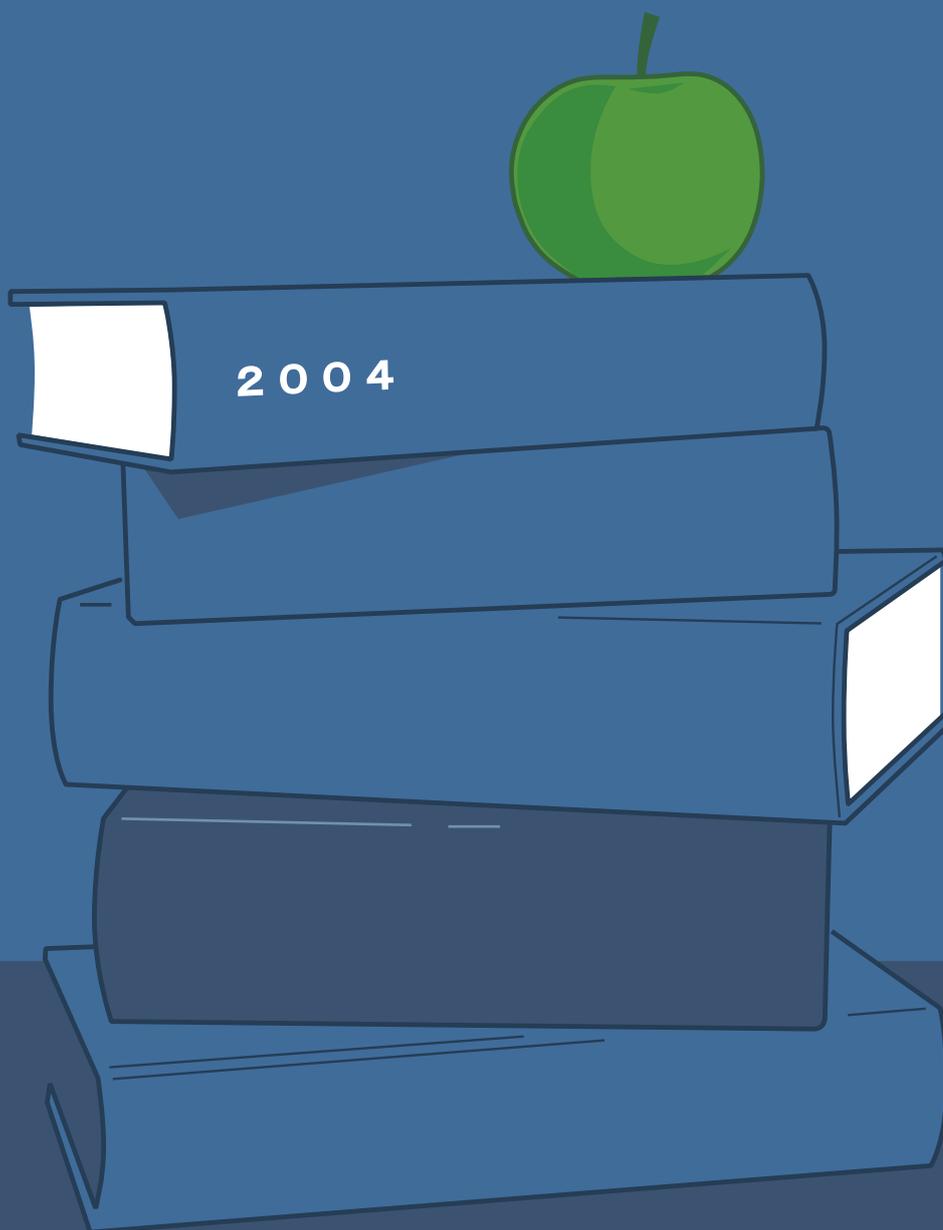


平成16年度国際子ども図書館
児童文学連続講座講義録

「ファンタジーの誕生と発展」



研究報告：イングラム・コレクションの魅力

目 次

刊行にあたって	村山 隆雄 ………	3
ファンタジーの周辺	神宮 輝夫 ………	4
メルヘンからファンタジーへ	間宮 史子 ………	20
イギリスのファンタジー	定松 正 ………	37
アメリカ・カナダのファンタジー	白井 澄子 ………	47
ファンタジーとはなにか	井辻 朱美 ………	68
国際子ども図書館で児童文学 (ファンタジー) を調べる	千代 由利 ………	95
児童書総合目録活用術	渡辺 和重 ………	137
研究報告： イングラム・コレクションの魅力	神宮 輝夫 ………	143
講師略歴	……………	162

「児童文学連続講座講義録」の刊行にあたって

平成16年10月、国際子ども図書館は、図書館員をはじめとする子どもの身近な場所で、直接子どもと本をつなぐ役割を果たしている方々を対象に、「児童文学連続講座」を開催いたしました。本講座は、児童サービスにおいて必要とされる幅広い知識の涵養に資することを目的としていますが、児童文学の流れを大系的に把握できるよう意識してテーマを設定しました。

第1回目は、平日頃より関心が高く、また、最近では何かと話題にもなっている「ファンタジー」を取り上げ、総合テーマを「ファンタジーの誕生と発展」としました。講師陣は、この分野の研究で活躍されている神宮輝夫氏（国立国会図書館客員調査員、青山学院大学名誉教授）、間宮史子氏（白百合女子大学児童文化学科専任講師）、定松正氏（共立女子大学部文芸学部教授）、白井澄子氏（白百合女子大学児童文化学科助教授）、井辻朱美氏（白百合女子大学児童文化学科教授）です。神宮先生には、講座の監修もお願いいたしました。

本講座では、国際子ども図書館所蔵資料の一層の利用促進と児童書のナショナルセンターとしての役割の理解浸透を願い、各講師に、国際子ども図書館が広く内外から収集した児童書を取り上げていただくとともに、国際子ども図書館の職員による、「国際子ども図書館で児童文学（ファンタジー）を調べる」や「児童書総合目録の活用術」も課目としました。

おかげさまで、第1回の児童文学連続講座は、好評を得ましたが、研修室の規模もあり、希望者全員の聴講の要望にお応えすることができませんでした。あらためて、児童書に関する研修への強い要望を認識した次第です。ここに、本と子どもをつなぐ仕事に携わっておられる多くの方々と情報と経験の共有ができればと、本講義録を刊行し、広く配布することといたしました。より豊かな児童サービスにお役に立つことができるならば、これに勝る喜びはありません。

末尾ながら、お忙しい中、快く講師をお引き受けいただき、国際子ども図書館初の児童文学連続講座を実りあるものにするためにご尽力いただきました講師の先生方に、厚く御礼申し上げます。

平成17年10月

国立国会図書館国際子ども図書館長

村山 隆雄

ファンタジーの周辺

神宮 輝夫

Stories and Society Children's Literature in its Social Context (Edit. By Dennis Butts, Macmillan, 1992) 学校物語、冒険物語、ファンタジーなどという章があって、それぞれのジャンルを要領よくまとめたもの。ファンタジーの章はC. W. Sullivan IIIが筆者。ファンタジーの説明のはじめに、アメリカの研究者Kathryn Hume's *Fantasy and Mimesis* (1984) からの引用をもってきている。ヒュームはファンタジーについて、次のように説明する。

文学は人間の二つの衝動がうみだすものである。その一つはmimesis、つまりまねたいという気持ちである。非常に真に迫っていて、他の人たちが経験を共有できるように出来事、人物、事物を描写しようとする欲求である。ファンタジーは、既定の事実を変えること、つまり、現実の変更、退屈からの脱却、遊び、ヴィジョン、欠けているものに対するあこがれ、読者の言葉の砦を通り抜けてしまう比喩的イメージである。

さらに、ヒュームは「ファンタジーとは、どんなかたちであれ、世間一般が認める現実からはなれることである」とも言う。ファンタジーという文学は、「退屈逃れがしたい」「遊びたい」「ヴィジョンをもちたい」「自分にないものへの憧れの気持ち」「言葉が持たせてくれる常識ではない考えとか心象とか理想をもちたい」ひっくるめて、現実から抜け出したい気持ちが生み出す文学だということです。

ファンタジー文学の分類の一例
昔話や伝承のフェアリーテイル
創作されたフェアリーテイル
擬人化されたお人形や玩具の話
魔法の冒険物語
動物擬人化物語
神話的ファンタジー
別世界物語

伝承の昔話と創作された昔話に関すること

Nancy L. Canepa (1957-) *From Court to Forest : Giambattista Basile's Lo cunto de li cunti and the birth of literary Fairy tale* (1999)

主要作品年表：イギリス

- 1839 Catherine Sinclair Holiday House
1841 Captin Frederic Marryat Masterman Ready
1856 Charlotte Mary Yonge The Daisy Chain
1858 Robert Micahael Ballantyne The Coral Island
1863 Charles Kingsley Water Babies
1865 Lewis Carroll Alice's Adventures in Wonderland
1868 L. M. Alcott Little Women
1869 J. H. Ewing Mrs. Overtheway's Remembrance
1871 George MacDonald At the Back of the North Wind
1872 " Princess and the Goblins
1872 Susan Coolidge What Katy Did
1876 Mark Twain The Adventures of Tom Sawyer
1876 Mary Louisa Molesworth Carrots
1879 " The Cuckoo Clock
1879 " The Tapestry Room
1880 Johanna Spiri Heidi
1881 J. H. Ewing Daddy Darwin's Dovecote
1883 R. L. Stevenson Treasure Island
1883 Carlo Collodi Pinocchio
1884 Mark Twain The Adventures of Huckleberry Finn
1886 F. H. Burnett Little Lord Fauntleroy
1888 Oscar Wilde The Happy Prince
1894 Rudyard Kipling The Jungle Book
1895 Mrs. Molesworth The Carved Lion
1897 Rudyard Kipling The Captains Courageous
1899 " Stalky & Co.
1899 E. Nesbit The Treasure Seekers
1902 J. Barrie The Little White Bird (containing Peter Pan in Kensington Gardens)

主要作品年表：日本

一八九一（明二四）	巖谷小波	『こがね丸』
”	”	『猿蟹後日譚』
一八九二（明二五）	”	『新御伽草子』
”	若松賤子	『小公子』前編
一九〇八（明四一）	文部省編	『教訓仮作物語』
一九〇九（明四二）	佐々木邦	『いたづら小僧日記』
一九一〇（明四三）	小川未明	『赤い船』
一九一二（大二）	島崎藤村	『眼鏡』
一九一七（大六）	浜田広介	『黄金の稲束』
一九一九（大八）	小川未明	『金の輪』
一九二一（大一〇）	”	『赤い蝋燭と人魚』
”	浜田広介	『椋鳥の夢』
一九二二（大一一）	”	『大将の銅像』
”	有島武郎	『一房の葡萄』
一九二四（大一一三）	宮沢賢治	『注文の多い料理店』
一九二七（昭二）	坪田譲治	『河童の話』
”	榎本楠郎	『メーデーごっこ』
一九二八（昭三）	猪野省三	『ドンドンやき』
一九二九（昭四）	千葉省三	『トテ馬車』
一九三二（昭七）	新美南吉	『ごん狐』
一九三五（昭一〇）	坪田譲治	『魔法』
”	”	『お化けの世界』
一九三六（昭一一）	”	『風の中の子供』
一九三七（昭一二）	”	『子供の四季』
一九三八（昭一三）	塚原健二郎	『七階の子供たち』
一九三九（昭一四）	宮沢賢治	『風の又三郎』
一九四〇（昭一五）	川崎大治	『太陽をかこむ子供たち』

「ファンタジーの周辺」紹介資料リスト

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	Holiday House:a book for the young Famous books for boys and girls	Catherine Sinclair 作	Blackie & Son 18--	VZ1-962
2	Masterman Ready,or,The wreck of the Pacific	Captain Frederick Marryat 作	F. Warne 18--	VZ1-720
3	The Daisy Chain	Charlotte Mary Yonge 作	Macmillan 1888	蔵書なし
4	The Coral Island:a tale of the Pacific Ocean	Robert Micaheal Ballantyne 作	J. Nisbet 18--	VZ1-101
5	The water-babies:a fairy tale for a land-baby	the Rev.Charles Kingsley 作 J. Noel Paton 絵	Macmillan 1864	Y8-A5802
6	Alice's Adventures in Wonderland	Lewis Carroll 作 John Tenniel 絵	Macmillan 1868	VZ1-222
7	Little Women The children's treasure book	L.M.Alcott 作	Children's Press c1934	Y8-B2764
8	Mrs. Overtheway's remembrances, and other tales	J.H.Ewing 作	J.M. Dent & Sons 19--	VZ1-391
9	At the Back of the North Wind	George MacDonald 作 E.H. Shepard 絵	J.M. Dent 1956	Y8-A5801
10	The Princess and the Goblin	George MacDonald 作	Blackie 1890	VZ1-686
11	What Katy Did Warne's star series	Susan Coolidge 作	F. Warne 1891	VZ1-267
12	The Adventures of Tom Sawyer	Mark Twain 作 Barry Moser 絵	Books of Wonder c1989	Y8-B2280
13	Carrots	M.L.Molesworth 作	Macmillan 1876	蔵書なし
14	The Cuckoo Clock	M.L.Molesworth 作	Macmillan 1877	蔵書なし
15	The Tapestry Room	M.L.Molesworth 作	MacMillan 1879	蔵書なし
16	Heidi Collana "Corticelli"	Johanna Spyri 作 Carlo Alberto Michelini 絵	Mursia c1971	Y8-A1766
17	Daddy Drawin's dovecot	J.H. Ewing 作 Randolf Caldecott 絵	Society for Promoting Christian Knowledge 1881	VZ1-365
18	Treasure Island	R.L.Stevenson 作 Edmund Dulac 絵	E. Benn 1927	VZ1-997
19	Pinocchio's adventures in wonderland	Carlo Collodi 作	Jordan, Marsh c1898	Y8-B3194
20	The Adventures of Huckleberry Finn Puffin classics	Mark Twain 作	Puffin Books 1994	Y8-A811

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
21	Little Lord Fauntleroy	F.H.Burnett 作	C. Scribner's Sons 1908, c1897	VZ1-192
22	The Happy Prince Everyman's library children's classics	Oscar Wilde 作 Charles Robinson 絵	D. Campbell c1995	Y8-A762
23	The Jungle Book	Rudyard Kipling 作 J.L. Kipling, W.H. Drake, and P. Frenzeny 絵	MacMillan 1894-1895	Y8-A405
24	The Carved Lion	M.L.Molesworth 作	MacMillan 1895	蔵書なし
25	Captains Courageous	Rudyard Kipling 作	Amereon House c1897	Y8-A1019
26	Stalky & Co.	Rudyard Kipling 作	Macmillan 1899	VZ1-645
27	The story of the treasure seekers	E.Nesbit 作 Cecil Leslie 絵	Penguin Books 1994	Y8-A175
28	The Little white Bird	J.Barrie 作	Hodder and Stoughton 1902	Y8-A3088
29	こがね丸 少年文学 第1編	巖谷小波作 大橋新太郎編	博文館 1891	YDM103043(マ イクロフィッ シュ)
30	猿蟹後日譚：一名・猿蟹弔合戦	巖谷小波(大江小波) 著 武内桂舟 画	博文館 1891	YDM103004(マ イクロフィッ シュ)
31	新御伽草子	巖谷小波作	博文館 1892	YDM103051(マ イクロフィッ シュ)
32	小公子	バアネット原作 若松賤子訳	[] 1891	YDM103023(マ イクロフィッ シュ)
33	教訓仮作物語	文部省編	国定教科書共同販売所 1908	YDM102978(マ イクロフィッ シュ)
34	いたづら小僧日記 少年少女世界の名作文学48(日本編4)	佐々木邦作 川端康成等監修	小学館 1967	Y7-102
35	赤い船	小川未明作 山路真護絵	あかね書房 1951	児913.8-O272a3
36	眼鏡(抄) 編年体大正文学全集 第2巻(大正2年)	島崎藤村作 竹盛天雄編	ゆまに書房 2000	YZ-918-ヘン
37	黄金の稲束 ひろすけ童話讀本 第1集	濱田廣介作	文教書院 1924	Y8-N05-H151
38	金の輪 小川未明名作選集1	小川未明作	ぎょうせい 1993	Y9-466
39	赤い蠟燭と人魚	小川未明作 いわさきちひろ絵	童心社 1975	Y7-4719
40	椋鳥の夢 ひろすけ童話讀本 第2集	濱田廣介作	文教書院 1924	Y8-N05-H152

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
41	大将の銅像	濱田廣介作 川上四郎絵	実業之日本社 1922	児乙部22-H-2
42	一房の葡萄 小国民シリーズ	有島武郎作 源川雪子絵	小学館 1946	児995-95
43	注文の多い料理店 日本の名作	宮沢賢治作 朝倉摂絵	講談社 1971	Y7-2448
44	河童の話 ピハの寶	坪田譲治作	中央公論社 1941	Y8-N03-H706
45	メーデーごっこ 日本ジュニア文学名作全集6	槇本楠郎作 日本ペンクラブ編 井上ひさし選	汐文社 2000	Y8-N00-187
46	ドンドン焼き 日本ジュニア文学名作全集6	猪野省三作 日本ペンクラブ編 井上ひさし選	汐文社 2000	Y8-N00-187
47	トテ馬車	千葉省三作 川上四郎絵	古今書院 1929	児乙部29-T-1
48	ごん狐 日本ジュニア文学名作全集7	新美南吉作 日本ペンクラブ編 井上ひさし選	汐文社 2000	Y8-N00-187
49	魔法	坪田譲治作	健文社 1935	Y8-N03-H715
50	お化けの世界 ロビン・ブックス10	坪田譲治作 須田寿絵	河出書房 1955	児 913.6-Tu647o
51	風の中の子供 日本文学選25	坪田譲治作	光文社 1948	Y8-N03-H856
52	子供の四季	坪田譲治作	新潮社 1938	757-102
53	七階の子供たち 新童話選集6	塚原健二郎作	子供研究社 1937	Y8-N04-H1129
54	風の又三郎	宮沢賢治作	羽田書店 1947	児93-M-9
55	太陽をかこむ子供たち 新日本児童文学選集2	川崎大治作 松山文雄絵	文昭社 1940	児935-48-(2)
56	にじが出た	平塚武二作 中尾彰絵	国民国書刊行会 1948	児乙部48-H-19
57	ノンちゃん雲に乗る	石井桃子作 桂ユキ子絵	光文社 1951	児913.6-I583n
58	コルプス先生汽車へのる	筒井敬介作 いわさきちひろ絵	季節社 1948	児乙部48-T-27
59	ビルマの豎琴	竹山道雄作 猪熊弦一郎絵	中央公論社 1949	児95-T-1
60	原始林あらし 片耳の大シカ・赤い月：ほか	前川康男作 日本児童文学者協会編	偕成社 1971	Y7-2406-(9)

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
61	風琴 日本少年文学選集5：おかあさんの顔	長崎源之助作	三十書房 1964	児918.6-N6882-(5)
62	二十四の瞳	壺井栄作 森田元子絵	光文社 1952	児913.6-Tu643n
63	風信器 集団読書テキストA16	大石真作	全国学校図書協議会 1975	Y8-N00-285
64	ツグミ 日本ジュニア文学名作全集10	いぬいとみこ作 日本ペンクラブ編 井上ひさし選	汐文社 2000	Y8-N00-187
65	ながいながいペンギンの話	いぬいとみこ作 横田昭次絵	宝文館 1957	児913.8-I483n
66	木かげの家の小人たち	いぬいとみこ作 吉井忠絵	中央公論社 1959	児913.8-I483k
67	だれも知らない小さな国	佐藤暁作 若菜珪絵	講談社 1959	児913.8-Sa867d
68	赤毛のポチ	山中恒作 しらいみのる絵	理論社 1960	児913.6-Y386a
69	竜の子太郎	松谷みよ子作 久米宏一絵	講談社 1960	児913.6-M415t
70	星の牧場	庄野英二作 長新太絵	理論社 1963	児913.8-Sy958h
71	肥後の石工	今西祐行作 井口文秀絵	実業之日本社 1965	Y7-383
72	教室二〇五号 創作少年少女小説	大石真作 斎藤博之絵	実業之日本社 1969	Y7-1473
73	魔神の海 少年少女現代日本創作文学8	前川康男作 床ヌプリ絵	講談社 1969	Y7-1628
74	ボクちゃんの戦場 理論社のジュニア・ライブラリー	奥田継夫作 しらいみのる絵	理論社 1969	Y7-1903
75	でんでんむしの競馬 少年少女創作文学	安藤美紀夫作 福田庄助絵	偕成社 1972	Y7-3315
76	ぼっぺん先生の日曜日	舟崎克彦作・絵	筑摩書房 1973	Y7-3588
77	なまけんぼの神さま あかね新作児童文学選8	さねとうあきら作 今井弓子絵	あかね書房 1974	Y7-4131
78	兎の眼 理論社の大長編シリーズ	灰谷健次郎作 長谷川知子絵	理論社 1974	Y7-4211
79	チツゼミ鳴く木の下で	血海達哉作 長尾みのる絵	講談社 1976	Y7-5509
80	石切り山の人びと 少年少女創作文学	竹崎有斐作 北島新平絵	偕成社 1976	Y7-5652

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
81	街の赤ずきんたち 児童文学創作シリーズ	大石真作 鈴木義治絵	講談社 1977	Y7-6327
82	グスコープドリの伝記	宮沢賢治作 横井弘三絵	羽田書店 1941	児935-23
83	北国の犬	関英雄作 山下大五郎絵	有光社 1942	児952-252
84	風と花びら 小国民文芸選1	平塚武二作 小山内竜絵	帝国教育会出版部 1942	児952-35-(1)
85	八号館	岡本良雄作 古家白羊絵	翼賛出版協会 1943	児971-17
86	夕顔の言葉	壺井栄作 松山文雄絵	紀元社 1944	児971-135
87	ちびっこカムのぼうけん	神沢利子作 山田三郎絵	理論社 1961	児913.8-ka483t
88	銀のほのおの国	神沢利子作 堀内誠一絵	福音館書店 1972	Y7-3358
89	くらやみの谷の小人たち	いぬいとみこ作 吉井忠絵	福音館書店 1972	Y7-3191
90	冒険者たち：ガンバと十五匹の仲間	斎藤惇夫作 藪内正幸絵	牧書店 1972	Y7-3079
91	空色勾玉 Dragon Swoard and Wind Child	荻原規子作	福武書店 1988	Y8-5599
92	白鳥異伝 Dragon Sword and Powerful Crescent Jade	荻原規子作	徳間書店 1996	Y9-2911
93	薄紅天女 Celestial Maiden in Light Pink	荻原規子作	徳間書店 1996	Y8-M97-94
94	月の森に、カミよ眠れ The Myth of the God of Moon Forest	上橋菜穂子作 金森泰三絵	偕成社 1991	Y8-8795
95	聖霊の守り人 The Guardian of the Water Sprite	上橋菜穂子作 二木真希子絵	偕成社 1996	Y9-2886
96	闇の守り人 The Guardian of the Under World	上橋菜穂子作 二木真希子絵	偕成社 1999	Y8-M99-379
97	夢の守り人 The Guardian of a Dream	上橋菜穂子作 二木真希子絵	偕成社 2000	Y8-N00-358
98	虚空の旅人	上橋菜穂子作 佐竹美保絵	偕成社 2001	Y8-N01-460
99	月神の統べる森で	たつみや章作 東逸子絵	講談社 1998	Y8-M99-337
100	地の掟 月のまなざし	たつみや章作 東逸子絵	講談社 2000	Y8-N00-102

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
101	天地のはざま	たつみや章作 東逸子絵	講談社 2001	Y8-N01-225
102	月冠の巫王	たつみや章作 東逸子絵	講談社 2001	Y8-N02-40

ファンタジーの周辺

神宮 輝夫



子どもの文学の二つのジャンル

差し上げた資料の中に *Stories and Society Children's Literature in its Social Context* (edited by Denis Butts, Macmillan, 1992) という本の名前があります。わかりやすい英語で書かれたとても便利な本です。大学院のマスター・コース程度の学生の、研究の手引きといった感じのもので、ファンタジー、冒険物語、家庭小説その他のジャンルを要領よくまとめて解説してあります。

この本のファンタジーの章は、チャールズ・サリヴァン3世 (Charles Sullivan III) というイースト・カロライナ大学の大学院の教授が担当しています。彼は、ファンタジーの説明のはじめに、キャスリン・ヒューム (Kathryn Hume) の *Fantasy and Mimesis* (『ファンタジーと模倣』 New York, Methuen, 1984) の一部分を引用します。

文学は人間の2つの衝動が生み出すものである。その1つは *mimesis*、つまりまねたいという気持ちである。他の人たちが経験を共有できるように、出来事、人物、事物を、出来るだけ迫真的に描写しようとする欲求である。一方、ファンタジーは既定の要件を改めて、事実を変えたい願望、つまり、退屈からの脱却、遊び、幻想、欠けているものへの憧れ、あるいは読者の言葉の砦を無視する比喩的イメージを求めることである。

ヒュームは、また、「ファンタジーとは、いずれにせよ、世間一般が認める現実から離れることである」とも言っています。リアリスティックな話は、できるだけ事実近づこうとする衝動から生まれ、ファンタジー文学は、事実からできるだ

け遠ざかりたいという衝動が創るということでしょう。こんな解説から、私たちは文学を1本の線と考えることが出来ます。一方の端にリアリズムの極、他方の端にファンタジーの極があります。そして、あらゆる作品はこの線上のどこかに位置を占めることとなります。

動物文学に例をとりましょう。登場する動物が人間の言葉で話し考える場合は、もう、ファンタジーですが、中にはヘンリ・ウィリアムスン (Henry Williamson) が長い間ともに暮らしたカワウソをモデルに、カワウソの目でカワウソの暮らしを描いた『カワウソのタルカ』 (Tarka the Otter, 1927) のように、ほとんど科学的な観察記に近いフィクションから、自然の営みの物語化にすぐれた『バンビ』 (1923)、それから、観察記的なためにしばしば読者をまどわせるけれど、じつはフィクションであるシートンの『動物記』 (*Wild Animals I Have Known*, 1898) などがあります。さらに、さまざまな生きものを人間の美德と悪徳のパターンにはめているイソップの寓話、これが、たぶん『カワウソのタルカ』の対極に位置するでしょう。

ファンタジーをキャスリン・ヒュームのように、現実から離れることだと考えれば、いろいろな作品を、ファンタジーという枠の中に含むことが出来ます。1例をあげますと、アメリカのメアリ・シェイナー (Mary Shaner) という研究者は、

- ① 伝承のフェアリーテール
- ② 創作されたフェアリーテール
- ③ 擬人化された人形や玩具の話
- ④ 魔法の冒険物語
- ⑤ 擬人化動物物語

⑥ 神話的ファンタジー

⑦ 別世界物語

に分類しています。

分類は、共通する性質にしたがって分けられるわけですから、作品を理解する上で判断のきっかけを与えてくれます。もっとも私は、ファンタジーにしてもなににしてもあまり細かい分類を好みません。何百年も前に生きていた人たちと現在の子どもたちが、古い屋敷で時間を共有する「グリーン・ノウ物語」は「幽霊物語」と分類できるでしょうけれど、それによって失われるものも多いと思います。

シェイナーの分類には賛成できないところもあります。しかし、ファンタジーの分類の中に、伝承のフェアリーテール (traditional fairy tale)、日本ではメルヘン (Märchen) とよばれることが多い分野を入れていることは、よいことだと私は考えています。私は、ファンタジーを比較的にこまかく分類する前に、まずグリム童話のような、多数の無署名の人々が長い時間をかけて創り上げた昔話をも含めて、つまりグリムからハリー・ポッターまで全部ファンタジー、ふしぎや魔法の出てくる話は全部ファンタジーというくらいに考えて、そこから始めてもよいのではないかと考えています。

細かい分類は必要に応じてすればいいのであって、はじめからファンタジーという文学の定義はこれこれ、分野はこれこれと頭に入れて、作品を読んだり、選んだり、推薦したりすることは窮屈だと思うのです。

小学校の低学年生が冒険物語を読みたいと思って本を借りに来たとき、低学年向き冒険物語と分類された図書をえらぶよりは、昔話であるグリムの「ヘンゼルとグレーテル」をすすめるほうが当たり率は高いのではないのでしょうか。分類にとらわれないことが大事です。

伝承の昔話と創作された昔話のこと

歴史的には、伝承されてきた昔話が母体になって創作された昔話が生まれ、ほとんど同時にファンタジーとよばれるジャンルの作品が生まれたことは確かです。しかし、昔話は消えうせることなく、

今の子どもとおとなに読まれ、楽しまれています。それは、活字で表現され、時には語られて、読者と聞き手に伝えられています。今、絵本や本になっている昔話は、誰かによって書かれたものです。そして、その場合は原話からということが原則となっています。昔から語り伝えてきた民衆の精神をできるだけ損なわずに伝えようという考えが、そこにはあるでしょう。

グリム兄弟は、1812年に1冊目の童話集を出版して以来長い間、その原則のお手本のように見られてきましたが、グリム兄弟も、語られた話をすべて、そのままに文字化していなかったことがわかってきました。白雪姫を殺そうとしたのは魔女である継母、となっていますが、本来は実の母親だったそうです。19世紀もまだ早い頃、母親が実の娘を殺すことなど、倫理道徳に反するとんでもないことだったのでしょう。

「ジャックと豆の木」も、18世紀のものなどには、ジャックが雲の上の巨人の家から持ち出した宝ものやお金は、その昔巨人がジャックの父親から盗んだことになっていました。啓蒙主義時代のモラルには、勇敢なジャックには盗みを働いて欲しくなかったのでしょう。わずか2例ですが、これでも、昔話というものは時代によって絶えず変化してきたものであって、固定した原話などというものは存在しないといつてよいかと思えます。

ここで、ナンシー・キャネパ (Nancy Canepa 1957-) という人の *From Court to Forest: Giambattista Basile's Lo cunto de li cunti and the birth of literary Fairy tale* (1999、「宮廷から森の中へージャンバチスタ・バジーレの『お話のお話』」) をご紹介しておきましょう。

『お話のお話』は通称『5日物語』^{ペンタメローネ} *Pentamerone* とよばれています。これは、婚約者である王子を、魔法によって奴隷の少女に奪われたゾーズ王女が宮廷に集めた老女たちの話を1日に10話ずつ5日間、つまり50話を王子にきかせて、彼を奪い返すという枠物語です。魅力的なのは、「眠りの森の美女」「シンデレラ」「長靴をはいた猫」「ダイヤモンドとひきがえる」などシャルル・ペローの「ペロー童話集」(1697)に収録された話とそっくりな話があることです。1634年から36年にかけて書

かれたこのお話集は、生粋のナポリ方言で書かれたため、読者が少なくして知名度が低く、ペローやグリムよりはやくに昔話を集めて書き直していたのに、最初の昔話収集家・再話家である荣誉はあたえられませんでした。そして、研究者のキャネパは研究書の副題でのべているように、*Pentamerone* が literary fairy tales つまり創作昔話の始まりだとしています。

キャネパの主張は、口伝えに語り続けられてきた昔話は、ある人間によって文字化された瞬間から、それは literary fairy tales、すなわち創作された、あるいは文芸化された昔話になるということです。私たちは、グリム童話集が伝承の昔話の代表で、アンデルセン童話集は創作昔話のはしりになるものというように考えていますが、キャネパの主張に従えば、グリム童話は無論のこと、ヨルゲン・モウ (Jörgen Moe) とアスビョルンセン (Peter Christian Asbjornsen) が収集・編集した『太陽の東月の西』(*Norwegian Folk and Fairy Tales*, 1843-4) なども literary fairy tales となります。

私が、伝承の昔話と創作昔話の境目にこだわるのは、日本でも数多くの昔話が物語や絵本になって出版されるとき、よいものを選ぶ基準として原話の精神をよく伝えているかどうか云々されることが多いからです。しかし、もともとの精神をしっかりと伝えている原話はどこにあるのかということになると、あいまいになります。口承で伝えられたものも、話者が少しずつ変えたにちがいありません。そして文字化されたときにまた変えられます。

アンデルセンの童話は創作された童話の代表のようなものですが、最初の童話集が1835年に出版されたとき以来、昔話の精神に根ざしていると評価されています。個人や時代が付け加えたり削ったりした部分はあっても、1つの話の基本部分は変わらずに伝えられているということでしょう。私たちは、ある昔話の現在の再話がよくできていると考えたら、それを読者にすすめればよいのです。

リアルな作品とファンタジーとの関係

子どもの文学世界にファンタジーとよばれる作品が出たのは、英米文学関係の人たちの間では、『水の子』(*Water Babies*, Charles Kingsley, 1863) からとされています。この話は、煙突掃除の少年トムが地主屋敷の煙突掃除中に、まちがって屋敷の令嬢エリーさんの部屋に出てしまい、驚いたエリーさんの悲鳴にトムも驚いてひたすら逃げ、川にはまって溺死するところからはじまります。

大きな屋敷に作りつけられている煙突の煙道に入って掃除をする少年の悲惨な生活は、当時社会問題になっていました。川で溺れたトムは水の子に変身します。これは、彼を見守っていた川の妖精のおかげなのです。水の子は作者キングズリの独創的アイディアの産物で、身体は人間と同じだけれど、耳の後ろのえらでも呼吸ができる両生類のような生きものです。キングズリは聖書的世界観をくつがえすダーウィンの進化論と神学的世界を融合させようとして自然科学を真剣に真剣に学んでいたのも、肺呼吸とえら呼吸をする水の子などというイメージを思いついたのでしょう。

水の子トムは、水の世界でよい子になるための修行を積み、さらにさまざまな国を旅して歩きます。『水の子』は、ですから、キリスト教社会主義を主張して労働運動に共感しながら、信仰を揺るがしかねない進化論と四つに取り組みあった1人の宗教家・文学者が現実問題に真剣に立ち向かった、1つの結果なのでした。現実の子どもと大人と彼らの生きている状況を知って、そこから出てくる問題を子どもに向けて語るときに、ファンタジーという形式が生れたのです。

『カッコウ時計』と『ピーター・パン』

19世紀後半のイギリスは『水の子』にはじまって、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』(1865) や ジョージ・マクドナルドの『北風のうしろの国』(1871) ほかが次々に出版されたファンタジーの黄金時代でした。しかし、リアルな作品の方が数は多く、また傑作も続出しました。よいファンタジーが生れる時、必ずリアルな作品がそれを支えていました。

日本では『カッコウ時計』(*The Cuckoo Clock*,

by Mary Louisa Molesworth,1879) くらいしか知られていないモルズワース夫人の出世作は『キャロット、赤毛の男の子』(Carrots, 1876)。赤毛の幼い男の子の、主として内面の動きを愛情豊かに丁寧に描いたもので、幼児の内面の魅力を人々に伝え、幼年文学を切り開いたリアルな作品でした。幼い子どもの心の動きをとらえたリアリズムから、幼児の心中の多彩な空想を物語化するまでの距離は、ほんの一步でした。彼女は日常生活の中で起こる不思議、つまり幼児の自由な心の動きそのものを語る日常の魔法 (everyday magic) 物語という新種のファンタジーを創造したのでした。この分野は彼女の後継者であるE.ネズビットによって完成したとあってよいでしょう。

モルズワース夫人は、幼児の内面世界の発見者と言われますが、こういうことは、彼女の作品で顕在化したに過ぎず、実際には、当時の多くの人たちが知っていたと考えられます。バーネット夫人は『小公子』(Little Lord Fauntleroy, F. H. Burnett, 1886) 『小公女』(Sara Crew,1888) で有名ですが、やはり彼女の作品である『私がいちばんよく知っている人の話』(The One I Knew Best of All, 1893) では、幼いときの自分の心象風景を生き生きと語っています。

当時、少年少女を登場させて記憶に残る作品を世に問うた作家たちは、子どもの思考や言動が年齢、性別、環境に応じて相違がある部分と共通した部分があることをよくわきまえていたのだと思います。

『ピーター・パン』(Peter Pan, James Barrie, 1904) というファンタジー・ドラマは、上演されるやいなや大変な評判になり、20世紀前半の50年間、イギリスではクリスマス・シーズンには必ずどこかの劇場で上演されていました。ハンフリー・カーペンター (Humphrey Carpenter) という研究者による、非凡な19世紀イギリス・ファンタジー論『秘密の花園』(Secret Gardens-A study of the Golden Age of Children's Literature, 1985) は、19世紀後半のイギリス・ファンタジー・ブームは神を見失った時代の人々の疑似宗教行為と述べています。そうだとすれば、ロンドンのケンジントン公園にピーター・パンの銅像が建ったのも

うなずくことが出来ます。しかし、私は、それ以上に、当時の大人たちは、モルズワース夫人やバーネット夫人たちの創作活動の積み重ねのおかげで、子どもの内面には、大人ほどよごれていない「童心」の世界があるという共通の認識を持っていたからではないかと考えています。

子どもについてのしっかりした知識を持って、彼らの生活を堅実に描いたリアルな作品群があって、はじめてファンタジーによいものが生れるのではないのでしょうか。

日本の場合

それは、日本の場合にも、よくあてはまると思います。広い意味ではなく、狭い意味でのファンタジーと言えば、1959年の『だれも知らない小さな国』(佐藤さとる)、『木かげの家の小人たち』(いぬいとみこ)と1960年の『龍の子太郎』(松谷みよ子)を頭に浮かべる人も多いでしょう。この頃が、日本のファンタジーの夜明けだと言われますが、この時期には、非常にすぐれているとは言えないまでも、活力のあるリアルな作品が次々に生まれていました。

しかし、ここでまず、19世紀末から20世紀末までの、広い意味でのファンタジーを眺めてみる必要があるでしょう。

1868年にはじまった明治時代は、^{いわやさぎなみ}巖谷小波命名の「お伽話」時代と言えるでしょう。小波自身は長篇の動物擬人化物語『こがね丸』(1891)をはじめ、『猿蟹後日譚』(1891)のような創作昔話、『当世少年気質』(1891)、『暑中休暇』(1891)などに見られるような、少年たちの日常を扱ったリアリスティックな作品、それから日本と外国の伝承文学の再話など、子どもの文学全般に偉大な業績を残しました。

^{おしかわしゅんろう}押川春浪は小波の推薦で冒険小説『海底軍艦』(1902)をはじめ、多くの愛国的な冒険物語を発表して、多くの読者を熱狂させました。若い日の泉鏡花も、日本人の誇りを訴える『金時計』(1893)という短編や、きわめて愛国的な一種のファンタジー『海戦の余波』(1894)などを発表していました。国木田独歩が確かな筆致で少年たちの日常のひとこまを描いた『山の力』(1903)や、与謝

野晶子の『金魚のお使』(1907)などは今読んでも充分楽しめます。与謝野晶子の作品は、金魚が電車に乗ってお使いに行くというナンセンスな話で、当時としては破格な作品でしたが、これなどを除いて、明治といわれる時代の子どもの文学は、国家意識を持つ、民族としての自尊心を高める、将来有望な人材となるなど、全体的には非常に実際の現実的だったと考えられます。

もちろん、『こがね丸』のような動物に仮託しての仇討物語も動物擬人化物語ですから、広い意味でファンタジーに属していると分類できます。ただ、すでに指摘したとおり、実際の、現実的で、ヒュームの言う「現実から離れたい」気持ちをおこす類のファンタジーではありませんでした。やはり、「お伽」文学でしたでしょう。

「童話」という言葉が一般的になったのは大正期に入ってからでした。そして、ご存知のように、大正期は童話の最盛期でした。一流の小説家と童話作家の両方が競うように作品を発表したからです。芥川龍之介の『蜘蛛の糸』(1919)、『杜子春』(1920)、をはじめに、佐藤春夫の『蝗の大旅行』(1921)、武者小路実篤の『鳩と鷺』(1921)、室生犀星の『寂しき魚』(1920) そのほか、大人の作家たちの力作がならぶ一方で、小川未明、浜田広介、坪田譲治、千葉省三、宮沢賢治などが英語で fairy tale、ドイツ語で Märchen とよばれ、日本では童話とよばれるジャンルの特徴を駆使して、日本の児童文学の代表的な作品を数多く生み出しました。童話という言葉は、一時期子どもが読む文学作品全体の名前でしたから、空想的な話も現実的な話もいっしょにして童話とよんでいました。

しかし、1926年末から昭和とかわった頃から、童話の世界が、だんだんに現実的な話のほうに傾きはじめてきました。これは、1929年からの世界的経済不況とファシズムの台頭で戦争の危険が高まりはじめた状況が大きく影響していたためでした。

ファンタジーへ

1945年の終戦以後、新しい時代のための新しい子どもの文学を創り出す努力がさまざまな作品を生み出しましたが、童話の流れの中からは、なか

なかこれはという傑作は生れてきませんでした。1つの大きな理由は、民主主義を基礎に、平和で戦争のない、そして平等な社会を築きあげるにはどうしたらよいかという大きな目標に向かって本当に真剣に取り組んだからだったと思います。真面目すぎたのです。ですから、童話という、現実よりはすこしよい人間関係や社会や政治など、つまり理想的な世界を語り続けてきた文学形式のなかに厳しい戦後の生活の実態を盛り込み、すこしでも理想に近づこうとする努力が語られ、結局は叫びのような主題の表現になって、失敗してしまいました。

そこで、童話よりも長篇の小説がふさわしい形式だという声が高くなり、少しずつ長くて面白い小説を創造する実験が重ねられました。

どこの国でも、伝承の文学から、ダイレクトにファンタジー文学が生れることはありません。日本で最初に生れたファンタジー作品は佐藤さとの『だれも知らない小さな国』(1959)とされています。作者は、多くの童話を創作しながら、土着の小人探しをストーリーとして、その発見をハッピーエンドとする長篇の物語にたどりついたのです。

そして同じ年にいぬいとみこの『木かげの家の小人たち』が発刊されました。いぬいとみこは、編集者としてイギリスのファンタジー作品を次々に紹介しながら、おそらく『床下の小人たち』(*The Borrowers*, Mary Norton, 1952) から主なヒントを得て、イギリスの小人親子が戦中・戦後の日本を生き抜く物語を書きました。こうした作品は、はやく言えば、ほとんど無の状態から新しい分野を切り開いたわけで、作者たちの苦勞が本当によくわかります。

いぬいとみこは、はっきりとイギリスのファンタジーにヒントを得ていましたが、佐藤さとは、独自性を明言しています。しかし、あえて一般的な分類に従えば、両作品ともモルズワース・ネズビット系統のいわゆる everyday magic に属しています。佐藤さとの作品が英語圏の国々で、日本の読者が熱中するほどに評価されないのは、彼らにとっては、特に独創性を感じないからでしょう。

その点、はっきりと独創的なのは『龍の子太郎』(1960) だったでしょう。類似の昔話を集めて、主題をしっかりと定め、さまざまな話のエピソードをたくみにつないで、小さい子どもにもよくわかる昔話の語り口で起伏に富むストーリーを展開したこの作品は、童話とファンタジーを理想的につないでくれました。

それ以後、思いつくままにならべてみても、『銀のほのおの国』(神沢利子 1972) 『くらやみの谷の小人たち』(いぬいとみこ 1972) 『光車よ、まわれ!』(天沢退二郎 1973) などなどが頭にうかんできます。それぞれ、構成のしっかりした印象深い作品です。ほかにも幼い子ども向きの作品から、ヤングアダルトといわれる人たちにふさわしい作品が数多く出版されています。

以上のどの作品も、読み応えある力作です。しかし、私は、1980年代までを、日本のファンタジーの前期と見られないかと考えています。全体的に1980年代までのファンタジー作品は現実性という負荷が大きすぎたのではないと思うからです。それは、たぶん、1945年以後、童話が背負って苦労した「新生日本の理想」をファンタジーも背負い続けたからでしょう。たしかに、fairy taleあるいはMärchenは、人間と社会について普遍性を求め、ファンタジーは現実と向かい合うという性質を持つでしょう。日本の場合は、現実と向かい合いすぎたのです。そのため、どこかいつも堅苦しさが付きまるとして、別世界で遊ぶ気持ちが持てませんでした。(『だれも知らない小さな国』はちがうという声が、あちこちから聞こえてくるでしょう。ほかの作品についても、おそらく同じでしょうけれど。)

『クヌギ林のザワザワ荘』『ふるさとは、夏』

そんなことを、いつの頃からか考えはじめていたので、1990年の6月に『クヌギ林のザワザワ荘』(富安陽子) が、そして7月に『ふるさとは、夏』(柴田勝茂) が出たときは、正直ほんとうに楽しかったです。2つの作品は、ともに、土着の神々や妖怪をちりばめて話がすすむのですが、読み進むうちに、いつの間にかその土地に溶け込んで、連綿と続いてきた土地の生活に自分も加わっているよ

うな思いでした。ようやく、日本という風土が、私たちひとりひとりに与えてくれるものを、この作家たちが物語にしてくれたという感じでした。

そして、その思いは、荻原規子、上橋菜穂子、たつみや章という3人の作品に出会って、さらに強くなりました。

3人の女性作家たち

荻原規子さんの作品は、柴田さん、富安さんの作品より早い1988年から続いています。『空色勾玉』(1988)、『白鳥異伝』(1991)、『薄紅天女』(1996)の3点が今までに出版されているファンタジーだと思います。

上橋菜穂子さんには『月の森に、カミよ眠れ』(1991)、『精霊の守り人』(1996)、『闇の守り人』(1999)、『夢の守り人』(2000) 『虚空の守り人』(2001) があります。

そして、たつみや章さんは『月神の統べる森で』(1998)、『地の掟 月のまなざし』(2000)、『天地のはざま』(2001)、『月冠の巫王』(2002) を書いています。

80年代までのファンタジーとの質的な違いを、象徴するのは上橋さんの『月の森に、カミよ眠れ』でしょう。これは、2人の半神的なヒーローの戦いを描いた神話的な物語です。全土を統一する野心をもつ最大の部族を代表する戦士と、月の森の神の息子との戦いは、両者がかすかながらも神格をただよわせているので、宗教的な二元論のようにも思えますが、それ以上に、性質の違う文化の対立を基礎にしていると思われます。その対立の構図は荻原さんの『空色勾玉』にも見られます。支配的な力を持つ日の女神の氏族と闇の神の一族の抗争がストーリーです。

この作家たちは、1つのテーマのみを書きつけているわけではありませんが、自然を崇敬して生きる文化圏と、鉄器を用いて農耕や狩猟に従事する文化圏との衝突が基本的なテーマとして全体に流れているように思えます。

私は、この間、鎮守の森文化ということが書いてある本を読んで感銘を受けました。日本には各地に鎮守様が祭られていて、たいていは森にかこまれています。その森の木は、それぞれ土地にあっ

た種類のものだということです。私は、ここで作品を紹介させていただいた3人のファンタジー作家がお書きになっていることは、鎮守の森に似ているように思うのです。

私たちが、主としてイギリスのファンタジー作品に出会ったとき、ほとんどの作品がキリスト教の信仰を土台に置いた善悪二元論の構図を持っていることを知りました。ファンタジーは宗教に根をおかなくては生れないのではと言った意見もき

きました。

荻原さんたちのファンタジーも、光と闇、弥生と縄文などという二元論に思えるかもしれませんが。しかし、この作家たちの語ろうとしているのは、文化、つまり基本的な生き方についてです。

新しい、独創的なファンタジーであり、本格的な日本のファンタジー始まりと私は考えています。

(じんぐう てるお 平成14-16年度国立国会図書館客員調査員 青山学院大学名誉教授)

メルヘンからファンタジーへ

間宮 史子

- ・メルヘンあるいはメルヒェン (Märchen) ≒ 昔話、口伝えのおとぎ話
- ・メルヘンや昔話のファンタジー性はどう形づくられているのか。ヨーロッパ (主にドイツ語圏) のメルヘンのうち、人間が人間の住む世界とは異なる世界を訪れたことを語る話 (異界訪問譚) をとりあげてみていく。
- ・メルヘンの主人公はさまざまなおとぎ話でかけていく。メルヘンはさまざまな「異界」とそこを訪れた人間について語っている。そこで今回は、地上と地下に存在する異界を検討し、異界がどのようにイメージされているかを考えてみたい。

地上 (地続き) の異界

- 白雪姫 (ドイツ/グリム童話) — 肯定的なイメージの異界
- ヘンゼルとグレーテル (ドイツ/グリム童話) — 否定的なイメージの異界
- 七羽のカラス (ドイツ/グリム童話) — 呪われた人間がいる異界
- 七羽のからす (オーストリア) — 呪われた人間がいる異界

地下の異界

- ホレばあさん (ドイツ/グリム童話) — 肯定的・否定的なイメージ両面をもつ異界。正しい反応をする人間には報いるが、間違った反応をする人間は罰する。
- 黄金のベテリと松やにバビー (スイス) — 肯定的・否定的なイメージ両面をもつ異界。正しい反応をする人間には報いるが、間違った反応をする人間は罰する。
- ダンスですりきれた靴 (ドイツ/グリム童話) — 呪われた人間がいる異界

「メルヘンからファンタジーへ」紹介資料リスト

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	おどる12人のおひめさま：グリム童話	グリム兄弟作 エロール・ル・カイン絵 やがわすみこ訳	ほるぶ出版 1980	Y17-6885
2	グリム七わのからず	リスベート・ツヴェルガー絵 池田香代子訳	富山房 1985	Y18-1155
3	グリム童話集：完訳1	金田鬼一訳	岩波書店 1981	Y7-8954
4	ヘンゼルとグレーテル：グリム童話	グリム作 リスベス・ツヴェルガー絵 佐久間彪訳	かど創房 1981	Y18-2702
5	ヘンゼルとグレーテル：グリム童話	高橋健二文 柳椋二絵	講談社 1979	Y17-6261
6	ホレおばさん	グリム作 仲埜ひろ文 南塚直子絵	学習研究社 1992	Y18-N01-508
7	完訳グリム童話：子どもと家庭のメルヘン集	グリム兄弟編 小沢俊夫訳	ぎょうせい 1985	Y8-2312
8	完訳グリム童話集	高橋健二訳	小学館 1985	Y8-2626
9	完訳グリム童話集：決定版1	グリム作 野村（ヒロシ）訳	筑摩書房 1999	Y9-M99-219
10	七わのからず：グリム童話	フェリックス・ホフマン絵 せたていじ訳	福音館書店 1971	Y17-3500
11	世界民話全集 4(中欧篇)	関敬吾等編 茂田井武絵	河出書房 1954	児909.3-Se1223
12	白雪姫	村岡花子文 新井五郎絵	講談社 1956	Y17-1156
13	白雪姫：グリム童話	グリム作 バーナデット文・絵 佐々木田鶴子訳	西村書店 1986	Y18-2764

メルヘンからファンタジーへ

間宮 史子



メルヘンあるいはメルヘン

私に与えられたテーマは「メルヘンからファンタジーへ」です。まずレジュメをご覧ください。日本語でメルヘンあるいはメルヘンと表記してありますけれども、正確にはMärchenです。これはドイツ語です。メルヘンはだいたい、昔話あるいは口伝えのおとぎ話という意味で考えていいと思います。カタカナの「メルヘンランド」とか「メルヘンチックな」という言葉がありますが、ドイツ語のMärchenというのは、だいたい昔話というふうに考えてよいかと思います。たとえば、グリム兄弟が出版した『グリム童話集』の原題は*Kinder- und Hausmärchen*『子どもと家庭のメルヘン集』であり、この場合のメルヘンは訳すと昔話です。ただ、メルヘンと昔話は全くイコールではなく、たとえば、アンデルセンのメルヘンといういい方もいたします。メルヘンはいろいろな意味を含んでいる言葉なのです。昔話ではなく、少し手の加わったもの、分かりやすく書きかえられたものをメルヘンということもありますし、創作メルヘンといういい方もあります。今回の講義では、昔話あるいは口伝えのおとぎ話ということで「メルヘン」を使わせていただきます。

メルヘンのファンタジー性

メルヘンはファンタジーの源と考えられております。長い間人々の間で語り継がれてきた、作者を個人に特定できない口伝えのおとぎ話が、メルヘンや昔話なのです。そういったメルヘンのファンタジー性が、どう形づくられているのかということを中心に考えていきたいと思っております。そこから、きょうのテーマになっております「メルヘンから

ファンタジーへ」の移行もしくは変遷がみえてくるのではないかと思います。変遷というと、少し語弊があるかもしれませんが、ファンタジーが誕生し発展していった基の部分のメルヘンに焦点を当てたいと思います。皆様も、メルヘンや昔話のことに関しては随分ご存知でいらっしゃると思いますが、きょうはヨーロッパ、主にドイツ語圏のメルヘンを扱おうと思います。私は、ドイツ語圏のメルヘンや日本の昔話の研究、そして両者の比較などを専門にしております。

いろいろなメルヘンがありますが、そのなかでも特にファンタジー性が一番あらわれていると考えられるのは、人間が人間の住む世界とは異なる世界を訪れたことを語る話です。昔話研究では、そういった話群を「異界訪問譚」といっています。異界とは、異なる世界、別世界ということで、非日常世界あるいは非現実世界といっても構いません。このような異界訪問譚は世界のどの民族にも伝えられており、日本の昔話にもさまざまな異界訪問譚がございます。人間が異界を訪れ、そこで何かを体験して、また戻ってくる、簡単にいえばこういう話なのですが、人々が異界をどうとらえ、異界にどのようなイメージをもってお話として伝えてきたのか、そこに、ファンタジーの基になるようなもの、メルヘンあるいは昔話のファンタジー性があらわれているのではないかと考えています。そこできょうは、お話のテキストに沿って具体的にみていこうと思います。

異界訪問譚

人間の主人公が異界へ出かけていく話は少なくありません。メルヘンはさまざまな「異界」とそ

こを訪れた人間について語っています。それは裏返していえば、異なる世界との関わりに人々が関心を持ち続けてきたということでもあります。今回扱うのは、地上にある異界と、地下にある異界についてです。地上と地下以外にも、異界は水中にあらわれることもあります。たとえば日本の昔話の「浦島太郎」がそうですね。海中に竜宮という異界があり、人間の男がそこを訪れて帰ってくるという話です。異界はまた、天上にもあらわれます。イギリスの「ジャックと豆の木」や、日本の「天人女房」などがそうです。「天人女房」は、帰ってしまった天人女房を追って、人間の男が天上世界を訪ねる話です。異界はいろいろなところにあると考えられているのです。川の向こう側とか、海を隔てた向こう側に異界があると語られることもあります。今回は、地上と地下の異界が語られている話を検討して、異界がどうイメージされているのかということのみていききたいと思います。

地上（地続き）の異界

地上の異界についての話に入ります。地上とは地続きということで、歩いて行くことができます。地上のどこかに、人間が住む世界とは異なる世界がイメージされており、人間が何かのきっかけでそこを訪れて、しばらく滞在する場合がありますし、すぐ戻ってきてしまう場合もあります。少し先取りしていいますと、異界から戻ってくることはとても大事なのです。今回扱う話においては、異界へ行った人間はすべて戻ってきます。人間が異界に留まることはできないのです。行ったら、帰ってこなければならない、そこがどんなにいいところでも。また、これとは逆に、どうしても帰ってこなければならない、そうしないと自分がとりこまれてしまう、という怖い異界もあります。それではまず、地上（地続き）の異界に関して具体的にみていきます。

「白雪姫」—肯定的なイメージの異界

地上の異界について、最初に「白雪姫」を挙げました。「白雪姫」はグリム童話でよく知られた話です。グリム童話は、ドイツのグリム兄弟とい

う学者兄弟が、19世紀初めに当時ドイツで伝わっていた話を集めて出版した昔話集です。グリムの創作ではありません。「白雪姫」については、肯定的なイメージの異界とレジュメには簡単に書いたのですが、どういうことかと申しますと、この話では、白雪姫という娘が7人のこびとの小屋に行きます。何で行ったかといえば、継母の命令により狩人に森へ連れだされ、殺されそうになったからです。そこで狩人に命乞いをして逃げていく。白雪姫は森の中を走りに走って、夕闇がせまる頃、小さな小屋を見つけます。小屋には誰もおらず、白雪姫は勝手に入り込んでこびとのベッドで眠り、翌朝目を覚ますと7人のこびとがいます。7人のこびとのいるあの小屋は異界であり、人間が住む世界ではありません。「白雪姫」を異界訪問譚として考えてみると、これは、白雪姫という娘が森の中の、7人のこびとの住んでいる世界へ行った話です。白雪姫がそこで何をしたかといいますと、7人のこびとにかくまわれ保護されて過ごしていたわけです。しかし、継母に居場所を見つけれ、継母は3回白雪姫を殺しにやってきます。1回目2回目は、こびとたちが白雪姫を助けてやりますが、3回目のリンゴのときだけどうしても助けてやれなくて、ガラスの棺に入れて安置したことになっています。そこへひとりの王子がやってきて白雪姫を見、どうしてもこの棺が欲しいといい、持ち帰ることになる。そこで白雪姫は、人間が住んでいるこちらの世界へ帰ってくるわけです。帰ってくる途中、王子は召使いたちに棺をかつがせて歩いているのですが、召使いたちがやぶに足をとられてよろめきます。その拍子に、白雪姫が飲み込んでいたリンゴのひとつがのどから出て、白雪姫は生き返ります。白雪姫は、死んでいる状態、死の世界から生の世界に戻ってくると同時に、こびとたちがいる異界から人間の世界に戻ってきたことにもなります。異界があらわれるのは森の中です。森の中を走りに走って行きついた先です。7人のこびとは白雪姫にとっては怖い存在ではありません。敵対する存在ではなくて保護してくれる存在です。それで、肯定的なイメージの異界と書いたのです。ただ、いくら保護してくれるといっても、白雪姫は帰ってこなければな

りません。白雪姫が帰ってくるきっかけは、3回目に継母に殺されたときにこびとたちが助けてあげられず、王子が来たことによるわけです。結末では、白雪姫は王子と結婚してハッピーエンドになる。その意味でも、ある種肯定的なイメージで描かれている異界と考えたわけです。

白雪姫は一体どのくらいの期間、あの7人のこびとたちのいる異界にいたのでしょうか。実はテキストにはまったく書かれていません。メルヘンや昔話は細かい描写をしないので、必要でなければ時間も語らないのです。白雪姫が継母の女王より美しくなったのは7歳のときで、こびとたちの小屋から戻ってきたときは王子と結婚する年齢になっていますが、異界での滞在時間ははっきりと語られていません。

「ヘンゼルとグレーテル」―否定的なイメージの異界

次にとりあげるのは「ヘンゼルとグレーテル」です。やはりグリム童話です。この話では、否定的なイメージの異界が語られています。食べる物がなくなってしまい、ヘンゼルとグレーテルという兄妹が親に森の中に捨てられます。1回目は小石を目印に帰ってこられるのですが、2回目は帰ってこられません。小石のかわりにまいたパンくずが鳥に食べられてしまったからです。ふたりは、森を歩いているうちに迷い、3日間森の中を歩きまわってお菓子の小屋に着きます。お菓子の小屋を食べていると、中から老婆が出てきて、ふたりを小屋の中へ入れてくれます。ご馳走を食べさせてくれ、きれいなベッドで寝かせてくれるので、一見とてもいいところなのですが、次の日になると、とても怖いところに来てしまったことに気づきます。老婆は魔女であって、実は子どもたちをおびき寄せて食べようとしていた。ヘンゼルは小さな家畜小屋に閉じ込められてしまい、グレーテルはヘンゼルを太らせるために料理をするようにいわれ、こき使われます。ですから、ヘンゼルとグレーテルはそのままあそこにいたら、ふたりとも魔女に食べられてしまうのです。何とかして逃げなければいけない怖いところですので、否定的な異界としています。ヘンゼルとグレーテルは

割合長い間、魔女の小屋にいます。4週間です。

「四週間たったある晩のこと、魔女は、グレーテルにいいました『さあ、ぐずぐずしないで、いって水をくんどいで。おまえの兄さんが、ふとろうがふとるまいが、あした、あの子を殺して煮てしまおうんだ。わたしは、いまのうちに、小麦粉をこねておくからな。いっしょにパンが焼けるように』」（小澤俊夫訳『完訳グリム童話』ぎょうせい、1985年。以下、グリム童話の引用は同書より）。

魔女は、ヘンゼルは殺して煮て食べ、グレーテルはパン焼き釜に突っ込んで焼いて食べようと思っているのです。しかし、最後のところでグレーテルが機転をきかせます。パン釜の中のパンが焼けたかどうか見てこいと魔女にいわれたときに、こういいます「どういうふうにしたらいいか、わからないわ。まずやって見せてくれない。パンをつっこむ板の上ののってちょうだい。そしたら、あんたをおしこんでみるから」。

すると、魔女はパンを突っ込む板の上に乗ります。グレーテルは魔女をできるだけ奥まで突っ込み、パン釜のふたを閉めてしまうので、魔女は焼け死んでしまう。それで助かって、閉じ込められていたヘンゼルを救い、ふたりで戻ってきます。魔女を殺さない限り、自分たちが食べられてしまう怖いところですので、否定的なイメージの異界です。異界というのは、必ずしもいいところばかりではありません。先の「白雪姫」のような、人間を保護してくれる異界もありますが、この「ヘンゼルとグレーテル」のように、人間をとりこもうとする異界もあり、そのような異界からは敵対者を殺して逃げてこなければならぬのです。

ヘンゼルとグレーテルは、森の中を3日間歩きまわってお菓子の小屋に着きますが、帰ってくるときには川を渡ります。グレーテルが魔女を殺してヘンゼルを救出し、魔女の宝物を持って帰る道をさがします。そのうちに、大きな川に出くわします。ところが、その川には橋もないし、舟もないし、渡ることができません。アヒルが泳いでいるので、その背中に乗せてもらって、向こう岸に渡してもらおう。行くときは、ふたりは川を渡っていないのですが、帰ってくるときに、突然この川が出てくるのです。この川は何でしょうか。これ

は、あちらの世界とこちらの世界の境界です。この川を渡らないとこちらへ帰ってこられないのです。川や池などの水が、異界と人間の世界との境界としてあらわれることは少なくありません。ヨーロッパの昔話でも、日本の昔話でも。この「ヘンゼルとグレーテル」の川も、実は境界なのです。ですから、川を渡って魔女の世界から人間の世界に戻らなければいけない。アヒルに川を渡してもらおうと、だんだん見慣れた森になってきて、お父さんの家に帰り着きます。今回はとりあげていないのですが、川を渡った先に地獄があると語られる話があります（たとえば、グリム童話「3本の金髪を持った悪魔」）。主人公は、渡し守に川を渡してもらいます。そして地獄を訪ねて、悪魔の3本の毛をもらい、帰ってくる時にはまた川を渡してもらってこちらに戻ってきます。

「七羽のカラス」一呪われた人間がいる異界

次は「七羽のカラス」です。これもグリム童話からです。この話には、「白雪姫」や「ヘンゼルとグレーテル」とは違って、呪われた人間がいる異界があらわれます。テキストをお渡しいたしましたので、みていきます。ある人に7人の息子がいて、やっと娘が生まれます。父親は息子に、娘の洗礼のための水を汲みに行かせます。ところが、息子たちが先を争って水を汲もうとしたため、桶が泉に落ちてしまいます。息子たちが帰ってこないで、お父さんは怒って呪いの言葉を吐きます。「いつまでたっても帰ってこないで、とうとう、おこつてのろいました『ぼうずども、みんなカラスになればいい!』」。すると、7人の息子はカラスになって飛び去ってしまいます。「両親は、このろいのことばをとりけすことはできませんでした」と先にいくのですが、生まれた娘はだんだん大きくなり、あるとき、自分に7人のお兄さんがいるということを知ります。そして、「自分がお兄さんたちをすくわなければならないと思い、いてもたってもいられなくなりました。そこで、とうとうこっそり家を出て、広い世の中に旅に出ました」。ここから娘の旅が始まるのです。「お兄さんたちをさがしだし、たとえ命をかけてもすくいだそうと思ったのです」。持ち物についてもふ

られています。両親からももらった指輪と、パンと、水と、小さな椅子。これが異界への旅になります。「女の子はどンドン歩いていきました。どこまでも、どこまでも歩いていくうち、世界のはてにきました」。まず、お日さまのところに行きますが、お日さまは怖いのです。「お日さまは熱すぎて、おそろしいことに、小さな子どもたちを食べていました」。それで、そこから逃げ出し、今度はお月さまのところへ行く。「けれども、お月さまはつめたくて、こわくて、いじわるでした。そして、子どもに気がつく、『人間のにおいがするぞ! 人間のにおいがするぞ!』と、いいました」。娘はそこから立ち去り、今度はお星さまのところに行きます。お星さまはみんな親切で、あけの明星が、娘にひよこの足をくれて、いいます。「この足を持っていないと、あなたのお兄さんたちがいるガラス山をあけることはできません」。この娘は、かなり長い距離を旅しているといえるでしょう。先ほど扱った「白雪姫」や「ヘンゼルとグレーテル」では、森の中を徒歩で移動して異界へ行きます。白雪姫は1日森の中を走り、ヘンゼルとグレーテルは3日間森の中を歩きまわります。地続きですから、特別な移動手段がなくても、歩いて異界へ到達できます。「七羽のカラス」では、娘は歩いて世界のはてまで行ってしまいます。歩いてどうやって世界のはてまで行くのだろうと思いますが、メルヘンの中では行ってしまいます。そして、世界のはてまで行くと、お日さまや、お月さまや、お星さまがいる。娘は、天の世界に行ったわけではありません。おもしろいことにヨーロッパのメルヘンでは、こういったことがよくあります。人間が水平方向に地続きになっているところをずっと歩いて行くと、お日さまのところに着く、お月さまのところに着く、お星さまのところに着く。天体が擬人化されて、水平方向に移動した先にあらわれるのです。

娘の旅はまだおしまいではありません。世界のはてに来て、お日さま、お月さま、お星さまのところに行きますが、まだ最終到着地には着いていません。最終到着地はどこかという、ガラス山です。お星さまのところ、お兄さんたちはガラス山にいるといわれ、「女の子は、その足をうけ

とり、ハンカチにたいせつにくるんで、また歩きはじめました。とうとうガラス山に着きました」。どのくらい歩いたのかわかりませんが、ガラス山に着きます。その門は固く閉じられている。それを開けるための鍵であるひよこの足を取りだそうとして、なくしてしまったことがわかります。娘がどうしたかといいますと、ナイフで自分の小指を切り落とし、それを門に差しこんで門を開けるのです。口伝えのメルヘンや昔話には、このような、指を切る、首を切る、手を切るなどの場面があらわれます。そこだけをみると非常に残酷ですが、描写はしません。それが、メルヘンや昔話の語り口の特徴です。「やさしい妹は、ナイフを取りだして、自分の小指を切り落とし、それを門にさしこむと、門はうまくあきました」。ここでは、痛いとも血が流れたともいっていないですし、それどころか、この小指のことは後では一言も話題にされません。役割を果たしたら、話題にならなくなってしまいます。写実的な描写をしない、言葉でいうだけであって、肉体を奥行きのある肉体として扱わず、平面的に扱います。血は流れませんし、痛みの描写もありませんし、切った指がどうなったのかも語られません。切った首を再びのせると、首を切られた人は生き返ります。普通の肉体だったらありえないことですがけれども、メルヘンや昔話の語り方ではこうなのです。グリム童話「手を切られた娘」では、切られた手がまた元どおりになります。

少しそれましたが、娘はガラス山に入ります。すると、最初に迎えてくれるのはこびとです。「おまえ、なにをさがしにきたんだね？」というので、「七羽のカラスになった兄さんをさがしてるんです」と答え、待たせてもらいます。この部分、「白雪姫」の場面とよく似ています。「こびとは、カラスたちのごちそうのもらった七まいのおさらと、七つのさかずきを運んできました。すると、妹は、そのおさらの一まい一まいから、ひと口ずつ食べ、さかずきのひとつひとつから、ひと口ずつ飲みました。そして最後のさかずきのなかに、持ってきた指輪を落としておきました」。そのとき、カラスたちが帰ってくる。食事を始めようとして、「ぼくのおさらからとって食べたのはだれ

だ？ぼくのさかずきから飲んだのはだれだ？これは人間の口が飲んだあとだぞ！」といいます。このせりふ「これは人間の口が飲んだあとだぞ！」は、カラスになったお兄さんたちが人間の来ない世界にいることを示しています。七羽目のカラスが、指輪を見つけます。「ぼくらの妹がここにきてくれているならば、ぼくらはすくわれるんだがなあ！」というので、娘は飛び出していきます。最後のところですが、「すると、カラスはみんな、また人間のすがたにもどりました。みんなよろこんでさあ、キスしあい、そして、楽しくうちへ帰っていきました」。これでおしまいです。娘は長い旅をしてガラス山に行き、カラスになってしまったお兄さんたちを救うことができたわけです。最後はとても簡単です。帰っていったとはいっていますが、どうやって帰ったかは全く語られていません。「楽しくうちへ帰っていきました」という一言で終わっています。娘がガラス山に着くまではとても大変です。到着するまでに長い距離を移動しなければならないということは、異界に到達するのが大変であり、それが移動の距離によってあらわされているといえます。そのような遠距離移動をしているにも関わらず、帰りはあっという間です。このようなことはしばしば起こります。この話の場合は、お兄さんたちが救われて帰ったということが大事であって、どのように帰ったかは大事ではないのです。呪いをかけられて、カラスの姿をとらざるをえなかったお兄さんたちは、ガラス山にいました。ガラス山ではこびとがカラスたちの世話をしているようでしたが、お兄さんたちが呪いをとかれ、娘といっしょに人間の世界にもどってくると、このこびとについては一切話題になりません。レジュメには、呪われた人間がいる異界と書きましたが、これは、あまり肯定的な異界ではないかもしれません。娘が危害を加えられることはないし、食べられてしまうような怖さがあるところではないですが、カラスになったお兄さんたちが、救われるまで滞在しなければならないとすれば、否定的な異界と考えることができます。

ここに、いくつか絵本を用意していただいています。これは『七羽のカラス』で、リスベート・

ツヴェルガーが絵を描いています。(資料リスト2)後で手にとってご覧ください。ご存知の方も多いかもしれませんが、メルヘンを絵本にした場合、たとえば、異界をどう描くかは、その画家の話の解釈によって違ってくると思います。これは、娘がお日さまを訪ね、怖くなって逃げ出したところです。これは、お星さまたちがいすに座しているところ。ツヴェルガーはこう描いています。ツヴェルガー意以外の「七羽のカラス」もあります。

「七羽のからす」一呪われた人間がいる異界

もうひとつの「七羽のからす」(小澤俊夫編、飯豊道男訳『世界の民話28オーストリア』ぎょうせい 1985年)は、オーストリアの話です。メルヘンは口伝で伝えられてきたので、各地に似た話があるのです。「七羽のからす」は、ヨーロッパではあちこちに分布している話です。テキストに沿って見ていきましょう。タイトルは、先のグリム童話と同じ「七羽のからす」です。話の骨組みも同じです。一番下の妹が、呪いにかけてカラスになってしまった7人の兄たちを救いに行く話ですが、先程の話とは、娘の旅の仕方や到着地、途中で出会うものが違います。異界の部分が少し異なっているのです。発端部分はほとんど同じです。からすになれというのが、父親ではなくて母親ですが。

娘が大きくなり、旅に出たというあたりです。「娘は、泣いて引き止めようとする母親の言葉に耳をかさず、すぐさま兄たちを救いに出かけた。何日か歩いていくと、これも地上の異界ですから、徒歩で行きます。「大きな森にきた。ここで道に迷った。さんざん歩き回った末、夜になるころ、不意に明かりがちらちらするのが見えた。そっちに行くと、小屋の前に出た」。これが、風の家なのです。女の人が出てきて、「うちの人は風でね、近寄る人間をかたっぱしから食っちゃうんだから」といいます。娘は「桶のあいだに隠れます」といって、小屋の中に入れてもらう。そのとき、主人の風が帰ってきます。「風ははいってきて、しばらくすると言った。『おい、人間の血のにおいがするぞ。おまえ、だれか隠したな。さっそく夕飯に平らげてやる』」。先の「七羽のカラス」で

も、お月さまが「人間のにおいがするぞ」といってました。風や月、あるいは、悪魔や巨人などが、「人間のにおいがする」「人間の血のにおいがする」というのは、彼らが異界の住人だからです。ところが、ここでは娘は食べられることなく、風の女房が雌鶏を焼いてそれを風に食べさせます。すると、風は「おれは隠れてる人間に、何も手出しはせん。さあ、出てこい」といいます。娘が出てきて、テーブルの前に座していると、「そのうち風の主人は雌鶏を平らげた。いつもみたいに骨を地面にほうり投げずに、皿に置いた」。この骨が、やはり大事なのです。先の話では、ヒヨコの足がでてきましたが、ここでは、風が食べた雌鶏の骨です。「皿にのっかってる骨を取って、大事にとっておけ。いつか要ることがあるだろう。あしたの朝、おれが出かけるとき、おまえも一緒にくるんだ。おれが木をなびかせる方向に行くんだ」といわれて、娘は風と一緒に出かけ、風が木をなびかせる方向に行きます。何日かすると、ガラスの城に着きます。先の話ではガラス山でしたが、この話では、ガラスの城に着く。これが、娘の最終到着地です。風の小屋はすでに異界ですが、娘の旅はそこでは終わらず、お兄さんたちがいるガラスの城へ到着しなくてはなりません。やはり、その城には扉も門もなかった。先の話でも、ガラス山の鍵を開けないと中へ入れませんでした。ここもそうです。娘は不意に、鶏の骨を思い出し、どうしたかといいますと、「娘は骨をガラスの壁に段々みたいに上下にはめこんで、窓にたどり着き、そこからなかにはいりこんだ」。骨で鍵を開けたのではなく、階段のようにして使ったわけです。娘が中に入ると、広間には「ベッドが七つ、テーブルが七つあって、テーブルの上には、どれにも食事の入ったつぼがあった。娘はひとつのつぼから味見をすると、なかに指輪を入れて、ベッドの下にもぐりこんだ」。そのとたん、12羽のからすが窓から入ってきて、地上におりると、人間の姿に変わります。おもしろいことに、最初の7人がお兄さんたちで、あとの5人は全身緑となっています。この全身緑の5人は、何なのかかわからないのですが、からすになってしまった7人のお兄さんたちの給仕係であるらしく、「食事の給仕をし

てすむと、また飛び去った」となっています。兄たちは指輪と妹を見つけ、娘は「わたし、兄さんたちを助けにきたの」といいます。

ところが、この話はここで終わりません。先のグリム童話の「七羽のカラス」では、兄たちが人間の姿に戻り、みんなで楽しくうちへ帰っていったのですが、この話ではまだ先があって、これだけでは兄たちの呪いはとけないのです。娘は、兄たちがいるガラスの城にしばらく滞在しなければならず、それも7年口をきいてはいけないという試練がついています。「娘はでも、考えを曲げなかったの、そのときから、ただのひと言もしゃべれなくなった。娘は兄たちのところにて家事をした」。ですから、娘は口をきかないで、7年近くそこに留まっていたことになります。しかし、異界に行きっぱなしにはならず、戻ってきます。戻ってくるきっかけは、その後によってきます。「あるとき、昼間はからすになっている兄たちが遠出をしたとき、娘は森へ、もみの実探しに行った」。娘は森に出かけます。その森でこの国を治めている王様の狩人たちに見つけられます。娘は高い木の上に逃げこむのですが、猟犬に嗅ぎつけられ、王様の注意をひき、連れて行かれます。ところが、口をきかないので、処刑されることになる。いよいよ娘が絞首台に上がらされたとき、ちょうど、口をきかないでいる7年が終わるので、兄たちがやってきて、妹のことを救います。ここでも、生と死がぎりぎりのところで隣り合っています。さらに、兄たちが、からすの姿から解放されて人間にもどることと、呪われた人間がいる異界からこちらの人間の世界へ戻ってくるのが、ほぼ同時に行われています。娘は王様に連れられてきたところで、すでにガラスの城からこちらの世界に戻ってきていますが、最後のところで全てがうまくいくようになっています。「王様は娘の健気な勇気を聞いて、娘を妻にした。それから兄たちは、年を取った母親のことも御殿に呼んで、みんな幸せに満ちたりた暮らしをした」。このオーストリアの「七羽のからす」とグリム童話の「七羽のカラス」は、妹が呪われた兄たちを救うために異界を訪れるという同タイプの話ですが、異界への到達の仕方や、途中で出会うものが違っていま

す。しかし、娘が長い距離を移動しなければならないこと、その意味で、異界に到達するのが簡単でないことは共通しています。

地下の異界についての話に入る前に、メルヘンや昔話の語り口の特徴を少しお話します。メルヘンや昔話には、さまざまな異界の住人、すなわち、魔女、呪われてカラスになった人間、こびと、風などが登場しますが、これらのものが口をきいて人間とやりとりをします。人間はそれに対して驚いたり怖がったりしませんし、不思議にも思わないのです。言葉をしゃべる動物もしばしば登場しますし、お日さまやお月さまやお星さまも口をききます。グリムの「七羽のカラス」で、娘がお日さまとお月さまを怖がるのは、彼らが口をきくからではなく、小さな子どもたちを食べているから、あるいは、冷たくて意地悪だからです。昔話に登場する人間は、人間ではない存在、つまり異界の住人に対して、精神的な違いを感じていないのです。人間に対するのと同様に、異界の住人と会話をし、交渉します。精神的な次元の違いを感じていないということで、「一次元性」といいます。

メルヘンや昔話独特の語り口については、スイスの文芸学者マックス・リュティが理論化し、『ヨーロッパの昔話—その形式と本質』（小澤俊夫訳 岩崎美術社 1969年）を著しました。リュティは「一次元性」について、「昔話では主人公ははなしをする動物や風、星などに会っても、べつに驚嘆もしなければ不安も感じない。（中略）異常なものに対する感情をもちあわせていないのである。主人公にとってすべては自分とおなじ次元に属しているように見える」と述べ、人間が人間以外の存在のなかにべつな次元を感じる感情をもっていない、と述べています。また、先に触れた、登場人物の指や手などが切りとられることについては、「昔話に登場する人間や動物には肉体的、精神的深さがない」「昔話の登場者はあたかも紙で作った図形のように、好きなように切りとってべつに本質的变化が生じるものではない」と述べています。リュティ理論については、その日本への紹介者である小澤俊夫の『昔話の語法』（福音館書店 1990年）が大変参考になると思っています。小澤は、ヨーロッパの昔話だけでなく、

日本やそれ以外の昔話にもそのような語り口の特徴がみられるとし、とてもわかりやすく解説しています。

リュティは『ヨーロッパの昔話』で、「昔話にとって地理的遠隔は、精神的に別世界のものを表現する唯一の正しい手段である」ともいっています。たとえば、白雪姫とこびと、ヘンゼルとグレーテルの兄妹と魔女、娘と星、娘と風、娘と呪われてカラスになってしまった兄たち、これらは、人間と異界の住人ですから、本来なら精神的には断絶があるわけです。けれども、その精神的断絶が感じられないように語る昔話においては、人間の住む日常的世界と異界とを「すくなくとも地理的に隔離するのをこのむ。すなわち昔話は精神的に区別されたものを、一本の線のうえに投影し、内的なへだたりを外的な距離によって暗示する」のです。本来口で語られてきたメルヘンや昔話は、耳で聞いてわかりやすくなければなりません。そうでないと、記憶に残りませんし、伝承されていかないわけです。たとえば、話がいろいろに枝分かれしてしまうと、本だったら読み返せますが、語られる昔話は読み返すことができないので、話の筋は一本の線でないといけないのです。その線がまっすぐ最後の結末までいく。そして、その一本の線の上に、精神的に異なるものもあらわされています。主人公が長い距離を旅していくと、お菓子の小屋、ガラス山やガラスの城に着きます。これまでにとりあげた話においては、主人公は地上の異界に徒歩で到達し、長い距離を移動していきます。グリムとオーストリアの「七羽のカラス」の場合は、娘が途中で立ち寄るところもありますし、かなり長く移動していることになると思います。

地下の異界

地下の異界に入ろうと思います。地上の異界と違って、地下の異界へは下の方向に移動しなければ到達できません。地下に別世界があるという考え方は、いろいろな民族にあります。日本の昔話にも、たとえば「おむすびころりん」があります。「おむすびころりん」では、爺が穴に入っていきます。ヨーロッパのドイツ語圏の話としてとりあ

げたのは、まず「ホレばあさん」です。この話も、グリム童話の中では有名です。ここにいくつか「ホレばあさん」—これは『ホレおばさん』になっていますけれども—の絵本を用意していただいたので、後でご覧になってください。「ホレばあさん」については、肯定的・否定的なイメージ両面をもつ異界とレジュメには書きましたが、簡単に申しあげますと、正しい反応をした人間には報いるが、間違った反応をした人間は罰する、そういう異界です。「おむすびころりん」で知られる日本の昔話の「地蔵浄土」や「鼠の楽土」においても、これと同じ肯定的・否定的なイメージ両面をもつ異界が語られます。

「ホレばあさん」—肯定的・否定的なイメージ両面をもつ異界

「ホレばあさん」をみていきます。ある未亡人にふたりの娘があり、ひとりは美しく働き者、もうひとりは醜くて怠け者でした。醜くて怠け者の実の娘はかわいがられ、美しく働き者の継娘はいじめられています。このふたりの娘は極端なコントラストをなしています。メルヘンはこのような極端な語り方を好みます。この話では、継娘と実の娘がふたりとも異界に出かけていきます。ただし、一緒には行きません。最初に異界に行くのは継娘です。異界を訪問する人間が、なぜ異界へ行くかという、実は行きたくて行くのではないのです。異界へ行く動機は内的なものではなく、外的なものです。先ほど検討した地上の異界についての話、「白雪姫」や「ヘンゼルとグレーテル」でもそうでした。白雪姫は、戻ったら継母に殺されてしまうので、森の中へ走って行ってこびとの小屋に着く。ヘンゼルとグレーテルは、親に森に捨てられ、迷って歩き回るうちにお菓子の小屋に着く。「七羽のカラス」では、娘はカラスになってしまった兄たちを救うために行くのであって、「いちどガラス山に行ってみましょう」と思っただけではありません。この「ホレばあさん」でも同様です。継娘は、毎日糸紡ぎをさせられていて、ある日、糸紡ぎに使うつむが血だらけになったので、井戸で洗おうとしますが、つむは水の中へ落ちてしまいます。娘が継母にこのことを話す

と、継母は「おまえが、つむを落としたなら自分でひろってくるんだ！」と命令します。「それで、むすめは井戸へもどりましたが、どうやっていいかわかりません。こまりはてて、とうとう井戸のなかへとびこんでしまいました」。井戸に飛び込んでも、娘は溺れたりしません。この井戸は、異界への入り口、通路になっているのです。水は通路や境界としてあらわれることが多いのですが、この場合は、地下の異界への入り口もしくは通路になっています。「目がさめて、われにかえると、そこは美しい野原でした。お日さまがさんさんとてって、何千という花がさいています」。井戸の底に別世界が広がっています。娘は野原を歩きはじめます。やがて、パン焼き釜がひとつあり、中のパンが「わたしをだしておくれ、こげちゃうよ。わたしはもうとっくに焼きあがっているんだ！」と叫びます。娘はめんどろがらずに近よって行って、パンを全部引き出してやります。また歩き続けると、今度はリンゴの木があり、その木が「わたしをゆすっておくれ！わたしたちリンゴは、みんなもう、すっかり熟してるんだ！」といいます。娘は木をゆすってリンゴをすっかり落としてやります。また歩き続け、とうとう小さな家に着きます。「家のなかから、年とったおばあさんが外をながめていました。そのおばあさんには、大きな歯があったので、むすめはこわくなってにげだそうとしました。けれども、おばあさんはむすめにむかって、大声でいいました『こわがらなくていいんだよ。(中略)あなたがうちの仕事をきちんとしてくれれば、しあわせにしてあげよう。ただ、注意してわたしのベッドをきちんとととのえておくれ。そして羽がとぶように、よくふとんをはたくんだよ。そうすれば地上に雪がふるからね。わたしは、ホレばあさんだよ』」。このおばあさんが、ホレばあさんです。ホレばあさんの住んでいる家があるのは地下の異界です。ここは、メルヘンのファンタジー性がとてもよくあらわれているところです。娘は、井戸に飛び込んで地下の異界に行き、ホレばあさんの家に到着しました。そこでホレばあさんの羽ぶとんをはたくと、地上に雪が降るのです。とても不思議でおもしろいですね。(挿し絵を示しながら) これは、娘がその羽ぶとんを

はたいているところだと思いますが、雪が降っています。空中に窓が開いた形になっています。しかし、娘が仕事をするホレばあさんの家は地下にあるのです。「ホレばあさん」の原文テキストには、この部分に注がつけられていて、「それで、ヘッセンでは、雪が降ると、ホレばあさんがベッドを整えているという」とあります。ヘッセンは、現在のドイツのほぼ中央部に位置するヘッセン州のことで、グリム兄弟とグリム童話のふるさとです。

娘はホレばあさんの家で仕事をします。「どんな仕事でも、おばあさんの気にいるように、きちんとかたづけ、おばあさんのふとんを力いっぱいはたいてあげました。むすめはしあわせにくらすことができました。いやなことをいわれることもないし、毎日、煮たものや、焼いたものを食べさせてもらえました」。この娘にとっては、ホレばあさんのところはいいところです。家で継母にじめられているよりは、ずっといい暮らしができるわけですから。ところが、娘は帰りたと思うのです。異界がどんなにいいところでも、そこを訪れた人間は帰りたくなる、あるいは、帰ってこなければならぬということなのかもしれません。「ホレばあさんのところへきてから、だいぶ日にちがたちました。むすめは、なんとなく悲しくなってきました。ここは、うちにいるより千倍もいいんだけど、だんだん、うちがこいしくなりました。そこでおばあさんにむかっていきました『わたし、うちがこいしくなりました。ここは、とてもいごこちがいいんですけど、もうこれ以上いられません』」。

ホレばあさんは「あんたのいうとおりだよ。あんたは、とてもまじめにつかえてくれたから、わたしが、自分で上の世界へつれて行ってあげよう」といいます。ここで「上の世界へ」といっているということは、ホレばあさんがいるのは、やはり「下の世界」なのだということがわかります。それで、娘が地上に戻る場面です。娘は井戸に飛び込んで地下の異界に着きましたが、帰るときはこの井戸を使いません。どうやって帰ってくるかという、次のように語られています。「ホレばあさんは、むすめの手をとり、大きな門のところまでつれて行ってくれました。門があげられました。

むすめがその下をとおると、金の雨がはげしくふりました。そして金がぜんぶ、むすめのからだにくっつき、むすめは、みるみるうちに、すっかり金でおおわれてしまいました。『あんたは、はたらきものだったから、それをぜんぶ持っていいよ』と、ホレばあさんがいいました。そして、そのうえ、井戸のなかに落とされたあのつむも、かえしてくれました。それから門がしめられました。むすめは地上に着いていました。ホレばあさんがつれていってくれた大きな門は、地下の異界と地上の人間世界との境界と考えられます。門が開けられその下を通ると、娘は金の報酬をもらい、落としたつむも返してもらって、門が閉められると、地上に戻っています。おもしろいのは、娘が着いたのは「お母さんのうちからそんなに遠くないところ」だったということです。家の庭に入ると、ニワトリが「うちの金のおじょうさまのお帰りだよ」と鳴きます。この娘は、継母に落としたつむを拾ってこいといわれ、井戸に飛び込むことによって地下の異界を訪問しました。異界にはしばらく滞在し、ホレばあさんのところで家事をします。そこで幸せに暮らしていましたが、帰りたいたいと思ひ地上に戻ってきます。帰るときに、仕事に対する金の報酬をもらいます。つまり、異界は正しい反応をした人間に報いてくれたことができます。

ところが、継母は金でおおわれた継娘を見ると、自分の娘にも同じ幸せを与えたいと思います。そこで今度は、実の娘が継娘のまねをして異界へ行きます。「それで、もうひとりのむすめも、井戸のわきにすわって糸をつむがせられました。つむが血だらけになるように、むすめは、わざと指にさして、手をイバラのかきねでひっかきました。それから、つむを井戸のなかに投げこみ、自分もとびこみました。むすめは、前のむすめと同じように、美しい野原に着きました」。実の娘は、継娘と同じ手続きを踏んで、やはり異界へ行きます。しかし、同じ手続きをわざと行なっているのです。さらに、異界で出会うものに対する実の娘の反応は、継娘のそれとは正反対です。同じ道を歩いていくと、パン焼き釜のところに来ます。パンが「わたしをだしておくれ！」と叫びますが、実の娘は

「わたしがよろこんで手をよごすとでも思っているの！」といい、パンを出してやりません。次に、リンゴの木のところに来ると、リンゴの木が「わたしをゆすっておくれ！」と叫びますが、娘は「頭にも落ちてこられたらたまらないわ」といい、リンゴを落としてやりません。最後にホレばあさんの家に着き、雇ってもらいます。「最初の日は、一生けんめい自分をおさえて、まめにはたらき、ホレばあさんになにかいいつけられると、すぐにそれにしがいました。(中略)けれども、二日めには、もうなまけははじめました。三日めには、もっとなまけははじめました。朝には、ちっとも起きません。ホレばあさんのベッドの手入れもちゃんとやらないし、羽がとぶほど力をいれて、ふとんをはたくこともしませんでした。ホレばあさんはうんざりして、このなまけものを帰すことにしました」。ここで、実の娘は継娘と同じ手続きを踏んで地上に戻ります。「ホレばあさんは、なまけもののむすめも、あの門のところにつれていきました。ところが、むすめが下をとおると、金の雨ではなくて、大きななべにいっぱいはいった、コールタールがふってきました。『これが、おまえの仕事のほうしゅうさ』とホレばあさんはいって、門をしめてしまいました」。報酬はその仕事の内容に正確に対応しています。異界でのできごとは、人間に対する試練あるいはテストととらえることができます。人間が異界から試されている、といってもいいでしょう。最初の訪問者は正しい反応をして報いられ、まねて行く2番目の訪問者は間違った反応をして罰せられます。実の娘が体じゅうコールタールだらけになって帰ると、ニワトリが「うちのきたない、おじょうさまのお帰りだよ」と鳴きます。

日本の昔話において、「ホレばあさん」と同様の構成で、人間が地下の異界を訪れた話は、「地蔵浄土」や「鼠の楽土」です。そこでは、最初の異界訪問者とそれをまねる2番目の異界訪問者は、爺と隣の爺になります。これに対して、ヨーロッパの話の場合は、女の子の組み合わせ、それも、継娘と実の娘という義理の姉妹になります。この組み合わせは、文化によって違いがあります。たとえば、韓国や台湾では、男の兄弟になります。

小澤俊夫は「昔話における隣モチーフ」(川田順造・柘植元一編『口頭伝承の比較研究Ⅰ』弘文堂1984年)という論文で、日本昔話において爺と隣の爺という組み合わせが多いことを、隣人を気にする日本の精神のあらわれととらえています。

「黄金のベテリと松やにバビー」—肯定的・否定的なイメージ両面をもつ異界

次にあげたのは、スイスの「黄金のベテリと松やにバビー」(小沢俊夫編・訳『世界の民話Ⅰドイツ・スイス』ぎょうせい 1976年)という話です。「ホレばあさん」と同タイプの話で、黄金と松やにが、金とコールタールに対応しています。この話でも、娘が地下の異界に行きます。母親がいて、継娘(ベテリ)と実の娘(バビー)がいます。ベテリはいじめられていて、夜も昼も紡ぎ車を回させられています。糸紡ぎはヨーロッパでは、女性の大事な仕事でした。「ある日ベテリのはずみ車が床に落ち、ころころ転がって行ってねずみの穴に入ってしまった」。紡ぎ車を回して、はずみ車が転がり、ねずみの穴に入ったということは、同じ部屋のどこかに穴があって、そこに入ってしまったということです。すると、「まま母はベテリに、ねずみの穴に潜って行って自分ではずみ車をとってきなさい、ときつく命令した。かわいそうなベテリは命令に従うよりしかたなかった」。ここでも、継娘が地下の異界へ行く動機は、継母の命令です。そもそもねずみの穴に、はずみ車が落ちるのも不思議なのですが、メルヘンは大ききことには頓着しません。そのねずみの穴にベテリも入ります。おもしろいことに「穴に入ろうとすると、穴がぐっと広がった」と語られています。この穴が、地下の異界への通路になっています。「そしてなんだか目に見えない手で支えられて、とてつもなく遠くの、地下の、全然別な世界へ連れて行かれるような気がした。ほんとうに連れて行かれたのだ。地下の世界はなんとすばらしい光景だったことだろう。行く手には豪華な城がきらきらと光って見えた」。「ホレばあさん」の場合とは少し違いますが、やはり地下に別世界があります。地下にお城があるのです。ベテリがお城の近くに行ってみると、そこにいる小犬たちが、

娘の名前を知っていて「黄金のベテリがきたよ!」といいます。まもなく、数人の子どもたちに親切に迎えられます。子どもたちはベテリに「あんたご飯食べる時誰といっしょに食べたい?ぼくたちと?それとも小犬たちと?」と聞きます。ベテリが「小犬のところへすわらせて!わたしには、それでももったいないよだわ」というと、子どもたちは「あんたはぼくらといっしょのテーブルで食べなきゃ」といいます。「それから二種類の着物を持ってきて選ばせた。一方は木綿で、もう一方は黄金でできていた。ベテリは『わたしにはこれで十分だわ』と言って木綿の着物をとった」。ところが、子どもたちは、ベテリに「黄金の着物を着せ、お城の豪華な広間へ連れていった。そこには黄金のテーブルに最高のごちそうと飲みものが並べられてあった」。継娘は黄金の着物を着て、子どもたちとご馳走を食べます。「そのうえお別れのときには、子供たちは高価な飾りものと、それに黄金のはずみ車もくれた」。異界から帰ってくるたびに、人間が贈り物をもらってくることはしばしばみられます。「それからみんなはベテリをあのおねずみの穴へ押し上げて、悪いまま母の居間へ返した。居間にもどると、黄金の着物を着たベテリはまるで天使のように光り輝いた」。帰ってくるときは行くときに入った、ねずみの穴がまた通路になります。ねずみの穴に押し上げられると、ベテリは居間に戻るわけですから、継母の家の居間の下に異界があることになります。

今度は、実の娘のバビーが、ベテリと同じ幸せを得たいとまねして異界へ行きます。「それで、母と娘ははずみ車をねずみ穴に落とし、バビーがそれを追っていった。すると、ほんとうにまた穴はひろがり、バビーの姿は見えなくなった」。下に着くと「ベテリから聞いたとおりの道を行って、小犬たちがいる城に着いた」。バビーはベテリと同様、小犬たちと子どもたちに迎えられますが、その様子はベテリるときとは違います。小犬たちは「松やにバビーが来たぞ!」とほえ、「そのなき声は怒ったような調子で、目は陰うつで、しっぽはだらりとさがっていた」。子どもたちの「まなざしはベテリを迎えたときに太陽のように輝いていたのはまるっきり違っていた」。「子どもた

ちはバビーに、食事のとき誰と一っしょに食べたいかと聞いた。『あんたたちとだよ』とバビーは言った。(中略) 子どもたちはバビーに着物を二着出して見せた。木綿のと黄金のと。バビーは黄金の方が欲しい、ベテリも黄金の着物をもらったのだから、と言った。そして黄金のはずみ車とその他たくさん黄金の飾りを欲しいと言った。しかし、バビーは木綿の着物しか着せてもらえず、小犬たちと一緒に床でご飯を、しかも残飯と油かすばかりを食べさせられます。すべて正反対になるわけです。「お別れのとき、バビーの木綿の着物にタールと松やにが塗られた。そして松やにバビーとしか呼んでもらえなかった。はずみ車ももらうにはもらったが、使い古しの木製のものだった」。バビーは、ねずみ穴から地上へ戻されます。そして、ベテリはいつも黄金のベテリと呼ばれるのに対し、バビーの方は松やにバビーと呼ばれます。

この話は、「ホレばあさん」と同タイプの話です。ただし、地下の異界への行き方が違います。また、継母の居間のすぐ下に異界があり、そこには豪華な城があり、小犬たちや子どもたちがいて、訪問者の娘を迎えてくれます。この子どもたちは何なのかと思いますが、話の中では、はっきり語られていません。

「ダンスですりきれた靴」一呪われた人間がいる異界

もうひとつ、グリム童話の「ダンスですりきれた靴」をみていきましょう。これはエロール・ル・カインが描いた絵本で、『おどる12人のおひめさま』というタイトルになっています。私が用意したテキストは「ダンスですりきれた靴」と訳されています。これも、地下の異界にでかけていく話です。少し長いですが、とてもおもしろい話です。地下の世界にお城があり、そこに、呪われた人たちがいるという形になっています。

王様に12人の王女がいます。王女たちは毎夜どこかへかけて、踊っているらしい。というのは、朝になると、王女たちの靴がダンスですりきれているからです。それで王様は、おふれをだします。「王女たちが、夜中にどこでダンスをするのか、

さぐりあてたものは、王女のうちひとりを妻としてえらび、王の死後は、王となるであろう。だが、ひとたび申しでて、三日三晩のうちに、さぐりだすことができなければ、そのものの命は、うしなわれるであろう」。このおふれは非常に極端です。できれば、王女を妻とし王となる、けれども、できなければ、命は失われる。メルヘンの語り口の特徴である極端性のあらわれです。その後、何人もが王女たちの秘密を探ろうと試みて失敗し、命をおとします。そこへ、ひとりの貧しい兵隊があらわれます。この兵隊が、王女たちのあとについて地下の世界へ行くことになるわけです。兵隊は歩いていくうちに、ひとりのおばあさんに出会い、このおばあさんが助けてくれます。「そんなにむずかしいことじゃないんだよ。夜になると、ワインを持ってくるけれど、それさえ飲まなければいいんだ。そして、ぐっすりねむったようなふりをしているのさ」。それから、着ると姿が見えなくなるマントをくれます。このおばあさんは、兵隊にとっては援助者です。メルヘンや昔話では、ちょうどいいときに援助者があらわれて、主人公がちょうど必要としている物や助言を与えてくれるのです。それで兵隊は、王様に「王女さまがたのゆくえをさぐってみましょう」と申しでます。「夜になって、寝る時間がくると、王女たちの大広間のとなりへつれていかれました」。すると、おばあさんのいったとおりになります。一番年上の王女がワインを持ってきます。けれども、兵隊はそれを飲まず、ぐっすり眠ったふりをします。王女たちは起きあがって、おめかしを始めます。ところが、一番末の王女だけが不安に思い、「わたし、なぜか知らないけど、とてもみょうな気持ちがするの。きっと、なにか不幸なことが起きるにちがいないわ」といいます。

王女たちが地下の異界へ行くところです。「いちばん上の王女が、自分のベッドのところへ行って、ベッドをたたきました。するとたちまちベッドは、床のなかにしずんでいって、落とし戸が口をあけました。兵隊は、王女たちがいちばん上の王女をせんとうにして、つぎつぎと、下へおりていくのを見ました。(中略) 兵隊は起きて、あのマントを着て、すえの王女のあとについて、その

穴からおりていきました」。12人の王女たちは、大広間にベッドを並べて寝ています。その大広間の地下に異界があるのです。エロール・ル・カインの絵本では、こんなふうには12人のお姫さまがベッドを並べて寝ている姿が描かれています。ここは、先の「黄金のベテリと松やにバビー」の、居間の下に異界が広がっているというのと似ています。ベッドが床の中に沈んでいって、落とし戸が口をあける、というあたりは映像にしたらおもしろいかもかもしれませんね。地下の異界へ行くわけですから、下へ降りていく、そして、やはり穴が地下の異界への通路になっていることがわかります。ここでは階段を降りていくという形になっています。王女たちは下に着いてから、まだ歩いていきます。まず、銀の葉っぱの並木道を歩く。兵隊は証拠として銀の枝を一本折る。その次に、金の葉っぱの並木道、最後にダイヤモンドの並木道を通ります。このところ、とてもきれいです。兵隊は、そのたびに証拠に一本ずつ枝を折っていく。そうやってどんどん進んでいきます。しまい大きな池に着きます。「その池には十二艘のボートがうかんでいて、それぞれのボートにひとりずつ、美しい王子が乗って、十二人の王女がくるのを待っていました。王子はそれぞれひとりずつ、自分のボートに乗せました。兵隊は、いちばんすえの王女のボートに乗りこみました」。王子たちと王女たちは、池を渡って向こう岸に行きます。そこには美しいお城がたっていて、明かりに照らされており、楽しい音楽が聞こえてきます。この城が王女たちの最終到着地であり、その王女たちの行方を追う兵隊の最終到着地でもあります。この城で、王子たちと王女たちはダンスをします。「あけがたの三時までおどりつづけました。靴はすっかりすりきれてしまい、みんなダンスをやめなければなりませんでした」。ここは、「あけがたの三時まで」とはっきり時間をいっています。ダンスをやめて帰るときは、来たときと同様、池を渡らなければなりません。「王子はまた、それぞれ王女を乗せて、池を、こいでもどりました。兵隊はこんどは、せんとうの、いちばん上の王女のボートに乗りました。岸に着くと、王女たちは、つぎの夜にもまたくることを約束して、それぞれ

王子とおわかれしました」。おもしろいことに、王子たちはこの先には行けないようで、池の岸までしか来られません。水はここでも、境界になっていることがわかります。「王女たちが、階段のところへくるまでに、兵隊は、さきまわりして、自分のベッドにとびこんで横になりました。そして、十二人の王女が、つかれきって、ゆっくり階段をあがってきたときには、兵隊は、また大いびきをかいていました」。こうして兵隊は、王女たちが地下の城で王子たちとダンスをしていることを、見破ってしまいます。

「翌朝、兵隊は、このふしぎなダンスをもう一度、よく見てこようと思ったので、王さまになにもいません。そして、二日めの晩も、三日めの晩も、いっしょにでかけました。(中略)三日めの晩には、しょうことしてワイングラスをひとつ、こっそり持ってきてしまいました」。王様が「わしの十二人のむすめたちは、夜中に、いったいどこでダンスをして、靴をすりへらせて帰ってくるのじゃ？」とたずねると、兵隊は「地下にある城で、十二人の王子とです」と答え、証拠の品物も見せます。「王女たちは、とうとう見やぶられたことをさとって、もう、うそをついてもしかたないと思い、すべてをはくじょうしました」。この後、王女たちはもう王子のところへは行きません。それで、兵隊は一番上の王女と結婚し、王の死後、王様になることが約束されます。つまり、兵隊は、王女たちを追って地下の異界へ行ったことにより幸せを得たわけです。王女たちにとっては、地下の異界を訪問して王子たちと踊ることは、一時の楽しい体験だったといえるかもしれません。不思議なのは、王子たちについてで、話の最後はこうなっています。「ところが、あの十二人の王子ののろいは、王女たちとダンスをしたぶんだけ、長くとけませんでした」。王子たちが呪いをかけられて地下の城にいる理由は、語られていません。呪いがとけない限り、王子たちは地下の城にいるのではないのでしょうか。不思議な、おもしろいメルヘンです。地下に城があるのは、「黄金のベテリと松やにバビー」でもそうでした。

地下の異界と地上の異界の違い

地下の異界について、「ホレばあさん」「黄金のベテリと松やにバビー」「ダンスですりきれた靴」の三話を駆け足でみてきました。地下の異界は、そこを訪問する人間が住んでいるごく近くに存在しているようです。たとえば、「黄金のベテリと松やにバビー」では、居間にねずみ穴があり、その穴に入ると娘は地下の異界に着きます。「ダンスですりきれた靴」では、一番上の王女が自分のベッドを叩くと、ベッドが床の中に沈み、落とし戸が口をあけ、それが地下の異界につながっています。また「ホレばあさん」においても、娘が飛び込む井戸は継母の家からそれほど離れていません。人間が地下の異界へ行く場合、異界への入り口あるいは通路はすぐ近くにあるといえます。けれども、下に着いてからは、かなり移動しています。「ホレばあさん」では、娘が野原を歩いていくと、パン焼き釜があり、リンゴの木があり、最後にホレばあさんの家に着きます。「黄金のベテリと松やにバビー」では、娘は目に見えない手で支えられ、遠くの、地下の別世界へ連れていかれ、豪華な城に着きます。「ダンスですりきれた靴」では、王女たちがかなりの距離を移動していきます。銀、金、ダイヤモンドの並木道を通って池に着き、その池を王子たちと舟で渡り、向こう岸にある城に着きます。どの話においても、地下の異界の空間的広がりを感じられると思います。

もちろん、地下の異界が語られるメルヘンはこれだけではありません。たとえば、王子や騎士が遠くまで旅をして、地下につながる穴を降り、竜にとらわれているお姫さまを救い出すという竜退治のメルヘンもあります。ところが、今回扱ったメルヘンにおいては、地下の異界は、異界訪問者が生活しているすぐ近く、あるいは、すぐ下に存在している感じがします。その一方で、異界訪問者は地下に到達してから、かなりの距離を移動します。地下の異界は、空間的広がりをもってイメージされているといえます。

このような地下の異界に対して、地上の異界はすぐ近くには存在しません。地上の異界に到達するために、人間は長い距離を移動しなければなりません。たとえば、森の中を3日間歩きまわって

お菓子の小屋に着く、歩いて世界のはてに行き、さらにそこからガラス山へ行く、などのように。こうしてみると、異界がどこにあらわれるかによって、異界への行き方、異界からの帰り方が違ってくることがわかります。きょうは、そういった異界訪問譚の一部を紹介いたしました。メルヘンに語られている異界をみていくことによって、メルヘンのファンタジー性がどのように形づくられているかが明らかになるだろうと思い、私はこのような研究を続けています。今回お話ししたことは、そのうちの一部です。たとえば、地上の異界でも、あまり長い距離を移動せず、すぐに到達してしまう場合もあります。また今回は、女性が異界へ行く話が多かったのですが、異界へ行くのは女性だけではなくありません。男性ももちろん行きます。先ほど触れた竜退治のメルヘンでは、王子や騎士が地下の異界を訪れ、竜を退治して、とらわれのお姫さまを救い出します。

メルヘンにおける異界

「メルヘンからファンタジーへ」というテーマで、きょうはメルヘンの方に焦点をあててお話しいたしました。メルヘンのなかでも異界訪問譚をとりあげて検討し、異界がどうとらえられ、どのようにイメージされているかをテキストに沿って具体的にみてきました。今回扱った地上と地下の異界についてみてみると、異界には、肯定的なイメージの異界、否定的なイメージの異界、肯定的・否定的なイメージ両面をもつ異界、呪われた人間がいる異界、の4種類がありました。

今回はヨーロッパ、特にドイツ語圏の異界訪問譚にしぼりましたが、日本の異界訪問譚においても同じように、いろいろな場所に異界がイメージされています。人間が地下の異界を訪れた話として、先ほど「ホレばあさん」のところで、日本の「地蔵浄土」や「鼠の楽土」をあげました。ここでは、最初の異界訪問者とそれをまねる2番目の異界訪問者は、爺と隣の爺です。地下の異界には、地蔵や鬼あるいは鼠がいて、訪れた爺を迎えます。そのときの、異界への到達の仕方や異界の様子は、ヨーロッパの場合と似ているところもありますが、異なるところもあります。私のこれまでの調

査によれば、日本の話においては、異界訪問者はあまり長い距離を移動していない印象があります。割合すぐに異界に到達してしまう感じです。今回扱ったドイツ語圏のメルヘンでは、地下の異界は、異界訪問者が生活している場所のすぐ下に存在しています。一方、異界訪問者は地下に到達してから、かなりの距離を移動しています。ところが、日本の「地蔵浄土」や「鼠の楽土」では、爺が仕事にいった山で穴に入ると、すぐに地蔵のところや鼠たちが餅つきをしているところに着き、あまり移動しません。こういうところに、文化による異界のイメージの違いがあらわれるのだと思います。たとえば、地上の異界は、日本の場合は山の中にあらわれますが、ドイツ語圏の場合は森の中です。日本の話でよくみられるのは、男が山を歩いているうちに迷い、一軒家があるので行ってみると、女がひとりいる。男は異界の女に迎えられ、何らかの体験をし、何かのきっかけで異界から日常世界へ戻ってきます。あるいは、戻ってこなければならぬような否定的なイメージの

異界もあります。

こうしてみると、メルヘンや昔話における異界はとても大きなテーマなので、いろいろなことがみえてきます。とくにファンタジーを考えるときには、さまざまに応用して考えることができるのではないのでしょうか。たとえば、創作のファンタジー作品では、異界はどう語られ、どのように形づくられているのか。

メルヘンや昔話は口伝えされてきましたので、本来その伝承には文字や絵や映像というメディアは存在しませんでした。ここに絵本の『白雪姫』がありますが、メルヘンや昔話を絵本にしたときに、語られたものがどう描かれるのか、たとえば、異界はどう描かれるのかということを見ても、また別の課題や問題点があらわれてくると思います。

これで、私の話を終わります。ご清聴ありがとうございました。

(まみや ふみこ 白百合女子大学児童文化学科
専任講師)

イギリスのファンタジー

定松 正

- ・ファンタジー文学の先祖（口承および文字化された話）
- ・文字化された物語と再話者たち
 - 「アラビアン・ナイト、または千夜一夜物語」（18世紀初頭以降英訳）
 - 「イソップ寓話集」（15世紀以降英訳）
 - シャルル・ペロー「昔の物語ーペロー童話集」（1697年、1729年英訳）
 - オーノワ伯爵夫人・ポーモン夫人など/グリム兄弟「子どもと家庭のための童話集ーグリム童話集」（1812年初版、1823年英訳）
 - アンドルー・ラング「青色の童話集（1889年）ー「薄紫色の童話集」（1910年）
 - ジョーゼフ・ジェイコブズ「イギリス昔話集」（1890年）、「続イギリス昔話集」（1894年）

その他諸伝説話

- ・口承および文字化された話の流れを汲む新しい創作話の始まり
 - ハンス・クリスチャン・アンデルセンの世界/ジョン・ラスキン/ウィリアム・M.サッカレー/
チャールズ・ディケンズ/オスカー・ワイルド
- ・新しい文芸形式としてのファンタジー文学
 - チャールズ・キングズリ/ルイス・キャロル/ジョージ・マクドナルド
- ・ファンタジー文学の形式
 - ハイ・ファンタジー/ロウ・ファンタジーなど
- ・ファンタジー文学の諸相
 - 現実からの脱出志向 - ラドヤード・キプリング/ケネス・グレアム/ジェイムズ・バリ/
A.A.ミルンなど
 - 魔法の衰退（エヴリデイ・マジック）- イーディス・ネズビット/パミラ・トラヴァーズ/
メアリー・ノートンなど

「イギリスのファンタジー」紹介資料リスト

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	黄金の川の王さま 世界少年少女文学全集 33 (イギリス 編 5)	ジョン・ラスキン作 山本蘭村等絵 安藤一郎訳	創元社 1955	児 909-Se122
2	北風のうしろの国へ 世界の名作図書館 9	ジョージ・マクドナルド作 山室静, 田谷多枝子訳	講談社 1968	Y7-498
3	砂の妖精 世界児童文学全集 21	イーディズ・ネズビット作 深沢紅子絵 石井桃子訳	あかね書房 1959	児 909-Se1223- (21)
4	たのしい川べ	ケネス・グレアム作 E.H. シェパード絵 石井桃子訳	岩波書店 1963	児 933-cG74tl
5	ばらと指輪 少年少女世界の名作文学 4 (イギリス 編 2)	ウィリアム・サッカレー作 吉田郁也等絵 大平よし子訳	小学館 1965	Y7-102
6	ホビットの冒険	J.R.R. トールキン作 寺島竜一絵 瀬田貞二訳	岩波書店 1965	Y7-374
7	水の子物語 少国民世界文学叢書 2	チャールズ・キングスレイ作 角浩絵 安藤一郎訳	新少国民社 1947	児 995-187

イギリスのファンタジー

定松 正



ファンタジー文学の成立の背景

今日はイギリスのファンタジーの話ということですが、イギリスでファンタジーという場合、つまりどういうものをイギリスのファンタジーかという、それはかなり複雑多岐にわたりますので、ある程度話を詰めさせていただきます。まず、言葉としてのファンタジーという語は、オックスフォードの英語辞典に拠りますと、14、15世紀ぐらいにもう使われているという記述があります。ただその頃は、今日でいいますところのファンタジーの概念とは、かなりかけ離れていたようです。例えば、「幻想」とか「妄想」という意味で使われていたようです。それが、今日のようなファンタジーの概念になるのにはかなりの年月を経ているようです。

普通、ファンタジーという言葉から私たちは、魔女が出てくるとか、ハリー・ポッターの本のように魔術が行われるとか、妖精が出てくる、あるいは幽霊、巨人、ドラゴンなど、そういうものが出てくるものをファンタジーの作品だとなんとなく想定しがちです。結果的にファンタジーといったものを、人が想定して規定するそのプロセスには、それぞれの日常生活の中でどのような出来事にその人が遭遇したのか、または経験してきたのか、あるいはどういうものの考え方をする人なのか、そういうものに関係があるのではないかという感じがします。要するに、個人的な人生の経験によってファンタジーという言葉は規定される、そのような傾向があると思われます。

ご承知のように、ファンタジーという語そのものはラテン語系の言葉を起源とするファンタジアです。意味は、人はものを物理的に見るが、とき

には目に見えないものがある、それを見えるようにするという「普通、見えないものを見えるようにする」という意味らしいのです。そこから生じたとされるファンタジー文学というのは、私たちの個人的な欲求というか、こうしたいけれども日常生活ではできないことをやってみたい、あるいは現実の中に隠されている謎みたいなものを見てみたい、現実の真実をきちんと知りたい、そういうことを私たちに感じさせる機能をもっている文学形式というわけです。いわば、目に見えないものを見えるようにする、つまり、普段叶わないものを叶うようにするために人間が考えついた、あるいは文学に携わっている人間たちが考えついた一つの手段だと規定できるのではないかと思います。要するに、現実の生活の中に隠された謎や神秘を解きほぐせるものを具体的に実現させる形式、それをファンタジーの文学、あるいはファンタジーという小説だというふうに規定できるのではないかと思います。

そういうファンタジーの文学の成立の背景には、現実の真実を知りたい、あるいは現実の中の謎を解きほぐしていきたいと考えるときに、およそ私たちが遭遇する日常的な相克というものがあります。それは現実社会にひそんでいる善と悪の問題です。つまり人間が創った社会、共同体には、最終的にはこの2つの両極端のものが対立している、あるいは闘っているという現実があるということです。ですから善と悪の相克、あるいは闘い、その実態を理解したいがゆえに、私たちはファンタジー、あるいはファンタジー文学というものを求めるのではないかということがいえるだろうと思います。

今日、いろいろな作家がいろいろな作品を発表していますが、それらの作品を見ていきますと、善と悪の闘い、あるいは善と悪の構図、これが人間の社会なのだというようなことが必ず浮かび上がっています。それを納得すると、そういう構図になる原型があるのではないか、つまりファンタジー文学がそういうものを反映する、その原型となるものがずっと以前からあるのではないかという考えにいたります。ここで、昔話という形式が思い浮かんできます。妖精物語といってもいいと思いますが、英語ではフェアリー・テイルといっているようです。日本語では昔話といったほうがわかり易いと思います。その昔話という形式を見てみますと、その根底には善と悪の闘いの構図といったものがきちんと植え込まれている。神話ではとくにそういったことがいえるかと思えます。

ファンタジーに描かれる世界は、表現的にいろいろありますが、単にモチーフや約束事だけではなく、どうもその奥に、それが描かれた現実の文化がはめ込まれている、あるAという作家の作品では、Aがどの時代にどういった生き方をしたかによって、その時代性が出ているということはいわれます。つまり、その根底にはその時代の善と悪の構図が浮かび上がってくるからそうならざるを得ないということだと思います。ですから、ファンタジーには、それを書き表した作者の、時代に対するものの考え方、あるいは人間としてのものの考え方というのが必ず浮き出てくる、それが目に見えないものを見えるようにするというファンタジーという語の原点の意味だろうと考えられます。

ファンタジーの祖先

さて、今日のファンタジー文学の原型というのは、やはり口承話ではないでしょうか。つまり伝統的な説話とか民話とか、口承によって語り継がれてきた話です。ここでは、総称的に昔話と表現します。文字ができますとそれらは書写化されるわけですが、昔話は大人たちの間で語り伝えられてきた、大人たちが子どもを意識せずに語り継いで、しかも大人たちが独自の目的で創り、語り、広めてきた話ではないでしょうか。それが、ファ

ンタジーの先祖にあたると思われま

す。いろいろとファンタジー作品を見てみますと、口承話を先祖とするファンタジー作品が発表される時期はだいたい19世紀に入ってからではないでしょうか。また、19世紀の後半に入って発表されたものの中に、秀れたファンタジーといわれるものが入りだしてきた。例えば、チャールズ・キングズリーという人の『水の子』、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』、『鏡の国のアリス』、そういう作品が19世紀の後半に出ています。こういう作品は、それ以前にフランスでシャルル・ペローという人がいまして、1600年代の人ですが、そのペローが採集して刊行した童話集、またその100年余ぐらい後に、ドイツのグリム兄弟が集めた240編以上ものグリム童話に、この『水の子』も2冊の『アリス』も、発想上かなりの影響を受けているのです。

ただ、これらの作品はその時代の社会の道徳観、倫理観というようなものにあまり拘泥しない新しい文化、ものの考え方を取り入れている。読むとわかりますが、キングズリーにしても、書き方に昔話的な要素がかなり見受けられるけれども、童話や昔話といわれるペローやグリムの話の中に匂っている、何だか真面目くさった、「～しなくてはいけない」というような独特の倫理観のようなものが取り払われています。そこが新しいところです。確かにこれらの作品は口承話に影響されて出てきたのですが、昔話的な匂いは取り除かれている。そういうふうに見ますと、新しい子ども向けのファンタジー文学というのは、まったく新しい背景のもとに出てきたということになります。

そこでもう少し、ファンタジーの祖先について触れてみます。魔法、あるいは非現実的な現象というものを扱った昔話は、だいたい人間の共同社会の善と悪との闘いといった問題、善と悪との構図を扱っているという点で、ほぼすべて視点を同じくしています。なぜ昔話はそういうところに強くこだわっているのかというと、法律や憲法が作られていない古代の社会、原始的な人間の共同社会を考えてみますと、そこでは人間社会を律するような何かが必要だった。だから、そういう社会で生まれてくる話は、善と悪の構図を鮮明に反映

し、そして当然善が悪を打ち破る、はびこる悪を善が苦心して闘って打ち破っていく、あるいは善いことをする人間が誉められ、悪いことをするものが滅ぼされるという構図を暗に示唆することによって、共同社会のルール作りに役立っていたのではないのでしょうか。さらにいいますと、昔話はじつは原始的な人間の共同社会における法律の役目を果たしていたのではないかと、話作りには直接に子どもの存在は眼中になかったでしょうから、大人が作って、大人の間だけで話されていた。だから、残酷な部分や子どもに聞かせたくない、聞かれない部分がはめ込まれたというのが当然あったわけです。しかし大人たちが作った社会のルール、あるいは法律のような役目、機能を果たすために、そういう話が存在していたということがあったというのは十分考えられます。

例えばイソップ寓話の話などは、もともと人が話すのを聴いて覚えなければいけなかったでしょうから、一つ一つの話は非常に短い、長くなると覚えるのが困難になります。その短い話の中に、必ず一つ教訓が入っています。そういう教訓は後代になっていろいろな人が知恵を出し合ってまとめたのでしょうが、それはもともとの話には明文文化されてなく、話そのものが教訓になっていました。イソップなどを読みますと、それが法律の役目をしていたことがよくわかります。

ところが、口承で伝わり、文字ができてからは書き写されて伝わってきた話が、16世紀末あたりから、イギリスではいきなり姿を消していく社会的な現象が起こってくるわけです。大人たちが今までのように語らなくなり読まなくなり、あるいは話さなくなるという現象です。それはなぜか。時期的に、16世紀末といえますとエリザベス1世が亡くなる直前で、そのあと17世紀には非常に厳しい国教会の教えを守る清教徒（ピューリタン）の清教主義、ピューリタニズムが台頭する時期に入ります。聖書が非常に重んじられてくる。大人が子どもに読ませる本、あるいは一番てっとり早い方法として子どもに見せる本が聖書になる。聖書の時代の到来です。今まで教会の聖職者だけが読んでいたものが、多くの人々の間に広まっていくのです。とくに17世紀の初め頃、英訳された聖

書が出てきます。標準英語に翻訳されて、それが宗教教育にしる英文学の分野にしる、多大な影響をおよぼしてくるのです。聖書そのもの、そして聖書を物語化したものが発行され、聖書に接することが子どもの教育というものに欠かせない要素だという時代になってきます。17世紀のそういった時代の宗教志向が、それまで文字化されてきた昔話の本、あるいは礼儀作法を説いたり、ABCといった国語教科書的な子どものための本に、きつい宗教的な戒律が必ずページごとに付け加えられたりして、ある意味でファンタジー文学の発達が阻害されていたわけです。

ところが、やがて自由な発想を阻害する社会は行き詰まり、だんだん緩和されていきます。社会の文化として、宗教をあまり出さない風潮がだんだん高まってきますと、今まで子どもに与えられてきた本とは少し違う本が必要となってきます。

ファンタジー作品が秘めているもの

ところで余談ではありますが、当時ファンタジーの推進に一役を買ったジョン・ロックという哲学者は、非常に硬いイメージがありますが、ある一面では非常に軟らかく、イギリスのファンタジーの推進の一翼を担った人です。イソップの話は、モラルや教訓ばかりではなく、動物が出てきたり魔法的なものが起こったりして、話そのものがとても子どもに良いのだ、というようなことを説いたのです。つまり彼は新しい人間観、新しい人間認識を推し進めていった人なのです。

このように時代が大きく変わっていくようになるわけです。神を中心にしてその教えに背く人間を悪、背かない人間を善という価値観のもとに、善と悪を一概に振り分けていた時代から、人間の本性を注視する時代に入らざるを得なくなっていったのです。その対象になったのが、とくに子どもです。身体が小さいだけで、扱われかたは大人と同じという子ども観から、どうもやはり大人と子どもは違うらしいという認識が生まれてくるようになったのです。新しい児童観が芽生え、育まれてきたのです。それが17世紀から18世紀に至り、イギリスだけで見てみますと、文学では近代小説が生まれてくるところに窺えます。つまり人

間の外形、外見だけではなく、人間の心の中に焦点を当てた文学作品です。つまり、小説です。そういったものが18世紀、新しい人間観のもとに出てきます。そういう風潮をより推進していったのがロマンティズム、ロマン主義です。

ロマンティズムの最初の詩人といわれるウィリアム・ブレイクの『無垢の歌』の中に、子どもとはいかに偉大な存在であるかを謳う、いわば子ども賛歌が見られます。それまでの宗教志向、教会志向の視点の狭さに対する反発の狼煙というのはロマンティズムの勃興で始動したのではないかとよくいわれます。そして、当然のごとくロマン主義のロマン志向が子どもの本の世界を揺さぶってくるわけです。ブレイクに続くロマン主義の詩人として「子どもは大人の父である」と謳ったウィリアム・ワーズワースがいます。彼らは、子どもの想像力がいかに優れているかということ、大人とは比べものにならない知的強靱さをもっていること、また人間が生きることの喜びはどこにあるのかということ強調していくこととなります。そのような流れの中で、マザーグースなどの伝承童謡が見直されていきます。また、ペローが17世紀末に発表した『シンデレラ（サンドリヨン）』、『赤ずきん』などを含む8編の童話、それがイギリスで英訳されたものが重版されます。さらに19世紀初めの1823年、ドイツのグリム兄弟が集めた童話集が英訳され発刊されます。

こうしてイギリスの子どもの本は、伝統的に受け継がれてきた遺産をふたたび見直すことになるわけです。同時に過ぎ去った時代、過去に生きた人々の生活に興味、関心を抱きます。近代人に対して先住民といえいいのでしょうか、彼らが暮らす草原、森の生活に視点を注ぐようになります。この頃、森をモチーフにして数多くの作品が書かれています。また、孤島、大洋に対する憧れを表わした作品や、今まで誰も見たことのないような異世界を描いたもの、さらにそのような未知の世界を探検するという人間の欲求を描いた作品も書かれました。19世紀に入り、ファンタジーが生まれる土台が着々と整えられていくことになったわけです。

繰り返しますと、現実からかけ離れた空想の世

界を描き、個人の内面と関連があるイメージ、また非現実的、現実逃避という印象をファンタジーに対して抱きがちではありますが、ファンタジー作品は人によって書かれ、人に読まれていく文学作品である以上、時代的ないしは歴史的背景とは切っても切れないところで生じているのです。つまり、それぞれの作品にはそれが書かれた時代の事情が反映されているとすれば、それを読んできた人間たちの息吹きをも反映されているといえます。さらにいえば、ファンタジーの世界は現実の世界とは無縁の世界ではないということです。より現実的な問題を照らし出す寓話的な特徴を、ファンタジー作品は秘めているということを押さえるのが重要です。

ファンタジー文学の発展

いよいよ19世紀に入り、ファンタジーは本格的かつ具体的に顔を見せはじめました。とくにイギリスでは、経済的階級格差を生むことになる産業革命や近代小説という新しい文学の形式が起こったりした18世紀という古典主義、合理主義の時代を経たのちのことです。そういったものをルーツとしてファンタジー文学というものが出てきます。また、19世紀初頭から中葉にかけての宗教運動も、その進展に大きく関わっています。ヘンリー8世が16世紀にローマ・カトリックに対して確立させた新教派、イングランド教会またはイギリス国教会、プロテスタントにおいて、その宗教観を軸に内部対立がおこります。旧教徒によるローマ・カトリックを見直そうとするオックスフォード運動が、このファンタジー文学にもかなりの影響をおよぼすこととなります。牧師が筆をとるという風潮を促すのです。『水の子』を書いたキングズリは国教会の牧師ですし、ルイス・キャロルは父親が牧師で彼自身もオックスフォードのクライスト・チャーチ学寮（牧師養成校）を卒業し、その職には就かなかったものの、その資格を得ました。その後続くジョージ・マクドナルドは、ずっと牧師職を続けていました。このように、偶然にも時代の流れとファンタジー文学の発展が非常にうまく結びついたので19世紀でした。それ以前にはこういう文人たちが書いたような作品は見られ

ませんでした。

19世紀初頭から、ファンタスティックな物語はイギリスで大流行していましたが、ファンタジーが急激に出てきたもう一つの背景にゴシック小説の流行があります。中世という過ぎ去った過去、また過去の人々の生活への憧れ、隔離された場所に強い興味を持つ傾向は、ゴシックロマンにつながっていきます。これもまた、19世紀初期のロマン主義が持っていた傾向の一つです。このゴシックロマンとは産業革命によって起こった経済構造の激変、さらに物質主義を憂い、遠い過去の中世の世界に憧れ、中世という昔を美化し、再構築する文学スタイルです。このスタイルを象徴するものに城があります。今にも崩れ落ちそうな、苔むしたような廃墟が舞台となり、中に入ると、幽霊が出てきそうな廊下が延々と続く。あるいは、そのような古い建物に住む化け物に焦点が当てられる。現実世界を変貌させた科学がもたらした一種の逆利益が反映されているという描き方がされていました。例えば、美しい緑があふれる中世の庭を懐古主義的に描いているようでいて、じつはその内部や館には新しい考えの人間を住まわせる、そういう複合的な構成の取り入れ方がゴシックロマンの特徴として挙げられます。19世紀のファンタジーの派生にはこのようなゴシックロマンの考えがかなり影響したといえます。一つ一つ挙げると、きりがありませんが、それがルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』や『鏡の国のアリス』の登場人物たちのありさまにもよく反映されています。

19世紀に入ると、伝統的な昔話におけるしきたりやルールを利用して、口承の時代のように匿名ではなく、名前が分かる作者がひとつの昔話の世界を創るようになりました。キングズリやルイス・キャロルの作品が発表されるほんの数年前のことです。

具体的に作品例を挙げて触れてみたいと思います。まず『黄金の川の王さま』という話があります。日本語に訳されています。最初のページをめくりますと、妖精の絵が出てきます。実際の世界にはないけれども、この本は妖精が出てくる本だという提示をしているわけです。ジョン・ラス

キンという反資本主義の思想家が発表した、彼の唯一の童話です。将来彼の奥さんになる、小さな女の子に語りかける形で発表された本です。

物語には、ハンス、シュヴァルツ、グリュックという三人の男の子が登場します。兄弟だけで、ある谷間の村に暮らしていて、多くの昔話がそうではありますが、上の二人の兄は非常に強欲かつ意地悪で、下のグリュックはとてもいい子なのです。ある日、兄弟が住む小屋に一人の老人がやってきて宿りを乞います。それを拒否した上の二人の兄に老人は怒り、谷間を荒地に変えてしまいます。兄弟たちの生活は苦しくなります。そういう時、あの妖精、川の神様が現れて「あの川に聖なる水を3滴注ぐと黄金の川になるだろう。ただし不浄の水を注げば川の水はあふれ出て水を注いだ者は黒い石となろう」と予言し、姿を消します。二人の兄は黄金だけを採ろうと不浄の水を注ぎ、その結果黒い石になってしまう。最終的に正直者のグリュックだけが教えを忠実に守り、谷間が美しく蘇るという話です。何となく『グリム童話集』や『ペロウの童話集』の話を彷彿させる作品です。

ラスキンは英訳版の『グリム童話集』に前書きを書いています。ラスキンのこの話では、現実の世界にはあり得ない存在の妖精がはじめから登場しています。昔話の常套手段のように、はじめから別世界を描いているのです。社会主義思想家の彼は昔話のしきたりをうまく使い、非現実の世界を描きながら、当時のイギリスの産業革命が起こした繁栄と、その裏に歴然と生じた貧富の差という矛盾を映し出していました。これは、昔話にもう一つの意味を重ねた作品に移り変わっていく過渡期の作品です。

もう一人ウィリアム・サッカレーという作家がいました。彼は『虚栄の市』などを発表し、ディケンズと並ぶイギリスの大作家です。彼も唯一子ども向きに『バラと指輪』という話を書いています。とある国の王様が亡くなり、王位に就くはずの王子から叔父が王位を奪う。新王は王子につらく当たり教育も受けさせず放置し、将来を約束したはずの新王の娘も王子の無知を嫌うようになります。そして隣国の王子に娘は惹かれるようになり、そうこうしているうちに魔法の指輪が登場し、

さまざまなことが起こるといふ、いわばドタバタ劇です。最終的には現国王の娘は隣国の王子と結ばれ、王子も別の国の優れた姫と結ばれ、そしてそれを結びつけたのは魔法の指輪だったという話です。サッカーがイタリアに家族旅行をした際に娘たちに語った話を活字にしたものだという事です。話の構成そのものはラスキンの『黄金の川の王さま』と同じく、別世界に舞台を置いた話です。そうでありながら、その中の人間関係は当時のイギリス政府の争いごとを揶揄しているのです。この話も昔話からファンタジーへの橋渡しの作品として知られています。ほかにディケンズの『クリスマス・キャロル』、オスカー・ワイルドの『幸福の王子』、『ザクロの家』などの短編集もその役割を果たしていました。

ファンタジー文学の創始者たち

こういう作品群が出たあと、また出ている一方で、異なる構造をもつ作品が出てきました。当時、イギリスの人たちはファンタスティックなものは別世界のこととははじめから決めてかかっていたのに、現実の世界からあるトンネルを通して当然のように別世界に入っていくという構成の話が出てきたのです。これが普通、ファンタジーの手法といわれているものです。キングズリの『水の子』がこの手法を用いています。この手法を用いたものは、この作品が最初だろうと思われまふ。主人公のトムは、家が貧しく学校にも行けず、大人と同じように煙突掃除をして稼がなければならない現実の世界に住んでいる少年です。ある日、大金持ちの家の煙突を掃除しているうちに、偶然その家の娘の部屋の暖炉に降りてしまい、娘を驚かせ、屋敷の者に追いかけるはめになります。少年はある川のほとりまで逃げていきます。このあと少年は現実の世界から川の世界に入り込んでいく。水を通して、川の中、別世界に入っていく。そこから物語が始まります。

トムは、水の中の冒険を通して浄化されていきます。牧師であるキングズリは屋敷の娘の純白な姿と、煙突の黒い煤で汚れたトムの姿を対比させ、水の中の世界、別世界をキリスト教の教えと複雑に絡ませながら描いています。また、トムは川の

中に入ったときには全身にたくさんの棘が生じたのに、それが川を下って改心していくうちに一本ずつ抜け落ちていくのです。気持ちの変化とともに外形も変わっていくという、生物の進化のありさまの筋道で描かれています。チャールズ・ダーウィンが1859年に発表した、神が万物を創ったとする聖書の教えをことごとく覆すような進化論を、話の進行の土台に使ったともいわれている場面です。

この物語が書かれた直前に、当時イギリス統治下のアイルランドで大飢饉がありました。大切な食糧だったジャガイモが獲れず、100万以上もの人々が亡くなったのです。そして多くのアイルランド人がイングランドにも移り住むようになりました。トム自身の故郷と設定されている北イングランドにも。キングズリは学校を卒業してから、ロンドンの少し南の村で牧師をしていました。産業革命が結実したあとですから、豊かな産業構造とともに階級の問題が存在しました。彼は牧師でありながら、このような社会問題の解決にも取り組みました。禁欲的なキリスト教徒とも呼ばれるのですが、キリスト教の教えによって社会を変えていく強引な運動を推し進め、キリスト教社会主義の実現に努めたようです。

『水の子』は最初、キングズリが親戚の子どもを楽しませる目的で書いたものでした。よく知られた話ですがルイス・キャロルの場合もそうで、執筆動機が自分の、または自分の身近な子どもを喜ばせるためということが多々あるのは興味深いことです。19世紀のロマン主義における子ども賛歌の影響が窺えます。ルイス・キャロルは中でも少女に関心が高く、数学教師として教鞭をとっていたクライスト・チャーチの学寮長の娘アリス・リデルをとくに気に入り、彼女を中心に語ってあげたのが『不思議の国のアリス』としてまとまったのです。話の中に出てくるアリスは現実のアリスとは関係ないようです。

主人公アリスは、ある日お姉さんと川の土手で読書をして過ごします。しかし、お姉さんが読んでいる本が難しいために飽きて寝込んでしまう。そこへ白いうさぎが現れて、そのあとアリスはうさぎを追いかけっていくという夢の世界の話です。

現実の世界にいるアリスが、地下にのびるうさぎ穴というトンネルを通過して、別世界に入っていくという話の構造です。最終的には夢から醒めて、また現実の世界に戻るのです。つまり、これはファンタジーの手法であり、キングズリーの作品の構成と全く同じです。この地下世界で、アリスは昔話に出てきそうないろいろなキャラクターにめぐり合っていきます。ものの順序がめっちゃくちゃで、でたらめな世界、つまりファンタジーの世界にキャロルは言語的な遊戯、言語的なゲーム、言葉遊びのようなものと彼独特の風刺精神、当時のオックスフォードの学校経営への批判を混在させながら、この作品を成り立たせているのです。

キングズリー、キャロル、次に挙げます『北風のうしろの国』のジョージ・マクドナルドの同時期の三人は、イギリスにおけるファンタジーの基礎作りをした人と便宜的に位置づけられています。マクドナルドは新しい文学形式、ファンタジーの父と目される人です。キャロルの『アリス』を自分の子どもに読ませて好評だったので、彼はキャロルにロンドンの出版社を紹介しました。マクドナルドがいなければ『不思議の国のアリス』は出版されてなかっただろうと思われるほど、この両者の因縁は深いのです。彼はスコットランドに生まれ、16歳のときに北部のアバディーン大学に入り、ドイツ文学を専攻しました。ある意味で、ドイツの童話、メルヘンに早く影響を受けた人ではないかと思われます。というのも、ご承知のように18世紀のドイツの詩人にノヴァーリスという人がいるのですが、彼の最後の詩集『青い花』にマクドナルドは生涯影響されたと書いているのです。グリム兄弟が編纂した昔話集も当然読みこなしたと思われ、彼自身、花や動物に変身する妖精の話や壮大な宇宙世界の話を書いています。幻想的なモチーフを、ドイツ的にといいましょうか、科学的に書いているのです。この人のその後の作品を見ると、そのことがよく窥えます。キングズリーの『水の子』とも、キャロルの『不思議の国のアリス』とも書き方が異なり、襟を正して読まざるを得ないような書き方をしています。とくに『北風のうしろの国』では、人間の「死」に対するこの人独特の考え方、死生観がはっきりと出ていま

す。このことはノヴァーリスの世界と相通ずるところがかなりあるのではないかと思います。

『お姫さまとゴブリン』という話もあります。その続編に『お姫さまとカーディ少年』がありますが、日本では『お姫さまとゴブリン』がよく読まれているようです。これにはゴブリンという地下に住む小さな妖精、小鬼が出てきます。ゴブリンは悪を象徴し、城の屋根裏部屋に住む貴婦人を善とするイメージが象徴されています。善と悪という昔話的なモチーフの間で、お姫さまとカーディ少年がさまざまな冒険をしていくもので、マクドナルドの作品の特徴である彼独自のキリスト教神学の考え方が濃厚に表れています。

このようにして、キングズリー、キャロル、そしてマクドナルドによりイギリスのファンタジー文学は花開いたのです。

ロウ・ファンタジーとハイ・ファンタジー

最後に一つだけ、ファンタジーの分類について紹介しておきたいと思います。まずよく見られるのが、別世界と現実の世界を合体させたものです。現実からファンタジーの世界に入っていく描き方、それから別世界に住んでいるものが現実の世界に入ってくるもので、逆になっているものもありますが、だいたいこの描き方が普通です。別世界に接しているがためにさまざまな魔法が出てきます。このようなものがロウ・ファンタジーというふうに分類されているようです。ロウとは低い(low)です。善と悪の、あるいは光と闇の闘いが現実世界から入っていくキャラクターたちによって別世界で展開されることが多く、現実と非現実を巧妙に交錯させた構成が、このロウ・ファンタジーの最も多いパターンだと思います。具体的に例を挙げますと、まず前述の三人の作品が当てはまります。現代ではルーシー・ボストン、あるいはフィリパ・ピアスもそうです。『ピーター・パン』も、現実のロンドンのダーリング家の子どもたちが時間の流れもちがう別世界に入り、また戻ってくる話ですから、これに該当します。ファンタジーと呼ばれるもののほとんどの作品が、これに当てはまるのではないのでしょうか。

また、ハイ・ファンタジー、ロウに対して高い

(high) ファンタジーという分野があります。これは非常に高度な内容を持ち、昔話的、妖精話的な枠を越え、技法的にも作者の想像力、モチーフの面においても非常に複雑で、それ故に深く長い作品になっています。良い例でいうと、トールキンの『指輪物語』などがそうです。初めから別世界を創り、別世界に舞台を置き、現実世界との接触や交錯はない。アメリカのものではル＝グウィンの「ゲド戦記シリーズ」もそうです。この

ように大きく分けてファンタジーは、その構成および目的によって2つの型に分けられるようです。

あと一つ紹介したいことがありましたが、時間がなくなってしまいました。中途半端になりましたが、お許しいただきたいと思います。というわけで私の話を終わらせていただきます。本日はありがとうございました。

(さだまつ ただし 共立女子大学文芸学部教授)

アメリカ・カナダのファンタジー

白井 澄子

アメリカのファンタジー

1) ファンタジーの育ちにくい背景

- ・空想や娯楽を排除する初期のピューリタナ的な伝統
- ・想像を絶する広大な土地と空間、脅威的な自然や天候が現実世界に存在する
- ・アメリカ自体が夢の国といえる
- ・実利的な生き方が奨励される（ベンジャミン・フランクリンなど）
- ・アメリカン・ファンタジーの源流
法螺話（トールテイル）（ポール・バニヤンなど怪力や、巨大な作物などの法螺話）

2) アメリカのファンタジー

アメリカ生まれの初期のファンタジー

『怪じゅうが町へやってきた』（1881）（フランク・ストックトン著）

＜怪獣グリフォンと迷惑顔の町の人々の攻防をユーモラスに描いたおとぎ話＞

『オズの魔法使い』（1900）（フランク・ボーム著）

＜著者の所信表明／工業化の進むアメリカ／種明かし／努力と報い／たとえ別世界であっても人間の世界が中心／神秘性の欠如／すでにアメリカのファンタジーの特徴を備えている＞

法螺話系のファンタジー

『ルータバガ物語』（カール・サンドバーグ著、未訳）

＜アメリカらしさをふんだんに取り入れた荒唐無稽かつ詩情あふれるおとぎ話＞

『ゆかいなホーマーくん』（1943）（ロバート・マックロスキー著）

＜リアリズム作品に法螺話の要素が混じり合う／古きよきアメリカ＞

『マクブルームさんのすてきな畑』（1970頃）（シド・フライシュマン著）

＜正統派の法螺話の流れを汲むゆかいな物語＞

ユーモラス、ナンセンスなファンタジー

『たくさんのお月さま』（1943）（ジェイムズ・サーバー著）

＜ユーモア作家サーバーによるウィットに富むファンタジー＞

『エルマーのぼうけん』（1950）（R. S. ガネット著）

＜エルマー、竜の子を助ける／子どもの心理をとらえた、幼年ファンタジーの決定版＞

『マイロのふしぎな冒険』（1989）（ノートン・ジャスター著）

ハイ・ファンタジー、ケルトの素材—1960-70年代のアメリカ社会と連動

- ・トールキン、C. S. ルイスなどの影響が大きい
- ・アメリカ国家にたいする国民の不信感／悪を倒す戦いへの憧れ

『タランと黒い魔法の釜』(1965)「プリデイン物語」シリーズ (ロイド・アリグザンダー著)

＜ケルト神話を題材に／ブタ飼いのタラン少年、死者を生き返らせる魔法の大釜を破壊する旅にでる／重いテーマとユーモアの融合がイギリス人には違和感となる＞

『光の六つのしるし』(1973)「闇の闘い」シリーズ (スーザン・クーパー著)

＜ウェールズの伝承、特にアーサー王伝説が根底に流れる／善なる者と悪の戦い／身近な人々の心に忍び込む悪がリアル／著者の戦争の恐怖体験が根源にある＞

『影との闘い』(1968)「ゲド戦記」シリーズ (アーシュラ・ル＝グウィン著)

＜竜嫌いのアメリカ人への挑戦／竜の棲む地域・時代設定／青年ゲドの自己同一化の戦い／多島海、魔法学校など、別世界がリアル／第5巻では、それまでの男中心社会の物語から女の力を支持する物語へと変化＞

動物ファンタジー

『シャーロットのおくりもの』(1951) (E. B. ホワイト著)

＜ユーモア作家ホワイト／農場を舞台にした、コブタとクモの友情物語／動物の生態、生命のサイクル／動物と人間の対比、風刺＞

『フリスビーおばさんとニムの家ねずみ』(1971) (ロバート・オブライエン著)

＜実験用に捕獲され、強化、教育されたねずみ／人間の予想を越えて高度に知能発達し、文明化した彼らを選ぶ道は？／高度文明化社会で心を失いがちな人間への警鐘＞

『ポピー：ミミズクの森をぬけて』(1995)「モスフラワーの森」シリーズ (アヴィ著)

＜野ネズミの少女ポピーの勇気と冒険の物語＞

SFファンタジー

『ザ・ギバー』(1990) (ロイス・ローリー著)

＜全てが制御され、感情にも煩わされないユートピア社会の落とし穴／過去の記憶や感情を持たない人々／「記憶を伝える者」の役目／社会に疑問を抱いた少年の行方＞

現代の動き—より身近な現実を表現する方法としてのファンタジー

『ウィーツィー・バット』(1989) (フランチェスカ・リア・ブロック著)

＜現代少女を主人公にした新しいおとぎ話＞

『スター★ガール』(2000) (ジェリー・スピネッリ著)

＜転校してきた奇抜な少女にかき乱される高校生／一見リアルな学園物語だが、少女とその行動は現実離れしている／現代社会に流されて生きる者に自分を振り返らせる／少女はまるで天使かなにかのよう＞

4) まとめ

- ・アメリカのファンタジーの特徴

- ①メッセージ性が強く、トールキンなどイギリス・ファンタジーの作家が純粋に別世界の構築に楽しみを見出していたのとは、根本的に異なる。

- ②イギリスのファンタジーは、G. マクドナルドやC. S. ルイスなど、何らかの形でキリスト教と関わっているものがあるが、アメリカでは少ない。

- ③アメリカらしいのは、法螺話系のファンタジーだろう。

- ④リア・ブロックやスピネッリは、リアリズムでは表現しきれない現代人と社会を表現。

- ・この他にも、黒人作家の作品や移民作家による作品がある。また、おとぎ話のパロディなども盛んに書かれている。

- ・参考「竜を恐れるアメリカ人」(『夜の言葉』ル＝グウィン) (実利主義と空想のギャップ)

- ・ディズニーの存在——本来、架空の世界であるファンタジー世界を作り、実体験させてしまうという点でもアメリカ的。オズの魔法使いと似ているといえる。

カナダのファンタジー

1) カナダの風土と歴史的特色

- ・カナダ児童文学の開花は1980年代
- ・アメリカ（リアリズム）とイギリス（タイム・ファンタジー）の影響
- ・人を寄せ付けぬ驚異に満ちた自然・土地、動物
- ・多民族／多文化国家（民族間の摩擦／母国や移民の歴史 → ファンタジーで表現）
- ・先住民（カナダ・インディアン、イヌイット）の文化や神話に対する興味と畏怖の念
- ・地域性（プレーリー、山岳地帯、森林地帯、氷原など）
- ・cf. オーストラリア、ニュージーランド

2) カナダ児童文学の特徴——自然、冒険、サバイバル、動物、移民の歴史

少女の夢と空想

ルーシー・モンゴメリー『赤毛のアン』

冒険とサバイバルの物語

ジェームズ・ヒューストン『こおりついた炎』

動物物語

アーネスト・シートン『シートン動物記』

ファーリー・モファット『ぼくとくらししたフクロウたち』

移民の歴史

ジョイ・コガワ『ナオミの道』

3) カナダのファンタジー

カナダで生まれた最初の本格ファンタジー

『金の松かさ』（1950）（キャサリン・アンソニー・クラーク著、未訳）

The Golden Pine Cone. Catherine Anthony Clark.

<「行って帰る」式の冒険ファンタジー／善悪の戦い／白人とカナダ・インディアンの世界を融合させたファンタジー／カナダらしい風景、動物、気候が描かれる>

SFファンタジー

『イシスの灯台守』（1980）（モニカ・ヒューズ著）

<近未来小説／地球移民の先発員オルウェンと移民団の葛藤と決別／著者のカナダ移民体験>

『リングライズリングセット』（1982）（モニカ・ヒューズ著）

<極北の地が舞台／守られた環境・集団からの脱走少女／卑下していた部族に捕まり、そこで生活／対立する文化や民族を越境することで見えてくるもの／サバイバル>

『ダスト』（2003）（アーサー・スレイド著、未訳） *Dust*. Arthur Slade.

<1930年代大恐慌時代と早魃に苦しむ農場が舞台／乾ききった農地、干からびた大人たちの心、つけ込む悪の力／失踪した弟を思う兄の愛が悪にいとむ>

タイム・ファンタジー

『地下貯蔵庫』（1981）（ジャネット・ラン、未訳） *The Root Cellar*. Janet Lunn

<バーモント州の少女が、貯蔵庫の扉を通して南北戦争時へタイムスリップ／歴史>

『床下の古い時計』(1987) (キット・ピアソン著)

<母と娘の心の隙間をうめる物語／古い時計／現代の12歳の少女が、母の子ども時代にタイムスリップ／幼くか弱い母の姿を目の当たりにする／母を理解する方向へ／実体験の重み>

『丘の上、夢の家族』(1996) (キット・ピアソン著)

<幽霊物語／貧しく家庭に恵まれない文学少女シーオに同情をよせる作家の幽霊が、彼女を自分の作品の中に引き込む／リアリズムの家庭小説とファンタジーの融合>

超能力

『ジュリー』(1985) (コーラ・テイラー著)

<予知能力を持って生まれたジュリーの孤独と、自分自身を受け入れていく過程／プレーリー地帯／家族、親族の反応／アイデンティティの問題>

動物ファンタジー

『シルバー・ウィング』(2000) (ケネス・オッペル著) *Silver Wing*. Kenneth Oppel.

<「銀翼のコウモリ」シリーズ第1巻／未熟児のコウモリの若者が悪に立ち向かう／第三巻は大都会トロントを舞台に人間社会批判も／数少ない動物ファンタジーの一つ>

何でもありのヘンテコな世界

『スクランブル・マインド』『マインド・スパイラル』シリーズ (キャロル・マタス、ペリー・ノーデルマン共著)

<相手の心が読める国の王子と、何でも思ったことが現実化できてしまう国の王女の結婚話を軸にしたナンセンス・ファンタジー／早い展開は新しいファンタジーの流れ>

4) まとめ

・カナディアン・ファンタジーの特徴

①イギリスの影響を強く受けたタイム・ファンタジーが見られるが、舞台は古い館ではなく、むしろ歴史的な側面に目が向けられている。

②移民の国カナダが感じられる作品がみられる (歴史との絡み、移民間の摩擦)

③ありのままの自分 (人と違う自分のアイデンティティ)

→ カナダの国としてのアイデンティティとの関わり

④自然と人間 (驚異的な自然と人間の共存、サバイバル)

・今回は取り上げていないが、カナダ・インディアンに伝わる伝説を扱ったファンタジー、ケルトの妖精を題材にしたファンタジー (O. R. メリング)、中国の移民作家によるファンタジーなど、非常にバラエティに富む作品が書かれつつある。

「アメリカ・カナダのファンタジー」紹介資料リスト

アメリカ

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	ウィーティー・バット・ブックス	フランチェスカ・リア・ブロック作 金原瑞人, 小川美紀訳	東京創元社 1999-2002	KS152-G422 (本館)
2	エルマーのぼうけん	ルース・スタイルス・ガネット文 ルース・クリスマン・ガネット絵 わたなべしげお訳	福音館書店 1963	児 933-cG19e
3	オズの魔法使い	ライマン・フランク・ボーム原作 谷本誠剛訳	国土社 1978	Y7-6565
4	親子ネズミの冒険	ラッセル・ホーバン作 乾侑美子訳	評論社 1978	Y9-N02-95
5	怪じゅうが町へやってきた	フランク・ストックトン作 モーリス・センダック絵 久保田輝男訳	偕成社 1967	Y7-582- (12)
6	影との戦い	アーシュラ K.ル = グウィン作 ルース・ロビンス絵 清水真砂子訳	岩波書店 1976	Y7-5603
7	シャーロットのおくりもの	E.B. ホワイト作 ガース・ウィリアムズ絵 さくまゆみこ訳	あすなる書房 2001	Y9-N01-33
8	スターガール	ジェリー・スピネリ作 千葉茂樹訳	理論社 2001	Y9-N03-H134
9	たくさんのお月さま	ジェームズ・サーバー作 ルイス・スロボドキン絵 なかがわちひろ訳	徳間書店 1994	Y18-10294
10	タランと黒い魔法の釜	ロイド・アリグザンダー作 神宮輝夫訳	評論社 1973	Y7-3773
11	光の六つのしるし：闇の戦い 1	スーザン・クーバー作 浅羽英子訳	評論社 1981	Y7-8907
12	フリスビーおばさんとニムの家ねずみ	ロバート・C. オブライエン作 ゼナ・バーンスタイン絵 越智道雄訳	富山房 1974	Y7-4183
13	マイロのふしぎな冒険	ノートン・ジャスター作 横川ジョアンナ絵 斉藤健一訳	PHP 研究所 1998	Y9-M99-32
14	マクブルームさんのすてきな畑	S. フライシュマン作 Q. ブレイク絵 金原瑞人訳	あかね書房 1994	Y9-1186
15	ポピー：ミミズクの森をぬけて	アヴィ作 B・フロッカ絵 金原瑞人訳	あかね書房 1998	Y9-M98-162

カナダ

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
16	マインド・スパイラル1 スクランブル・マインド：時空の扉	キャロル・マタス,ペリー・ノーデル マン作 金原瑞人,代田亜香子訳	あかね書房 2001	Y9-N01-123
17	マインド・スパイラル2 ミッシング・マインド：はじまりの 記憶	キャロル・マタス,ペリー・ノーデル マン作 金原瑞人,代田亜香子訳	あかね書房 2001	Y9-N01-194
18	マインド・スパイラル3 マーヴェラス・マインド：光輝く闇	キャロル・マタス,ペリー・ノーデル マン作 金原瑞人,代田亜香子訳	あかね書房 2002	Y9-N02-147
19	マインド・スパイラル4 エターナル・マインド：果てなき世 界	キャロル・マタス,ペリー・ノーデル マン作 金原瑞人,代田亜香子訳	あかね書房 2002	Y9-N02-262
20	イシスの灯台守	モニカ・ヒューズ作 水野和子訳	すぐ書房 1986	Y8-3829
21	リングライズリングセット	モニカ・ヒューズ作 野原幸夫絵 山田順子訳	佑学社 1987	Y8-3999
22	床下の古い時計	K.ピアソン作 葛西利行絵 足沢良子訳	金の星社 1990	Y8-7991
23	丘の家、夢の家族	キット・ピアソン作 本多英明訳	徳間書店 2000	Y9-N00-122
24	ジュリー：不思議な力をもつ少女	コーラ・テイラー作 さくまゆみこ訳	小学館 2003	Y9-N03-H254
25	The Golden Pine Cone (金の松かさ)	Catherine Anthony Clark 文 Greta Guzek 絵	Harbour Publishing 1994	未所蔵 (邦訳出版なし)
26	Dust	Arthur Slade	Wendy Lamb Books c2003	Y8-B3543

アメリカ・カナダのファンタジー

白井 澄子



はじめに

ご紹介いただいたとおり、カナダの話というのは比較のお聞きになるチャンスが少ないと思いますが、北米全体でお話をさせていただきたいと思えます。どんなふうに進めようかと考えていたのですが、例えば、1つ2つの作品に絞って、アメリカのファンタジーの特徴はこうだというように、詳しくお話するのも1つの方法ですが、私は、以前に図書館情報学を勉強して、その時に子どもの本と子どもを結びつけるということ、実地に、しかも具体的な作品を使った形で学びましたので、今日はそれに近い形で話をさせていただこうと思っています。ということは、いろいろな作品を紹介し、その中に私の意見を交えていきたいと思えます。総覧的な話になりますが、お付き合いいただきたいと思えます。

最初に、アメリカから話を進めます。だいたいプリントにそって話を進めます。私たちが児童文学を考える時に、しばしばリアリズムとファンタジーに分けますが、リアリズムは現実的な話で、ファンタジーは架空の話というような大まかな分け方で話していきます。

アメリカのファンタジーの背景

アメリカはどちらかというと現実的な話や、現実社会の中で生きている子どもたちの話が多いようです。昔は『若草物語』からはじまって、今では、問題をいろいろ抱えている子どもたちの問題小説もたくさんあります。その中で、アメリカはファンタジーが全くないのかといいますが、そうでもありません。ただし、イギリスと比べるとずいぶん様子が違うと思えます。イギリスと比べると、

数が圧倒的に少ないですが、幾つか拾ってグループにしてみると、何か特徴が見えてくるように思えます。

最初に、1) ファンタジーの育ちにくい背景という、非常に否定的なことを書きました。考えてみると、アメリカという国には、イギリスとは違って、森の中に妖精がいるというような気配はあまり感じられません。アイルランドへ行きますと、森の小道のところに、「妖精が通ります」という小さな看板が出ているそうです。アメリカは、全然そんなことはありません。広大な土地が広がっているようなところですし、そういう意味ではそもそも昔から、妖精が登場するなどといった、イマジネーションを刺激するようなものがあまりなさそうです。イギリスに飛行機で行って上から見ていきますと、緑がつながっていて、なだらかな丘にそってうねうねと畑がつながっているような感じです。アメリカを上から見ますと、ただ広くて、きれいに土地が分けてあるようなイメージがあります。広い土地の中には、グランドキャニオンや、広大なプレーリーや、もちろん山もありますが、イギリスとは随分違う風景をもっていると思えます。おまけに、その自然は、大きな竜巻がおこったり、強力なハリケーンが襲ったりと、かなり気候が荒いです。そんなことも上手くファンタジーの中に取り入れた話も後で出てきます。イギリスの穏やかな土地の違い、風土の違いが1つ大きな特徴といえます。

それから人間のことを考えてみますと、イギリスからピューリタンの人たちがやって来て、アメリカ東部に植民地を作りました。キリスト教の精神に基づいたピューリタンの生き方は、非常に厳

しい生活、無駄なものをそぎ落として自分自身を研ぎ澄ましていく、そして神様と向き合うというような生活でした。空想をして何か楽しいことを思い描くとか、娯楽のゲームや、楽しい本というものも許されない状況だったので、子どもにとってはあまり面白くない環境だったと思います。ただしこれは、17世紀、18世紀くらいのことです。その後、さらに多くの植民者たちが来るわけですが、何をアメリカに求めてきたかという、やはり、古いヨーロッパにはない明るい夢でした。しばしば言われるのは、アメリカ自体が夢の国であったから、そこでわざわざ空想を膨らませてファンタジーを作らなくても、ファンタジーの中に住んでいるようなものであったということです。そういう所で暮らしながら、世代がだんだん代わっていきます。

私が子どもの頃に、避雷針の話聞いて印象に残っていたベンジャミン・フランクリンがいます。彼が推奨していた、あるいは、実行していたのですが、きちんと暦をつくって、農作業計画にはじまり、いつ何をするのが、細かく日々の生活の中で計画されていました。とにかく合理的に日々の生活を送っていくということが、アメリカ人にとっては大事なことと考えられていました。よく実利的という言葉を使いますが、そういう理に叶ったことをするという生活姿勢ができてきたと思います。

しかし、実際には人間はそればかりだと生きていけません。その反動といたらよいでしょうか、アメリカには、いわばアメリカのファンタジーの源流となるような、ホラ話がたくさん作られました。これはその昔、人々が厳しい自然の中を生き延び、人との付き合いでも、自分を守らなければならないことがあったと思います。このあたりからホラを吹いて相手を威嚇するような話が生まれたのでしょう。また、あまりにも厳しい天候なので、ホラでも吹いて上手く楽しく生き延びていこうという気持ちがあったかもしれません。例えば、ポール・バニヤンという怪力の大男の話が伝わっていますし、巨大な作物の話もあります。当時は作物を育てるのも大変だったと思いますが、そんな中で種を蒔いたら、たちまちのうちに巨大なカ

ボチャができて、しかもゴロンゴロンとのたうち回ったというような話をしたりしていたようです。アメリカの人々は実利的な生活の中で、アメリカなりのファンタジーの要素を育み、それがファンタジーの誕生につながったのです。しかし、実際にアメリカで子ども向けの本格的なファンタジーが生まれたのは、比較的遅い1900年です。

初期のファンタジー

アメリカのファンタジーで1番よく知られているのは、やはり、『オズの魔法使い』ではないかと思います。カンザス州に住むドロシーという女の子が主人公です。カンザス州は、広大な畑が広がり、実際に非常に竜巻が多い土地ですが、物語でも竜巻がやってきて、ドロシーを不思議な国に運んでいってしまいます。不思議な国に着きますが、どうやって帰ったらよいものか困っていると、他にも困っている者たちに会います。かかしとライオンとブリキのきこりです。それぞれ欲しいものがあって、かかしは脳みそ、ライオンは勇気、ブリキのきこりは心が欲しいのです。4人は望みをかなえてもらうために、オズの国へ行って、オズの魔法使いといわれる人に会いに行くのです。種明かしになってしまいますが、オズの魔法は本当の魔法ではありませんでした。彼はいろいろな音響効果を使ったり、科学的な道具を使ったり、しかも最後は、気球でどこかへ飛び去ってしまったりします。この設定は、イギリスのファンタジーとは大きく違うところですね。本当の魔法は、こんな形では出てきません。そのかわりに、オズが言うには、心が欲しいと言っていたブリキのきこりや、かかし、ライオンに、今までの冒険の中で、皆それぞれが、心を使ってみんなを助けたり、いろいろなアイデアを出したり、勇気を示したりしたのではないかと、「今まで持っていた自分の心の中のものに、気が付かなかっただけなのだよ」というようなことを言ってくれます。これは非常に励ましになります。ドロシーも自分が知らずに履いていた魔法のくつの存在に気づくことで、懐かしい故郷に帰ることができます。

こうしてみると、『オズの魔法使い』は、イギリスの伝統的な魔法や妖精が出てくる話とは全く

違うのがわかります。全て「種明かし」があるのです。著者のフランク・ボームという人は、この本を書くにあたって、自分がどういうお伽噺を、当時の現代の子どもたちに書きたいと思ったかということ、本の最初に書いてあります。先ほど、見てみたのですが、邦訳の子ども版にはそれがカットされているものがあることがわかりました。何を考えて彼が子どもの本を作ったかといいますと、従来のヨーロッパから伝わってきたお伽噺とは違うもの、つまり、「子どもが恐れるような魔女が登場するものや、教訓的なものが入っているものは、今の子どもにふさわしくない。私が作ろうと思っているのは、そんなものをすべて排除した新しい、現代の子どもにふさわしいお伽噺です」ということを言って、この『オズの魔法使い』をはじめているのです。それくらいの気持ちをもって書いた本です。それなりの当時のアメリカがよくわかる作品になっていると思います。確かに、教訓性というものは、表立っては読み取れません。ハラハラする出来事の連続なのですが、よくよく考えてみると、「自分で気が付かなかったこと、よく自分の中をみてご覧なさい」というように、今の私からみるとやや教訓的な部分もあるのです。それでも何かを教えこむために書かれた古い児童書に比べれば、楽しい空想物語であることは間違いないでしょう。それから、オズの様々なトリックは、ヨーロッパのお伽噺にはなかったものです。工業化するアメリカ、科学技術が進み、いろいろな新しい機械ができてくるアメリカが見えてきます。神秘性はほとんど感じられませんが、別世界に行ってもやはり人間の心が大切だという点や、「頑張って何かをやればきっと成功する」というアメリカらしい考え方が見えるファンタジーで、ある意味で、その後のアメリカのファンタジーの要素をすべて備えているように思います。

さて、1900年に『オズの魔法使い』が書かれましたが、その前に書かれたファンタジーは、あまりないと言われています。確かにこれほどの大物はありませんが、私の好きな話に、フランク・ストックトンの『怪じゅうが町へやってきた』という本があります。表紙をご覧になって、どこかで

見た絵だと思いいなるかもしれません。『かいじゅうたちのいるところ』を描いたモーリス・センダックが絵をつけたものです。物語では、怪獣が町にやってくるのですが、この怪獣は、よく建物の正面につけるグリフォンです。自分と同じ仲間がいるからと言って、1日中、建物の正面に座って眺めて本人は喜んでいますが、町の人たちは大迷惑です。そこで、牧師さんに頼んで何とか出て行くように説得してもらうことにします。牧師さんが怪獣に話をすると、その怪獣も牧師さんの言うことをよく聞くのです。牧師さんの後を付いて歩いて、なかなかいいところがあります。しかし、町の人たちはいつかは自分たちが食べられてしまうと怖がって、牧師さんが町の外へ出て行けば、怪獣もきっと出て行くだろうと思い、牧師さんを町から追い出してしまいます。ところが、怪獣は、建物の所についている怪獣の彫刻が気に入っているので出て行かないのです。しかも、怪獣は牧師さんの代わりをします。学校で先生の代わりもします。しかも怖いですから、生徒は皆いい子になっているし、病気の人も、「どうしましたか」と聞くと、けろっと治ってしまったりするのです。そんなおかしな、ホラ話めいた話です。愚か者の話は昔話にもありますが、町の人たちは典型的な愚か者ですし、物語は寓話に近いといえます。町の人と怪獣、最後がどうなるかは是非お読みいただきたいと思います。

こんな話が、大物の『オズの魔法使い』の前に書かれました。一方、『オズの魔法使い』が1900年に出てから後、ほぼ半世紀にわたって、アメリカにはこれといってファンタジーは生まれませんでした。次に登場するファンタジーは、レジュメ2ページに書いてある、動物ファンタジーの、『シャーロットのおくりもの』です。今回は、アメリカらしいファンタジーというものを、だいたい年代を追って、テーマごとにまとめてみました。アメリカらしいものを、最初に幾つかあげてありますので、ホラ話、ユーモア、ナンセンス系のファンタジーからお話したいと思います。

ホラ話、ユーモア

ホラ話は、アメリカの人にとっては伝統文化の

ようなものです。ただし、アメリカで、非常にアメリカらしいと思われるホラ話系のファンタジーは、あまりにもアメリカらしくて、日本語に訳すと難しいというところもあり、実は訳されていない話があります。とても面白いので、少しだけ紹介しましょう。リストの一番上にあげてある『ルータバガ物語』なのですが、著者はカール・サンドバーグといって、詩人です。彼が、アメリカの広大な土地やホラ話の要素などを盛り込んで、しかも、情緒豊かにお話を作ったものが、この『ルータバガ物語』です。これは、とても不思議な別世界ルータバガ国のお話です。そこへ行くには、思い立ったらすぐに一切合切を売り払い、身一つになって、行かなければなりません。列車に乗ってずっと行って道がジグザグになってきたら、そろそろルータバガに着くという設定です。国の近くになると、「よだれかけ」をしているブタがいたりするので、ルータバガに着いたことがわかります。しかも、ルータバガ国の首都は、レバー・アンド・オニオンという、レバニラのような町の名前なのです。そこに出かける家族がいるのですが、人物の名前も直訳すると「斧を取ってくれ父ちゃん」のような、とても奇妙な名前です。これを日本語に訳していくと、面白さがぴんとこないかもしれません。どんな話ののっているかといいますと、たとえば、お見せしているイラストの、広大な土地の上の方に雲のようなものが浮かんでいるのが見えると思いますが、実はこの中に町が浮いています。クリームパフ村という素敵な名前がついているのですが、突風が来るたびに吹き飛ばされます。あんまり吹き飛ばされるので、何とかもとの所へ戻る方法を考えておかなければいけません。かすかに細いロープが見えますが、町の真ん中にロープを巻きつける場所があって、地面にすえつけたロープを巻いていくと元の所に戻れる仕掛けがあるという話です。それから摩天楼の話もあります。書かれたのが1922年ですからもう摩天楼があったわけで、エンパイヤーステートビルが結婚したり、子どももつくったりします。できた子どもは汽車なのです。その汽車が大活躍します。親は嬉しいです。ところが、汽車は事故を起こしてしまうという、ペーソスを含ん

だ展開をします。ここには、アメリカの都市化、工業化が見えてきます。もう一つ、私が好きな話を紹介しておきます。イラストの、少し薄暗いところの崖っぷちにバッファローに乗ったアメリカ・インディアンが見えるでしょうか。失礼してインディアンという言葉を使わせていただきます。タバコ屋の横に馬に乗ったインディアンの像があって、普段は木の像ですが、夜明け前にパッと目覚めたときにバッファローがやってきます。彼はそれに乗って疾走し、崖のふちに止まって夜が白々と明けていく大地を眺めます。少し明るくなってきた時、また戻って元のところにいるという、とても詩情豊かな話です。そんな話がたくさん入っていますが、ホラ話なので、騙されないようにしてください。アメリカでは今もよく読まれていて、いろいろなイラストレーターが新しい絵をつけています。

ホラ話系の中に『ゆかいなホームーくん』があげてあります。なぜこんなところに『ゆかいなホームーくん』がでてくるのだろうとお思いかもかもしれません。一般的には、リアルな男の子の話ととらえられていると思います。ホームー君はいたずらっ子ですが問題を上手に解決してしまう、一昔前のアメリカの子どもらしさを持っています。たとえば、お母さんにダメと言われたスカンクを飼って、飼っていたおかげで泥棒を退治できたとか、新し物好きのおじさんがドーナツ作り機を買いますが、ドーナツがどんどんできて止まらなくなってしまいます。それをホームー君が上手にさばいて、ことが収まるというような話です。一見リアルな話に思えますが、よくよく考えてみると、そんなにドーナツができて、しかもそれを上手に売りさばいたなんて、まさにホラ話なのです。この『ゆかいなホームーくん』を書いた、ロバート・マックロスキーという人は、絵本の『カモさんおとおり』を書いた人です。『ゆかいなホームーくん』の続きに、この町の名を題名にした、『センターバーグ物語』があり、大きく育ちすぎた植物が温室の屋根を突き破って伸びてしまったという話が出てきたりして、こちらのほうが正真正銘のホラ話になっています。私は、以前は『ゆかいなホームーくん』は本当にリアルな少年の話だと思って

いましたが、イギリスの評論家でハンフリー・カーペンターという人は、オックスフォードの世界児童文学百科で最初からファンタジーとして扱っているのです。ちょっと不思議に思いましたが、なるほど、ホラ話系ファンタジーの要素がたくさん入っていて、アメリカをよく表している作品だと思います。

次の、『マクブルームさんのすてきな畑』も、やはりホラ話系のファンタジーです。マクブルームさんがペテン師から奇妙な畑を買ってしましますが、その畑は土地がものすごく小さいのに、何か種を蒔くと瞬く間に育ってしまいます。トマトでも何でも巨大に育ってしまって、自慢してもしきれないくらい。そんな傑作な話がたくさん入っています。しかも、畑を取り返そうとするペテン師とのやり取りもあって、どちらが出し抜くかということが、面白さの要素になっています。こうしてみると、アメリカのファンタジーは、イギリスのファンタジーとはずいぶんタイプが違ふと思います。

また、アメリカ人はユーモラスなこと、ナンセンスなことで笑うのが大好きです。たとえば、講演をしたりする時にも、必ず初めにジョークを言って皆を笑わせます。そういうユーモア好きのアメリカ人たちを楽しませてきた話が幾つかあります。これは、絵本といった方がいいかもしれませんが、アメリカ版のお伽噺です。『たくさんのお月さま』です。書いたのは、ジェームズ・サーバーという、アメリカで大人向けのユーモア作家として活躍をしていた人で、幾つか子ども向けの本も書いています。この『たくさんのお月さま』にも、ある意味で、種明かしのようなものがあります。レノア姫というお姫さまの具合が悪くなって、「お月さまを取ってくれたらよくなる」と言うのです。王様はお供のものや学者さんたちに、どうしたら月が取れるかと相談をしますが、皆、今までに王様のために、いろいろなことをしてきましたが、月だけはご免こうむりますと断ります。困った王様は道化師に尋ねると、彼は、お姫さまに尋ねてはどうかと提案します。なるほどと思って尋ねると、レノア姫が言うには、お月さまは、親指の爪と同じくらいだと言います。木

のところ昇ってくる時に親指をかざすと、ちょうどそこに入るくらいだということです。早速、金で作ってもらい、お姫さまは元気になりました。しかし、王様はその晩困ったことになりました。取ったはずのお月さまが、夜になるとまた昇ってくるわけです。さて、困った。これをどういうふうに解決したかは、作品をお読みください。

そして、手近な物を使って冒険をするという、『エルマーのぼうけん』も、ユーモラスなアメリカの幼年向けファンタジーの極めつけということができると思います。書かれたのが1950年ですから、『オズの魔法使い』からずいぶんたっているわけです。エルマーという男の子が、竜の子どもがどうぶつ島に捕らえられていることを猫から聞いて、その竜の子どもを助けるために冒険の旅に出かけます。彼が持って行ったものは、リボン、くし、チューインガム、歯ブラシというような身近なものです。途中で、怖いライオンに出会って困りはしましたが、リボンをあげて、「ちゃんとリボンでたてがみを編んだら素敵でしょ」と言って、その間にすたこらと次に行きます。サイが出てきた時も、「角を歯ブラシで磨くときれいになりますよ」と言って、難を逃れていきます。最後に、どうぶつ島に捕らえられている竜の子どもを助けだします。ここに登場する竜は、イギリスやヨーロッパに伝わっているあの恐ろしくて大きくて、穴の中に金銀財宝をどっさり抱え込んでいる竜とは全然違います。かわいらしくて、ぽっちゃりしている、子どもの竜です。それを、少年が助けてやる。少年の若い力がアメリカの未来を担うことを感じさせます。子どもに、いろいろな力が備わっているということを伝えてくれているようなところもあります。『ゆかいなホーマーくん』もそうですが、子どもが難問を解決していきます。子どもの力は素晴らしいものだということをファンタジーの中でいっているのではないのでしょうか。

『ルータバガ物語』は20世紀初期ですし、『ゆかいなホーマーくん』も1943年です。これは戦争中ですので、この時代にこんなに楽しい話が書かれていたかと思うと、アメリカという国はやはりすごいと思ってしまう。だいたい、アメリカで

は1950年代の『エルマーのぼうけん』あたりまでが、面白くて明るく、かつ、子どもを励ますような話書かれていたといえます。

少し年代が新しくなりますが、1989年という現代のものも1つユーモラスな作品の中に入れておきたいと思います。ノートン・ジャスターが書いた『マイロのふしぎな冒険』です。ノートン・ジャスターはファンタジー作家ではなく、建築家で大学の先生でもあった人です。でも、『ふしぎの国のアリス』を書いたのが数学者で大学の先生であったルイス・キャロルであるということを見ると、どこか共通性があるかもしれません。この『マイロのふしぎな冒険』は、マイロという男の子が主人公ですが、この子は何にも興味がなくて、何をやっても面白くない、とにかくやる気のない子です。その子がある時、不思議なプレゼントを受け取ります。何かというと、高速道路の料金所です。普通はそういうものはあまりプレゼントではもらいませんから、興味をもって組み立てますと、自動車もありまして、料金所を通過していきます。すると不思議な世界に入りました。そして、虫のおじさんと、お腹に目覚まし時計がついた奇妙な犬に出会い、3人で冒険に出発します。彼らが行った国は「向こうの国」という国で、そこには、「言葉の都」と「数の都」という2つの都があって、それぞれ兄弟が治めていたのですが、仲たがいをして、ごちゃごちゃになっています。たとえば、「言葉の国」の中では音が聞こえなくなってしまって、言葉がよく通じなかったり、音が聞こえないのでいろいろ困ったことが起こります。音楽会が開かれて大成功だったのですが、音がまだ聞こえてきません、というようなことがあったりします。それから、「数の国」でも大混乱です。マイロが国の中を歩いていくと、向こうから人間の半分よりは少し大きいくらいの子どもが歩いてきます。半分しかなくて、歩きにくそうなので、「どうしたの」ときくと、「ぼくは平均的なアメリカ人だよ」といいます。日本でもそうですが、子どもの数が、最近では1家族あたり2人を割り込んで1.3人だといったりします。小数点以下の人間は実際には存在しないのですが、「ぼくは平均的なアメリカ人」を文字通りに解釈する遊びが出てき

ているわけです。マイロは大混乱の中を進んでいきます。いろいろな経験をするうちに今まで気が付かなかった、言葉の面白さ、数の面白さ、世の中の面白さに目覚めていきます。最後には、元の家に戻ってきますが、戻ってきたときには料金所は消えてしまっています。マイロはいろいろなことに興味が持てる子どもになっていくという、最後のオチがまとまりすぎのような気もしますが、ルイス・キャロルばりの言葉遊びや、奇想天外なことがたくさん出てきます。しかもそれを建築家を書いていきますから、理論的に話が進んでいくところがまた面白いわけです。アメリカ版『ふしぎの国のアリス』といえますね。しかし、アメリカのものは、読者を笑わせて、何かを伝えたり、子どもを励まそうとする意図をもったファンタジーになっているのがわかります。

ハイ・ファンタジーとケルトの素材

次に、ハイ・ファンタジーやケルトの素材という項目がありますが、アメリカには伝統的なお伽噺といいたいまいしょうか、妖精が出てくるような話はありません。全てイギリスからの輸入版です。しかし、1960年代、70年代あたりに、イギリスのケルト伝説や神話をファンタジーに取り入れた作品がいくつか書かれるのですが、理由の1つに社会的なことがあげられます。アメリカは第二次世界大戦後、特に、ベトナム戦争が泥沼化して、それに反対する多くの若者が平和を訴える時代に入っていきます。かつて、人々はアメリカが理想の国だと思っていたのですが、ここにきて、より良い世界、あるいは悪いものを倒して良くなっていく世界というものを、考えなくてはならなくなったことに気づきました。このことが、次のような作品を生む背景になったのだと思われます。同様の理由で、この時代は、イギリスで書かれたトールキンの『指輪物語』や、C.S.ルイスの『ナルニア国物語』といったファンタジーがアメリカの若者の間でよく読まれました。ここに描かれる善と悪の戦いに強い影響を受けたようです。そして、アメリカには妖精物語はないけれど、いわば祖国であるイギリスや、ケルトの伝承を借りてきて、自分たちなりのファンタジーを造ろうではないかと

いうことになったのでしょうか。

たとえば、ロイド・アリグザンダーの書いた「プリデイン物語」ですが、今日あげてあるものは、その中の『タランと黒い魔法の釜』です。この中に出てくるのは、ケルトの神話の中に登場する大釜です。その中に死者を入れると蘇るといわれている伝説の釜を題材に使っています。その釜が悪の手に渡れば、悪い者が蘇ってどんどん増えていってしまうわけです。それを阻止しようとする話です。その主人公がタランというブタ飼いの少年です。ブタ飼いというのは、卑しい仕事とされているうえ、身元もはっきりしない子です。そのタランが大釜を悪の手から取り戻す冒険の旅に加わります。同行するのは、旅人に身をやつした立派な騎士です。彼らとの冒険を通してだんだん成長しながら、悪の手から世界を守ります。これは少年の成長物語でもあり、善悪の戦いで悪を倒すというファンタジーでもあります。ハイ・ファンタジーという言葉も、定義が難しいですが、英雄が成長していく英雄ファンタジーもこの中に入れてよいでしょう。中心になるのは、善が悪と戦って、悪を倒していくという壮大な構図です。「プリデイン物語」にはケルトの様々な神話が取り入れられています。タランは、身元不明のブタ飼いの若者ではありますが、実は、英雄物語の英雄というものは、たいてい身元がわからない者として登場します。そして、いろいろ冒険を重ねて成長していったって、本当の生まれがわかり、立派な騎士になったり、王様になったりしていく過程が描かれていく場合が多いのです。『アーサー王物語』がその典型です。是非、英雄物語をそのように見ていただくとまた別の面白さがあると思います。つまり、人の成長ということとぴったりと重なっていて、何者かわからなかった者が自分をつかんで成長していく過程が描かれるのです。「プリデイン物語」も、まさにその流れにそっていると思います。

それから、スーザン・クーパーの『光の六つのしるし』という作品があります。これは、「闇の戦い」というシリーズの、とりあえず最初の作品ということにしておきましょう。実はこの作品のずっと前に単独で書かれた物語があって、つなげ

てみると、そこが最初になるのです。これもやはり善と悪の戦いです。ごく普通の家族の中の1人の少年が、11歳の誕生日に、自分が太古から伝わる魔法の力を持った人間の1人であると知らされます。『ハリー・ポッター』と、出だしは少し似ています。11歳というのは、全くの子ども時代をちよっぴり抜け出す時期なのでしょう。その11歳のウィルが、善なるものの1人であることが告げられますが、実は、6つの善なる者が集まってはじめて、悪を倒すことができるのです。しかも、しるしを持つ6者はどこにいるのか不明です。善なる仲間を探す旅と、迫り来る悪の手との戦い、その攻防戦が壮大なファンタジーとして描かれます。この話の下敷きになっているのはイギリスの『アーサー王物語』です。『光の六つのしるし』の前にも1つ作品があると言いましたが、それはアーサー王にまつわる「聖なる器」（聖杯）を子どもたちが探し出すのを悪の力が阻止しようとする話です。この物語を発展させて、より大きなファンタジーにしたものが、「闇の戦い」シリーズです。イギリスの伝承を借りているという点では、先ほどのアリグザンダーの「プリデイン物語」と似ているところもありますが、たとえば、身近にいる人間に悪が取り付いて、一見普通に見えるけれど、実は恐ろしい人物に変化しているというようなことが起こるなど、全体に深刻な調子が強いです。一方、「プリデイン物語」の方は、面白いお姫さまが出てきて、そのお姫さまとのやり取りがユーモラスで、内容が重いわりには軽快に話が進みます。この点、イギリスの人からすると、本当のファンタジーではないと言われてしまっているようです。それでも、アメリカが、自分たちの故郷であるイギリスの伝説や神話を使ったファンタジーで、人間についてさまざまなことを伝えようとした作品であり、評価することができると思います。

この他、ハイ・ファンタジーの中で、1つのピークを示していると思うのが、アーシュラ・K・ル＝グウィンが書いた「ゲド戦記」です。最初の『影との戦い』にも、善と悪の戦いが出てきます。しかも、悪にあたるのは、1人の青年の心の中の影の部分です。ゲドという、魔法を勉強中の青年が主人公です。彼は、魔法の力比べをしようと挑戦

してきた少年に、思わず自分の力を見せびらかしてしまいます。すると強烈な魔法が起こり、それと同時に自分から何か不思議なものが出ていってしまったように感じます。その後ずっと、ゲドは不思議なものに付きまといわれます。それが、彼の影の部分ですが、影は周りの世界をも苦しめるので、ゲドはその不思議な影のようなものを退治する長い旅に出かけます。海の果てまで追って行き、影と向き合います。魔法の世界では、本当の名前を言い当てると相手に力を及ぼすことができるのですが、ゲドは影に向かって「ゲド」と自分の名前を呼びます。すると、影はゲドと一体化するのです。つまり、自分の闇の部分を受け入れたといえます。青年の心理的な葛藤が上手くファンタジーの形で書かれています。

アーシュラ・K・ル＝グウィンとは、サイエンスフィクション作家として有名ですが、これはいわゆるSFではありません。時代は中世でしょうか。しかも、この中には太古の竜、魔法、魔法使いなど、不思議な要素がたくさん入ってきます。アメリカのファンタジーとしては異色なものです。ル＝グウィンがアメリカ人のものの考え方を書いたものの1つに、竜を怖がるアメリカ人のことを書いたエッセイがあります。その中で彼女は、アメリカ人は、想像力が造り出した生き物はあまり好きではないと言っています。「エルマーシリーズ」に登場する竜をみてもわかるとおり、確かに、アメリカの作品にはヨーロッパの世界にいるような竜は出てきません。彼女はそれに挑戦する形で、「ゲド戦記」の中に竜を登場させます。

さらに、この話は最初は3巻ものであったのが、どんどん書き足されていって、5巻ものになりました。前半の話は、ゲドという青年魔法使いが成長してアイデンティティをきちんと確立するまでの話です。彼が立派な魔法使いになるまでが3巻で書き上げられ、ル＝グウィンはそれで良かったと思っていたのです。ところが、フェミニストである彼女は、時代の流れとともに、作品の中でも女性の力をもっと評価しなければいけないことに気がつきました。このような考えに基づいて書き加えられたのが4巻と5巻です。5巻目では、シリーズの前半で、ゲドに助けられた少女がもう中

年になって登場します。しかも、今度は、魔法の力も何もかも失って戻ってきたゲドをしっかりと受け止める役割を果たします。また、作品には、太古の昔からいる知恵と恐ろしさを兼ね備えた竜が大きな存在として登場し、世界や人類の調和をとりもどす一助になります。このように、ル＝グウィンという人は、今までアメリカ人が、あまり扱わなかった竜を書くことに挑戦したり、男性中心社会ではなく、女性ならではの力を作品に書き込むなど、社会と連動したファンタジーを書いているといえます。

アメリカ人がなぜ竜が嫌いかということ、先ほどアメリカ人はイマジネーションの世界が苦手だと言いましたが、実利的なことや、目に見えることを無駄のない形でやっていこうとするアメリカ人にとって、イマジネーションの世界に関わることは受け入れがたいのです。アメリカ人が受け入れる竜は、「エルマーシリーズ」に登場する魔力のないかわいらしい竜なのです。このように、イギリスの伝統を借りる形で壮大なファンタジーが書かれたのですが、イギリスのものより強く、社会と関連したイデオロギーが見え隠れしているように思います。

動物ファンタジー

次に、動物、およびその他の話題に移りたいと思います。アメリカのファンタジーで、先ほどの『オズの魔法使い』以来ずいぶん間があって、次に出てくるのが動物ファンタジーの『シャーロットのおくりもの』で、今でもよく読まれている作品です。これは、子ブタとクモの話で、未熟児で生まれたウィルバーというブタが登場します。普通でしたら、未熟児は殺されてしまうのですが、女の子が自分で飼うことになり、命は何とか助かります。それでも、意気地がなくてメソメソしているのです。それを、納屋の上の所に住んでいるシャーロットというとてもおしゃれで賢いクモが助けます。その助け方が、ふるっていて、クモの巣に、「ウィルバーは素敵なブタ」というような文字を織り込むのです。ちょっとした魔法です。これを見た農場の人たちは、仰天して腰を抜かします。「大変だ、神の啓示だ」と言って、ウィルバーをよく世話をしたおかげで、最後は品評会で特別

賞をもらい、ベーコンになるのは免れるというような話です。この話のポイントは、クモのシャーロットが、寂しい子ブタと心を通わせ、助け、助けられるところでしょう。一般的に、動物のファンタジーというと、動物をかわいらしく描いてしまうことがありますが、この作品は、動物世界のことや、動物の生態がきっちりと書かれているので定評があります。たとえば、シャーロットはクモですが、クモは虫を捕まえて、その汁を吸うなどして生きていきます。ウィルバーは、それを目の当たりにしてギョッとします。素敵なシャーロットがあんなものを食べるなんて、と思いショックを受けます。けれどもシャーロットは、「私たちはこうやって生きるように造られているのよ」ということをきっちりと伝えます。また、生死に関わることもできます。シャーロットはクモですから命が短いのです。次の命を残して死んでいかなければいけないのですが、彼女の卵を助けるために、今度はウィルバーが活躍します。品評会場でシャーロットは息絶えていくのですが、ウィルバーは卵を口の中にくわえて、つぶさないように持って帰ります。春になってクモの子が生まれます。こうして新しい命が続いていくのです。子どもにも生命の営みがわかるように描かれています。やや教育的に聞こえるかもしれませんが、とても面白い。それは、ストーリーもさることながら、登場人物の性格が非常に上手く書き分けられているからだと思います。その中に、動物の生態をきっちり書いている。そして、これは大人の目かもしれませんが、人間社会の風刺もきいています。先ほどの、農夫が魔法に驚くところもそうです。ホワイトという人はユーモア作家です。この作品にもそれが生きています。

それからまた少したって、今度はSF風の動物ファンタジー、『フリスビーおばさんとニムの家ねずみ』が書かれました。ニムという実験場で実験用に飼育されたネズミたちが、栄養たっぷりの長生きをする餌を与えられ、文字を覚えさせられます。文字が読めると、怖いもの無しです。人間が思った以上に、知恵と体力を蓄えたネズミたちが、実験場を抜けだして、自分たちの社会を作ろうとします。そこに、人間による自然破壊で住み

かを奪われそうな野ネズミのおばさんと家族が関わってきます。普通の野ネズミのおばさんですから、変わった力はありませんが、ニムのネズミたちとの関わりを通して、読者には人間が自然や生き物に及ぼす様々な悪影響が見えてきます。面白いのは、人間の予想以上に知識を蓄えたネズミたちが、困った事実と直面するところです。実験場の近くに住んでいることは、ネズミにとって非常に都合のいい快適な生活なのですが、そんな苦労のない生活をしていたら自分たちがダメになってしまうのではないかと心配するのです。私たちは身につまされる部分です。もちろん、楽な生活がいいというネズミたちもいて仲間割れを起こします。文明化されたねずみの中でも心あるネズミたちが、自分たちの生活を守るための戦いを、野ネズミのおばさんが見届けます。現代の、高度文明化社会の中に生きている人間を鏡に映したようなネズミたちは、便利な社会の中に住んでいる私たちへの警告を発しているような気がします。この中で、種類の違うネズミたちの互いに助け助けられる人情が、大きなポイントになっています。どんなに文明化されて便利になっても、結局、人がつながっているのは温かい友情、愛情、信頼であるのです。野ネズミのフリスビーおばさんは、それらを大切にしています。久しぶりに読み返して、なかなか良い作品だと思いました。

次に、『ポピー：ミミズクの森をぬけて』をあけてあります。これは、正統派の動物物語といえます。ポピーはティーンエイジャーの女の子の野ネズミで、ボーイフレンドがいたのですが、殺されてしまいます。森の動物たちに人間による自然破壊の危険が迫る中、たった1人で、皆を連れて安全なところへ逃げなくてはなりません。皆、若い女の子のネズミの話など聞かないので、それをなんとかやっていこうという話です。だいたい前にイギリスで書かれた『ウォーターシップ・ダウンのうさぎたち』も、若くてか弱いウサギが、皆を引き連れて安全な所に逃げていく話でしたから、少し似たところがあります。ここでは、女性ネズミです。しかも、最初は意気地がなくて、「どうしよう」と涙ぐんでいるようなネズミです。それが、しだいに怖いミミズクのところへ交渉に行き、

彼女の言葉を信じない者たちを率いて進む、冒険ファンタジーに発展していきます。作家のアヴィの作品は日本でもいくつか翻訳されていますが、劇的な物語を語るのが非常に上手い人です。『シャーロットのおくりもの』にしても『フリスビーおばさんとニムの家ねずみ』にしても、伝えるテーマがはっきりとあります。一方、『ポピー』は動物社会での動物どうしの関わりが中心になっており、人間社会を映し出した寓話と言ってもよいでしょう。

現代のファンタジー

少しだけ現代の動きをお話しします。これはファンタジーと言ってよいかどうかわかりませんが、「ウィーツィ・バット・ブックス」シリーズという現代的な女の子の話と、『スター★ガール』という、やはり現代的な少し変わった女子高校生の話です。どちらもある意味では、現実離れしています。『ウィーツィ・バット』の話は、アメリカで非常に人気があって、著者のフランチェスカ・リア・ブロックは、ロサンジェルスで活躍している作家です。作品は非常に現代的で、ロスのクールな生活ぶりが出ていたとの評判です。日本では、この話をとても好きだと言う若い人たちがいる一方で、よくわからないと言う人たちもいます。主人公は、ウィーツィという女子高校生ですが、素敵なおことや綺麗なものが大好きです。でも、彼女の言う素敵なおことや綺麗なことはパンク系なのです。彼女は格好のいいボーイフレンドを見つめますが、彼が同性愛者であることがわかり、ウィーツィと彼がそれぞれに新しいボーイフレンドを探します。そのうちにウィーツィは、子どもが欲しいと言い、みんなで協力して子どもをつくってしまいます。彼らは愛があふれる素敵なお映画を作りながら生き生きと暮らしています。大人が見たら眉をひそめるような事柄が次から次へと展開しますが、このお話は、いわば現代のお伽噺なのです。著者は、夢というオブラートに包んで現代社会を提示しているといったらいいでしょう。

『スター★ガール』も、とても人気のある作品です。ジェリー・スピネッリという人が書いています。スピネッリは、少し不思議な現実離れした

主人公を通して現実社会を描くのがとてもうまい作家です。この『スター★ガール』は、身なりも性格もとても変わったスターガールという女の子が、ある高校へやってきて、みんなの気持ちや価値観をかき回すというような話です。スターガールは白いウェディングドレスを着て、ウクレレを奏で、ポケットにはネズミを入れて登場します。彼女のする事があまりにも変わっているので、みんなは彼女にどう対応してよいか戸惑いますが、彼女のカリスマ性にひきつけられていきます。恋人になった男子高校生は、スターガールのおかげで今まで気づかなかった、風の音や、空の美しさなどを知ることができます。しかし、一度は彼女を受け入れた一般の高校生たちも、彼女が試合中に敵のチームまで分け隔てなく応援したことで、彼女をのけ者にしてしまいます。しだいに、恋人も彼女から離れ、結局、彼女はこの高校を去っていきます。この作品はいろいろな読むことができますが、非常にリアルな高校の話のように見えていて、どこか現実を超えたファンタジーめいた要素が入っているのが感じられると思います。現代のアメリカ社会は混沌としていますから、こういう比喩的なファンタジー要素がないと何かを伝えることが難しいのかもしれない。

まとめ

アメリカのファンタジーは、何かメッセージを伝えようとするものが多いように思います。別世界を造って、その中で空想を楽しませて遊ぶイギリスのものとは違う特質といえるでしょう。その背景には厳しい自然と戦いながら生き抜いてきた人々の実利的な生活を重視する生き方があるのだといえます。アメリカらしいのは、やはり、ホラ話系のファンタジーだと思いますが、最後にあげた、ブロックやスピネッリという人たちは、1つの新しい流れを見せているような気がします。この両極の間に、動物物語があったり、SFめいたものがあったり、いろいろな形でその時代を反映するファンタジーが書かれているのだと思います。

カナダのファンタジー

それでは、同じ北米大陸にあって、長い国境線でアメリカとつながっているカナダの話に移りたいと思います。まだ翻訳作品は多くありません。ところで、カナダにどんなイメージをお持ちでしょうか。人によっては、『赤毛のアン』に出てくるような、リンゴの花が咲き乱れている緑豊かな所を思われるかもしれませんが、私は、氷に閉ざされた世界がすごく身近にある情景を思い描いてしまいます。カナダの南部は、比較的暖かい温暖なところがありますが、北側は、北極圏ですから厳しい自然と接しています。そのような土地にさまざまな移民からなるカナダ人が住んでいます。カナダの国は、英語とフランス語が公用語で、アジアからの移民もいますし、ヨーロッパからの移民の人たちもたくさん入っています。当然のことながらイヌイトや土着のカナダ・インディアンも住んでいる、典型的な多文化国家です。そして、1971年には国をあげて多文化政策をとることになりました。これは、さまざまな民族を白人世界に全部溶け込ませてしまうのではなくて、それぞれの国の文化を活かした形で、共にカナダをつくっていきましょうという政策です。政策は、学校教育や図書館の中でも浸透はしていますが、実に難しいところがあります。たとえば、一緒のクラスにいる子どもたちが、髪の色も違えば、肌の色も違う、そして文化的背景も違うとなると、クラスの運営は大変そうです。そういうお国事情を反映したリアルな話もたくさん書かれています。文化の異なる相手との誤解を扱った作品や、文化摩擦を扱った作品も書かれています。ただ、そのような作品が書かれるようになったのは、比較的最近のことです。プリントの最初に、カナダの風土と歴史的なことが少し書いてありますが、カナダの児童文学が大きく躍進したのは1970年代後半から80年代です。リアリズムの作品もありますしファンタジーの作品もありますが、オーストラリアなどと比較しても、少しスタートが遅かったと思います。大きな理由は、先ほどお話した、アメリカと国境線を長く接しているということです。同じ言語を使いますし、テレビ番組もアメリカのものが入っています。だからこそ、逆にカナダを

意識し、カナダらしさを訴えてゆくために生まれてきた文学というものが、近年になってたくさん出てきたということです。アメリカは、リアリズムの作品がたくさん書かれ、イギリスはファンタジーの作品がたくさん書かれましたが、カナダは長い間、それらのいいところを取って、子どもたちは、アメリカのもの、イギリスのものを自然に読んでいたというわけです。

80年代あたりになって、新しい多文化政策も落ち着いてきた頃、ようやく、カナダらしい作品が国内で書かれるようになりました。翻訳のあるものを、2) のところにあげました。ファンタジーからはなれますが、さっと見てみます。まず、ジェームズ・ヒューストンの『こおりついた炎』です。これは氷原で冒険をするサバイバルものですが、カナダの児童文学はサバイバル冒険ものが伝統的に多いのです。それから、自然を扱ったもの、動物の話もたくさんあります。動物の話では、『シートン動物記』が一番でしょう。それから、ファーリー・モワットという人も、シートンよりはだいぶ後の時代になりますが、自分が実際に動物と暮らしたことを題材に書き、『ぼくとくらししたフクロウたち』などがあります。そして、さまざまな移民の歴史がありますが、今日は日本のものをあげてあります。ジョイ・コガワの『ナオミの道』が訳されています。こんなふうに、『赤毛のアン』以外にも、日本で紹介されている作品があるのです。

初期のファンタジー

では、カナダのファンタジーですが、最初のカナダらしい作品が書かれたのは、比較的早く、1950年です。キャサリン・アンソニー・クラークの*The Golden Pine Cone* (金の松かさ) という作品です。翻訳がありませんが、表紙の絵でもわかるように、カナダ・インディアン架空の世界に白人の子どもが入って冒険をする話です。兄と妹の2人のきょうだい、金の松ぼっくりのイヤリングの片方を拾うのですが、実は、それが、カナダ・インディアンの女神が治める国の、善なる力を蓄えた大切なイヤリングだったのです。それが、ふとしたことから人間の世界に転がっていた

のです。子どもたちは、イヤリングを女神に返そうと別世界への旅に出るのですが、それを阻止する者たちがいて、恐ろしい目にあいます。中でも恐ろしいのはインディアンの巨人で、彼が悪人になったのは、婚約者の女王と心の交流ができなくなってしまったからです。子どもたちが困難の末にイヤリングを女神に戻すことで、巨人は失われた心を取り戻し、女王と再び愛を確認することができます。これは、半世紀ほど前に書かれましたが、白人の世界と先住民の世界がうまく融合して話が進んでいます。しかも、カナダの自然が生かされています。カナダの鳥や動物はもちろん、山と水が美しいブリティッシュ・コロンビア州の風土が生かされ、氷にとざされた場所を冒険していくところは、サバイバル物語としての面白さももっています。そして、人間の温かい心が皆を救う結末も納得がいきます。

SF風のファンタジー

その後、アメリカと同じ様に、作品があまり書かれない時代が続いてしまいます。1つには、イギリスからたくさんいい作品が入ってくる時代にかかってきたからだだと思います。『トムは真夜中の庭で』や「ナルニア国物語」などが入ってきていますので、カナダで書かなくても間に合ってしまったというところがあるかもしれません。そして、少し間があいて書かれるようになるのが、1980年くらいです。次の、サイエンスフィクション・ファンタジーのところを見てください。これは翻訳があります。最初に書いてあるのが、『イシスの灯台守』で、著者のモニカ・ヒューズは、イギリスからカナダに移民した人です。結婚を機に移民をしたので、大人になってから移った人です。彼女がカナダに移った時に、非常に苦勞をしたようです。1つには気候です。イギリスとは比べものにならないくらい寒く厳しい。そして、人と付き合っていくのが非常に難しい。移民の国ではあるけれども、自分がカナダ社会に入っていくのに非常に苦勞をしたと言います。疎外感を感じている自分を悲しいと思ったことがあるようです。このような体験が、作品を生む動機になっていたのかもしれません。

最初にお話しする『イシスの灯台守』は近未来小説です。地球の人口が増えすぎて溢れてしまうので、近い将来、イシスという惑星に移って、そちらに移民団を送ろうという計画があり、先発隊として科学者たちが行きます。しかし、大人たちが亡くなり、1人だけ生き残っている少女がいます。16歳くらいになったオルウェンという少女です。今は、その少女と彼女を守っているガーディアンというロボットだけが惑星にいて、基地を維持して、いつ移民団が来てもいいように準備万端整えています。そこへ、いよいよ地球からの移民団がやってきます。オルウェンは、始めて人間と接するのですから、どんな人たちが来るのだろうと楽しみにしています。そのうちに、心を通わせる男性もできます。ところが、普段は皆が酸素マスクで体を覆っているのですが、あるとき、オルウェンの素顔が見えます。恋人はオルウェンを見てショックをうけます。実は、彼女は空気の薄い所でも楽に生きていけるように目も鼻も皮膚も改造されていたからです。このほかにも、基地の主導権をめぐる争いなど、オルウェンと移民の間には断絶ができてしまいます。結局、オルウェンは基地を離れて山奥に住むようになります。悲劇的な話でもあるのですが、移民がやって来て、先住の人と葛藤があるというのは、まさにカナダ的なテーマですし、著者が最初にカナダにやって来た時に感じた孤独感なのかもしれません。続編では、半世紀後のオルウェンと移民団の様子が描かれます。すっかり墮落して存続が危ぶまれる移民団と、もう年をとったオルウェンの間を、1人の少年がとりもつことで移民団の危機を救います。

同じ作者の『リングライズリングセット』は氷に閉ざされた氷河期の世界が舞台です。背景にあるのはカナダの氷原でしょう。ここの人々は、冬には氷原の寒さから身を守る巨大シェルターの中で暮らさなければいけないのですが、ヒロインの少女は息苦しくて仕方がない。自由になりたい、自分らしく生きたいと、そこを抜け出します。そして皆が恐れ、かつ、卑下していた野蛮な民族に捕まるのです。彼らほどことなくイヌイットを思わせませぬ。彼女はそこでの体験を通して、自分の住んでいた閉塞的な社会に風穴をあける働きをし

ます。これも、異文化どうしの無理解と思ひ込みが生む衝突を、SF風に描いたもので、氷原を生き延びるサバイバルものの要素もみられます。カナダのファンタジーはSFばかりが多いわけではありませんが、夢のようなファンタジーとは少し異なるかもしれません。

また、比較的新しい作品に『ダスト』がありますが、アーサー・スレイドという人が書き、賞をとった作品です。これは翻訳はありません。ダストとは埃とか粉の意味です。舞台は1930年代の大恐慌と干ばつが重なった非常に厳しい時代のプレーリー地帯にある農村です。大人たちは、作物も育てられなくて絶望しているうえ、子どもたちが次々と失踪します。そんな中、不思議な男がやってきて「雨の降る機械をつくってあげましょう」と言って人々に期待をもたせます。しかし、一方で、彼は子どもたちをさらい、子どもたちのエキスを抽出して永遠の命を得ようとしているのです。弟がさらわれた少年が、その男に挑みます。干上がった大地、希望をなくして心身ともに干からびた大人たち、それらを少年の兄弟愛が救います。

タイムファンタジー

カナダでは、タイムファンタジーにも面白いものが書かれているので、それについても、お話ししたいと思います。タイムファンタジーというと、『トムは真夜中の庭で』などのイギリスのものが有名だと思います。古い館から別世界に行き、過去の時代の人たちと心の交流をするというファンタジーです。カナダのタイムファンタジーは、イギリスのものとは少し違うようです。『床下の古い時計』と『丘の上、夢の家族』はともにキット・ピアソンが書いています。いずれも、孤独な少女が過去の世界に行くことによって人生の新しい局面を見つけることができる話です。別世界での体験がある種の救いにつながるというでしょう。

『床下の古い時計』は、お母さんとの間に断絶を感じている内気な少女の話で、離婚もからんでいます。ニュースキャスターのお母さんは、積極的なしっかり者で、内気な少女とは対照的です。その少女が、おばあさんの別荘に行き、そこで古

い金時計を見つけます。ネジを巻くと過去の世界、お母さんが子どもだった時代にタイプスリップします。そこで少女は、今はあんなにしっかり者で、自分のことなど振り向いてくれないお母さんが、皆にのけ者にされて、何を言っても聞いてもらえず、とても悔しい思いと悲しい思いをして、涙も流している。そんな子ども時代のお母さんを見るのです。その後、時計は壊れてしまうのですが、お母さんに時計のことを話すと、あの活発なお母さんが涙ぐんで、今まで記憶の底に押しやっていたことを思い出し、2人のわだかまりが消えていくという話です。そのチャンスを作ってくれたのが過去へのタイムシフトだったのです。

そして、同じくキット・ピアソンの書いた『丘の上、夢の家族』も、女の子が寂しい思いをしているところからはじまります。『床下の古い時計』のお母さんはニュースキャスターでカッコいいのですが、こちらのお母さんは、離婚をしてボーイフレンドを次から次に替えるようなお母さんです。そして、今はとても貧しくて、10歳の娘を連れて街頭で物乞いをしなければいけないくらいなのです。女の子はいやでたまりません。しかも、お母さんは、新しいボーイフレンドができて、この子をおばさんの家に預けます。バンクーバーは西海岸にある都市ですが、そこからフェリーで隣の島へ行く船の中で、1人の女性作家の幽霊がこの少女を認めます。作家は少女の悲しみに共感をおぼえ、彼女が思い描くような夢の家族を見せてあげようと、自分の作品の世界に誘い入れ、素晴らしい家族に出会わせます。本当に愉快な兄弟たちがいて、優しいお父さん、お母さんがいる家族で、女の子はとても楽しい一時を過ごしますが、それが幻とわかった時、絶望に襲われます。それでも、ふとしたことから、ある作家が若くして亡くなり、作家としての夢が果たせなかったことを知ります。実は、その作家が夢の家族を見せてくれたのです。少女と作家の幽霊は、お墓でお互いの気持ちを打ち明けあいます。作家は、自分の書きたい気持ちを少女に託し、心をやかに消えていきます。夢を託された女の子は、自分で物語を紡ぐことを考えて、少し明るさを取り戻していきます。同時に、お母さんも戻ってきて事態が好転し

ていきます。この作品はタイムファンタジーであり、幽霊物語でもあります。主人公が別世界に行き、違う世界を見ることで新しい生き方に気づくという意味では、時空を超える旅というのは現実の生活以上の経験をさせてくれる場として働いているのではないのでしょうか。イギリスのタイムファンタジーとの共通点はありますが、カナダのものは、現実の生活や家族とのかかわりが強く、現状をうまく生き延びるための助けとしてファンタジーが作用しているように思います。

その他のファンタジー

もう1つ、これはタイムファンタジーではなく、超能力に関わる話で、比較的最近、翻訳が出た『ジュリー』という作品です。原作が書かれたのは1980年代です。これは、生まれつき予知能力を持った少女の話です。ジュリーは自分が少し変わっているということ、小さい時から感じて、ずっと思い悩んでいます。兄弟たちは、ジュリーが時々変なことを言うといってとバカにし、お母さんは、とても心配しています。ジュリーは口数の少ない子になり、不安をかかえながら小学校へあがりますが、そこでも孤独な思いをしています。しかし、予知能力が人の助けになることが何度か起こっていきます。そして、ある日、彼女は大草原に帆船が浮かんでいるのを見ます。これは、実は死者の船なのですが、これが見えた時は、誰かが死ぬ前触れだとわかっている、ジュリーは今まで乗ったこともない馬にしがみついて走りに走り、危機一髪で事故にあったお父さんを助けます。こうして、自分の力が人の役に立つかもしれないと思い始めた少女は、自分に授かった能力と共に生きていくことを受け入れていきます。超能力の話ではあるのですが、ある意味では、少女が自分らしさを受け入れていく、成長の話といえるかもしれません。カナダ人は、アメリカ人でもイギリス人でもない、カナダ人のアイデンティティを、いろいろな意味で意識しなければいけない時があります。児童文学でも、自分らしさ

を見つめていく話というのは、ファンタジーでもリアリズムでも書かれています。このジュリーの話は、カナダ特有の大草原を舞台に、自分らしさを受け入れていく話で、カナダ人のアイデンティティ探しとも重なる話だといえるでしょう。

最後に、奇想天外なファンタジーをご紹介します。『スクランブル・マインド』がそれです。「マインド・スパイラル」シリーズの1冊です。人の心が読めてしまう国の王子と、何でも思ったことができてしまう国の、しかも気の強い女王が、互いに婚約者同士という設定で、とんでもないことが次々に起こる話です。心の動きというのは実に複雑です。私たちは、本当はやりたけれど、やってはいけないとコントロールをきかせていますが、それがなくなった時に、どんなことが起こるのか、それに悪の力が関わってきたときにどうなるかというようなことを、あの手この手で見せてくれる話です。カナダのファンタジー界では、このような実験的な作品も書かれています。

まとめ

カナダのファンタジー全体を簡単にまとめますと、イギリスの影響を受けたファンタジーが多いように思います。その中の1つはタイムファンタジーですが、イギリスのものとは違って、むしろ、時を越えることによって、難しい現代社会に生きる子どもの内面を映し出そうとしたり、彼らが新しい生き方をつかむきっかけを与えようとするファンタジーになっているようです。それから、作品としては、モニカ・ヒューズのSFなどがそうですが、移民の国であるカナダを反映するような作品がいくつかあります。自分らしさの発見を、ファンタジーに託して語っている作品もあります。また、今回の話の中では、最初にお話した*The Golden Pine Cone*は、カナダらしさが凝縮されている話だろうと思います。カナダは児童文学の面では後発の国ですが、興味深い作品が書かれているのです。

(しらい すみこ 白百合女子大学児童文化学科
助教授)

ファンタジーとはなにか

井辻 朱美

- ・ 昔話、おとぎ話をもとにしたもの——現実と異界が一元的に溶けあう世界観
- ・ 歴史小説を代行するもの（異界における一元的なハイ・ファンタジー）
- ・ 枠物語（エヴリデイ・マジック（ロー・ファンタジー）、パラレルワールドもの含む）
——世界の構造化への視線

■ 資料① <年表>

①神話・伝説・動物物語・メルヘン・騎士物語・古代英雄物語 ②空想旅行記 ③ユートピア譚
④シノワズリ、オリエンタリズム、エキゾチズム ⑤秘境探検もの（遺跡・過去の文明、古生物など
と出会う。ある場所が別の時間をもつ。科学的真実らしさを前提・この亜種としてのタイム・ファン
タジー） ⑥歴史ロマン（偽史含む） ⑦神秘学、魔術など代替世界体系 ⑧サイコ・ファンタジー
（第二世界が主人公の内面を反映する鏡となる）その他「幽霊」（歴史因縁）「吸血鬼」（永生）「ゴー
レム」（人工生命）などの特化ジャンルあり。

1516 トマス・モア『ユートピア』③

17世紀 ユートピア旅行記（大航海時代の影響による）（旅行記プラス ユートピア）

1605-16 M・セルヴァンテス『ドン・キホーテ』①②

1616 作者不詳『偉大で感嘆すべきアンタンジル王国の物語』②③

1657-62 シラノ・ド・ベルジュラック『別世界または日月両世界の諸国諸帝国』②

1677-79 ドニ・ヴェラス『セヴァランブ物語』②③

1697 シャルル・ペロー『童話集』①

1699 フェヌロン『テレマックの冒険』②

18世紀 ゴシック・ロマンス（理性の世紀の裏面）

1726 ジョナサン・スウィフト『ガリヴァー旅行記』②

1759 ヴォルテール『カンディード』⑤

1764 ホレス・ウォルポール『オトラント城綺譚』①

1768 フォントネル『哲学者の国またはアジャオ人物語』③

1772 ジャック・カゾット『悪魔の恋』①

1786 ウィリアム・ベックフォード『ヴァテック』④

- 1787 『ドン・ジョヴァンニ』プラハ初演 時代は17世紀
 1794 アン・ラドクリフ『ユドルフォアの秘密』①
 1795 M・G・ルイス『マンク』①⑦

19世紀 ロマン主義とメルヘン復権

- 1800 ノヴァーリス『夜の賛歌』
 1802 ノヴァーリス『青い花』①⑦
 ルードヴィヒ・ティーク『ルーネンベルク』
 1812 グリム童話集
 1818 メアリー・シェリー『フランケンシュタイン』⑦
 1819 J・W・ポルドリ『吸血鬼』
 1820 E・T・A・ホフマン『ブランビラ王女』①⑧
 1830 チャールズ・ライエル『地質学原理』
 1834 ブルワー＝リットン『ポンペイ最後の日』⑤⑥
 ギデオン・マンテル、イグアノドン発見
 1839 E・A・ポー『アッシャー家の崩壊』①
 1851 ジョン・ラスキン『黄金の川の王さま』①
 英国における妖精物語復興の最初の作品
 1853 テオフィル・ゴーティエ『アッリヤ・マルケッラ』
 1854 ドフォントネー『カシオペアのΦ』②
 1855 ジェラルド・ド・ネルヴァル『オーレリア』②④⑤⑦
 1856 テオフィル・ゴーティエ『ミイラ物語』④⑤
 1858 ジョージ・マクドナルド『ファンタステス』①②
 1859 チャールズ・ダーウィン『種の起源』
 1865 ジュール・ヴェルヌ『月世界旅行』
 地底の発見→時間（地層）の発見→タイム・ファンタジーの出現
 ルイス・キャロル『ふしぎの国のアリス』②⑥
 ジュール・ヴェルヌ『地底旅行』⑤
 1869 ジュール・ヴェルヌ『海底二万里』⑤
 1871 ジョージ・マクドナルド『北風の後ろの国』①⑦
 1872 ルイス・キャロル『鏡の国のアリス』②
 レ・ファニュ『吸血鬼カーミラ』
 1885 H・R・ハガード『ソロモン王の洞窟』④⑤
 1887 H・R・ハガード『洞窟の女王』④⑤
 1889-1910 アンドリュー・ラング『色の童話集』①
 1890 ウィリアム・モリス『ユートピアだより』③
 中世手工業ギルドにユートピアを見る
 1894 ウィリアム・モリス『世界のかなたの森』②
 中世回帰・騎士物語への憧れ
 ラディヤード・キプリング『ジャングルブック』③④
 アンソニー・ホープ『ゼンダ城の虜』①⑥

- 1895 H・G・ウェルズ 『タイムマシン』 ⑤
G・マクドナルド 『リリス』 ⑤⑦
- 1897 ブラム・ストーカー 『吸血鬼ドラキュラ』
- 1900 F・R・ボーム 『オズの魔法使い』 ②③
テクノロジー+ファンタジー
- 1901 ビアトリクス・ポター 『ピーターラビットのおはなし』
H・G・ウェルズ 『月世界最初の人間』 ⑤
- 1902 イーディス・ネズビット 『砂の妖精』 ① (⑧)
- 1903 少女レベッカ
- 1905 バロネス・オルツイ 『紅はこべ』 ⑥
- 1906 セルマ・ラーゲルレーヴ 『ニルスのふしぎな旅』 ①②
- 1907 イーディス・ネズビット 『魔よけ物語』『魔法の城』 ①⑤
- 1908 ケネス・グレアム 『たのしい川べ』 ①
- 1910 ウォルター・デ・ラ・メア 『ムルガーのはるかな旅』 ②③
- 1911 ジェームズ・バリ 『ピーターパン』 ①③
フランシス・バーネット 『秘密の花園』 ③⑥
- 1912 コナン・ドイル 『ロストワールド』 ④⑤
- 1913 エドガー・ライス・バローズ 『類人猿ターザン』 ①⑤
- 1920 ヒュー・ロフティング 『ドリトル先生アフリカ行き』 ①④⑤
デヴィッド・リンゼイ 『アークトゥルスへの旅』 ②⑦
空想の旅の内面化・心理化
- 1921 エリナー・ファージョン 『リンゴ畑のマーティン・ピピン』 ①
- 1924 ロード・ダンセイニ 『エルフランドの王女』 ①
ホーンブック・マガジン刊行
- 1925 ルドルフ・シュタイナー没
- 1926 A・A・ミルン 『クマのプーさん』 ①
- 1928 H・P・ラブクラフト 『ダンウィッチの怪』 ⑦
- 1929 アーサー・ランサム 『ツバメ号とアマゾン号』 ②⑥
コナン・ドイル 『マラコット深海』 ⑤⑦
- 1930 ドイル没
- 1932 ローラ・インガルス・ワイルダー 『大きな森の小さな家』 ⑥
R・E・ハワード 『コナン・シリーズ』 -1936 ①⑤
- 1934 P・L・トラヴァース 『風によつてきたメアリー・ポピンズ』 ①
- 1937 J・R・R・トールキン 『ホビットの冒険』 ①②
- 1938 T・H・ホワイト 『永遠の王』 ①⑥
- 1939 アリソン・アトリー 『時の旅人』 ⑥⑧
ヒルダ・ルイス 『とぶ船』 ①⑤⑥
ロバート・ネイサン 『ジェニーの肖像』
- 1943 サン＝テグジュペリ 『星の王子さま』 ⑥ (⑧)
- 1945 A・リンドグレーン 『長くつ下のピッピ』 ①
メアリー・ノートン 『ベッドかざりと魔法のほうき』 -47 ⑤⑥⑦
- 1946 トーヴェ・ヤンソン 『ムーミン谷の彗星』 ①

- マーヴィン・ピーク『ゴーマンガスト城』三部作-1959 ①⑦
 エリザベス・グージ『まぼろしの白馬』⑥
 1947 ルーマー・ゴッデン『人形の家』
 1952 メアリー・ノートン『床下の小人たち』①(⑧)
 1954 ルーシー・ポストン『グリーン・ノウの子どもたち』⑥
 ポール・ギャリコ『七つの人形の恋物語』⑧

1954-5 J・R・R・トールキン『指輪物語』①②

- 1950-6 C・S・ルイス『ナルニア国物語』①⑦
 1958 フィリパ・ピアス『トムは真夜中の庭で』⑤⑥
 キャサリン・ストー『マリアンヌの夢』⑧

60年代 human potential movement

オルダス・ハックスレー人間の潜在的可能性について発案、このころからニューサイエンスや心理学

マズロー、ベイトソン、フリッツ・パールズ(ゲシュタルト心理学) グロフ(トランスパーソナル心理学)

ケン・ウィルバー、ルパート・シェルドレイク、カブラ、キューブラー・ロス、ケストラージョーゼフ・キャンベル『神話の力』(85-6の対談) 物理世界と人間との媒介をする「意識の力」

- 1960 アラン・ガーナー『ブリジンガメンの魔法の宝石』①
 1961 マイクル・ムアコック「夢見る都」①⑦
 1964-68 R・アリグザンダー『プリデイン物語』①②(④)
 『メアリ・ポピンズ』映画化
 1965-77 スーザン・クーパー「光の六つのしるし」シリーズ①⑤
 ガーナー『エリダー』①
 1966 ルーマー・ゴッデン『台所のマリアさま』
 1967 E・L・カニグスバーク『クローディアのひみつ』『魔女ジェニファとわたし』⑧
 J・G・ロビンソン『思い出のマーニー』
 1968 U・K・ル＝グウィン『ゲド戦記』(-2002) ①⑦⑧
 1972 ペネロピ・ファーマー『骨の城』⑧
 1973 ラッセル・ホーバン『ボアズ・ヤキンのライオン』①⑦
 パトリシア・ライトソン『星に叫ぶ岩ナルガン』①
 1975 メアリ・シュトルツ『鏡のなかのねこ』④⑤⑧
 1979 ミヒヤエル・エンデ『はてしない物語』①⑧

80年代RPG

- 1981 ロバート・ウェストール『かかし』⑧
 サイコ・ファンタジー主流に
 1982 マーガレット・マーヒー『足音がやってくる』⑦⑧
 ダイアナ・ウィン・ジョーンズ『魔法使いはだれだ』⑦
 1986 マーガレット・マーヒー『クリスマスの魔術師』⑦⑧
 ダイアナ・ウィン・ジョーンズ『魔法使いハウルと火の悪魔』①
 1987 キット・ピアソン『床下の古い時計』⑧

- 1991 マーガレット・マーヒー『危険な空間』⑧
 ダイアナ・ヘンドリー『屋根裏部屋のエンジェルさん』⑧
 1992 マーガレット・マーヒー『地下脈系』⑧
 1993 ジェームズ・レッドフィールド『聖なる予言』ベストセラーに
 1995 マーガレット・マーヒー『ヒーローのふたつの世界』①⑧

〈ネオ・ファンタジーの時代〉

- 1995 ラルフ・イーザウ『ネシャン・サーガ』1巻
 1996 フィリップ・プルマン『黄金の羅針盤』③⑦（「ライラの冒険」シリーズ1巻）
 完全に小説的
 1997 J・K・ローリング『ハリー・ポッターと賢者の石』①⑦（⑧的小道具多し）
 1999 ダレン・シャン『ダレン・シャン』シリーズ開始①⑦
 2000 ゲイル・カーソン・レヴィン『さよなら、「いい子」の魔法』①⑧
 2001 スーザン・クーパー『影の王』⑤⑥⑧
 タイム・ファンタジー
 2003 ジョナサン・ストラウド『バーティミアス①サマルカンドの秘宝』
 もうひとつのパラレルワールド、ロンドン

★お勧め参考文献

- 荒俣宏『ヨーロッパ、ホラー&ファンタジー・ガイド』講談社α文庫 2002
 『想像力の地球旅行——荒俣宏の博物学入門』角川文庫 2004
 その他、荒俣宏の本は読んで損はない。
 桂侑子、牟田おりえ編著『はじめて学ぶ児童文学史』ミネルヴァ書房 2004
 ベッティーナ・ヒューリマン『ヨーロッパの子どもの本』（上下）、ちくま学芸文庫 2003
 石原孝哉『幽霊のいる英国史』集英社新書 2003
 フィリップ・アリエス『子どもの誕生』みすず書房、小澤俊夫『昔話とは何か』福武文庫 その他
 リューティ『昔話の本質』ちくま学芸文庫など、マックス・リュウティの著作
 鏡リュウジ『魔女入門』柏書房 2003

★まとめ 現代ファンタジーのルーツと特徴 →いまの状況とは???

コント・ド・フェ
 妖精物語・昔話、空想旅行記など。世界は一元的（魔女、人狼などがすべて地続きの世界）

↓

合理的な世界観の浸透。昼の世界（実）と夜の世界（虚）の切断。後者は非現実・妄想、迷信とされる。

逆説的だが、そのような時代に初めて意識化される異界。17世紀にゴシック小説、18世紀に初めて幻想文学成立

現実ともうひとつの別世界の二元対立＝ファンタジーの始まり！

↓

別世界の受難時代 19世紀後半-20世紀前半

児童文学の中でのみ生存を許される。（子どもの現実の一部としての空想世界）

または大人の主流文学外のエンターテインメントや偽史小説、初期SFなど。



完全な架空世界（ハイ・ファンタジー）の創造 1950年代

リアル（現実）とは何かへの疑問提出 「虚」の自立

トールキン、C・S・ルイス→ゲーム世界へ



旅行記部分（移動・別世界までの旅程）の欠落

（おそらくテクノロジーの発達による移動の高速化のため）

第二世界のバリアフリー化

先進諸国の「実」の行き詰まりとぐらつきに伴い、「虚」が浮上、オルタナティブな世界の模索。

心理学・神話学・文化人類学などによる「虚」の再定義と意味づけ、合理的世界観の中で再評価される。

市民権をえたファンタジーというジャンル

タイム・ファンタジーの活性化



サイコ・ファンタジーの出現

内面世界の見取り図としての第二世界、つまり、未知の土地の探険や冒険ではなく、自分の内面の探究へ

「虚」こそが「実」の「実」を映し出す鏡

★現代のファンタジー

①メッセージ性の強い壮大な世界寓話・観念的

『はてしない物語』（M・エンデ）『ライラの冒険』シリーズ（P・プルマン）または個人の無意識の中の神話性 M・マーヒー（外世界と内意識のとけあった接合状態こそが「現実」である）

②癒し系・精神世界系との合体

『葉っぱのフレディ』『聖なる予言』（J・レッドフィールド）

『星の巡礼』『アルケミスト』（パウロ・コエリョ）

③昔話の構造パターンを換骨奪胎した（良い意味の）神話的類型物語

18世紀的自我に基づく小説という形態 → 物語への環帰

英雄物語の元型を使った

『ハリー・ポッター』（J・K・ローリング）

『ネシャン・サーガ』（ラルフ・イーザウ）

昔話のクリシェとそのパロディ

『魔法使いハウルと火の悪魔』『ダークホルムの闇の君』（ダイアナ・ウィン・ジョーンズ）

『ダレン・シャン』（ダレン・シャン）

『さよなら「いい子」の魔法』（ゲイル・カーソン・レヴィン）

これらは現実とブレンドされた架空世界でもある。

『アルテミス・ファウル』（オーエン・コルファー）

cf映画『マトリックス』

■ 資料② <タイム・ファンタジー参考文献>

<児童文学>

- イーデイス・ネズビット『魔よけ物語』講談社青い鳥文庫（上下）1907
ロバート・ネイサン『ジェニーの肖像』ハヤカワ文庫、偕成社文庫（映画化あり）1939
アリソン・アトリー『時の旅人』岩波少年文庫または評論社 1939
ヒルダ・ルイス『とぶ船』岩波書店 1939
メアリー・ノートン『空とぶベッドと魔法のほうき』岩波少年文庫 1945
ルーシー・ポストン『グリーン・ノウの子どもたち』評論社 1954
フィリパ・ピアス『トムは真夜中の庭で』岩波少年文庫 1958
J・G・ロビンソン『思い出のマーニー』（上下）岩波少年文庫 1967
ペネロピ・ライブリィ『トーマス・ケンプの幽霊』1973 田中明子訳 評論社 1976
アイリーン・ダンロップ『まぼろしのすむ館』中川千尋訳 福武書店 1987
キット・ピアソン『床下の古い時計』金の星社 1987
『丘の家、夢の家族』徳間書店 1996（訳書 2000）
メアリー・ダウニング・ハーン『時間だよ、アンドルー』田中薫子訳 徳間書店 1994（訳書 2000）

<それ以外>

- ケン・グリムウッド『リプレイ』新潮文庫 1988
リチャード・マシスン『ある日どこかで』尾之上浩司訳 創元推理文庫（映画化あり）1975
（訳書 2002）
ジャック・フィニイ『夢の十セント銀貨』ハヤカワ文庫 1979
『ゲイルズバーグの春を愛す』ハヤカワ文庫 1980
『ふりだしに戻る』（上下）ハヤカワ文庫 1991
『フロム・タイム・トゥ・タイム』角川文庫 1999
ディーン・R・クーンツ『ライトニング』文春文庫 1988
ロバート・チャールズ・ウィルソン『世界の秘密の扉』公手成幸訳 創元推理文庫 1989（訳書 1995）
『時に架ける橋』伊達奎訳 創元推理文庫 1989（訳書 2000）
ジュード・デヴロー『時のかなたの恋人』新潮文庫 1989
ピート・ハウトマン『時の扉をあけて』白石朗訳 創元推理文庫 1996（訳書 2000）
北村薫『スキップ』『ターン』『リセット』新潮文庫 それぞれ 1997, 1999, 2001
恩田陸『ライオンハート』新潮文庫 2000
村山由佳『もう一度デジャ・ヴ!』集英社文庫 1998
高畑京一郎『タイムリープ』メディアワークス 1997
鈴木光司『楽園』新潮文庫 1990
宮部みゆき『蒲生邸事件』文春文庫 1996
佐藤正午『Y』ハルキ文庫 1998
西澤保彦『七回死んだ男』講談社文庫 1995
筒井康隆『時をかける少女』角川文庫（映画化あり）1976

その他『バック・トゥー・ザ・フューチャー』『恋はデジャ・ヴ』『ある日どこかで』『天使のくれ

た時間』など映像作品多数

エッセイとしては、梶尾真治『タイムトラベル・ロマンス』平凡社2003がお勧め

〈コミック〉

山田ミネコ『冬の円盤』2001 その他ハルマゲドン・シリーズ、タイムパトロール・シリーズなど
(秋田書店、双葉文庫他)

やまざき貴子『マリー・ブランシュに伝えて』白泉社 1992

この手の単純なタイムスリップものは多いのでいちいちあげない。

萩尾望都『ポーの一族』『マーリン』(全集または『続・十一人いる』文庫所収) 小学館

手塚治虫『W3 (ワンダースリー)』(TV実写ドラマ放映)

〈ファンタジー一般を考えるための参考文献〉

昔話関連

小澤俊夫『昔ばなしとは何か』福武文庫

マックス・リュートイ『昔話の本質』ちくま学芸文庫 ほか

ウラジーミル・プロップ『魔法昔話の起源』せりか書房

深層心理学

ブルーノ・ベッテルハイム『昔話の魔力』評論社 フロイト派の解釈

河合隼雄『昔話の深層』講談社α文庫 ユング派の解釈

『影の現象学』『ファンタジーを読む』講談社学術文庫

民族学・文化人類学関連

大塚英志『物語の体操』朝日文庫

『キャラクター小説の作り方』講談社現代新書

『物語消費論』角川文庫

『物語消滅論』角川oneテーマ21 2004

中沢新一『ポケットの中の野生』新潮文庫

『世界最古の哲学』カイエソヴァージュ① 講談社選書メチエ

『対称性人類学』カイエソヴァージュ⑤ 講談社選書メチエ

小松和彦『妖怪学新考』小学館ライブラリー

『神隠しと日本人』角川ソフィア文庫

大航海・植民地関連

正木恒夫『植民地幻想』みすず書房

南條竹則『ドリトル先生の英国』文春新書

オリエンタリズム関連

E・サイード『オリエンタリズム』平凡社

弥永信美『幻想の東洋』青土社

博物学関連

荒俣宏『目玉と脳の大冒険』ちくま文庫 他、集英社文庫の荒俣宏コレクションなど

幽霊とテクノロジー

M・ミルネール『ファンタスマゴリア』ありな書房

伊東俊治『ジオラマ論』ちくま文庫 十九世紀末の光学器械と見世物装置→幻想

B・コマン『パノラマの世紀』筑摩書房

魔女関連

H・P・デュル『夢の時』法政大学出版局

魔女とは現実と異界（自然）の垣根の上に座る存在・・・

鏡リュウジ『鏡リュウジの魔女入門』柏書房

自然

G・バシュラール『空間の詩学』ちくま学芸文庫

ミルチャ・エリアーデ『鍛冶師と錬金術師』せりか書房

『聖なる空間と時間』 //

『イメージとシンボル』 //

庭園・テーマパークなど

橋爪伸也『日本の遊園地』講談社現代新書

ヴォルフガング・タイヒェルト『象徴としての庭園』岩田行一訳 青土社

ジャック・ブノア＝メシヤン『庭園の世界史』河野・横山訳 講談社学術文庫

川崎寿彦『楽園と庭』中公新書

ファンタジーと幻想文学そのものについての総論

ツヴェタン・トドロフ『幻想文学論序説』創元ライブラリ

R・カイヨワ『イメージと人間』思索社

荒俣宏『別世界通信』イーストプレス

B・アトベリー『ファンタジー文学入門』大修館

E・ラブキン『幻想と文学』東京創元社

スタインメッツ『幻想文学』文庫クセジュ

ルイ・ヴァックス『幻想の美学』文庫クセジュ 1960（訳書 1961）

「ファンタジーとはなにか」紹介資料リスト

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	丘の家、夢の家族	キット・ピアソン作 本多英明訳	徳間書店 2000	Y9-N00-122
2	思い出のマーニー 上・下	ジョン・ロビンソン著 松野正子訳	岩波書店 1995	Y9-1858
3	グリーン・ノウの子どもたち	ルーシー・M. ポストン著 ピーター・ポストン絵 亀井俊介訳	評論社 1988	Y8-5483
4	ジェニーの肖像	ロバート＝ネイサン著 山室静訳	偕成社 1977	Y7-5895
5	時間だよ、アンドルー	メアリー・ダウニング・ハーン著 田中薫子訳	徳間書店 2000	Y9-N00-58
6	空とぶベッドと魔法のほうき	メアリー・ノートン著 猪熊葉子訳	岩波書店 2000	Y7-N01-7
7	トーマス・ケンプの幽霊	ペネロピ・ライヴリイ著 田中明子訳	評論社 1976	Y7-5348
8	時の旅人	アリスン・アトリー著 小野章訳	評論社 1981	Y7-8672
9	とぶ船	ヒルダ・ルイス著 ノーラ・ラヴリン絵	岩波書店 1966	Y7-626
10	トムは真夜中の庭で	フィリップ・ピアス著 スーザン・アインツィヒ絵 高杉一郎訳	岩波書店 1967	Y7-944
11	まぼろしのすむ館	アイリーン・ダンロップ著 中川千尋訳	福武書店 1990	Y8-8005
12	魔よけ物語：続・砂の妖精 上・下	イーディス＝ネズビット著 ハロルド＝ロバート＝ミラー絵 八木田宜子訳	講談社 1995	Y9-1906
13	床下の古い時計	K.ピアソン著 葛西利行絵 足沢良子訳	金の星社 1990	Y8-7991

ファンタジーとはなにか

井辻 朱美



はじめに

井辻です、よろしくお願ひいたします。皆様に、細かい字で書いたプリントをお配りしていると思います。21世紀の今、ファンタジーはジャンルとして自立するようになりました。今日は、始めにファンタジーのルーツを見ることで、ファンタジーとは何か、どういうものの蓄積の上に成り立っているのか、過去から大きいスパンで見いきます。それから、20世紀になって、少しファンタジーが変わったというあたりが、資料2に出ていますようにタイム・ファンタジーといいますが、時間を扱ったファンタジー。それまでは、どちらかというところ、空間の遠いところへ行ったり、知らない外国へ行ったり、あるいは、太陽や月へ行ったりのような、空間的に移動するのが別世界だったのですが、20世紀になって、時間というものが入ってきて、タイム・ファンタジーというものができてきたということです。それを2番目にクローズアップして見ます。

それから現在のネオ・ファンタジーへの流れです。20世紀の真ん中ぐらいになりますと、トールキンが出てきて、その後、ファンタジー小説というジャンルが確立して、子どもの本だけではなくて、大人の本にもファンタジーが、堂々とできてきました。その中で、20世紀後半にかけて、3つぐらいターニングポイントがあるかと思えます。1回目がトールキン、2回目が私の考えではM・エンデ、3回目のターニングポイントが、いわゆる『ハリー・ポッター』シリーズや、ネオ・ファンタジーといわれている世界で、児童文学に、もう1回非常に大きく振り子が振れて、ファンタジーが戻ってきた時代。それまでは児童文学は、

大人の文学のサブジャンルのような、少し後ろを追いかけていくような感じだったのですが、この時代になりますと、主流である子どものファンタジーの方が、文学の先へ出ているという気もします。そういうネオ・ファンタジーの特徴を見て、最後に、ファンタジーとはどういうものかということで、何人かが言っていることを紹介いたしまして、現代のファンタジーの地図のようなものを見ていくという順番で考えています。

ファンタジーの世界

「ファンタジーとはなにか」といいますと、レジュメには、昔話、おとぎ話をもとにしたもの、歴史小説を代行するもの、粋物語と書いてあります。「ファンタジーとは何でしょう」と聞かれた場合に、日本のものだと『かぐや姫』や『桃太郎』と言うし、外国のものだと『シンデレラ』や『グリム童話』などもファンタジーに入れて考えていると思うのですが、これが1番古いタイプのファンタジー、いわゆる昔話、おとぎ話です。「不思議なことが起こる話が全部ファンタジーです」と言ってしまうのもいいのですが、その起こり方でだんだんニュアンスが違ってきています。この昔話やおとぎ話が、それ以外に不思議なお話がなかった時代には、現実と不思議な世界というものが、そんなにはっきりと切れていなくて、森へ行くと妖精がいるとか、山へ行くとやまんばがいるとか、ちょっと怪しい小路へ行くと魔女がいるとかつながっていたのです。世界が2つ、別世界と現実があるという世界観ではなかったわけです。ですから、一元的と書いてあるのですが、『グリム童話』を読んでいると、不思議な巨人や魔女が

突然出てきて、あるいは、ドラゴンがいたり、小人がいたりして、「願いを叶えてあげよう」と言います。主人公は、全然驚きもせずに「そうか願いを叶えてくれるのか」と、すぐその世界と溶け合ってしまうわけです。こういうのが、17世紀やそれ以降とは違ったファンタジーのあり方だった。それは、魔女や、小人や、巨人がいたりというの、ある意味で、本当にあることだと思っただけではないからです。街中にはいないだろうけれども、森の中に行ったら、狼人間もいるだろうというような感じです。魔女というのは、本当にいると思われていましたから、魔女狩りというようなことがあったわけです。

その後、ハイ・ファンタジーという言い方をするのは、(やや誤解を招き兼ねないのですが、)わりとまことしやかに創りあげられたお話というような形のもので、信じられないような世界に行って冒険してきた話のようなものです。これは、『ユートピア旅行記』あたりから始まっています。ハイ・ファンタジーは、最初から別世界のお話が展開している、あるいは、地球の過去の時代の話で一見歴史小説風なのだけれども、そこにちょっと魔法が入っていたりするというような、一元的なファンタジーです。現実があって向こうがあるという2つの引き裂かれ方がしていないようなものです。

そして3つ目に、一応枠物語と書いています。枠物語という言葉は、お聞きになったことはありますか。枠というとフレームです。フレームがついているお話と思っていただくといいかと思いません。現実の世界があって、そこで人々が生活をしていて、それからどこか扉を開けて別世界に行ってみたり、あるいは、誰かがやってきて不思議な魔法を見せてくれたり、あるいは、別の自分のパラレルワールドの世界へ行ってしまうと、2つの世界が描かれている。そして2つの世界がぶつかり合ったり、あるいは、一方が一方を飲み込んだりする話。このあたりが1番ファンタジー・コンシャスなファンタジーという感じです。こういうものが、どういうふうに歴史の中に出てきたかレジュメの資料①<年表>を見ていきたいと思えます。この年表は、何世紀はこんな世紀だった

というように見ていけばいいと思います。年表には記号をつけてあります。①②③④と、私が勝手に分けただけですが、中身からみると、①神話・伝説など、あるいは『ガリヴァー旅行記』の②空想旅行記、あるいは、③ユートピア譚というのは、世界のどこかに、あるいは、未来のどこかにユートピア的な世界があるというものを訪ね歩く小説ですので、ファンタジーというより、社会学的に未来の素晴らしい世界があるという話として書かれる。シノワズリ、オリエンタリズム、エキゾチズムはだいたいおわかりになると思いますが、ヨーロッパの人たちにとっては、中近東の『千一夜物語』の世界や中国風な世界、そういうものがとてもエキゾチックでファンタジーなわけです。『トゥーランドット』みたいな中国幻想オペラや『蝶々夫人』『アイダ』などがヨーロッパで上演されるというのは、彼らにとっては、それは一種のファンタジーなわけです。我々からいうと逆に『アーサー王』の世界とかがファンタジーなのですけれど。それから、秘境探検もの、歴史ロマン(偽史含む)とありますけれど、これは今日は、あまり深く細かく追っていかなくてもいいと思います。

ファンタジーの流れ

まず、16世紀の有名なトマス・モアの『ユートピア』。その次の17世紀は大航海時代。航海術も進んで、植民地を求めてヨーロッパ諸国が世界各地に行き始めた時代です。そうしますと、ヨーロッパの人たちは今まで自分たちが知っていた世界ではないどこかに別世界があると思うわけです。ですから、それは空間的に行けば行きつく世界であって、そんなに不思議な世界ではないかもしれないのですが、当時のヨーロッパでは、アメリカ大陸やアフリカにふつうの人が行くということはありませんでしたし、そういう世界は完全に別世界として思い描かれていたわけです。『ドン・キホーテ』は、特に遠い地方に行く話ではなくて、騎士物語のパロディです。何か既に存在している作品あるいはジャンルを、もう1回パロディにするもしくは、もう1回それを語り直したり、それで遊んだりするというのも、ファンタジーの1つ

の特徴なのです。

少し話がとびますが、『ハリー・ポッター』というのは、まさにそういう作品でありまして、『ハリー・ポッター』を読んでいると、幽霊物語から、ホラー小説の時代や、今まで出てきた魔術、オカルトの伝承、あるいは学校小説というジャンルや、それまでに出てきたいろいろな文学ジャンルを持ってきて、はぎ合わせて、全部新しく語り直したというか、パロディ化して語り直しています。例えば、首が半分とれている“ほとんど首なしニック”というのがいます。あれはまさにゴシック・ロマンスという、古城に幽霊が出る話が流行った時代があって、ああいう時代の、「古城に幽霊パターン」をパロディ化しているのです。ホグワーツ自体が古城ですから、そこに幽霊がいるという設定は、まさにゴシック・ロマンスです。それをあややってパロディ化してみたり、“トイレの花子さん”みたいな“マートル”がいますが、本当に現代風にそれをパロディ化して、でも、読者は何となく、昔こういう「古城幽霊パターン」があったと知っているので、二重に笑える、面白い、そういうものを裏に透かし見しながら、楽しむというわけです。特に、大人の読者はニヤッとするとこがたくさん出てきます。

話をもどしますと、17世紀にシラノ・ド・ベルジュラックという人の書いた『別世界または日月両世界の諸国諸帝国』という本があって、太陽に行ったり、月に行ったりする荒唐無稽の話ですが、少し科学的な知識もありながら、地球のどこかにこういう世界がある、あるいは宇宙にこういう世界があるというような冒険譚を書いていた。たぶんこれが、今のニュアンスでは、当時のファンタジーでしょう。つまり、現実ではないような所へ行って帰ってくる話です。そして、このあたりから、このフレームっぽいニュアンスが既に出ている。「これはお話なのだ」というフレームです。昔話、おとぎ話の時代には、そんなにそのニュアンスはなくて、「本当かもしれない」という感じだったのですが、このへんから、これはフィクションだという感じが出てきます。

18世紀というのは啓蒙の時代といわれて、とても合理的な世界観が覆ってきた時代です。自然科

学も進歩してきました。そうすると、今まで魔女や幽霊やモンスターや狼人間とかいろいろなことを信じていたのに、そんなものは迷信だということになりまして、本当にはいないのだとなりますのです。しかし、そこでどうなるかということ、本当にはいないということになると、かえって安心して、フィクションでそういうものを作って遊ぼうとします。それで古城幽霊ものや、因縁、先祖のたたりとか呪いとか、そういう話が多く出てきました。一番有名なのが『オトラント城綺譚』というものです。ここに挙げてある本は全部、日本語の翻訳がありますので、図書館で検索して下さい。『オトラント城』も幾つか出ております。これは古城に幽霊、先祖の因縁やたたりという典型的なお話でした。日本で言えば、伝奇小説ですね。面白いのは、啓蒙や理性の世紀になると、かえって、フィクションはフィクションとして成立させようということになり、幽霊物語が花盛りとなる。このへんが現実と虚構・別世界とが分かれてくるところです。本当に幽霊がいると思っている時代は、わざわざこんなに手間ひまかけた長編小説を書くこともないのですが、これは完全にフィクションだとされた時代には、ジャンルとして成立して、皆がこぞって書いたということになります。

その次に19世紀になりますと、近代化が進み、科学的なものの見方や、合理的な世界観が広まり、政治的なことでも、ヨーロッパのいろいろな国が独立したり、あるいは植民地支配も確立したりと、世界がだんだん狭くなってきます。そういう時代に、ただお話として面白い、大衆的な幽霊物語ではなく、もっと私たちはこういうものを心に求めているのだと考えた人たちがロマン派です。その根っこにあったのが、『グリム童話集』などです。『グリム童話集』は、グリム兄弟が採集して広めたというもので、もちろんドイツだけではなく、イギリスやヨーロッパ各地に翻訳されて、大変な人気を得ました。この時代は、いろいろな国がヨーロッパで独立していった。ドイツも、いろいろな国に分かれていた。今でいえば州、バイエルン州とかがそれぞれ独立国だったのが、だんだん1つの国家になろうとしていく。国家統一のアイデンティティというものが欲しくなるわけです。そう

すると、自分の国の古い神話や古典的な昔話に、自分の国のアイデンティティを求めようということになり、ドイツだけではなく、いろいろな国でこういうものの採集が進んでいきます。もちろん、イギリスでも民話や妖精物語がまた復興してきます。ただし、イギリスはずっと前から、こういうものが好きだった国なので、突然復興したというわけではないのです。

日本でも、江戸時代に、鎖国はしていましたが、ヨーロッパの外圧などがあつた時に、「日本とはなにか」、「大和魂はなにか」と考えた時に、本居宣長が『古事記伝』を書いて、歴史上何世紀かぶりに『古事記』を復活させたわけです。それと非常に近いものがあります。ナショナリズムとか、ナショナル・アイデンティティとして、民話や妖精物語がまた掘り出されてきた。そうすると当然、それを踏まえた文学作品が出てきます。「英国における妖精物語復興の最初の作品」といわれているジョン・ラスキンの『黄金の川の王さま』(1851)や、その他、児童文学以外の、イギリスやフランスのロマン派の人たちの作品で、いわゆる幻想文学のようなものもたくさん載せてあります。この19世紀というのは、古いものが掘り出されて復興したという時代であり、グリム童話を含めてヨーロッパ各地でいろいろな神話などが復興したのです。それは民族のルーツ探しであると同時に、神話的なものの見返しともなります。

地底旅行ブーム

ところで1834年の、イグアノドン発見というのはなにかといいますと、イグアノドンというのは恐竜の一種です。この頃、地質学が進みまして、20世紀にタイム・ファンタジーが出てくる伏線として書いてあります。イギリスでは、地質学がこの頃画期的に進んでいたようです。そして恐竜の骨が発掘される。化石を掘るのがブームになって、一般の人も、自分の家の裏山を掘った。地層を発見して初めて、目に見える形で、時間というものがあるのだと、わかるわけです。掘り出された古い神殿や、遺跡などもこの頃に注目されたのです。『ポンペイ最後の日』という作品があります。ポンペイの遺跡も、18世紀から発掘が進んでいたの

ですが、遺跡もブームになり、遺跡観光ツアーが流行りだします。この頃は旅行もずいぶんできるようになり、ヨーロッパの遺跡や洞くつなど古いものにみんなの目が向いていきました。この頃から洞くつ観光が盛んになっていったわけです。

そして、イグアノドンですが、地層が下に行くほど古いということをご存知だと思いますが、そうすると、地面の下へ行けば行くほど過去の時代がそこにあるということが、初めて空間的にイメージされるわけです。地下へ行く話や地底旅行の話が、この頃かなり出てきました。その中に、実は、ルイス・キャロルの『ふしぎの国のアリス』も入っています。面白いことに『地底旅行』と同じ年、1865年に出ています。ファンタジーが、この時にはじめて「時間」を視野に入れるわけですが、やや短いスパンの人類史、いわゆる昔話、神話が出てきたとともに、恐竜のような何億年単位の古さの話も、両方出てきたのが19世紀だったのです。それで、ルイス・キャロルの書いた『ふしぎの国のアリス』は、ナンセンス文学とか、言葉遊びが楽しいとか、アリスが理屈をこねるのが、それまでのおとなしい良い子ではなくていいとか、いろいろ言われていますけれど、当時は、この『ふしぎの国のアリス』も地底探訪小説の1つとして受け止められていたようです。『ふしぎの国のアリス』の、キャロルが最初につけたタイトルは「地下の国のアリスの冒険」、「アリスの地下の冒険」というタイトルだったのです。ですから、ルイス・キャロルもかなり意識していたでしょう。そして、アリスが地下へ降りて行きますと、そこには絶滅してしまったドードーや、ありえない絶滅動物たちがいます。地下へ掘って行くとまさに過去の世界があるという観念をとっている。地下へ降りて行くというのは、時間を逆行していくわけです。『鏡の国のアリス』の中で、明日のパイ、今日のパイ、昨日のパイと、逆転しているところがありますが、あれは地上からだんだん掘っていくと確かに逆転しているからです。3番目に、過去のパイ、昨日のパイがあったりする。だから、ルイス・キャロルの『ふしぎの国のアリス』にしても、当時の博物学や地質学のブームと関連していたのです。

この時代については、たくさん書名を挙げてありますけれども、洞くつや秘境探検、地底に行つて何かする話、滅びた遺跡を探訪する話などいろいろな古さのものがあるなかで、地質学の Spann よりも若く、この遺跡関連の古さの時代を舞台にしたものが、出てきています。これがファンタジーのベースになりました。アンドリュー・ラングの『色の童話集』(1889-1910)がありますが、これは今でも、『赤色の童話集』や『空色の童話集』として出ていて、あれはまさに、昔話を掘り出して、子どものために書いてあげたものです。次に、ウィリアム・モリスなどが出てきます。けれども、このへんの人たちは、近代の工業化、産業化された世界が嫌で、中世あたりの古いものに憧れ、中世騎士物語をパロディではなく、自分で復興して、また書き出したということになります。

1895年を見ていただきますと、非常に面白いことに、はじめて『タイムマシン』という作品が出てきています。ここからが、タイム・ファンタジーの時代かと思えます。もちろん、過去の世界や、未来の世界に行くという話が皆無だったわけではありません。ウィリアム・モリスの『ユートピアだより』のような「未来に行ってみたらこうなっていたよ」というようなものはありましたが、非常に観念的で、「絶対に未来に行けるわけではないけれど、未来はこうなっているでしょう」という、あまり実感をもたない、メッセージだけあるというような話になっていたのですが、ここではじめて、時間がリアルな感覚として出てきました。タイムマシンの目盛によって、時間が少し過去、もっと過去、はるかな過去、遠い未来という形でわかるようになってきたのです。

『タイムマシン』を書いたウェルズの友人がネズビットでした。『砂の妖精』という有名な作品を1907年に書いた人ですが、いわゆる児童文学初のタイム・ファンタジー『魔よけ物語』を書いています。これもタイム・ファンタジーとして、後で見たいと思います。とりあえず、現代まで話します。

20世紀の前半は、『ピーター・パン』や『秘密の花園』、「ドリトル先生」シリーズ、『クマのプーさん』などがあるというので、児童文学黄金時代、

特に英語圏の黄金時代といわれています。児童文学に興味のない人も知っている『メアリー・ポピンズ』や『ピーター・パン』、『クマのプーさん』は、全部この20世紀前半の作品です。そして、ほとんどの作品がファンタジーです。この時代の大人の文学は、戦争や大恐慌などいろいろありましたので、ファンタジーどころではないという時代でもあったわけです。

19世紀末頃から、コナン・ドイルが『シャーロック・ホームズ』を書き始めましたが、社会における犯罪をリアルに探求しようとする目が生まれてきて、ミステリー、推理小説というジャンルが生じています。推理小説は、基本的に、リアリティックな社会の暗部や犯罪を描き、抉り出していくジャンルです。そういうものが、児童文学の黄金時代の裏側で進行していました。子ども部屋の世界ではお子さま限定という感じで、ファンタジーのような楽しい夢が、受け入れられていたのです。この時代というのは、大人の世界には、秘境冒険ものの一種である『ターザン』や、あるいはSFのスペースオペラのようなものはありましたが、現在ファンタジーといわれているようなものはなかった。そういうものは、子ども部屋限定で、大人になったら卒業しましょうという対象でした。それがまさに『ピーター・パン』の世界です。大人になったら髭をはやし、鞆を持って、会社に行かなければいけないということです。子ども時代は、素晴らしい冒険と空想の樂園だけれども、皆卒業して大人になるのだという世界観でした。そうすると、子どものうちだけは楽しみましょうということで、子ども部屋限定のファンタジーは花盛りになります。

『クマのプーさん』でも、クリストファー・ロビンが学校へ行くようになると、だんだん魔法の森へ来なくなり、最後では去っていくような感じになります。そして『メアリー・ポピンズ』のシリーズは、1934年に1巻が始まっていますが、『公園のメアリー・ポピンズ』は50年代にかかっています。50年代がターニングポイントで、子ども時代限定ではなくなる方向へ向かっていきます。そのため4巻目の『公園のメアリー・ポピンズ』は、ややニュアンスが違ってきています。

子どもだけが見られる魔法や子ども部屋の中にある一時的な魔法、これはエブリデイ・マジックというジャンルです。エブリデイ・マジックという言葉は、みなさんも知っていらっしゃると思いますが、日常があって、これは手つかずのまままで安泰であって、この中で少しだけ不思議なことが起きて、またすぐ元に戻るといふ、現実には囲い込まれているようなファンタジーです。必ず約束事があって、魔法を使っても、大変なことにならないうちに終わって、日常が回復される。そして子どもたちは、ほとんど成長しないという、水戸黄門的なパターン化したお話です。『メアリー・ポピンズ』もそうです。メアリー・ポピンズが、不思議なことを見せてくれて、いくらかパニックするような事件になったりしても、最後には無事に上手く収まります。しかも、メアリー・ポピンズが「何を言っているのですか、そんな事件あったわけないでしょう」と全部否定してしまうのです。子どもたちは、そうかなと思ひ、日常が無事に回復されて、不思議なことやマジックが一時の夢で終わったというように終わるパターンがエブリデイ・マジックです。『砂の妖精』もそうですが、エブリデイ・マジックタイプの作品が、20世紀の前半多く出てきました。

ファンタジー小説のはじまり

ターニングポイントが、トールキンとC. S. ルイスが出てきたあたりです。ここではじめて、たぶん、子ども時代限定ではなくて、大人も楽しめるファンタジーという考えが出てきたのだと思います。それと同時に、きちんともとの戻る、腑に落ちるファンタジーではない、わけのわからないファンタジーが出てきています。エリザベス・グージの『まぼろしの白馬』(1946)や、『グリーン・ノウの子どもたち』(1954)などは、本当はどうなっているのかわからなくて、現実と幻想が混在して終わるといふ話が出始めてきています。それは、もう少し後の『トムは真夜中の庭で』(1958)や『マリアンヌの夢』(1958)になるともっとはっきりしてきます。どういう仕組みでそんな不思議が起きていたのか、結局はあまり説明されないまま、こういう不思議なことがあったと終わってしまっ

ている。現実がかなり侵入され、侵犯されて、こんなことがあってもいいのかというような感じになり始めていくのです。

トールキンとC. S. ルイスもそうですが、特にトールキンがこのジャンルの元祖といわれているのは、はじめてこの不思議な世界の話を実際に書いたという理由からです。それまでは、本当にかわいらしく、「昔話」ふうや、「お話」ふうに別世界を語っていました。そこへトールキンは、小説を書こうとしたのです。ですから、ホビットたちが何を食べて、どこでどういうものを着て、という日常を、事細かに書き込みました。英雄的な竜退治だけを書いているのではなく、日常をたっぷり書き込み、そのことによって、不思議な世界を堅固にしようとしたのです。現実を描写するように不思議の世界を描写し始めたということですから。あたかも本当のことのように書いていくことによって、その世界の強度をあげていく。これは、とても難しいことです。フィクション、ファンタジーの世界の強度を、インパクトのあるようにする、信じられるようにするというのは、なかなか難しいものがあると思います。トールキンのやり方は、現実的な、日常的なことをたくさん書き込み、エルフもドラゴンもドワーフも、みんな不思議な生きものとしてではなく、生きている生物としてとてもリアルに書いてあるのです。

そういうリアルさで攻めていくことで、達成される強度というものがあります。ただ、そのことによって壊れてしまう強度があります。やりすぎたために、日常的で、現実と変わらなくなってしまふ、不思議が薄れてしまうということもあるのです。トールキンがはじめたのは、「ファンタジー小説」というものです。つまり、小説のように、日常や細かい生活を書き込むことによって、そのファンタジーの世界を本当にあるもののようにしようとした。そして、大人にも広げていったということになります。ここまで細かく設定をすれば、大人もファンタジーを楽しんでいいのだと思わせた。要するにトールキンというのは、ゲームの元祖といわれているぐらい、設定マニアだったので。小説を書くのではなく、「世界を創る」と彼は言っています。物語を創るのではなくて、世界

を創る。彼は、「準創造」と創造者である神さまに遠慮して言っています。トールキンの世界設定は徹底しているので、ゲームの世界がここからはじまったのです。トールキンの世界観を借りて、最初のゲームがはじまった。これだけ設定して複雑な世界を創るのは、大人にも面白いということで、トールキン作品はゲームの世界と大人のファンタジー小説の世界、両方へと広がっていきます。ですから、この頃、ル＝グウィンのような大人向けの作家が『ゲド戦記』（1968）のようなファンタジーを書いたりしています。彼女はもともとSF作家です。

大人のファンタジー小説が広がると同時に、それが子どもの方にも還流してきて、深刻な話がたくさん出てきました。いわば暗めのファンタジーです。この頃、人間の心理について研究が進み、過去の記憶がよみがえることや、あるいは自分の中で抑圧しているものが夢の中で出てくるとか、いろいろなことが心理学上わかってきました。すると、ファンタジーというものは、荒唐無稽な、どこか遊園地みたいな別世界へ行き、願望充足してくる話ではなく、実は、主人公の内面の探求だというお墨付きも出てきたわけです。ですから、この頃の作品は、妙に主人公の成長物語が増えてきて、心理学的に読むと面白い作品が多いです。河合隼雄さんが『ファンタジーを読む』という文庫本で、たくさんこのへんのファンタジーを取り上げていらっしゃいます。その極めつけが、ミハエル・エンデの『はてしない物語』（1979）です。これが、私の考えでは、第2のターニングポイントです。プリントにサイコ・ファンタジーと書いてありますが、いわゆる心理学的なファンタジーです。具体的にどこかの世界に行つて、冒険することが楽しいということではなく、そういう世界に行つて、自分の内面を見つめ、自分と戦う話になっています。そういうファンタジーの世界というのは、自分の内面を写す鏡のようなものです。エンデは、特にそういう傾向が強かったのです。だから、メッセージ性が強く、わかりやすいということで、ますます大人に受けます。80年代の初頭まで、心理学的なファンタジーが多く書かれ、また、認められるようになってきました。

ネオ・ファンタジー

話は次に、ネオ・ファンタジーの時代へと飛びます。マーガレット・マーヒーやダイアナ・ウィン・ジョーンズは80年代の後半から活動していました。マーヒーはニュージーランドの人ですが、イギリスには、ファンタジーはただ楽しければいいという伝統があり、ドイツ人ほど理屈っぽくはなく、その楽しませるといふ伝統がずっと生きていたということもあるかと思います。でも、マーヒーは違ったわけです。またラルフ・イーザウなどのドイツのものは、読者に考えさせるものが多い。ドイツのものは、大人が読むと、読み解き易いのですが、透けて見えるようなところがあります。エンデ以来、不思議なことは起こるが、それは人間の押し殺している欲望や心理の反映であるというようなファンタジーが先にも言ったように多くなってきます。マーヒーも似ています。ダイアナ・ウィン・ジョーンズだけは、あまりにも時代を先取りしていた人なので、ネオ・ファンタジーに入れていいかと思います。

いわゆるネオ・ファンタジーの時代と言われているのが、『ハリー・ポッター』前後あたりからです。ここで、心理学的に人間を探求しようとしたり、世界はこうなっているということを探求しようとしたりして、非常に細かい描写に走っていった、あるいはリアリズム的に細かくなりすぎていった難しくなってしまった結果、ファンタジーが少し閉塞していたところへ、勢いよく『ハリー・ポッター』が出てきて、エンターテインメント路線の復権を果たしたわけです。ですから、最初にファンタジーがもっていた、いろいろなものをパロディ化して遊ぶことや、ゲームのようにクエストしながら数値を上げていき、めでたし、めでたしと上がりには到達する話や、そういう物語的な楽しさが、ここでまた戻ってきたと言われています。リストの最後に、ジョナサン・ストラウドの『パーティミアス』が載せてあります。これは、もう1つのパラレルワールド、ロンドンのパロディです。もう1つ別世界のロンドンがあるのです。この頃の作品を見ていただくと、全て何かのもじりや、前にあったジャンルをやり直したというものが多いです。『ハリー・ポッター』は、魔女学校もの

やオカルトや幽霊話を全部組み直した話ですし、『ダレン・シャン』というのは、吸血鬼ものの全くの書き直しというか、このジャンルの語り直しです。今まで、少年吸血鬼というのはほとんど登場しなかったのが、少年にしたところが新しいですね。『ハリー・ポッター』でも、少年魔法使いというのはあまりなかったのが、そこは新しいといえれば新しいでしょう。『ダレン・シャン』は、どこにいくのか、方向性が、だんだんわからなくなってきました。バトルロワイヤルようになってきたので、だんだん吸血鬼ジャンルから離れつつあります。(注¹この後2005年にシリーズが完結した。)

そういうふうに、ネオ・ファンタジーには、ルーツが見えて、前の時代のジャンルが見えるものが多い。この『パーティミアス』は、アラビアンナイトを踏まえて、しかも、小生意気な少年魔法使いのナサニエルが出てきて、妖魔をあごで使っている話です。この時代で面白いのは、もはや子どもが世界の中に放り込まれて、か弱く、よるべなく探求していく話や、周りの大人たちの力で育てられていく話、子どもが無力であるような話ではなくて、子どもに最初から力がある話だということです。面白いことに、ハリーは「選ばれた少年」だし、ライラも「予言された女の子」です。ダレン・シャンは、吸血鬼になってしまったことで、特権化された少年になっているし、クリフ・マクニッシュの『レイチェル』のシリーズでは、ヒロインは最初から魔力のある少女です。『ペギー・スー』でも、最初から魔力があって、ものが見えてしまうのです。ですから、そういう力のある少女が、むしろ、大人顔負けで世界を征服していくという話になりつつあります。これは後で話したいのですが、たぶん、インターネットなどの影響があるのではないかと思います。ファンタジーとは、だいたいこういう形で推移してきたというのが、最初のお話です。

次に、20世紀のタイム・ファンタジーに限って、どう推移しているかを話したいと思います。

その前に話は少し戻りますが、皆さんの中で、『アルテミス・ファウル』を読まれた方ありますか。「悪のハリー・ポッター」と帯のついている本です。

いかがでしたか。あれも、妖精物語のパロディや、妖精物語がテクノロジーの中で語り直されて、おまけにとっても性格が悪く、頭だけがずば抜けている主人公が、大人をあごで使って、いろいろな組織を動かしてしまう話です。今のインターネット社会の現状を見ると、完全に子どもの方が使いこなしている。子どもがネット上で世界を制覇しているわけで、大人は駄目だというのが現実です。昔は、例えば、学生が何かを調べようとする場合、この図書館のここには入れないとか制限があって、教師の方が情報にアクセスできたのですが、今は、学生の方がインターネットを上手く使いこなすので、新しい情報やデータを、いろいろなところからどんどん拾ってきます。「それはどこに載っていたのですか」と聞くと、「なんとかのサイトです」と言って、子どもの方が大人より新しい情報を多く持っているという時代です。昔は、老人が1番物知りで、1番偉かったので、1番無知な子どもは老人から学びながら、吸収しながら情報の上の方に、だんだん上がっていった。ところが今は、子どもが1番情報を持っているという、すごく変わった時代になりつつあります。たぶん、そのへんがネオ・ファンタジーの中に、こういう無敵の少年少女を輩出している理由だろうと思います。

タイム・ファンタジー

タイム・ファンタジーの話に戻りますと、資料②<タイム・ファンタジー参考文献>をご覧ください。児童文学以外でも、宮部みゆきなど、ファンタジー作家とはふつう言われていない人たち、恩田陸はファンタジー作家に入っていますが、ミステリーの北村薫などが、堂々とファンタジーを書いてしまっているというのが、このタイム・ファンタジーのジャンルです。それが面白いです。タイム・ファンタジーだけは、ファンタジー作家でなくてもどんどん書いている。

まず、このタイム・ファンタジーの第1弾というのは、先ほども申し上げましたが、1907年に『タイムマシン』のウエルズの友人のネズビットが、児童文学でははじめて、時間観光旅行のような話(『魔よけ物語』)を出したものです。これは、子

どもたちが、「魔よけ」を使って、いろいろな時代へ行ってみる。ローマ時代や、エジプトの時代へ行ってみたり、いかにも博物館で見たそのままの、いろいろな時代へ行ってみたりするという話です。さっき言い忘れましたが、この19世紀に、恐竜の骨などを全部、博物館が回収したわけです。大英博物館やメトロポリタン美術館など、博物館というのは、誰でも、もちろん子どもも入れるので、全てを見ることができます。博物館の成立が、タイム・ファンタジーに寄与した功績は大きいでしょう。博物館自体が、話の中に出てきます。パピロンの女王を現代に連れてきてしまったら、大英博物館の前だったというエピソードが『魔よけ物語』の中にあります。女王様は大英博物館に入って行き、「ここに、わらわの宝石が全部ある」と言って、盗まれたのだからと取り戻そうとします。現に、イギリスはいろいろな植民地から、泥棒をして大英博物館に溜め込んでいるのです(笑)。ルーブル美術館もそうですが、ヨーロッパはどこでもそういうことをやっていたのです。それによって博物館というのは、人工的な時間と空間をつくり、世界中のいろいろなものを、全部カタログ化した装置のような感じで成立していったわけです。

さてタイム・ファンタジーの第1弾のネズビットの『魔よけ物語』の内容ですが、これは『タイムマシン』と似ていて観光旅行です。あまり自分の内面とシリアスにリンクしていない旅行です。彼らには、従軍記者のお父さんや転地しているお母さんと赤ちゃんが、早く帰ってくるといいのという望みはあるのでそれをかなえてもらうために、魔よけの片割れを探して行きあたりばつたり観光旅行をしているのですが、過去に行くこと自体は第1の目的ではなく、そんなに自分の存在意義と関わっていない。ただ、アトランティス滅亡の時などを見て、これは過去のことだと言いながらも、すごくパニックする場面はあります。やはり、そういう遺跡や古い文明に対する興味が強かった時代を受けて、20世紀初頭にこういう『魔よけ物語』が出てきた。この頃、児童文学が大人の文学での流行を、少しずつ後追いをしていたのです。そして、どこかで抜くわけです。抜いたと思うのですが。

そして、第2弾が、『ジェニーの肖像』、『時の旅人』、『とぶ船』、みんな同じ年に出ています。3冊共同じ年だったので、驚きました。これらは、三者三様のタイム・ファンタジーです。後の時代に1番影響を与えたのが、『ジェニーの肖像』です。主人公は、ふつうの時間の中で生きている青年画家ですが、そこに現れてくる少女が、1年弱の間に幼女から若い女性へとどんどん大きくなっていく。つまり、時間の流れの違う2人が出会うという画期的な企画だったのです。これはほとんど、過去へは行っていません。時間の流れの違う2人が出会う、つまり、鈍行の列車と急行の列車が重なっていくような話なのです。たぶん、これに影響を受けているのが、『トムは真夜中の庭で』です。こちらは、90何歳のおばあさんと、14、5歳の少年なので、もう少しスパンが大きいですね。『ジェニーの肖像』の場合は、ラブ・ロマンスでもあります。2人の出会いと、なぜジェニーという不思議な存在がやって来たのかは、結局わからないまま、時の流れの神秘で終わってしまっている話です。この話の何がすごいかというと、時の流れはふつうは目に見えません。例えば、幼馴染の隣の子とずっと一緒に大学まで大きくなっていけば、一緒の速度で大きくなっているの、時の流れがわかりません。けれども、ジェニーの話では、相手の時間だけ早回しになっているので、ビデオの早回しのように露骨に時の流れが見えます。結局そこに何が出てくるかという、その人がどういう人であっても、その人が時の流れの中で愛したり苦しんだりしながら、一生懸命人生を送っていくというのが見えて、その人の容姿ではなくて、むしろ魂への理解のようなものが出てきて、とてもヒューマニスティックな見方が生まれるということです。

同じパターンの『トムは真夜中の庭で』は、トムは14、5歳の少年なのですが、ハティという女の子と真夜中の庭で出会って、そのハティが5、6歳の頃から結婚前の20歳前くらいまでが早回しになっているのを2週間の間に見てしまいます。最後には、そのハティが、実は家主のパーソロミー夫人だったということで、最後に同じ次元でこの90何歳のおばあさんに会ってしまいます。つまり、

5歳から90何歳まで早回しに会って見たことになるわけです。それで、トム的心中に何が生じるかという、ふつうだったら、90何歳のおばあさんと自分とは世代が違い、接点もない、理解できないと思うのですが、おばあさんとしゃべっているうちに、おばあさんの手振りや目つきの後ろにどンドン、少女が見えてくるのです。「あなたはハティだ」と叫んでいます。そして、別れる場面で、トムがもう1回お別れをしようと思い、しっかりと抱き合う。パーソロミュー夫人はトムよりこころもち大きいか大きくないかというくらいに、小さく縮んでしまったおばあさんですが、最後に、トムを預かっていたおばあさんが、「トムは、相手がまるで小さな女の子みたいに、両腕をおばあさんの背中に回して抱きしめていたのよ」と描写して終わる話です。トムはこの90何歳のおばあさんの中に、自分が一緒に遊んでいた10歳くらいの女の子をはっきりと見て、その女の子を抱いているシーンで終わるのです。魂の普遍性のような、非常に感動的な局面を浮かび上がらせている。魂や思いは変わらないということです。

このジェニー・パターンは、とてもSF作家に好まれました。『タイムトラベル・ロマンス』という本がありますが、これは、こういうタイムトラベル・ロマンスを自分でも書くSF作家の梶尾真治、『おもいでエマノン』などいろいろ書いている人ですが、タイムトラベル・ロマンスだけを集めてエッセイとして紹介した本です。ラブ・ロマンスが多いです。こういうものは、実は萩尾望都さんがコミックでたくさん書いています。たとえば『マリーン』は、まさにこの時間の流れの違うパターンのタイム・ファンタジーです。こちらは、男の子の方の時間が小さい頃から大きい頃まで流れていき、そこに相手の女の人がずっと同じ歳でやってくるという話です。時間の流れが男の子の方が早いというパターンです。『ポーの一族』という吸血鬼ものも、この時間ファンタジーに入れていると思います。なぜかという、吸血鬼というのは、そもそも時間が止まっています。自分が止まっているので、ふつうの速度で動いている人は全部早く見えるわけです。『ポーの一族』を読んでいただくと、主人公で吸血鬼のエドガーは、

時が過ぎ行くのが見えるような感慨を、よく述べています。自分も最初はふつうの人間だったので、両方わかるわけです。ふつうに生きている人たちの日々の営みがどんなに美しく、貴重かというようなことを、時の流れの速いものにしかわからない時のいとおしさのようなものを描いています。同じ吸血鬼ものでも『ダレン・シャン』は違います。ネオ・ファンタジーですからむしろ活劇です。バンパニーズVSバンパネラの、特訓をして鍛えて強くなるスポコンの要素も入っているし、『幽★遊★白書』のような少年ジャンプ系の話になっていっています。

それから1939年の他の2冊の本ですが、『とぶ船』というのは、ネズビットの時間観光旅行パターンを引き継いでいる話です。不思議なアイテムの船を手に入れ、それに乗って4人兄弟がいろいろな時代へ行く話です。面白いのは、時を超えることの感慨がかなり出てきていることです。中世に行ってマチルダという城主の女の子を連れてきてしまうのですが、そうすると、そのマチルダのお父さんの城主が建てている教会が、現代でもそこにあります。ヨーロッパでは教会というのは何百年もかけてどンドン増築されてできていくものです。現代の教会を見てマチルダは、私のお父さんが建てている部分はここまでだけれど、この後の時代にここまで完成したのねとわかる。その教会のバザーに、中世の女性にしかできないようなとても細かい刺繍を出品して、大変高い値段で売れたので、この教会のために役に立ったと彼女は喜んで過去に帰っていきこうします。その時に、教会の中をもう一度見て歩き、自分のお父さんが今建てているところへ行行って、あなたにはまた会えるでしょうと言い、それから、そのお父さんの時代の後の十字軍の時代のところへ行行って、十字軍の騎士像に、「あなたにはもうこの先会えないのだ」と言って、自分の時代と後の時代を、非常にはっきりと思いを込めて見つめながら、過去に帰っていきます。このバザーのところは、とてもいいシーンです。もちろん、未来の生活は便利で素晴らしいとマチルダは思うのですが、お父さんの建設中の教会がある自分の時代に生きていかなければいけないと思う。そして最後に献金箱にお金を入れ

て帰っていくのです。この話ではまた、別のロビン・フッドの時代に、発明好きでテクノロジーが好きな若者がいて、その若者が、現代の子どもたちが落としたおもちゃの機関車を修理して動くようにしたために、魔女狩りにあって火あぶりになりそうになるところを、ロビン・フッドと一緒に助けます。この若者を、この時代ではなくこっちで生きたらいいと、現代に連れてきてしまうのです。連れてきた後も、当人は特にカルチャーショックを受けることなく、いつの間にか庭師になって、現代にいたという終わり方になっています。

このへんから、タイム・ファンタジーは時の流れへの感慨のようになっていきます。そして、1番新しいタイプといいたいでしょうか、その後に流行るのが、『時の旅人』パターンです。これは、現代の女の子が田舎のサッカーズという所に行き、そこで10何世紀から建っている荘園屋敷の遠縁のおばさんの所にやっかいになっているうちに、その屋敷がずっと古くから建っているものですから、そこに入ると場所はそのまま、時々16世紀に行ってしまうのです。この手の多くのタイム・ファンタジーではトラベルする際、時を経て残っている建物があると、そこを入り口として入って行くことが多い。その建物を通じてスーッと自然に入っていくってしまいます。ですから、魔法の仕掛けや、アイテムで飛ぶのではなく、その建物が覚えている記憶の層の中に入っていくような感じなんです。階段を降りていくと見たことのない扉があり、開けると過去の時代の人たちがそこにいたというような、ストーリーは非常に説明しづらいのですが、むしろ雰囲気勝ったお話です。要するに、時を蓄えている場所へ行くと、そのままスーッと時の層の中を行ける。この場合は500年くらい過去へ行っていますが、ここで、タイム・ファンタジーの3つ目のパターンである、自分探し、あるいは家族史探求のようなものができます。主人公の女の子の一族は、500年前から、そこに住んでいて館の使用人をしていましたので、現在のおばさんやおじさんとそっくりな顔の人たちが、その時代にもいるのです。過去の時代にいる時に、そのおじさんが亡くなったという話が出て、彼女はぎょっとして、とても悲しくなり、現代に帰っ

てきます。しかし、そのおじさんがそこにいるので、とても喜び、抱きついてしまうというシーンがあります。輪廻転生を思わせるような、あるいは人間の生命の不思議さや尊さを思わせるものになっています。そして、このあたりから、身近な人が過去にもいる、自分の周りの人がそのまま過去に、そっくりな感じにいるというパターンが出てきます。これは、子どもが読むとどうでしょう。雰囲気はとてもいいのですが、ストーリー的にあまり起伏がないかもしれません。

このパターンは、のちのち受け継がれて、ルーシー・ボストンの『グリーン・ノウの子どもたち』などは、12世紀から建っている古い屋敷へ行くと、大昔にベストで死んだ子どもたちの幽霊が出てくるという、古い屋敷の中から時間がにじみ出てくるような話です。これは、幽霊屋敷のパターンでもあります。魔法のアイテムで時間旅行をするのではない。しかも、それが自分にとって非常に強いインパクトを感じさせる事件になっていきます。

このあたりからだんだんと、何百年も過去に行かず、少しだけ過去に行き、自分のお母さんの子どもの頃を見るとか、おばあさんに会うとか、そういうものができます。おばあちゃんに会う話たとえば『思い出のマーニー』です。これは、子どもが田舎に行って、自分のおばあちゃんの小さな時に出会う話です。『床下の古い時計』では、時計というアイテムがあります。ストーリーをかたんに説明をしますと、お母さんとお父さんが離婚をしてしまいます。12歳のパトリシアは、どちらの家に行こうかと迷います。お母さんはキャスターをしているバリバリの派手なキャリアウーマンで、自分とはそりが合わない気がします。それで、お父さんのほうは再婚するとは言っているものの、お父さんと一緒に暮らそうかと思っているのです。パトリシアは離婚調停の間、お母さんの実家に預けられます。そこで、古い時計の力によって、お母さんが12歳の時代へ行ってしまう。そこで、お母さんが、いかに男兄弟の中で、当時の封建的なお父さんに虐げられて過ごしたか、もっと自分を主張したかったとか、小さい妹の世話をみさせられて嫌だったことなど、生身の

お母さんの本当の姿がいろいろと見えてきて、とても12歳のお母さんを好きになるのです。現実に戻ってきた時に、お母さんは強がりです。突っ張って生きているような人なので、「私と一緒に来てちょうだい」とは絶対に言わないのですが、彼女を迎えに来た時にはじめて泣いてしまいます。その時にパトリシアは、この泣きじゃくっている母親の中に、あの12歳の少女ルツがいたのだと思い、はじめてお母さんを理解します。そして、「お母さんと一緒にいく」と言うと、お母さんは気持ちとはうらはらに、「それはあなたが決めること」と言って、子どもの自主性を重んじようとしたりします。娘がタイム・トラベルをしてお母さんの子ども時代を見ることで、お母さんを理解できるようになる。このような家族史パターンがだんだん増えてきています。映画『バック・トゥ・ザ・フューチャー』でもそうです。お父さんとお母さんがハイスクールで出会いますが、つき合いそうもないので、未来から来た息子が、一生懸命つき合わせようします。自分の身近な人、ルーツの人たちを理解するために過去に戻るというタイプの話が、歴史をまたぐような大昔ではなく、一代か二代前の家族がらみででてくることが、現代のタイム・ファンタジーのスタイルです。

歴史的な年表で最後の、メアリー・ノートンの『空飛ぶベッドと魔法のほうき』(1945)のパターンは、「ハーレクイン・ロマンス」シリーズなどに残っているタイム・トラベル・ロマンスものの方に受け継がれています。この話は、通信教育で魔法を学んだミス・プライスという現代女性が、空飛ぶベッドにのって、16世紀の時代へ子どもたちと一緒にいく。そこで魔法使いといっても呪文を知っているだけでろくに使えないという男性と知り合い、彼を現代へ連れてきたり、帰したりします。帰したあと、彼が魔法使いだと思われて火あぶりになりそうになるのを過去へ戻り助けたりしているうちに、2人の間に愛が芽生えてしまいます。ミス・プライスが、「私はもう過去の時代へ行って彼と一緒に住みます」と、過去へ行って終わるといふ話です。ふつうは現代に帰ってきて終わるのですが、面白い終わり方をしています。過去へ行って、そこで男性と恋におちるといふ話

は、今大人向けのロマンス小説の中でたくさん書かれています。ロマンス小説の方で一ジャンルをなしているような気がします。

さっきも申し上げたようにタイム・ファンタジーも時間的には50年くらいしか移動しない、家族関連の作品がとて多くなってきました。『時間だよ、アンドルー』はかなり新しい話です。これは、タイム・スリップをして、自分とそっくりな大おじさんと入れ代わってしまう話です。大おじさんは現代に来たので、ジフテリアで死なずに助かります。アンドルーはおとなしい子でしたが、大おじさんの時代に行き、わんぱくな大おじさんの代わりをやっているうちに、だんだん強い子になっていきます。やはりこれも、最後に2人が再会します。主人公のアンドルーという少年のところに、大おじさんのアンドルーが訪ねてくる。本当だったら死んでいるはずだったのですが、自分は生き延びてしまったのだと、おじさん自身も知っているのです。「だから私は結婚はしないことにした」と言っているのです。しかも、時間が変化するうちに、何が起きたかという、大おじさんの方は、少年のお父さんが考古学者だと聞いて、それは面白そうだと自分も考古学者になってしまい、過去が変わってしまったというパラドックスが出てきます。元は少年のお父さんが、この大おじさんに憧れて考古学者になったという設定だったのです。やはりこれも、自分がまだ生きて知っているくらいの家族との間の時間の流れを見るところです。『家族史タイム・ファンタジー』と私は言っています。

それ以外のところでは、ロマンス系のタイム・トラベルものだと、ジュード・デヴローの『時のかなたの恋人』、ロバート・チャールズ・ウィルソンの『世界の秘密の扉』と『時に架ける橋』は、やはり50年くらいしかタイム・スリップしない話で、自分の過去やお父さんの過去にしか行かない話です。日本の作家では皆さんも読まれたことがあると思いますが、宮部みゆきの『蒲生邸事件』。これと、リチャード・マシスの『ある日どこかで』(2004年に亡くなったクリストファー・リーブの主演で映画にもなった)はどちらもホテルを舞台としたタイム・スリップ・ファンタジーです。

古い建物に行くとタイムスリップするという原則があります。ホテルというのは100年以上建っているものが多いので、そこへ行ってタイム・スリップしてしまうわけです。『ある日どこかで』はかつてそのホテルに投宿していた7、80年前の女優に恋をしてしまった青年が、そのホテルに泊まって一生懸命「今は1911年」と自己催眠をかけながら寝ると、過去の時代にタイム・スリップし、彼女とめぐり合っただけで恋をするという話です。

宮部みゆきの『蒲生邸事件』も、受験生が、古いホテルからタイム・スリップする話です。紀尾井町のホテルから、2.26事件の頃にタイム・スリップしてしまいます。ホテルものファンタジーという、タイム・ファンタジーでしょうか。恩田陸の『ライオンハート』は作者自身も認めています、まさに『ジェニーの肖像』パターンです。時を越えて何度もめぐり合う男と女の物語。北村薫の『スキップ』『ターン』『リセット』は、『スキップ』では、25年くらいいきなり時がとんでしまい、女子高校生が主婦になっていて、だんだんその世界に適応していく話。『ターン』は、ぐるぐると時間のループに入ってしまった女性が、交通事故の昏睡状態から抜け出す話。『リセット』は、輪廻転生ものという感じです。こうして見ていただいてもわかるように、今売れているミステリー作家が自然に、こういうタイム・ファンタジーものを書いているわけです。西澤保彦の『七回死んだ男』は、ループに入ってしまった話で、同じ1日が何度も繰り返されます。主人公は、おじいちゃんが殺されるのを何とか止めようとして7回違うことをやってみて、8回目に成功するという話です。これはミステリーとして分類されている話ですが、他に映画にもたくさんあります。タイム・ファンタジーに関して言えば、ざっとこのような流れが、見てとれるでしょう。

ファンタジーの背景

<ファンタジー一般を考えるための参考文献>と書いてあるところを見ていただきますと、昔話、深層心理学、民俗学などとあります。つまり、ファンタジーというのは、それらのものをまたいでいる何かなのということだけは、言えるのではな

いでしょうか。昔話は、もちろん関わってきます。

深層心理学的なものは、一時ユングが流行って、『ゲド戦記』が出てきた時には、ユング心理学をそのまま書いたようだという評がなされました。作家の方も理論を知っているから、シャドーやグレート・マザーなどいろいろなものを出してきまして、読む方も知らないではなかなかすまされなくなってきました。『ハリー・ポッター』のJ.K.ローリングさんも、一時、うつ病になった時に、いろいろな心理療法を受けていたという話があります。『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』に「憂いの篩（ペンシープ）」というアイテムが出てきます。自分の思いを出して入れることができるものです。あのへんは、ローリングさんが自分で受けたイメージ・セラピーのようなものから創っているらしいです。ですから、魔法と心理学的な療法やセラピーは、とても近いところにあるということになります。まさに現代は「心理学化された社会」だということと言えるでしょう。

そして、民俗学・文化人類学では、『守り人』シリーズを書いた、上橋菜穂子さんご本人が文化人類学者でありますし、『ゲド戦記』を書いたル＝グウィンも、母親が文化人類学者です。ですから、文化人類学という古い神話的な思考を取り扱っている人たちは、ファンタジーとかなり近いということになります。民俗学出身の評論家の大塚英志さんが、いろいろな論考をたくさん書いて面白く、現代のファンタジーを読み解くのに活用できると思うので、挙げてあります。

宗教学の中沢新一さんや、妖怪学の小松和彦さんとか、いろいろファンタジー近接分野の評論家もチェックしたいですね。

植民地関連で、やはりオリエンタリズムやシノワズリ、あるいはインドの密林を舞台にした『ジャングル・ブック』やアフリカへの憧れと幻想を描いた『ターザン』シリーズ。私たちは『ターザン』はとても夢のある動物物語だと思っていますけれど、あれは、書いた人たちにとっては植民地の文化だったわけです。（もちろん、『ターザン』の作者はアメリカ人なので、あちらに植民地があったわけではありませんが。）植民地のエキゾチックな文化というのは、特にファンタジーの一つの

ルーツになっているとは言えます。『ジャングル・ブック』や『ターザン』、『ドリトル先生シリーズ』、ディズニーの路線の中にも、『ライオンキング』や、『ムーラン』や、ネイティブ・アメリカンの『ポカホンタス』とかいろいろなものがあります。

そして、博物学や、幽霊や、魔女や、庭園。『トムは真夜中の庭で』が典型ですが、古い建物や古い場所へ行って、タイム・スリップするということから、庭や古い建物についての論なども、参考になります。

ファンタジーと幻想文学についての総論

最後に、ファンタジーと幻想文学そのものについての総論、これはあまり詳しくやってもつまらないと思いますが、今のファンタジーについては、1番新しい人でB・アトベリーが詳しいでしょうか。少し前のR・カイヨワという人は、ありえないものや超自然的なものが、タブーを破って合理的世界に入ってきてぶつかるものがファンタジーだと言っていたのです。それが、1958年頃の話です。ありえないものと言っているということは、そもそも世界が2つに切れていて、実の世界に虚の世界が入ってくるということを言っている。つまり58年頃は、ありえないことが侵入してきて衝撃を起こす話がファンタジーだということでした。その後、トドロフという人は、19世紀を中心に幻想小説を分類していきまして、わけのわからない世界があって、わけのわからない事実が起きた時に、腑に落ちない、何だこれはと揺れ動くような気持ち、これが幻想文学の真髄だというようなことを言ったのです。これらになりますと、幻想文学の範囲が非常に狭くなってしまふ。その後のE・ラブキンあたりになりますと、現実世界で常識となっていることが、180度ひっくり返ったりすることがファンタスティックだと言って、例えば、『ふしぎの国のアリス』のようなナンセンスなものを持ち上げるという傾向になります。現実の原則をひっくり返すということで、現実転覆の文学というふう論じている人が比較的多いということはあると思います。しかし、それは現実というものが確固としてあるという時代の話

でありまして、現実があればこそ、そこに変なものが入ってきたり、それをひっくり返すようなことができていた。現代に近づいてきますと、バーチャル・リアリティというか、だんだん確固たる現実そのものが危ないという感じがしてきています。

レジュメの資料①<年表>の最後にまとめをつけてあります。これは、ここまで決めつけていいかは疑問なのですが、試論として見て下さい。昔の世界は非現実や現実がなく、実の世界も虚の世界も1つで、地続きだった。次に、だんだん科学が進歩してくると、迷信や幻想というものと現実が切れてくる。そこで、幻想小説のようなものができてくる。19世紀の終わりから20世紀前半までは、ファンタジーは、児童文学の中で子ども限定、子ども時代限定という形のみで生きていた。それから、完全な架空世界がないなら創ればいいという、設定マニアのトールキン等が出てきました。それまではどちらかという、別世界はあるかないかだったのです。「あるかもしれない、あつたらいいね」という感じです。ところが、ここで創ればいいという意識が出てきて、別世界へ行くのではなく創る方向へいってしまいました。これが、トールキンの1番すごいことです。そういう世界設定を創って、そこで書けばいいとなっていったわけです。このあたりから、ディズニー映画もできて、ディズニーランドもできて、ファンタジーランドがなければ創ればいいという時代になってしまった。なければ創ればいいとなったために、あるかないかではなくて、なくても別に創ればいいということになってしまったわけです。現に作れるテクノロジーもある。第二世界や別世界に、魔法のアイテムを使って行くとか、意識を集中してタイム・スリップして行くとか、それもだんだん必要がなくなって、浦安へ行ってチケットを買えばすむわけで、異世界がバリアフリー化してくるわけです。あるいは、コンピューターゲームのドラクエの画面を開いて、ゲームをすれば、即そこに入れるわけです。「あと20分だけゲームをやっている」とか言いながら、ゲームをしている姪や甥の姿を見ると、子どもは特に、別世界と現実を自由に行ったり来たりしていると思いま

す。そして、心理学的に言っても、ファンタジーというのは、意味があって、ちゃんとした文学だというお墨つきも、20世紀後半に出てきました。

ファンタジーの今

ファンタジーが今どうなっているかという、3タイプぐらいあるのではないかと思います。1つ目は、大きい世界観、世界はこうなっているのだということを言いたいタイプの話。「ライラの冒険シリーズ」は、聖書で示されているような、発展の仕方をしてきた世界ではない、パラレルワールドがあって、別の発展の仕方をしうるのではないか、ライラが新しいイブとして創り出す世界があるのではないかという仮定によって世界を創り直してしまう。本当はこういう世界があってもいいのではないかというような、世界そのものに疑問を突きつけてしまうような話です。そうすると、キリスト教側から攻撃をされてしまったりもします。こういう、世界観を問う、現実とは何かを問う、大上段なファンタジー。

次に、癒し系で、『葉っぱのフレディ』にいくというパターンです。『葉っぱのフレディ』や『盲導犬クイール』的なものは、純然たるファンタジーではないですが、癒し系の方につながっていきます。このタイプはベストセラーになるケースも多く、『聖なる予言』のレッドフィールドや『星の巡礼』のパウロ・コエリョなどは、心理学というよりは、どちらかという精神世界系です。物語によって、悟りとはこういうものだとか、知恵を示してあげるといようなファンタジーです。

3つ目が、昔話のパターンを換骨奪胎した神話的類型物語、『ハリー・ポッター』のようなものになります。昔話の構造分析にはプロップ（ロシアのフォークロア学者）とか、いろいろな学者がいますが、例えば彼らの論に従えば、主人公が最初から孤児であるとか、そこに何か召命、あなたは本当は王子ですとか、あなたは本当は魔法使いですとか言って、いつか迎えが来る、そして境界を越えて別世界へ行くという、英雄物語や昔話のパターンをそっくりそのまま使っていることがわかる。『ハリー・ポッター』はそれもあって、話題になりました。読んでいて楽に読めてしまう、どこ

かで見たとようなパターンということでもあります。そこに、さらに、トールキンがやったように、日常に何を食べていたとか、何を着ていたというようなディテールや細かい心理の動きを入れ込んでいくことで、強度も出すということです。『ハリー・ポッター』が上手なのは、ガチガチにリアリティをもたせないことが強度になっていることで、特にダーズリー一家のいじめや、おばさんを膨らませてしまうとか、完全に現実世界の話なのに、意識してマンガに創っているというところで、これはお話だというふうに最初から嘘っぽくしてあるわけです。そのために、かえってお話として壊れないのです。壊れないという大変ですけど、最初からこれはお話だというフレームがあるために、その中で安全に守られた形でハリーの成長とか本当のテーマが展開できていくような感じがあります。あまり現実すり寄り型で、日常生活や社会問題を書きますと、主要テーマではない、細部のディテールが現実と地続きになるがために、時代が変わった時に古くなったり、あるいは、書き込みすぎて荒唐無稽さや大胆な飛躍、我々に快感を与える昔話的飛躍がなくなってしまうというような問題がありますので、『ハリー・ポッター』というのは上手くできています、私は考えています。

『ネシャン・サーガ』を読まれた方はいらっしゃいますか。あれは、まさにゲームのような話です。プリントの1950年代と書いてあるところの横に、ゲーム世界へと入れてあります。ここで、ファンタジーにとって非常に大きかったことは、ゲームが出てきたことです。このゲーム世界へということから矢印を引っ張って『ネシャン・サーガ』あたりへもってきていただくと、うまく当てはまります。ゲームというジャンルができて、ゲームはファンタジーと相性がよく、話の内容がほとんどファンタジーなので、そのゲーム世界をノベライズしたものがまた、『アイスウインド・サーガ』など、ノベライズ小説という形で、物語、本の世界へ帰ってきています。この『ネシャン・サーガ』の作者は、コンピュータ・プログラマーです。ですから、本当にゲームのように話が楽しくだれないうで進んでいきます。都合よく援助者が出てきた

り、都合よく女の子とめぐり合ったり、都合よいカップルができたり、死んでしまったのに、杖の力で一生懸命祈ったら蘇ったり、話がリセットしたり、とてもゲーム的です。だからある意味、現実から浮遊した形に世界が浮いている感じになるのですが、ゲームのもっているテンポや、そのステージ、ステージでの満足感がいちいちあるなど、そういう形でゲームが活かされています。

ゲームという仕組みそのものを取り扱ったものの中で、たぶん1番面白いのが、映画『マトリックス』だと思います。これにいくと話が複雑になりますけれども。

ダイアナ・ウィン・ジョーンズは、いま流行っていてたくさん翻訳出版もされています。彼女は、1934年の生まれで、以前からずっと書いていたにもかかわらず、1980年代頃からしか注目されなかった、特に日本ではあまり翻訳されなかった。(注²このあと11月にジブリアニメ『ハウルの動く城』が公開され、さらにブレイク。)

それはなぜかという、彼女の書いているものは、最初からパラレルワールドの別の英国や別世界が舞台になっています。いや現実世界もあるのだけれどパラレルワールドの1つとしてしか出てこない。そういう特殊な設定なので、第二世界がバリアフリーな形で考えられるようになるまでは、なかなか受け入れられなかったのではないのでしょうか。現実がとても強かった時代は、現実と似ているけれど、魔法だけ通用しているもう1つのイギリスのような世界を考えてもリアリティがなかったらと思います。しかし我々は、いろいろなものを経て、またゲーム設定などを経て、頭をやわらかくして、そういうものも受け入れられるようになりましたので、パラレルワールドが12個もあるダイアナ・ウィン・ジョーンズの世界も、けっこう平気になってきました。

しかも、この手の別世界ファンタジーになりますと、現実があってこちらがあって、その間でせめぎ合ったりもしません。別の意味で一元的になってしまっているのです、ダイアナ・ウィン・ジョーンズの読みにくさがあるとするれば、最初から別世界にいる主人公が一見普通の人間ばいというところだと思います。それなのに別の世界

観の中にその人がおかれているために、反応の仕方がふつうの人っぽくない。妙に冷酷だったり、全く驚かなかつたり、クールだったり、弟を何回でも殺してみるとか。現実の人、現実のパラレルワールドだと思って、現実の価値観をそのまま持ち込んで読むと、人情がないと、感じるがあります。おまけに殆ど落ち込まない。それは、パラレルワールドが12個もあれば、落ち込まないだろうと思いますが(笑)。最初、この人物の世界観はこうだから、こういう感情反応をするのだということに慣れるまで、大人はやや時間がかかるのではないかと。子どもだったら、わりとすぐに入れるかもしれません。

そういう形の、現実と似ていて、しかもそれを裏切るようなファンタジーが増えてきています。最初から別世界ができ上がっていて、そこにいる主人公ではじまるわけです。もちろん、入りやすくするために、裏ロンドンや、ちょっと未来に行って妖精がいる世界など、現実を思わせるような、引用や仕掛けをしておくのですが、そもそも別世界だから、そこに最初からいる主人公は、現実の我々とはずいぶん違う生き方や感情の持ち方をしているという点が、もしかしたら、現実どっぴりの大人にはわかりにくい理由かもしれません。

それから、先ほどもふれましたがオーエン・コルファーの『アルテミス・ファウル』という、今2巻まで出ている、妖精物語が溢れているアイルランドの人しか書けないような話は、未来社会の悪の天才少年が、コンピュータを操って、スパイ謀略ものとかいろいろなジャンルのニュアンスを入れながら、しかも、ドワーフとかいろいろな妖精たちが変形した形で出てきて、そこでドタバタを繰り広げる話です。これは実は、『ダレン・シャン』よりも典型的な現代のファンタジーではないのでしょうか。つまり、ハリーは、まだいい子です。目上の人に素直で、ダンブルドア先生や目上の人から教えを受けながら、素直に大きくなっていくようなところがあるのですが、アルテミスになると、大人を秘書にしている、完全に自分アルテミスの方が偉いという形になっていて、そういう圧倒的な力や情報や超能力を持っている少年少女で、物語がはじまる。特訓して強くなるような時

代ではなく、最初から力のある少年少女たちだという側面があるのです。成長がモチーフではなく、全然別の現実に行って、リセットした生き方を楽しむものです。

あと、今出ているファンタジーで、面白いのは、妙にイタリアものが多いということです。イタリア人が書くのならわかるのですが、ドイツ人やイギリス人が書く、ヴェネチアなどを舞台にしたものがいっぱいあるのです。なぜかと思うのですが、それは、エンデが『モモ』でローマを舞台にして書いたのと似ていて、イタリア自体が、すでにファンタジーの土地だからでしょう。日本でもディズニー・シーという形でヴェネチアが作られています。ヴェネチアは、すでにファンタジーランド化された場所です。ダイアナ・ウィン・ジョーンズの『トニーノの歌う魔法』や、今出ている『ストラヴァガンザ』(註³2005年5月に続編も出ました。メアリー・ホフマン作)このへんはイギリス人の作品ですね。それから、ドイツ人で、『ネシャン・サーガ』のラルフ・イーザウが、『パーラ』という1番新しい小説で、たぶんヴェネチアかどこか、どう見てもイタリアでしかない土地を書いています。コルネーリア・フンケの『どろぼうの神さま』もヴェネチアです。なぜ、ドイツ人はイタリアが好きなのか。昔のゲーテの『イタリア紀行』の時代から、ドイツ人は太陽がいっぱいのイタリアへ行って癒されるパターンがあったようです。カイ・マイヤーの『鏡のなかの迷宮』も、完全にヴェネチアものです。イタリアはすでに現実ではなくてファンタジーランド化しているような気がします。ロンドンでもいいのですが、ロンドンよりイタリアの方が夢があるのでしょうか。現実の土地がすでにテーマパーク化している、幻想に侵食されている傾向があるということです。

もう1つ最後に、インターネットと魔法が近いものとして扱われていることをあげておきたいと思います。『アースヘイヴン物語』(キャサリン・ロバーツ)は、かなり気持ち悪い、生々しいファンタジーで、同じ作者が今『世界七不思議ファンタジー』のような伝統に近づけたものも書いてい

ますけれど、『アースヘイヴン物語』の中には、まさにプログラミングのツリーのような木があって、それが世界中のいろいろな木と情報ネットワークでつながっていて、その木の中に入ってコンピュータ操作をすると、連絡がとれるというようになっていまして、コンピュータの仕掛けが魔法になっているのだということを感じさせます。『アルテミス・ファウル』も、そういったコンピュータ的世界でした。そうしますと、だんだん現実というものも、変わっていく。木といっても本当の木ではなくて、それがそういう情報を伝えるもの、データだけを扱うものになっていってしまうという状況があるわけです。

昔は、この岩、この石に魔法がこもっているとか、魔法に関して、<ものフェチ>な時代だったのです。これが魔法の石だから集めなくてはいけないというふうにところが、今は情報ネットワークを支配することが魔法のような感じになっていて、そういう能力のある人が情報を手に入れたりとか、あるいは、それを操る力を持っている人、そして、現実をいくらかでも自由に、CGを書き換えるように、いくらかでもビジュアライゼーションで書き換えていく、そういうことが魔法だという感じになってきています。『レイチェル』でも、一生懸命魔法の特訓をするのではなく、内部の仕組みがどうなっているか想像して、頭の中でイメージトレーニングをすると、魔力が強いのでその通りになってしまうという、ものがなくて情報だけ、イメージだけの世界になりつつあります。これもやはりゲームの影響が強いと思います。

駆け足ですが、このあたりで、だいたい用意してきた話を、一通り終わります。『まぼろしのすむ館』の話をし忘れてしまったのですが、これは、心霊写真の話です。カメラで撮ると、前にその部屋にあった家具が写ってしまう話です。テクノロジーをそういうふうに使って、幽霊話を書いてみるという新しい話です。そういうふうな幽霊話だけれども、タイム・ファンタジーでもあるというものです。

(いつじ あけみ 白百合女子大学児童文化学科教授)

国際子ども図書館で児童文学（ファンタジー）を調べる

千代 由利

1. 国際子ども図書館蔵書について

蔵書数約30万冊（図書 23万冊、逐次刊行物 約1,700タイトル、非図書資料 約3万点）

2. 蔵書構成

2-1 児童書

国内の児童書・・・国立国会図書館法に基づく納本制度により網羅的収集

図書・教科書・教師用指導書、学習参考書（181,452冊）、雑誌（888誌）、非図書資料等
外国の児童書・・・（選択的）購入、寄贈、国際交換等により収集（39,808冊）

基本的な資料、世界あるいは各国の定評ある児童文学賞受賞作品等、外国語に翻訳刊行された日本の児童書、雑誌（125誌－関連雑誌を含む）

2-2 児童書関連資料・・・児童書・児童文化研究のための資料・・・購入・寄贈により収集

和図書（11,892冊）、洋図書（1,404冊）、和雑誌（709誌）*所蔵数は平成16年6月現在

<旧帝国図書館時代*の児童書>

旧帝国図書館は近代日本の唯一の国立図書館として明治期以降国内で刊行された出版物を、収集・保存してきた。（厳密な意味での法定納本ではないが、出版法制により出版者が旧内務省に届け出た出版物の交付を受けるという形。）

昭和23年に設立した国立国会図書館は帝国図書館の蔵書を引き継ぎ、児童書も含まれていた。

*旧帝国図書館は名称をたびたび変更したが、ここでは明治5年の書籍館から昭和23年の国立国会図書館発足までを総称する。

*帝国図書館では資料を、①甲部：利用保存の価値あり、②乙部：目下の利用価値は乏しいが一応の保存の道を講じ価値については後日の判断を待つもの、③丙部：利用保存の価値なく一年保存の上廃棄、という基準で分類していた。明治期においては、「児童書」の大半が「乙部資料」とされ、閲覧に供されなかった。

旧帝国図書館時代の資料で、乙部とされていた児童書は2002年の国際子ども図書館全面開館時に本館から移管し、現在、国際子ども図書館で閲覧が可能である。ただし甲部とされ一般の書籍と一緒に配架されていた資料は、現在も東京本館に所蔵されている（約2,000冊程度）。明治期～昭和前期の資料はマイクロ化されており、原資料の閲覧は原則として制限されている。

2-3 国立国会図書館の児童書の定義と分類

児童図書とは、高校生（18歳）以下の児童・生徒を対象として出版された図書。

青少年を対象として企画・編集された「子どもから大人まで」や「ヤングアダルト」用の資料も児童図書にしている場合がある、判断基準としては、日本図書コードの分類コードが使われている。

ISBNの後に表示されたC以降の数字の1桁目にある8（8000番台）が、販売対象が児童である

図書。

(例) ISBN 4-7721-0095-4 C8793) ← 8：児童 7：絵本 93：日本文学、小説・物語

<国立国会図書館児童書分類>

Y 1 政治・経済・産業・社会

Y 2 歴史・地理・風俗

Y 3 伝記

Y 5 教育・文化・宗教・道徳

Y 6 美術・音楽・絵画

Y 7 文学・語学（新書・文庫形態）

Y 8 文学・語学

Y 9 文学・語学（翻訳書）→洋図書では著者が日本人の場合のみ適用

Y 11 科学・技術

Y 12 スポーツ・遊戯

Y 13 辞典・年鑑・図鑑

Y 14 叢書・全集

Y 15 その他

Y 16 漫画本・漫画読物

Y 17 絵本

Y 18 絵本（翻訳書）→洋図書では著者が日本人の場合のみ適用

*和図書はY17-N04-HI42のように分類記号のあとに受入年（西暦）を付与（→1997年以降）

*洋図書はY17BR-B732-A4500のように分類記号のあとに出版国（BR）、著者記号（B732）を付与し、ローカル請求記号としている。ただし児童書総合目録ではローカル情報部分 [BR-B732] は表示されない。

Y 31～ 学習参考書

Y 311～ 学校教科書

Y 411～ 教師用指導書

非図書資料 YKG紙芝居 YNZカルタ YLZ映像資料 等

児童雑誌

和雑誌 Z32（国立国会図書館東京本館分もあり児童書は一部）

洋雑誌 Z57

児童書関連資料 NDLCではなく、NDC分類表第9版に準拠したローカル請求記号を付与し、第一、第二資料室に開架。（例）YZ930-サダ『英米児童文学辞典』定松正，本多英明編著

国際子ども図書館の外国語コレクション

イングラム・コレクション (VZ1)

主としてイギリスの18～20世紀の児童書1,157冊から成る。(18世紀約10冊、19世紀約470冊、20世紀約670冊。) イギリスのヘレフォード大聖堂主教座名誉参事会員エドワード・ヘンリー・ウィニングトン・イングラム師 (1849-1930) が、ヴィクトリア朝の道徳的、精神的価値観に沿った児童文学をテーマに19世紀後期から収集したもの。後に娘のコンスタンスが引継ぎ、古典児童文学や絵本にまで収集対象が広がられた。1744年にロンドンで子ども向けの書籍出版を始めたジョン・ニューベリーが出版した『リトル・キング・ピピンの物語』の初版 (*The History of Little King Pippin*. Printed for F. Newbery. 1780) をはじめ児童文学黎明期のルイス・キャロル、ジョージ・マクドナルド、ウォーター・クレイン、ケイト・グリーンナウェイ、20世紀のポターやグレアムなど代表的な作家・画家の作品が多数含まれている。イギリス児童文学史の流れをたどることのできるユニークなコレクションである。

- * ウィニングトン・イングラムコレクション (『国立国会図書館月報』446 pp.12-14 1998.5)
- * 神宮輝夫：ウィニングトン・イングラムコレクションの魅力 (『国際子ども図書館の窓』3 pp.16-20 2003.3)
- * 「イングラムコレクション」 (『未知の世界へー児童文学にえがかれた冒険』国際子ども図書館展示会図録 pp.18-20 2003.7)
- * 神宮輝夫：イングラムコレクションと冒険小説 (同上pp.14-17)

池田宣政コレクション (VZ2)

池田宣政^{のぶまさ} (南洋一郎) (1893-1980)、本名は池田宣政^{よしまさ}。池田宣政の筆名で、『形見の万年筆』、『リンカーン物語』、『野口英世』などの感動美談、伝記物を執筆する一方、南洋一郎の筆名で、『緑の無人島』、『緑の金字塔』、『バルーバの冒険』シリーズなど、特に『少年倶楽部』を舞台に数多くの冒険小説を執筆し、戦前から戦後の少年・少女に人気を博した。また、語学にも優れ翻訳も多数出版。『怪盗ルパン』シリーズ (ル・ブラン原作) は現在も出版されている。

平成13年にご遺族から、著作509冊と執筆の参考にした資料361冊 (洋書352冊) の寄贈を受けた。資料の随所に書きこみや付箋が残されており、執筆の参考にした洋書には出版社や画家に指示したと思われる付箋とメモが残っている。

- * 杉山きく子：アンデルセン『新・お話と物語』ほか3冊ー池田宣政 (南洋一郎) コレクションから (『国際子ども図書館の窓』2 pp.10-13 2001.3)
- * 池田宣政 (南洋一郎) コレクション (『未知の世界へー児童文学にえがかれた冒険』国際子ども図書館展示会図録 pp.21-23 2003.7)

チェコの児童書コレクション

20世紀後半を中心とする千野栄一氏旧蔵チェコスロバキア児童書コレクションと20世紀前半の昔話や創作童話を中心としたチェコの児童書合わせて850点。エルベンやニェムツォヴァーなど、また20世紀初めにチェコの昔話の集大成を行ったジーハの代表作が含まれている。千野氏旧蔵資料は、20世紀チェコスロバキアの児童書専門出版社アルバトロスとその前身であるSNDK (国立児童書出版社、プラハのアルバトロス社、プラティスラヴァのムラデン・レター社) 出版の児童書が多い。チェコ児童文学の古典『ほたるっこ』の各版約20冊などのほか、ラダ、ジェザーチ、フルビーン、ハシェ

ク、サイフェルト、ネズヴァル、クビーン、イラーセク、チャペックなど有名作家のものが多数含まれている。

ロシア児童書コレクション

ロシア児童文学の翻訳・研究家、田中かなこ氏（1931-1999）が収集した、主として革命後のソ連の児童書約3,700点を中心。単行本の多くは1933年設立の国立児童文学出版所（ジェーツカヤ・リテラトゥーラ）から出版されたもの。また、15の共和国、100以上の民族から成っていたソ連邦は昔話やフォークロアも豊富で、これらがコレクションの半数を占めている。1920年代、子どもたちの啓蒙・教育のために、多くの芸術家がアヴァンギャルドの実験的な試みによる斬新なデザインの絵本を数多く生み出した。1930年後半には厳しい国家統制によりこうした絵本は消えていくが、1970年代にその価値が見直され復刻された。田中コレクションにはこれらがよく揃っている。最近、これら1920年代～30年代のオリジナル121点も収集し一層充実した。また20世紀初頭ロシアではロシア芸術の刷新を目指すグループの中からイワン・ビリービンやナルブトなどによる華麗な絵本が生まれていた。こうした1900年代はじめの絵本40点も収集し、19世紀から20世紀ロシア児童書が概観できる。

*松谷さやか：国際子ども図書館ロシア児童書コレクションー田中かな子旧蔵資料を中心に（『国際子ども図書館の窓』4 pp.24-27 2004.3）

もじゃもじゃペーターコレクション

ドイツの医師ホフマン（1809-94）が、3歳の息子のために自作の挿絵を添えて作った絵本が1845年に出版され、最初の30年間で100版に達したという。児童文学界のみならず、児童教育の様々な分野で話題になった。19世紀以来出版されてきた「もじゃもじゃペーター」と各国で出されたパロディー等71点からなる。

洋雑誌

『セント・ニコラス』

St. Nicholas: a Monthly Magazine for Boys and Girls. Parien, Conn. [etc.] Educational Pub. Co. [etc.] 24-29cm Subtitle varies. 月刊
[所蔵 1(1) : 1873.11-67(2) : 1939.12 (欠42(4),58(8))] (Z57-A5)

1873年から1943年まで70年間にわたって刊行された高名なアメリカの児童雑誌。1873年、スクリブナー社は、当時有名な文芸雑誌*Harper's Monthly*や*Atlantic Monthly*に抗して、*Scribner's Monthly*（後*The Century*）を刊行し保守的で健全な家庭雑誌を目指して*Scribner's Monthly*（後*The Century*）を刊行し高い評価を得た。この成功に、同社は1873年11月、同誌のコンセプト、構成をそのままに、また同誌から当時一流の作家、画家を起用して児童向け雑誌の刊行に乗り出した。当時すでに編集経験もあり、『銀のスケートぐつ』*の著者としても名声を得ていたメアリ・メイプス・ドッジを編集長に迎え、美しい装丁で中上流階級の児童読者層に上質の娯楽を提供した。発行部数は当初4万部、後7万部を維持した。競争相手の児童雑誌を次々に買収するとともに、寄稿者、読者をも取り込んで成功を収めた。ドッジは32年間編集長として君臨し、児童雑誌は自然で楽しめるものであると同時に、理想と価値感をしっかり伝える教訓的なものであるべきという確固たる編集方針は、同誌のみならず、アメリカの児童書出版業界にも大きな影響を残した。バーネットの『小公子』ほか、マーク・トウェイン、オールcott、キプリング等も寄稿し、特に質の高いフィクションで定評があった。意外なところでは、『沈黙の春』で知られる生物学者で作家のレイチェル・

カーソン (1907-64) のエッセイが1918-22年の投稿欄に5点掲載されている。

しかし、1930年代以降到来した安価で大量生産の雑誌の時代には勝てず、また内部の混乱により衰退をたどり、何社かへの売買を経て1943年ついに70年間の歴史を閉じた。

* *Hans Brinker ; or, The silver skates* by Mary Mapes Dodge ; with introduction by Ruth Ewing Hilpert; illustrated by Clara M. Burd. Philadelphia Chicago John C. Winston Co. c1925. xiv, 325 p. (4) leaves of plates: ill. (some col.) 23 cm. (VZ2-1053)

* 『銀のスケートぐつ』 メリー・メープス・ドッジ著 中村妙子訳 桜井悦絵 東京 こまどり書房 昭和23 142p 19cm (児95-D-3)

[誌名の変遷]

St. Nicholas: Scribner's Illustrated Magazine for Girls and Boys (vol.1, no.1-vol.8, no.12) ;

St. Nicholas: An Illustrated Magazine for Young Folks (vol.9, no.1-vol.56, no.12) ;

St. Nicholas for Boys and Girls (vol.57, no.1-vol.67, no.4; vol.70, no.1- no.4)

[出版社と出版地の変遷]

Scribner & Co., New York, (1873-1881)

The Century Co., New York (1881-1930)

American Education Press, Columbus, Ohio (1930-1934)

Educational Publishing Corporation, New York and Dairen, Conn. (1934-1940)

St. Nicholas Magazine, Inc., New York (1943)

* *Children's periodicals of the United States; Historical Guides to the World's Periodicals and Newspapers.* Ed. by R. Gordon Kelly. Greenwood Press. (YZ-051-B3)

* 「セント・ニコラス」研究会編：アメリカの児童雑誌「セント・ニコラス」の研究 1987 212p

* 岸上真子：「セント・ニコラス」試論—こどもに求めるもの (『淑徳大学研究紀要』20 pp.113-129 1986)

* 岸上真子：「セント・ニコラス」の研究(1)(2) (『淑徳大学社会学部研究紀要』32 pp.241-257 1998 33 pp.197-214 1999)

* 「沈黙の春」レイチェル・カーソン 10代の草稿 (読売新聞 2004年7月3日夕刊)

『ボーイズ・オウン・ペーパー』、『ガールズ・オウン・ペーパー』

The Boy's Own Paper. London [Boys Own Paper Office.] ill. (some col.), 30cm. Variant title: *Boy's Own Annual.* Original cloth, paper covered boards. Tinted printispiece. Hundreds of ill.

[所蔵:v.10 (1887/88), v.16 (1893/94), v.19 (1896/97), v.21 (1898/99) (VZ1-162~164) v.2 (1879/80), v.12 (1889/90) ~v.15 (1891/92), v.18 (1895/96), v.30 (1907/08) ~v.34 (1911/12), v.39 (1916/17) ~v.63 (1940/41) (Z57-A26)]

Girl's Own Paper. London" The Leisure Hour" Office, 28 cm. Variant title: *Girl's Own Annual.* 週刊

[所蔵 1(1):1880.1.3-28(1448):1907.9.28] (Z57-A4)

教育改革等により識字力が向上しつつあった19世紀後半のイギリスでは、労働者階級の子もたちも買うことのできる安価で低俗な子供向け週刊誌があふれていた。こうした低俗な雑誌の子もたちへの悪影響を心配した福音系宗教団体・宗教冊子協会は、1879年1月、物語、偉人の伝記、ス

ポーツ、冒険、旅行など楽しみと知識をバランスよく配した絵入り週刊誌『ボーイズ・オウン・ペーパー』(BOP)を1ペニーで刊行した。冒険物語に熱中していた少年たちは、華やかな挿絵が扉を飾る当時の人気冒険作家キングストン、バランタイン、ヘンティ、ヴェルヌなどに心躍らされた。BOPは創刊後の10年間は50万部の発行部数を誇り、競争の激しい少年雑誌業界でほぼ1世紀近く刊行を続けた。少女版の『ガールズ・オウン・ペーパー』(GOP 1880-1965)も創刊され、BOPをしのぐ成功を取めた。しかし、隆盛を誇ったBOPも20世紀に入ると次第に勢いを失い、組織内部の意見の不一致、コスト高、事業拡張の失敗などにより経営危機に陥り、1967年廃刊に追い込まれた。

* *Children's periodicals of the United States; Historical Guides to the World's Periodicals and Newspapers*. Ed. by R. Gordon Kelly. Greenwood Press.

* 森本真実：海へ、そして帝国へー19世紀イギリス少年雑誌の海洋小説と作家たち（『神戸市外国語大学外国語研究』46 pp.65-70 1969）

* 森本真実：宗教冊子協会と『ボーイズ・オウン・ペーパー』（『神戸女子大学文学部紀要』30 pp.73-85 1997.3）

* 森本真実：「よきシティズン」になるためにー『ボーイズ・オウン・ペーパー』にみるイギリスの少年期ー（『世紀転換期イギリスの人びとーアソシエーションとシティズンシップ』小関隆編 人文書院 pp167-225 2000.4）

* 雑誌『ボーイズ・オウン・ペーパー』と冒険小説（『未知の世界へー児童文学にえがかれた冒険』国際子ども図書館展示会図録 p.8 2003.7）

コレクションの中から

ルイス・キャロル Lewis Carroll (1832-98)

『不思議の国のアリス』（イングラムコレクション）

Alice's adventures in Wonderland / by Lewis Carroll ; with forty-two illustrations by John Tenniel. London Macmillan and Co. 1868. 192 p. : ill. ; 19 cm. Original red cloth, gilt medallions of Alice and the Cheshire Cat on the covers. Later spine, new end papers. 42 finely engraved illustrations by John Tenniel. Pasted on some extra pages at the end are some old newspaper cuttings of articles about Lewis Carroll and obituaries which appeared after his death. Covers a little ink stained and spotted but very good internally. (VZ1-222)

第3版。1866年初版と同じクロス装丁。有名なテニエルの挿絵。巻末に当時のルイス・キャロルに関する古い新聞記事、訃報の切抜きが糊付けされている。

Alice's adventures in Wonderland / by Lewis Carroll ; with forty-two illustrations by John Tenniel. London Macmillan and Co. 1886. 192 p. : ill. ; 19 cm. Original red cloth, gilt medallions of Alice holding the pig on the front cover and the Cheshire cat on the back cover. Black end papers. Engravings throughout by Tenniel. One page has dusty edge and a small tear, occasional finger marks, some gatherings loosening, but binding intact, all edges gilt. (VZ1-219)

初版刊行後20年、82,000刷りを数える。1887年12月には、版を組み直した普及版が刊行されたという。初期アリスの面影をよくとどめる資料。

Alice's adventures under ground : facsimile of the author's manuscript book with additional material from the facsimile edition of 1886 / by Lewis Carroll; with a new introduction by Martin Gardner. New York Dover Publications c1965. xi, 95, viii p. ill. 22cm Decorative glazed boards. Many illustrations by the author. (VZ1-213)

キャロル自身による挿絵入り手稿本の複製

Alice's adventures under ground / by Lewis Carroll ; with forty-two illustrations by John Tenniel. New York Books of Wonder [1992] 196p. ill. 22cm. "first published in 1886 by Macmillan and Co. of London"--T.p.verso. (Y8-A5267)

マクミラン社初版の複製。テニエルのオリジナル木版から直接複製したもの。

Alice's adventures in Wonderland / by Lewis Carroll ; illustrated by Arthur Rackham ; with a poem by Austin Dobson. New York London Doubleday Page W. Heinemann 1907. xi, 161p., [13] leaves of plates : ill. (some col.) 29cm. Edition limited to 550 copies for sale in the United States of America. NDL copy, no.75. (Y8-A3099)

ラッカムによるカラープレート13枚を取めたもの。

Alice's adventures in Wonderland ; and, Through the looking glass / Lewis Carroll ; with ninety-two illustrations by John Tenniel. London D. Campbell Distributed by Random House c1992. 326p. ill. ; 21cm (Everyman's library children's classics) First work originally published : 1865. Second work originally published : 1871. (Y8-A765)

キャロル自身による挿絵入り手稿本の複製

トランプ国の女王 須磨子 [訳] (『少女の友』明治41.3) (Z32-42) 本邦初訳

(... 34回に訳して、その頃創刊の『少女の友』の初号から続けて寄稿した。... 『アリス物語』永代静雄による「はしがき」より)

挿絵に注目

アリス物語 キャロル原作 永代静雄著 東京 紅葉堂書店 1912 (大正1) 238p 図版 20cm (児乙部12-N-1)

上記を単行本にしたもの

アリスの夢 ルイス・カロール作 楠山正雄訳 東京 平凡社 1930 472p 図版 20cm (世界家庭文学全集7) (児乙部-30- K-19)

「不思議の国」「鏡のうら」の両作品を収める

鏡世界 (西洋お伽噺) キャロル作 長谷川天溪 (天溪居士) 訳 (『少年世界』 1899.4~1899.12 博文館) (雑52-10) (復刻版 Z32-1084)

Vol.5 no. 9 (p.22-30), 11 (p.27-35), 17 (p.34-39), 20 (p.31-40), 23, (p.37-40) 24 (p.21-25), 26 (p.17-21)

(鏡の国のアリスの初訳。「主人公、美イちゃん。ナンセンスのおもしろさを伝えきれず途中で終了。原作を精巧に模した挿絵。」『子どもの本・翻訳の歩み事典』より。)

ジョージ・マクドナルド George MacDonard (1824-1905)

「北風の向こう側」(1871)

At the back of the North Wind / by George Macdonald. [1st ed.] London Blackie (& Sons) [1890] 391p., [12] leaves of plates : ill. (some col.) 21cm. 12 full pages col. ill. by Frank C. Pape and 76 text ill., some after engravings by Dalziel Bros. Some plates misbound but all present. Pictorial cloth, decorated in art nouveau style. (VZ1-687)

北風のうしろの国へ マクドナルド作；山室静、田谷多枝子訳（世界の名作図書館 9）東京 講談社 昭和43 292p 24cm (Y7-498) (一部省略した訳、マクドナルド童話全集10 太平出版社 1977に完訳)

「王女とゴブリン」

The Princess and the goblin / by George Macdonald [1st ed.] London Blackie [1890] 308p., [12] leaves of plates : ill. (some col) ; 21 cm 12 full page colour plates, many b&w ill. in text. Pictorial cloth, rare dustwrapper (damaged with some loss but repaired).

(A little princess is protected by her friend Curdie from the goblin miners who live beneath the castle.) (VZ1-686)

王女とゴブリン G. マクドナルド作 村上光彦訳 淵上昭弘絵 東京 太平出版社 1974.4 320p 22cm (マクドナルド童話全集1) (Y7-6657)

ケネス・グレアム Kenneth Graham (1859-1932)

「夢みる日々」

Dream days / by Kenneth Graham. [1st ed.] New York J. Lane, the Bodley Head 1899, c1898. 275, 14p. 20cm. Original watered silk art nouveau designed covered boards, hand made paper, many piece torn off second blank, edge of spine very slightly rubbed otherwise fine. (VZ1-459)

Dream days / by Kenneth Graham ; with illustrations and decorations by Ernest H. Shepard. London Bodley Head 1973, c1962. viii, 176p. :ill. 20cm. "The present edition of 1983 is a reprint of the fourth edition with illustrations by Earnest H. Shepard and includes the note by Naomi Lewis which appeared as the foreword to the fifth edition of 1962"-T.p.verso. Cloth, pictorial dustwrapper. (VZ1-460)

シェパードの挿絵

ものぐさドラゴン ケネス・グレアム作 亀山隆樹訳 西川おさむ絵 東京 金の星社 1978.6 101p 22cm (世界こどもの文学) (Y7-6801)

おひとよしのりゅう ケネス・グレアム作 石井桃子訳 寺島竜一絵 東京 学習研究社 昭和41 154p 図版 23cm (新しい世界の童話シリーズ8) (Y7-443)

短編集「夢見る日々」に収録された中の一編の翻訳。どちらにもシェパードの絵は使われていない。

「黄金時代」

The golden age / by Kenneth Grahame ; with illustrations and decorations by Ernest H. Shepard.

[1stEd.] London J.Lane, the Bodley Head 1928. x, 166p. : ill. 20cm. Reprinted November 1928. Twenty-eight full page black and white plates and many illustrations in text by E.H. Shepard. Bound in beige cloth, the front cover decorated with designs by the artist in black. Very fine copy. (VZ1-461)

The golden age / by Kenneth Grahame ; with illustrations and decorations by Ernest H.Shepard. London J. Lane, the Bodley Head 1928. 166p. 20cm. Reprinted 1948. Decorated cloth. Frontispiece and 28 black and white drawings by Ernest H. Shepard. (VZ1-462)

The golden age / by Kenneth Grahame ; with illustrations and decorations by Ernest H.Shepard. London Bodley Head 1973, c1962. viii, 174p. : 20cm. "The present edition of 1973 is a reprint of the fifth edition with illustrations by Ernest H.Shepard and includes the note by Naomi Lewis which appeared as the foreword to the sixth edition of 1962"-T.p. verso. Cloth pictorial dustwrapper. (VZ1-463)

過去の刊行について詳しい記載あり

「たのしい川辺」

The wind in the willows / Kenneth Grahame ; illustrated by Ernest H. Shepard. London Reprint Society 1954. 320p. ill. 21 cm. Reprint of 1908 ed. Pale brown cloth, figures of the characters, surrounded by green leaves on the front cover and spine. Original line drawings and full page plates by E.H. Shepard. Very slightly spotted on foreedges, but near fine otherwise. (YZ-464)

シェパードの挿絵により古典的地位を獲得

The wind in the willows / Kenneth Grahame ; illustrated by Ernest H. Shepard. [New ed.] New York C. Scriber's Sons c1953. 259p. ill. 21 cm. Decorated cream cloth (slightly soiled). Map of the Wild Wood and many illustrations in text by E. H. Shepard. (YZ1-465(1))

このアメリカで刊行された版には、1931年の挿絵入り初版から割愛された挿絵が、シェパードの希望により描き替えられた上で入れられた。(p.13, 62/3, 107, 177/8, 221)

The wind in the willows / Kenneth Grahame ; illustrated by Ernest H. Shepard. [New ed.] New York C. Scriber's Sons c1954. c1954. 259p. ill. 21cm. Decorated cream cloth (slightly soiled). Map of the Wind Wood and many illustrations in text by E.H. Shepard. (VZ1-465(2))

The wind in the willows / by Kenneth Grahame ; illustrations by Arthur Rackham; introduction by A.A. Milne. London Methuen Children's Books 1951. xii, 178 p., [12] leaves of plates : ill. (some col.) 24cm. Reprinted 1973. Twelve fine full page colour plates by Arthur Rackham, and many black and white illustrations in text. Dark green cloth, pictorial coloured dustwrapper. Very fine condition. (VZ1-466)

(アーサー・ラッカムの挿絵)「この愛すべき物語の挿絵を手がけることを切に望んだアーサー・ラッカムが彼の挿絵画家としての経験を全て注ぎ込んで描きあげた図版を付した本」復刻版

The wind in the willows / by Kenneth Grahame ; with an introduction by A.A. Milne ; & illustrations by Arthur Rackham. New York Limited Editions Club 1940. 244 p., [16] leaves of plates : col. ill. ; 29 cm. In case. (Y8-A150)

たのしい川邊 ケネス・グレアム作 中野好夫訳 [アーネスト・H.シェパード] [挿画] 東京 白林少年館出版部 1940.11 309p 20cm (Y9-N03-H244) 初訳

ヒキガエルの冒険 ケネス・グレアム著 石井桃子訳 E.H.シェパード絵 東京 英宝社 昭和25 323p 19cm (児933-cG74hI) 戦後初訳

たのしい川べ：ヒキガエルの冒険 ケネス・グレアム作 石井桃子訳 E.H.シェパード絵 東京 岩波書店 昭和38 360p 23cm (児933-cG74tI)

ビアトリクス・ポター Beatrix Potter (1866-1943)

「きつねどんのおはなし」

The tale of Mr. Tod / by Beatrix Potter. [1st ed.] London F. Warne 1912.93p. : ill (some col.) ; 15cm. 15 coloured plates, black and white ill. in text. Buff paper boards, pictorial inset in center of front cover. Occasional finger marks, small. 5cms. stain affecting prelims and getting fainter until page 11. New spine. Pictorial end papers (Fig. 10 Linder)

(VZ1-872) 初版

キツネどんのおはなし ビアトリクス・ポターさく・え いしいももこやく 東京 福音館書店 1974 83p 15cm (Y17-4175)

The tale of the faithful dove / Beatrix Potter ; illustrated by Marie Angel. [1st ed.] London New York F. Warne c1971. 47p. col. ill. 17cm. Many coloured ill. Pictorial white cloth, pictorial dustwrapper. Mint. (VZ1-868)

ポターは1906年にこのお話を実話に基づいて書いたが、挿絵は描かず生前中は1部分しか刊行されなかった。

「ずるいねこのおはなし」

The sly old cat / written and illustrated by Beatrix Potter. [1st ed.] London New York F. Warne c1971 34p : chiefly col. ill. 17cm. Pictorial white card, pictorial dustwrapper .Mint. (VZ1-869)

ポターは1906年にこのお話と絵も書いたが、いろいろないきさつがあり、単行本としての刊行はこれが初めて。

ずるいねこのおはなし ビアトリクス・ポターさく・え まさきりこやく 東京 福音館書店 1888.6 35p 15cm (ピーターラビットの絵本) (Y8-5415)

ウォルター・デ・ラ・メア Walter de la Mare (1873-1956)

Poems for children / by Walter de la Mare. [1st ed.] London Constable 1930. xxxiii, 264p. 20cm. Cloth. (VZ1-328)

それまで未刊だった詩のほか、*Songs of Childhood, Peacock Pie*の全てを取める。

エレノア・ファージョン Eleanor Farjeon (1881-1965)

「銀のしぎ」

The silver curlew / Eleanore Farjeon ; illustrated by Ernest H. Shepard. [1st ed.] London Oxford University Press 1953. 182p. : ill. 23cm. Cloth. Many b&w drawings in text by E.H.Shepard. (VZ1-396)

銀色のしぎ エリナ・ファージョン作 阿部知二訳 瀬川康男絵 東京 講談社 昭和43 382p
23cm (国際アンデルセン大賞名作全集) (Y7-1201)

A.A.ミルン A.A.Milne (1882-1956)

「クマのプーさん」

Winnie-the-Pooh / by A.A. Milne ; with decorations by Ernest H. Shepard. 16th ed. London Methuen 1936. xi, 158 p. : ill. ; 20 cm. Illustrated throughout by E.H. Shepard. Uniformly bound original blue cloth, decs. of figures in black, dustwrappers designed with sketches by the artists. (VZ1-759(1))

「ぼくたちが小さかったころ」

When we were very young / by A.A. Milne ; with decorations by Ernest H. Shepard. 28th ed. London Methuen 1936. x, 99 p. : ill. ; 20 cm. Illustrated throughout by E.H. Shepard. Uniformly bound original blue cloth, decs. of figures in black, dustwrappers designed with sketches by the artists. (VZ1-759(2))

「プー横丁にたったいえ」

The house at Pooh Corner / by A.A. Milne ; with decorations Ernest H. Shepard. 8th ed. London Methuen 1936. xi, 178 p. : ill. ; 20 cm. Illustrated throughout by E.H. Shepard. Uniformly bound original blue cloth, decs. of figures in black, dustwrappers designed with sketches by the artists. (VZ1-759(3))

「6歳になったよ」

Now we are six / by A.A. Milne ; with decorations by Ernest H. Shepard. 11th ed. London Methuen 1937. x, 103 p. : ill. ; 20 cm. Illustrated throughout by E.H. Shepard. Uniformly bound original blue cloth, decs. of figures in black, dustwrappers designed with sketches by the artists. (VZ1-759(4))

「クマのプーさん」

Winnie-the-Pooh / by A.A. Milne ; with decorations by Ernest H. Shepard. London Methuen 1926. xi, 158 p. : ill. ; 20 cm. The four "Pooh" books housed together in a beautiful four-colored morocco clamshell case, gilt stamped. (Y8-159)

熊のプーさん ミルン作 石井桃子訳 岩波書店 1940 (個人所蔵)

熊のプーさん A.A.ミルン著 石井桃子訳 E.H.シェパード絵 東京 英宝社 昭和25 224p 19cm
(児93-M-41)

クマのプーさん A.A.ミルン作 石井桃子訳 E.H.シェパード絵 東京 岩波書店 昭和31 256p
函版 18cm (岩波少年文庫124) (児933-cM65k)

「昔あるとき」

Once on a time / by A.A. Milne ; decolated by Charles Robinson. London New York Hodder
and Stoughton 1917. 269 p. : ill. (some col.) ; 19 cm. (Y8-A5804)

昔あるとき A.A.ミルン著 志子田富寿子, 志子田光雄共訳 東京 北星堂書店 1995.4 284p 19cm
原タイトル: *Once on a time*. (KS164-E900) (本館)

J.R.R.トールキン J.R.R.Tolkin (1892-1973)

「ホビット」

The hobbit, or, There and back again / J.R.R. Tolkien. De luxe ed., [1st ed.] London Allen &
Unwin 1976. 286 p., [17] leaves of plates : col. ill. ; 23 cm. 2nd impression 1979. Col.
frontispiece, double page map, 12 full page col. plates, end paper map. De luxe binding in
black cloth, gilt, silver and red decorations on the front cover after a drawing by the author. In
original box, (the lid of the box is slightly damaged on 2 corners) . Near mint condition.

(要約 Bilbo Baggins, a respectable, well-to-do hobbit, lives comfortably in his hobbit-hole until
the day the wandering wizard Gandalf chooses him to take part in an adventure from which
he may never return.) (VZ1-1039)

ホビットの冒険 J.R.R.トールキン作 瀬田貞二訳 寺島竜一絵 東京 岩波書店 昭和40 476p
23cm (Y7-374)

「指輪物語」

The lord of the rings / by J.R.R. Tolkien. [1st ed.] London Allen & Unwin 1954-55. 3 v. : ill. (some
col.) ; 23 cm. Pt. 1: 4th impression Nov. 1955; pt. 2: 2nd impression 1955 ("3rd impression"--
Dustwrapper) Bound in original scarlet cloth, illustrative dustwrappers. Dustwrapper spines
slightly browned, creased at head and foot of spines, but very good otherwise. pt. 1. The
fellowship of the ring -- pt. 2. The two towers -- pt. 3. The return of the king. (VZ1-1041)

指輪物語1-5 J.R.R.トールキン著 瀬田貞二訳 東京 評論社 1972-8 6冊 22cm (Y7-3429)

グリム兄弟 Jacob Grimm Carl (1785-1863) and Wilhelm Carl Grimm (1786-1859)

The fairy ring : a collection of tales and traditions / translated from the German of Jacob and
Wilhelm Grimm by John Edward Taylor ; illustrated by Richard Doyle. New ed. London : J.
Murray, 1857. viii, 399 p., [9] leaves of plates : ill. ; 18 cm. Pages 48/49 soiled, occ. spotting. 11
(of 12) engraved plates by Richard Doyle. Original purple cloth, spine sunned, rebacked old

spine laid down. (VZ1-484)

Richard Doyle (1824-83) ヴィクトリア朝に最も人気のあった挿絵画家の1人

「七羽鳥」 グリム作 巖谷小波訳 『幼年雑誌』 1891 博文館 (雑52-48)

『おほかみ』 グリム作 上田万年訳 (家庭叢話1) 吉川半七刊 (YDM102874)

H.C. アンデルセン Hans Christian Andersen (1805-75)

【当館所蔵洋古書アンデルセン作品集】

Gesammelte Marchen / H.C. Andersen ; mit 112 Illustrationen nach Originalzeichnungen von V. Pedersen ; in Holz geschnitten von Ed. Kretschmar..-Leipzig : C.B. Lorck, 1849..-vii, 479 p., [16] leaves of plates : ill. ; 17 cm. (Y8-A5803)

デンマークのヴィルヘルム・ペーダセン (Wilhelm Pedersen 1820-1859) による挿絵。アンデルセン童話の挿絵の古典とされている。

Kjendte og glemte digte (1823-1867) / af H.C. Andersen. Kjobenhavn. C.A. Reitzel. 1867. xiv, 378 p. ; 15 cm. *Gesammelte Marchen*. (VZ2-1004)

「知られたる、また忘れられし詩」 アンデルセンの生前に刊行された最後の詩集で、詩218編を取める。

H.C. Andersens den Eventyr og historier / med illustrationer efter originaltegninger af Lorenz Frolich. Kiobenhavn C.A. Reitzels Forlag 1870-1874 3 v. ill. 17 cm. (VZ2-1005)

ローレンツ・フロリク (Lorenz Frolich 1820-1908) 絵。ペーダセンと同じ年に生まれる。ペーダセン没後、アンデルセン童話の挿絵を全て引き受けた。幻想的な描写は多くの人に親しまれた。

H.C. Andersens Eventyr og historier: femte Bind / med illustrationer efter originaltegninger af Lorenz Frolich. 2. udg. Kjobenhavn George C. Cron 1894. 342 p. : ill. ; 19 cm. Half calf, cloth. 別タイトル: *Eventyr og historier* (VZ1-35)

同じくフロリクの絵。

Fairy tales / by Hans Christian Andersen. London : Ward, Lock & Co., [1900].-xxxii, 525 p., [12] leaves of plates : ill. ; 22 cm. "Illustrated with nearly one hundred full-page and other engravings..-Original pictorial red cloth, front cover and spine highly decorated in art nouveau style in three colours..-Spine a little faded. Top of spine fragile. End papers browned but otherwise very good. (VZ1-30)

Stories & fairytales / by Hans Christian Andersen ; translated by H. Oskar Sommer ; with 100 pictures by Arthur J. Gaskin. London : George Allen, 1893. - 2 v. ill. 21 cm. Decorated chapter headings. Flowered end-papers. Original pale green cloth, pictorially decorated in the art nouveau style by Gaskin..-Gilt lettering on the spines a little faded. (VZ1-32)

ガスキン (Arthur Joseph Gaskin 1862-1928) 画家、挿絵画家、肖像画家、意匠図案家。ウィリアム・モリスとの出会いにより芸術・工芸への興味を深め、ケルムスコット・プレスの影響を

強く受けた。1893年に発表された上記作品が最もよく知られ、また高く評価された。

Andersenovy pohadky, svetove vydani / ilustroval Hans Tegner ; z danstiny prelozil Jaroslav Vrchlicky. 2. vyd. V Praze Solc a Simacek 1923-1924. 3 v. ill. 28 cm. Vol. 1 lacks publication date. (Y8-B881)

ハンス・タイナー はじめてアンデルセン童話集に彩色の挿絵を描いたことで知られている。

The fairy tales of Hans Christian Andersen / a new translation by Mrs. H.B. Paull-Unabridged ed. London : Frederick Warne and Co., [19--?] 704 p.19 cm. (VZ2-1006)

St. Nicholas (『セント・ニコラス』) 掲載作品

ルイーザ・メイ・オールコット Louisa May Alcott (1832-88)

「八人のいとこアアント・ヒル物語」

Eight cousins; or, the Aunt-Hill (1870年代 *St. Nicholas* に掲載)

Eight cousins, or, the Aunt-Hill / Louisa May Alcott. New York Puffin Books 1995. 299 p. ; 20cm. Puffin classics Cover title: Eight cousins. "First published in the United States of America by Roberts Brothers, 1875"--T.p. verso. 別タイトル: Eight cousins. 別タイトル: Aunt-Hill. (要約・抄録) Orphaned Rose Campbell finds it difficult to fit in when she goes to live with her six aunts and seven mischievous boy cousins. (Y8-A830)

八人のいところ：心と心の巻 オールコット著 松原至大訳 宮木薫絵 東京 富山房 昭和25
310p 19cm (児933-cA35h-M)

八人のいところ：小羊の巻 オールコット著 松原至大訳 宮木薫絵 東京 富山房 昭和26 341p
19cm (児933-cA35h-M)

フランシス・ホジソン・バーネット Frances Hodgson Burnett (1849-1924)

「小公子」

Frances Hodgson Burnett : *Little Lord Fauntleroy* (*St. Nicholas* Nov.1885~Oct.1886)

Little Lord Fauntleroy / by Frances Hodgson Burnett. New-York Charles Scribner's Sons 1886. xi, [1], 209, [15] p. : ill. ; 22 cm. "List of illustrations from drawings by Reginald B. Birch": p. [ix]. First edition, first state. Mark of the De Vinne Press, p. [210]. Frontispiece and plates included in pagination. First leaf blank. Publisher's advertisements, [14] p. at end. (54-44) (本館)

『小公子』 バーネット作 若松賤子訳 『女学雑誌』 1890.8~1892.1 女学雑誌社 (雑51-4)

『小公子』 バーネット作 若松賤子訳 博文館 1897 (明治30) 74-110 (YDM103024)

『家庭少女 小公女』 バーネット女史作 藤井白雲子訳 聚精堂 1910 (明治43) 329-95 (YDM101064)

マーク・トウェイン Mark Twain (1835-1910)

「トム・ソーヤー外遊記」

Mark Twain : *Tom Sawyer Abroad* (*St. Nicholas* Nov. 1893~Apr.1894)

Tom Sawyer Abroad 1894

The writings of Mark Twain. Definitive edition. 復刻版 東京 本の友社 1988. 37 v. ill., ports. 23 cm. Reprint. Originally published: New York: G. Wells, 1922-1923. V. 36-37 originally published as Mark Twain's autobiography. New York : Harper, 1924.

v. 19. Tom Sawyer, abroad. Tom Sawyer, detective, and other stories, etc., etc. (KS172-A5)

名探偵トム・ソーヤー：ソーヤーの大旅行 マーク・トウェイン作 白柳美彦訳 武部本一郎絵
東京 実業之日本社 1976.12 291p 20cm (マイジュニア) (Y7-5693)

村井弦斎 (むらいげんさい 1864-1927)

「紀文大尽」

Murai Gensai : Kibun Daizin (From Shark Boy to Merchant Prince)

(*St. Nicholas* July 1904~)

少年文学第1-32編 大橋新太郎編 東京 博文館明24-29 32冊 19cm 第11編 紀文大尽 (村井弦斎)
(特47-601) (YDM103043)

<参考文献>

The Winnington-Ingram Collection of Children's Books. Works spanning the 18th, 19th centuries including books on children's literature and moral education. A joint project of Lonie Ross and Compny, Ltd., Bath, Avon, England and Harrison Barrie Limited Folkestone, Kent, England. [1996]

童話の国からおくりもの H.C.アンデルセンの世界展図録 刈谷市美術館 松本育子編 刈谷市美術館 1955

ファンタジー関連書洋図書リスト

網かけ資料は「ファンタジー関係洋図書解題」で紹介。

タイトル	シリーズ名	出版地	出版者	出版年	版表示	請求記号
100 years of Oz : a century of classic images from The Wizard of Oz collection of Willard Carroll / John Fricke ; photography by Richard Glenn and Mark Hill.		New York	Stewart, Tabori & Chang	1999		YZ-933B-B2
The Alice companion : a guide to Lewis Carroll's Alice books / Jo Elwyn Jones and J. Francis Gladstone ; foreword by Roy Porter.		Basingstoke, Hampshire	Macmillan Press	1998		YZ-933C-B6
Alternative Alices : visions and revisions of Lewis Carroll's Alice books : an anthology / edited by Carolyn Sigler.		Lexington, Ky.	University Press of Kentucky	c1997.		YZ-933C-B8
The annotated Alice : Alice's adventures in Wonderland & Through the looking glass / by Lewis Carroll ; original illustrations by John Tenniel ; introduction and notes by Martin Gardner.		New York	Norton	c2000.	Definitive ed.	YZ-933C-B5
The art of Alice in wonderland / Stephanie Lovett Stoffel.		New York	Smithmark Publishers	1998	[1st Smithmark ed].	YZ-933C-B11
La Biblioteca di Noe : mostra internazionale di libri per ragazzi ed immagini sugli animali / a cura di Stefania Fabri e Maria Ida Gaeta.		Firenze	Le Monnier	1987		YZ-726.5-B2
A century of Welsh myth in children's literature / Donna R. White.	Contributions to the study of science fiction and fantasy ; no. 77	Westport, Conn.	Greenwood Press	1998		YZ-164.33-B2
Classic fantasy writers / edited and with an introduction by Harold Bloom.	Writers of English	New York	Chelsea House	c1994.		YZ-930-B33
Elsewhere : selected essays from the '20th century fantasy literature : from Beatrix to Harry' International Literary Conference / edited by Deborah Bice.		Lanham, MD	University Press of America	c2003.		YZ-909-B116
The fantastic sublime : romanticism and transcendence in nineteenth-century children's fantasy literature / David Sandner.	Contributions to the study of science fiction and fantasy ; no 69	Westport, Conn	Greenwood Press	1996		YZ-930-B76
Fantasy literature for children and young adults : an annotated bibliography / Ruth Nadelman Lynn.		New Providence, N.J.	Bowker	c1995.	4th ed.	YZ-028-B59

Fluent in fantasy : a guide to reading interests / Diana Tixier Herald.	Genreflecting advisory series	Englewood, Colo.	Libraries Unlimited	1999		YZ-028-B15
For the childlike : George MacDonald's fantasies for children / Roderick McGillis, editor.		[West Lafayette, Ind.] / Metuchen, N.J.	Children's Literature Association / Scarecrow Press	1992		YZ-933M-B5
Harry Potter's world : multidisciplinary critical perspectives / edited by Elizabeth E. Heilman.	Pedagogy and popular culture	New York	RoutledgeFalmer	2003		YZ-933R-B12
The historian's Wizard of Oz : reading L. Frank Baum's classic as a political and monetary allegory / edited by Ranjit S. Digne.		Westport, Conn.	Praeger	2002		YZ-933B-B6
Inventing wonderland : the lives and fantasies of Lewis Carroll, Edward Lear, J.M. Barrie, Kenneth Grahame, and A.A. Milne / Jackie Wullschlager.		New York / Tokyo	Free Press	c1995.		YZ-933-B6
The ivory tower and Harry Potter : perspectives on a literary phenomenon / Lana A. Whited, editor.		Columbia	University of Missouri Press	c2002.		YZ-933R-B13
J.R.R. Tolkien : a descriptive bibliography / Wayne G. Hammond, with the assistance of Douglas A. Anderson.	Winchester bibliographies of 20th century writers	Winchester, UK / New Castle, Del.	St. Paul's Bibliographies / Oak Knoll Books	1993		YZ-933T-B2
Kids' letters to Harry Potter from around the world : an unauthorized collection / compiled by Bill Adler.		New York	Carroll & Graf Publishers	2001	1st Carroll & Graf ed.	YZ-933R-B2
Literarische und didaktische Aspekte der phantastischen Kinder- und Jugendliteratur / Gunter Lange, Wilhelm Steffens, Hrsg.	Schriftenreihe der Deutschen Akademie für Kinder- und Jugendliteratur Volkach e.V. ; Bd. 13	Wurzburg	Konigshausen & Neumann	c1993.		YZ-909-B62
The literary products of the Lewis Carroll - George MacDonald friendship / John Docherty.		Lewiston	E. Mellen Press	1997, c1995.	2nd. rev. and expanded ed.	YZ-933C-B4
Mere creatures : a study of modern fantasy tales for children / Elliott Gose.		Toronto / Buffalo	University of Toronto Press	c1988.		YZ-909-B99
Modern fantasy writers / edited and with an introduction by Harold Bloom.	Writers of English : lives and works	New York	Chelsea House	c1995.		YZ-930-B33
The MUP encyclopaedia of Australian science fiction & fantasy / edited by Paul Collins ; assistant editors, Steven Paulsen & Sean McMullen ; foreword by Peter Nicholls.		Carlton South, Vic.	Melbourne University Press	1998		YZ-930-B65

The musical fantasies of L. Frank Baum / by Alla T. Ford and Dick Martin. With, Three unpublished scenarios / by the author of The wizard of Oz.		Chicago	Wizard Press	1958	1st ed.	YZ-933B-B1
National dreams : the remaking of fairy tales in nineteenth-century England / Jennifer Schacker.		Philadelphia	University of Pennsylvania Press	c2003.		YZ-388.33-B5
The natural history of make-believe : a guide to the principal works of Britain, Europe, and America / John Goldthwaite.		New York / Tokyo	Oxford University Press	1996		YZ-909-B57
Oz and beyond : the fantasy world of L. Frank Baum / Michael O. Riley.		Lawrence	University Press of Kansas	c1997.		YZ-933B-B4
Re-reading Harry Potter / Suman Gupta.		Houndmills, Basingstoke, Hampshire / New York	Palgrave Macmillan	2003		YZ-933R-B10
Reading Harry Potter : critical essays / edited by Giselle Liza Anatol.	Contributions to the study of popular culture ; no. 78	Westport, Conn. / London	Praeger	2003		YZ-933R-B11
A Reference guide to modern fantasy for children / [editor] Pat Pflieger ; Helen M. Hill, advisory editor.		Westport, Conn.	Greenwood Press	1984		YZ-930-B30
The science fiction and fantasy readers' advisory : the librarian's guide to cyborgs, aliens, and sorcerers / Derek M. Buker.	ALA readers' advisory series	Chicago	American Library Association	2002		YZ-028-B82
Science fiction, children's literature, and popular culture : coming of age in fantasyland / Gary Westfahl.	Contributions to the study of science fiction and fantasy ; no. 88	Westport, Conn.	Greenwood Press	2000		YZ-930-B109
St. James guide to fantasy writers / editor, David Pringle.	St. James guide to writers series	Detroit	St. James Press	c1996.	1st ed.	YZ-909-B25
Tolkien : a critical assessment / Brian Rosebury.		Houndmills, Basingstoke, Hampshire / New York	Palgrave Macmillan	c1992.		YZ-933T-B8
Tolkien : the illustrated encyclopedia / by David Day.		London	Mitchell Beazley	1993	Pbk. ed.	YZ-933T-B1
Tolkien the medievalist / edited by Jane Chance.	Routledge studies in medieval religion and culture ; 3	London / New York	Routledge	2003		YZ-933T-B6
Tolkien--a celebration : collected writings on a literary legacy / edited by Joseph Pearce.		San Francisco	Ignatius Press	2001	U.S. ed.	YZ-933T-B7

Touch magic : fantasy, faerie & folklore in the literature of childhood / Jane Yolen.		Little Rock	August House	2000	Expanded ed.	YZ-388-B17
Ventures into childland : Victorians, fairy tales, and femininity / U.C. Knoepfelmacher.		Chicago	University of Chicago Press	1998		YZ-930-B98
Welsh Celtic myth in modern fantasy / C.W. Sullivan III.	Contributions to the study of science fiction and fantasy ; no. 35	New York	Greenwood Press	1989		YZ-164.33-B1
When toys come alive : narratives of animation, metamorphosis, and development / Lois Rostow Kuznets.		New Haven	Yale University Press	c1994.		YZ-909-B77
Worlds enough and time : explorations of time in science fiction and fantasy / edited by Gary Westfahl, George Slusser, and David Leiby.	Contributions to the study of science fiction and fantasy ; no.101	Westport, Conn.	Greenwood Press	2002		YZ-909-B111
Worlds within : children's fantasy from the Middle Ages to today / Sheila A. Egoff.		Chicago	American Library Association	1988		YZ-930-B95

ファンタジー関係洋図書解題

【書誌】

Fantasy literature for children and young adults: an annotated bibliography / Ruth Nadelman Lynn. 4th ed. New Providence, N.J. Bowker c1995. lxxix, 1092 p. 24 cm. Includes indexes. (YZ-028-B59)

小学3年生から高校生を対象として、1900年～94年にアメリカで英語あるいは英語に翻訳されたファンタジー約4,800点の解題書誌。2部構成で、第1部は、作品を寓話ファンタジーから魔法ファンタジーまで10のカテゴリーに分け、著者名順に作品及び読書対象学年を収録し、簡単なあらすじと書誌事項及び書評掲載資料・掲載頁を記載。第2部はファンタジーに関する書誌・参考文献、評論、作家研究などを掲載した研究ガイド。巻頭に序論、1960年以降の代表的ファンタジー作品リスト、各賞受賞作品リストを掲載し、巻末に著者・イラストレーター索引、書名索引、主題索引を付す。1989年刊の第3版から50年以上絶版の58タイトルを削除し（リストを付す）、1,500タイトル、研究論文6,700点を追加した。

【事典・ガイド】

A Reference guide to modern fantasy for children. [editor] Pat Pflieger ; Helen M. Hill, advisory editor. Westport, Conn. Greenwood Press 1984. xvii, 690 p. 25 cm. Includes index. Bibliography: p. [623]-626. (YZ-930-B30)

19～20世紀の英米の作家36名による、子供向けファンタジーの中長編100余点を選びすぎり、作家、作品、登場人物、場所、魔法の小道具などを項目としてアルファベット順に配列、簡潔に解説した事典。「不思議の国のアリス」を始めとする夢のファンタジー及びSF、「クマのプーさん」等の短編集は収録対象から除外、オズのシリーズも他で沢山論じられていることを理由に割愛されている。巻末に、ファンタジー関係文献リスト、年表、挿絵画家リストがあり、総合索引を付す。参考図書として役立つだけでなく、幅広い読者の興味を誘うガイドにもなっている。著者はミネソタ大学で教鞭をとる。その他の著書にBeverly Clearly. Twayne, c1991 (Twayne's United States author series) がある。

St. James guide to fantasy writers / editor, David Pringle. 1st ed. Detroit St. James Press c1996. xvi, 711 p. 29 cm. (St. James guide to writers series) (YZ-909-B25)

厳密な意味で区別することはできないが、恐怖小説やSFとは切り分け純粋なファンタジー作家をとりあげ、別に刊行されるSt. James guide to Horror, Ghost, and Gothic Writersとセットで利用されることを意図している。そのためエドガー・アラン・ポーやステューブ・キング等は含まない。約400名の作家について、英、米で刊行された作品を網羅的に収録する。出身が英米以外のペロー、グリム、アンデルセン、カルヴィーノ、オルノー夫人、エンデ、フーケなど古典的なファンタジー作家11名については、外国語作家として別途掲載する。各項目は、伝記事項、完全な作品リスト、評論（署名入り）からなる。現存作家については本人のコメントも掲載。映画化されたものはその情報も掲載する。巻末に参考文献、著者の国籍別索引、書名索引を付す。

Fluent in fantasy : a guide to reading interests / Diana Tixier Herald. Englewood, Colo. Libraries Unlimited 1999. ix, 260 p. 26 cm. (Genreflecting advisory series) Includes bibliographical references

(p. 217) and indexes. (YZ-028-B15)

ファンタジーを愛好する読者の興味を広げ、また書店員や図書館員が客や利用者に適切な援助ができるように、多様な側面から案内するガイド。19世紀から1998年までに出版された資料を対象とする。全20章、3部構成。第1部（1、2章）はファンタジーの定義や重要性、ファンタジーに関するさまざまな情報や歴史的な変遷を概観。第2部（3～19章）では、剣・魔法、サガ・神話・伝説、妖精物語、タイムトラベルなど17ジャンルをさらにいくつかの下位のジャンルに分けて、それぞれ代表的な作品の内容を紹介するとともに、受賞、ヤングアダルトに人気、著者推薦などの情報を添える。第3部（20章）は資料・情報源の概説で、ファンタジーをさらに詳しく調べるための書誌、伝記、ガイド、雑誌、機関、出版者、賞名などのほかオンライン情報を紹介する。付録としてファンタジー関連用語集やヤングアダルト読者層のための推薦ブックリストを収載し、巻末に著者・書名、主題索引を付す。著者は他にもジャンルごとのガイドを多数編集している。

The science fiction and fantasy readers' advisory : the librarian's guide to cyborgs, aliens, and sorcerers / Derek M. Buker. Chicago American Library Association. 2002. xv, 230 p. 23 cm. (ALA readers' advisory series) Includes bibliographical references and index. (YZ-028-B82)

図書館員が、成人利用者の読みたいものを適切に提供できるように、SFとファンタジーの2部に分けて紹介したガイド。アメリカ図書館協会編集の読者案内シリーズのひとつ。ファンタジーについては、ファンタジーとは何かから始まり、古典的作品どのジャンルにも属さない作品について論じた後、叙事詩的ファンタジー、歴史ファンタジー、ユーモラスなファンタジー、などタイプにより10数章に分けて解説。代表的な作品の内容紹介のほか推薦作品リストがある。児童向け作品はほとんど含まれていない。付録として受賞作品リストを収載、巻末に著者・書名・シリーズ名・主題の総合索引を付す。利用者から読書相談を受けた時、どのようにやりとりしたらよいか、具体的な会話例を示し、心構えを説いているところが印象深い。

Classic fantasy writers / edited and with an introduction by Harold Bloom. New York Chelsea House c1994. xii, 187 p. 24 cm. (YZ-930-B33)

20世紀初頭までの最も有名なファンタジー作家14名 (L. Frank Baum, William Beckford, James Branch Cabell, Lewis Carroll, Lord Dunsany, Kenneth Grahame, H. Rider Haggard, Lafcadio Hearn, Rudyard Kipling, Andrew Lang, George MacDonald, William Morris, Beatrix Potter, Oscar Wilde) を収録。著者名のアルファベット順。一人について10から15ページで解説。詳細な伝記事項、著者及び作品についての批評の抜粋とその書誌事項、網羅的な著作リストからなる。総合索引等はない。

Modern fantasy writers / edited and with an introduction by Harold Bloom. New York Chelsea House c1995. xii, 194 p. 24 cm. (YZ-930-B73)

20世紀半ばの最も重要なファンタジー作家15名 (Ray Bradbury, John Collier, L.Sprague de Camp and Fletcher Pratt, E. R. Eddison, Robert E. Howard, Fritz Leiber, C.S.Lewis, David Lindsay, A. Merritt, Mervyn Peake, M.P.Shiel, Clark Ashton Smith J.R.R. Tolkien, Charles Williams) を収録。著者名のアルファベット順。一人について10から15ページで解説。詳細な伝記事項、著者及び作品について

ての批評の抜粋とその書誌事項、網羅的な著作リストからなる。総合索引等はない。

【研究書】

Mere creatures : a study of modern fantasy tales for children / Elliott Gose. Toronto Buffalo University of Toronto Press. c1988. x, 202 p. ill. 24 cm. Includes index. Bibliography: p. [187]-193. (YZ-909-B99)

20世紀に書かれた子ども向けファンタジーの古典10作品を取り上げ、昔話や神話等の口承文芸と、現代のファンタジーとの関係および、ファンタジーに描かれた動物や人間以外の人物について追求した評論。『くまのプーさん』、『たのしい川辺』のヒキガエルからホビットまで、登場人物（動物）の永遠の新しさと、物語の中での豊かな表現力の効果について心理学的洞察も交え論じている。巻末に書名・著者名・登場人物・キーワード等の総合索引がある。著者はカナダ、プリテッシュ・コロンビア大学英語教授。他に *The world of the Irish wonder tale: an introduction to the study of fairy tales*, Univ. of Toronto Press などの著書がある。

Worlds within. Children's fantasy from the middle ages to today. By Sheila A. Egoff. Chicago, American Library Association, 1988. xi, 339p. 24cm (YZ-930-B95)

英語圏のファンタジーについて、中世から現代までを論じた研究書。10章で構成。第1章ではファンタジーのルーツからファンタジーをカテゴリーに分けて概観し、以後、中世～ヴィクトリア朝、ヴィクトリア朝、エドワード朝、1930年代～1980年代とほぼ10年間隔に章立てして論じている。375以上の作品を取り上げているが、絵本、翻訳はとりあげていない。巻末に各章でとりあげた作品の書誌および索引が付されている。邦訳書『物語る力：英語圏のファンタジー文学：中世から現代まで』酒井邦秀ほか訳 偕成社 1995.7 613,48p. 著者はカナダのプリテッシュ・コロンビア大学、図書館・古文書・情報学部名誉教授。編書に児童文学に関する評論を集めた *Only connect : readings on children's literature*. Oxford University Press, 1969 邦訳『オンリー・コネクト』岩波書店 1978-80などがある。

【論文集】

Worlds enough and time : explorations of time in science fiction and fantasy / edited by Gary Westfahl, George Slusser, and David Leiby. Westport, Conn. Greenwood Press. 2002. vi, 198 p. 25 cm. (Contributions to the study of science fiction and fantasy, no.101) Includes bibliographical references (p. [167]-184) and index. (YZ-909-B111)

SFおよびファンタジーのテーマである「時間」について考察した論文集。「時間の矢」、「タイムスケープ」、「タイムカプセル」の3章に分けて14編を掲載。言及されているのはヤングアダルトや大人向けの作品がほとんどだが、「ドラえもん」と日本文化を扱った論文も含まれている。「時間とタイムトラベルに関する書誌」を、1. 小説・短編、2. 映画・TVプログラム、3. ノンフィクション・評論に分けて収載。巻末に執筆者の簡単な略歴を付す。

Elsewhere : selected essays from the '20th century fantasy literature : from Beatrix to Harry' International Literary Conference / edited by Deborah Bice. Lanham, MD University Press of America c2003. xxxii, 134 p. 22 cm. Includes bibliographical references and index. (YZ-909-B116)

2002年3月22、23日、アメリカ・オハイオ州アシュタブラで開催された国際会議「20世紀のファンタジー：ビアトリクスからハリーまで」における講演集。「記号意味論と意味」、「ハリー・ポッターへのアプローチ」、「物語を共有する」、「神話・伝説再訪」の4章に分けて、子どもとヤングアダルト向けファンタジーに関する12編の論文を掲載。巻頭論文には、『ザ・ギバー：記憶を伝える者』の著者ロイス・ローリーによる会議の基調講演を収録。巻末に執筆者の略歴を掲載。

ファンタジー関連書と図書リスト

請求記号	タイトルと責任表示	シリーズ	出版者	出版年
YZ902-アナ	あなたに贈るっておきのファンタジー ／ マーブルブックス 〓 編	マーブルブックス； 10	マーブルトロン：中央 公論新社	2002.2
YZ933-イワ	イギリス・ファンタジーへの旅 〓 著 岩野礼子 〓 著		晶文社	2000.7
YZ930-サク	イギリス7つのファンタジーをめぐる旅 〓 さくまゆみこ 〓 著, The fantasy land		メディアファクトリー	2000.2
YZ930-ヤマ	英国ファンタジー紀行 〓 山内史子 〓 文 〓 松隈直樹 〓 写真	Shotor travel	小学館	2003.10
YZ376-ウチ	さっこからファンタジーへ 〓 内田仲 子 〓 著		新曜社	1986.4
YZ371-モリ	子どもとファンタジー 〓 守屋慶子 〓 著		新曜社	1994.7
YZ909-ブリ	図説ファンタジー百科事典 〓 デイヴ ィッド・プリングル 〓 編 〓 井辻朱美 〓 日本語版監修		東洋書林	2002.11
YZ909-ヒカ	ひかわ玲子のファンタジー私説 〓 ひ かわ玲子 〓 著		東京書籍	1999.8
YZ028-イシ	ファンタジー・ブックガイド 〓 石堂 藍 〓 著, Guide to Fantasy world		国書刊行会	2003.12
YZ913.6-フナ	ファンタジの祝祭 〓 舟崎克彦 〓 著		文化出版局	1981.6
YZ376-アソ	ファンタジーと現実 〓 麻生武 〓 著	認識と文化；4	金子書房	1996.11
YZ909-アン	ファンタジーと歴史的危機 〓 安藤聡 〓 著		彩流社	2003.1
YZ909-スギ	ファンタジーの系譜 〓 杉山洋子 〓 著		中教出版	1979.6
YZ909-ファ	ファンタジーの諸相 〓 白百合女子大 学大学院猪熊葉子ゼミ編集委員会 〓 編, Aspects of fantasy		白百合女子大学児童文化 研究センター	2001.2
YZ909-イツ	ファンタジーの森から 〓 井辻朱美 〓 著		アトリエOCTA	1994.7
YZ930-トル	ファンタジーの世界 〓 J. R. R. ト ーキン 〓 著 〓 猪熊葉子 〓 訳		福音館書店	1973
YZ913.6-サト	ファンタジーの世界 〓 佐藤さとの 〓 著	講談社現代新書	講談社	1978.8
YZ901-イケ	ファンタジーの世界 〓 池田紘一, 眞 方忠道 〓 編		九州大学出版会	2002.3
YZ909-ライ	ファンタジーの大学 〓 ライクウォー ター 〓 編	マイカレッジライブラリー	ディーエイチシー	1995.5
YZ909-セル	ファンタジーの伝統 〓 ロジャー・セ ール 〓 著 〓 定松正 〓 訳		玉川大学出版部	1990.10

YZ909-コハ	ファンタジーの発想 / 小原信 著	新潮選書	新潮社	1987.3
YZ909-ロダ	ファンタジーの文法 / ジャンニ・ロダリー 著 / 窪田富男 訳		筑摩書房	1978.5
YZ983-ゴゴ	ファンタジーの方法 / ユーレイ・マン 著 / 秦野一宏 訳		群像社	1992.5
YZ901-コタ	ファンタジーの冒険 / 小谷真理 著	ちくま新書	筑摩書房	1998.9
YZ909-イツ	ファンタジーの魔法空間 / 井辻朱美 著		岩波書店	2002.12
YZ909-カワ	ファンタジーを読む / 河合隼雄 著	講談社+α文庫	講談社	1996.11
YZ909-クド	ファンタジー文学の世界へ / 工藤左千夫 著		成文社	1992.10
YZ901-アト	ファンタジー文学入門 / ブライアン・アトベリー 著 / 谷本誠剛, 菱田信彦 共訳		大修館書店	1999.3
YZ726.5-ファイ	フィンランド・ファンタジー / 北九州市立美術館, サントリーミュージアム「天保山」, 芸術の森美術館 編, Finnish fantasy		フィンランド美術展実行委員会	1997.11
YZ909-マホ	魔法のファンタジー / ファンタジー研究会 編	てらいんくの評論	てらいんく	2003.5
YZ913.6-ミヤ-11	宮沢賢治とファンタジー童話 / 谷本誠剛 著	関東学院大学人文科学研究所研究選書 ; 4	北星堂書店	1997.8
YZ164-シユ	龍のファンタジー / カール・シューカー 著 / 別宮貞徳 監訳		東洋書林	1999.11

ファンタジー関係雑誌記事索引

【文学一般】

- 完全保存版「ハリー・ポッター」&ファンタジー映画特集 Moe. (増刊) [2004.7] Z11-1259
「ハリー・ポッター」の魅力を探る / 木梨 由利 金沢学院大学紀要. 文学・美術編. (2) [2004] Z71-J477
- 書評 安藤聡著『ファンタジーと歴史的危機』—英国児童文学の黄金時代 / 森 恵子
世界文学. (98) [2003.12] Z12-374
- 巻頭大特集「ハリー・ポッター」から「魔法道具占い」まで MOE特選・魔法ファンタジーガイド
MOE魔法図書館オープン Moe. 25 (7) (通号 285) [2003.7] Z11-1259
- 第2特集 460万部突破 小野不由美の壮大なファンタジー世界へ「十二国記」周遊 Moe. 25 (5) (通号 283) [2003.5] Z11-1259
- ファンタジーの「生きる力」—『千と千尋の神隠し』論序説 / 浅野 俊和 児童文学論叢. (8) [2003.3] Z12-B164
- 第2特集 おぼけ&モンスター・ファンタジー 真夏の夜の夢物語 Moe. 24 (9) (通号 275) [2002.09] Z11-1259
- 巻頭大特集 最高傑作ファンタジー『指輪物語』映画化記念!「ロード・オブ・ザ・リング」ファンタジーの魅力 Moe. 24 (4) (通号 270) [2002.04] Z11-1259
- 第2特集 あなたはどんな架空世界が好き Z11-1259
- マーク・レモンによるファンタジー作品の先駆性 / 三宅 興子 梅花女子大学文学部紀要. 児童文学編. (通号 36) [2002] Z12-565
- フランツ・ブレンターノのファンタジー論 / 原 幸子 聖心女子大学大学院論集. 23 [2001.7] Z12-433
- 動物ファンタジーの先駆的作品としてのFabulous Histories—こまどりの擬人化を中心に / 多田 昌美
梅花児童文学. (9) [2001.7] Z12-433
- Up from Jericho Telにおけるファンタジー的要素の意味 / 横田 順子 白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集. (通号 5) [2001.3] Z71-D163
- 演奏におけるdiscretion—「ファンタジーする」ために / 三島 郁 フィロカリア. (18) [2001.2] Z11-1488
- 温羅(うら)物語—ある神話的ファンタジーを求めて / 古田 足日 山口女子大学文学部紀要. (通号 1) [1991] Z12-939
- 昔話と児童文学の文体-2-創作民話からファンタジィへ / 谷本 誠剛 言語文化論集. (通号 31) [1990] Z12-407
- 川端康成作品のファンタジー性(表現価値) / 森本 正一 表現研究. (通号 49) [1989.03] Z12-83
- たたずむ場所—ファンタジー論のためのスケッチ / 脇 明子 子どもの館. 11 (3) [1983.03] Z13-1277

【外国文学】

- 特集 マーク・トウェインとファンタジー—マーク・トウェイン研究と批評. (3) [2004.4] Z71-G755
シンポジウム(特集 マーク・トウェインとファンタジー)—マーク・トウェイン研究と批評. (3) [2004.4] Z71-G755
- ファンタジー作家としてのマーク・トウェイン(特集 マーク・トウェインとファンタジー) / 渋谷 章
マーク・トウェイン研究と批評. (3) [2004.4] Z71-G755
- トウェインとファンタジー—その研究史と今後の課題(特集 マーク・トウェインとファンタジー) / 有

- 馬 容子　　マーク・トウェイン研究と批評. (3) [2004.4] Z71-G755
- トウェインの晩年を見て (特集 マーク・トウェインとファンタジー) — (シンポジウム) / 志村 正雄
 マーク・トウェイン研究と批評. (3) [2004.4] Z71-G755
- 論争 ファンタジー作家の条件を問う—有馬VS.後藤論争 (特集 マーク・トウェインとファンタジー)
 — (シンポジウム)　　マーク・トウェイン研究と批評. (3) [2004.4] Z71-G755
- コネチカットの呪われた城—モリス、トウェイン、ウェルズ (特集 マーク・トウェインとファンタジー)
 — (シンポジウム) / 小谷 真理　　マーク・トウェイン研究と批評. (3) [2004.4] Z71-G755
- マーク・トウェインの天国—1905年から1906年を中心に (特集 マーク・トウェインとファンタジー) —
 (シンポジウム) / 有馬 容子　　マーク・トウェイン研究と批評. (3) [2004.4] Z71-G755
- メイル・マザーの「声」—フェミニスト・ファンタジーとしてのInterview with the Vampire / 原田
 寛子　　英米文学. 48 (1・2) [2004.3] Z12-34
- 狂った言葉のファンタジー—クノー『わが友ピエロ』における「見る」と「言う」/ 中里 まき子　　仏
 語仏文学研究. (29) [2004] Z12-960
- イギリス・ファンタジーの系譜 ハリー・ポッターはどこから来たか (特集Ⅰ ハリー・ポッターのイギ
 リス) — (ハリー・ポッターから読むイギリス) / 富山 太佳夫　　英語教育. 52 (8) (増刊) [2003.10]
 Z12-54
- 書評 有馬容子著『マーク・トウェイン新研究—夢と晩年のファンタジー』/ 和栗 了　　アメリカ文学
 研究. (40) [2003] Z12-377
- 英語を遊べば英語が身につく (3) 絵本作り:ことばのファンタジー・ワールドへ / 原田 昌明　　英語
 教育. 51 (4) [2002.6] Z12-54
- ミステリとファンタジーのすすめ (特集 英語教師のためのブックガイド) — (英語で読んで楽しもう)
 / 宮脇 孝雄　　英語教育. 51 (2) [2002.5] Z12-54
- アンチ・ファンタジーの世界—Christina RossettiのSpeaking Likenessesについて / 高橋 美貴　　試論.
 (30) [2002] Z12-327
- 動物物語とエピック・ファンタジー / 本多 英明　　相模英米文学. (20) [2002] Z12-815
- 『鐘の音』におけるリアリズムとファンタジー / 木原 泰紀　　福井大学教育地域科学部紀要. 第1部,
 人文科学. 外国語・外国文学編. (57) [2001.12.10] Z12-B167
- 人格変成能力としてのファンタジー—ミヒャエル・エンデの『はてしない物語』における過去の記憶の
 再構成について / 梅内 幸信　　九州ドイツ文学. (通号 15) [2001] Z12-748
- ヴェールを取る女性たち—アジア・ジェバル『愛、ファンタジア』/ 菅野 槇子　　仏語仏文学研究. (23)
 [2001] Z12-960
- ピクトルデュの館におけるファンタジー / 平井 知香子　　関西外国語大学研究論集. (72) [2000.8]
 Z12-90
- ファンタジー世界への冒険旅行—ドイツ児童文学における「出発」と「帰還」のモチーフ / 神田 彩子
 独文学報. (16) [2000] Z12-664
- ダイアナ・W・ジョーンズのファンタジーにおける女性主人公の"negotiation" / 菱田 信彦　　川村英
 文学. (通号 5) [2000] Z12-B121
- ドイツ・ロマン主義における「意識」の問題—E・T・A・ホフマンの夢・ファンタジー・現実 / 中井
 千之　　上智大学ドイツ文学論集. (通号 36) [1999] Z12-143
- ロデリック・ファンタジア—世紀末の芸術家 / 秋山 義典　　Otsuka review. (通号 34) [1998] Z12-384
- 方法としてのファンタジー—A.GarnerとD.W.Jonesを中心に (特集:現代の英米児童文学) / 谷本 誠剛
 英語青年. 143 (1) [1997.04] Z12-55

- 南部/白人/男性的主体とファンタジー—『響きと怒り』から『アブサロム,アブサロム!』へ / 佐藤 久美子 英米文学. (通号 57) [1997] Z12-35
- 喪失のファンタジー—ボート・シュトラウスの『膨れ上がる山羊の歌』をめぐって / 内村 博信 ドイツ文学. (通号 96) [1996.03] Z12-28
- 「今どきの学校」と白い牡鹿—『ライオンと魔女』のファンタジー擁護論 / 成瀬 俊一 英文学思潮. (通号 69) [1996] Z12-46
- イエイツの劇評—4—リアリストとファンタジスト / 前波 清一 大阪教育大学英文学会誌 (通号 39) [1994] Z12-246
- 富のファンタジー—"The Diamond as Big as Ritz" ノート / 伊豆 大和 英語と英米文学. (通号 28) [1993] Z12-56
- ディキンソンの詩法—知覚・イメージ・ファンタジーの風景 / 中井 清 白山英米文学. (通号 13) [1988.03] Z12-387
- モダンファンタジーの現代性—アーシュラ・K.ル・グインの場合 / 金原 瑞人 武蔵野英米文学. (通号 20) [1987] Z12-187
- テイクの「シェイクスピアの不思議の取扱い」について—「ファンタジー」の概念を中心に (ロマン主義特輯) / 丸山 武彦 上智大学ドイツ文学論集. (通号 21) [1984] Z12-143
- ファンタジーの文学性 ([愛知大学] 英文科創設三十周年記念特輯) / 久野 佐都美 Poiesis. (通号 10) [1980.05] Z12-405
- Orlando: 事実とファンタジー—3— / 柴田 徹士 大阪学院大学外国語論集. (通号 4) [1977.09] Z12-372
- イギリス児童文学—ファンタジーの流れを追って / 滝田 紀子 和洋女子大学英文学会誌. (通号 13) [1975.12] Z12-157
- E.M.フォースターの牧神の笛—ファンタジーの水脈 / 杉山 洋子 英語青年. 121 (5) [1975.08] Z12-55
- ファンタジーにおける登場人物とことばについて—Winnie-the-PoohとThe House at Pooh Cornerの場合 / 橋本 紀美代 武庫川女子大学紀要. 英語・英米文学編. (通号 19) [1972.10.00] Z12-295
- D.ガーネットのファンタジー—Lady into Foxを中心に / 新保 昇一 英文学. (通号 20) [1962.01] Z12-315

国際子ども図書館で児童文学 （ファンタジー）を調べる

千代 由利



国際子ども図書館の機構

「国際子ども図書館で児童文学（ファンタジー）を調べる」という本題に入る前に、国際子ども図書館の機構についてご説明させていただきます。この講義終了後に、子ども図書館全館のご案内をいたします。お手元の配布資料の中にパンフレットが入っておりますが、それには当館の概要等が記されておりますが、機構は書いてありませんので簡単にご説明いたします。

国際子ども図書館は、企画協力課、資料情報課、児童サービス課の3つの課から構成されています。企画協力課は、総務・庶務全般、広報、企画を担当しています。利用者へのサービスを主に担当しているところが、資料情報課と児童サービス課です。当館の2階に第一資料室、第二資料室と2つの資料室があります。この2つの資料室は18歳以上の方にご利用いただくへやで、お子さんは入室できません。資料情報課は、この2つの資料室を中心に大人への利用サービスを行っております。児童への直接サービスを担当しているのが、児童サービス課です。児童サービス課は、1階にある子どものへや、世界を知るへや、おはなしのへやを中心に、子どもへの直接サービスを行なっています。2階はお子さんが入りませんが、1階と3階にあるミュージアム、メディアふれあいコーナー、ホール等はお子さんもお楽しみいただけます。私のいる資料情報課は、国立のナショナルセンターとして、調査研究機関や各図書館への本の貸出しやレファレンス・複写サービス等を担当しています。

国際子ども図書館の蔵書構成

国際子ども図書館は2000年5月に開館しました。もう5年目に入りました。ただし、全面開館して、資料をきちんと揃えてサービスを開始したのは2002年の5月です。ですからまだ2年半しか経っていません。皆さんは図書館の方ですので、子ども図書館の存在は知っていただいていると思いますが、どんな資料を所蔵しているかについては、詳しくご存知ないのではないかと懸念しております。日本の子どもの本は、たぶん全部あるだろうが、外国語の本はどうなのかと疑問をお持ちかも知れません。今日は、国際子ども図書館の蔵書の構成、特に外国語に力を入れて、資料をご紹介します。講座のテーマであるファンタジーにそくして資料を選びました。図書館の方たちに、当館を利用させていただくうえで、当館の品揃えを知っていただきたいと思い、そのお話をさせていただきます。

お配りした資料にそって進めていきます。国際子ども図書館の蔵書ですが、蔵書数は約30万冊。その内容は、図書23万冊、雑誌・新聞を含めた逐次刊行物が1,700タイトルです。国際子ども図書館のパンフレットの最後に、国際子ども図書館所蔵資料として、詳しい数字が出ておりますので、後で見いただければと思います。

<国内の児童書>

蔵書構成としては、国内刊行の児童書は、国立国会図書館法の納本制度に基づいて網羅的に収集しております。本館で収集、整理を済ませた上で、国際子ども図書館に入っております。内容的には、図書、教科書、教師用指導書、学習参考書、

雑誌、非図書資料です。非図書資料というのは、電子資料、映像資料、マイクロ資料、紙芝居、カルタです。

<外国の児童書>

外国の児童書は、選択的に購入、あるいは寄贈・国際交換等により収集しています。

国際子ども図書館の大きな目的の1つは、資料を通じて国際的な理解を深めてもらいたいということです。そのため、世界中のなるべく多くの国から資料を集める努力をしています。現在、約112カ国から39,808冊、これは2004年6月現在の数字ですので、現在はもうすでに4万冊を超えています。外国語児童書の収集方針は、各国の基本的な資料ということで、各国の権威ある協会や団体が推薦した作品、定評のある児童文学賞受賞作品などを中心に集めています。また、外国語に翻訳・刊行された日本の児童書は力を入れて集めており、ホームページ上で、「外国語に翻訳刊行された日本の児童書情報」として提供しています。現在、約5,000タイトルの情報を公開しています。また、日本語に翻訳された外国の児童書の原書も力を入れて集めています。雑誌は児童雑誌のほか、児童書関連雑誌を含めて、外国語の雑誌125誌を所蔵しています。

さらに、児童書のナショナルセンターとして、児童書・児童文化研究に資するために、児童書関連資料を選択的に購入、あるいは寄贈により収集しています。和図書、洋図書、雑誌が含まれています。これらを全部合わせますと、蔵書数が約30万冊ということになります。

帝国図書館時代の蔵書

古いところはどこまで持っているかと言いますと、レジメに〈旧帝国図書館時代の児童書〉とありますが、国立国会図書館の前身である帝国図書館の資料を継承しています。帝国図書館は、明治以降、近代日本の唯一の国立図書館として、国内で刊行された出版物を収集・保存していました。現在の納本制度とは違いますが、その当時の出版法制により、出版社が旧内務省に届け出たものの交付を受けるという形で収集してきたものです。

この中に児童書も含まれており、国立国会図書館に引き継がれました。

レジメに書いてありますように、帝国図書館では資料が入ってきますと、資料を大きく甲、乙、丙部と分けていました。甲部というのは一般の資料で、利用・保存の価値があるもの、乙部というのは、今は利用価値が乏しいけれど一応保存しておき、その価値については後日の判断に待つ、丙部というのは、利用・保存の価値がないので1年間保存した上で廃棄する、という基準です。明治期は、児童書の大半が乙部に分類されていたので、箱積みになされ、閲覧には供されませんでした。この乙部と甲部の判断は、その後変わりました。きちんとした記録はありませんが、甲の範囲がだいぶ広げられたとされています。乙部にされた児童書は、国際子ども図書館が全面開館する時に、まとめて移管することができました。一方、甲部とされて一般の図書として扱われていた児童書は、全体の中から抜き出すことができませんでした。そのため、明治、大正、昭和前期の児童書の一部が、まだ国立国会図書館に所蔵されています。その数は2,000冊程度と思っています。本館に所蔵されています明治期から昭和前期の資料については、すでにマイクロ化が済んでおり、原資料の閲覧は原則として制限されています。

帝国図書館、あるいは国立国会図書館になっても、児童書はそれほど重視されておらず、積極的な収集は行われていませんでした。そのため、未収になっているものもたくさんあります。それを調査して積極的に集めているところです。

児童書の定義

国立国会図書館の児童書はどのようなものかを、簡単にご説明します。

18歳以下を対象として出版された図書を児童書としています。レジメの2ページ目にあります、児童書を判断する基準は、日本図書コードの分類コードを参考にしています。ISBNの最後にC以下の数字が4桁ありますが、その最初の数字が8(8000番台)の場合は販売対象が児童ということで、これを児童書としています。もちろん整理する際には、内容を見て、ルビの有無や、帯の宣伝

文句などを参考にして総合的に判断し、児童書と一般書とに分けています。ボーダーラインのところは難しいのですが、基準はそうになっています。

国立国会図書館児童書分類表

当館で使っている児童書の分類ですが、レジメにありますように、Y1からY18、Y31、Y311、Y411というように、頭にYの付いた分類記号を使っています。Y1からY12までは、内容、主題で分類したものです。国立国会図書館の一般の分類に比べれば、大変簡単な分類になっています。Y13からY18については、資料種別で分類しています。Y31が学習参考書、Y311が学校教科書、Y411が教師用指導書。次のYKG、YNZ、YLZは非図書資料の分類です。紙芝居、カルタ、映像資料等に付しています。児童雑誌のうち和雑誌についてはZ32を使っていますが、これには、例えば、マンガ雑誌や週刊誌類があり、児童雑誌はこの中のほんの一部です。当館にきているものは、児童用雑誌として出されたものですが、まだ本館に残っているものもあります。洋雑誌にはY57を付しています。

児童書や児童文化を研究するための関連資料には、国際子ども図書館では、配架のために国立国会図書館の分類ではなく、NDC分類表第9版に準拠した分類記号を付け、ローカル請求記号として使用しています。例えば、(YZ-930-サダ)のように、YZを付け、次に十進分類法(NDC)を付け、その次に著者名のカタカナ2字を取り、これをローカル請求記号としています。資料は、第一資料室、第二資料室に開架して、利用に供しています。以上が、国際子ども図書館の蔵書構成および分類についてです。

国際子ども図書館の特色あるコレクション

蔵書構成はおわかりいただけたかと思いますが、次に国際子ども図書館のコレクションについてご説明していきたいと思えます。最初に申し上げましたように、日本語が一番大きいコレクションですが、ここでは、皆さんがあまりご存知ないと思われる外国語のコレクションについて、ご説

明させていただきます。池田宣政コレクションのように日本語と外国語の両方から成っているものもありますが、コレクションとしてご紹介させていただきます。

特別コレクションが2つあります。イングラム・コレクションと池田宣政コレクションです。イングラム・コレクションには分類記号VZ1を、池田宣政コレクションにはVZ2を付して、通し番号を付けています。

イングラム・コレクション

イングラム・コレクションは、レジメの3ページに詳しく書きましたが、主として18から20世紀のイギリスの児童書1,157冊から成っています。一番多いのは20世紀の670冊です。19世紀、20世紀が中心です。イギリスのヘレフォード大聖堂主教座名誉参事会員エドワード・ヘンリー・ウィングトン・イングラム師という、大変長い名前の方のコレクションで、ヴィクトリア朝の道徳的、精神的価値観に沿った児童文学をテーマに19世紀後期から収集されたものです。後に、娘のコンスタンスに引き継がれて、ヴィクトリア朝の硬いものに加え、児童文学の古典、あるいは絵本にまで収集対象が広がられましたので、ファンタジーやフェアリーテイルというようなものも加えられたようです。古いものとしては、ロンドンで子ども向けの出版を最初に始めたジョン・ニューベリーが1780年に出した『リトル・キング・ピピンの物語』があります。これは初版です。これより前、1744年頃に『リトル・プリティ・ポケットブック』というものが出たのですが、当館には複製版しかないので、初版ということでこちらをお持ちしました。講義終了後これらを第二資料室に並べておきますのでご覧ください。ニューベリーは、児童書の出版を専門的に始めた人です。それ以前は、児童書という範疇がなく、子どもたちは、大人向けの絵入りの本を読んでいたのですが、ニューベリーは子どもが楽しめることを意識に入れて出版を始めたと言われています。こうした児童文学黎明期のものから、皆さんがよくご存知のルイス・キャロルやジョージ・マクドナルド、19世紀の挿絵画家で有名なウォーター・クレイン、ケイト・

グリーンウェイやランドルフ・コルデコット、こういう人たちの作品、また、ピアトリクス・ポターやケニス・グレアムなど、20世紀の代表的な作家・画家の作品が多数含まれています。順次ご紹介していきたいと思います。

こういう楽しい本もたくさんありますが、最初にイングラムが集めたのはヴィクトリア朝の精神的価値観に沿った硬いもので、数学、英語、地理、植物というようなものから、哲学、経済学などの教科書まで含まれています。ですから、このコレクションの作品を通してイギリス児童文学の流れをたどることができますし、教科書や教訓的な小説など、児童教育の歴史的研究、社会風俗研究などにも有用なユニークなコレクションだと思います。レジメに、参考資料が挙げてあります。『国際子ども図書館の窓 3号』に、神宮先生が「ウィニングトン・イングラムコレクションの魅力」というタイトルでお書きになっていらっしゃいます。読んでいただければ参考になるかと思います。また、このイングラム・コレクションは冒険小説が半数くらいを占めています。当館で2004年7月に『未知の世界へー児童文学にえがかれた冒険ー』という展示会を開きました。その中に、多数イングラム・コレクションの資料を展示しました。この展示会図録も参考になさっていただければと思います。これにも神宮先生がお書きになっていらっしゃいます。

池田宣政コレクション

2番目に池田宣政コレクションがあります。これは池田宣政、別のペンネームが南洋一郎で、本名を池田^{よしまさ}宣政と言います。宣政と^{のぶまさ}宣政とは漢字が違いますが、編集者が宣政を^{よしまさ}宣政と間違えたので、以後それを使うようになったと言われていいます。池田宣政の筆名で『形見の万年筆』『リンカーン物語』『野口英世』などの感動美談、伝記物を執筆する一方で、南洋一郎の筆名で『緑の無人島』『緑の金字塔』『バルーバの冒険』シリーズなど、特に大正から昭和にかけて人気のありました雑誌『少年倶楽部』を舞台に数多くの冒険小説を執筆して、戦前から戦後の少年・少女に非常に人気のあった作家です。語学にも優れ、翻訳も多数出版

しています。「怪盗ルパンシリーズ」は現在も出版されています。平成13年にご遺族から、著作509冊と執筆の参考にした資料、そのほとんどが洋書でしたが、全部で870冊の寄贈を受けました。状態もよく、大変貴重なコレクションです。資料の中には書き込みや付箋がたくさん残されています。執筆の参考にした洋書には、出版社や画家に指示したと思われるメモも残っています。『国際子ども図書館の窓 2号』にコレクションの紹介がございますのでご覧下さい。レジメにも、池田宣政コレクションの紹介を載せてあります。

チェコ児童書コレクション

次に、かなりまとまったコレクションとしてチェコの児童書コレクションをご紹介します。2003年に購入しました、言語学者で先ごろ亡くなられた千野栄一先生旧蔵の20世紀後半を中心としたコレクション約600冊が中心になっています。また2002年に、昔話や絵本、創作童話を中心とした20世紀前半、1901年から1950年までのチェコの児童書約200点を購入しました。合わせると約850点になります。チェコのエルベン、ニエムツォヴァーやジーハの代表的な作品が含まれております。千野先生のコレクションには、20世紀チェコスロバキアの児童書専門の出版社アルバトロスの前身である国立児童書出版社（プラハのアルバトロス社とスロバキア・ブラティスラヴァのムラデン・レター社）の児童書が大変多く含まれております。また、チェコの児童文学の古典『ほたるっこ』の各版が約20冊含まれております。その他ラダ、ジェザーチ、チャベックなど有名作家のものが多数含まれています。昨年購入し、まだ整理が3分の1くらいしかできていません。これらの資料をご覧になりたい場合には、児童書総合目録で確認の上ご利用ください。

ロシア語児童書コレクション

当館の大きなコレクションとして、4,500点に及ぶロシア語児童書コレクションがあります。1999年に亡くなられたロシア児童文学の翻訳・研究家田中かな子さんの、絵本を中心としたロシア語の児童書コレクションを購入いたしました。

1917年のソ連革命以降の児童書約3,700点から成っています。単行本の多くは、国立の児童文学出版所から出版されたものです。内容は田中さんが大変興味をもっていらした昔話やフォークロアが豊富で、当時15の共和国、100以上の民族からなっていたソ連邦の昔話やフォークロアが半数以上を占めています。ソ連邦では1920年代、文字の読めない子どもたちの啓蒙と教育のために、多くの芸術家がアヴァンギャルドの実験的な試みによる斬新なデザインの絵本をたくさん生み出しました。1930年代の後半になりますと国家統制が厳しくなり、こうした自由な雰囲気の中で生まれた絵本は消えていってしまうのですが、1970年代になり、その価値が見直されて、特に斬新なものを除いて復刻されました。これらが、田中コレクションにたくさん入っています。最近、これら1920年代から30年代のロシアの絵本がクローズアップされています。芦屋の市立美術館に81点ほど所蔵されており、それを基に、沼部信一氏のご自身の蔵書も含めて、「幻のロシア絵本」展を、芦屋市立美術館、東京都の庭園美術館等で開催されたことは、皆さんもご存知かもしれません。これは庭園美術館の時の図録です。現在、全国を巡回展示中です。来年、北海道や九州でも開催予定とのこと。なぜ、幻かというと、20～30年代の絵本が迫害を受けて30年代以降は消えてしまったということ強調したものです。しかし消えたという考え方をとらない説もあります。

たまたま今年、当館でもこの時期の絵本161点を、ほとんど庭園美術館の展示資料と重複しているのですが、買うことができました。また去年1900年代はじめの、イワン・ピリーピンやナールプトなどの大変華麗な絵本をまとめて買うことができました。これらを取り揃えて、来年4月から「ロシア児童書展」（仮称）を開こうと思っています。その時に内容をご紹介しますのでどうぞ楽しみにお待ちください。田中かな子コレクションについては、『国際子ども図書館の窓 4号』に詳しい説明が載っていますのでご覧下さい。

もじゃもじゃペーターコレクション

最後に、大変ユニークなものとして、「もじゃ

もじゃペーターコレクション」があります。ドイツの医師ホフマンが、1845年に、息子のために自作の絵を添えた絵本を刊行し、大変売れました。ただ、教訓的な意味合いが強い、また残酷だという意見もあり、児童文学界のみならず、児童教育の分野で話題になった本です。19世紀の刊行以来世界中で話題になり、版を重ねるとともに、各国で大変面白いパロディ版が出ています。これを71点購入しました。これについても、再来年の3月以降になると思いますが、ドイツの児童書ということで展示会を開催する予定です。

ロシア語児童書は購入したばかりで、未整理です。まだご利用になれません。もじゃもじゃペーターの方もまだ整理ができていませんので、展示会後までお待ちください。

洋雑誌コレクション1ー『セント・ニコラス』

洋雑誌のコレクションの中に、昨年購入した『セント・ニコラス』という雑誌があります。これがその創刊号です。かなり傷んでいてお返しはできませんが、後で展示します。日本名でいえばサンタクロースという名前ですが、アメリカで1873年に刊行された児童雑誌です。1巻1号から、少し欠号がありますが、1939年まで揃えることができました。なかなか楽しい本です。これは整理ができていますのでご利用下さい。1873年から1943年まで70年間にわたって刊行された有名なアメリカの児童雑誌です。

1870年にアメリカのチャールズ・スクリブナー社が、当時有名な文芸誌*Harper's Monthly*や*Atlantic Monthly*に対抗して、保守的で健全で、しかも人気のある雑誌を目指して*Scribner's Monthly*を刊行しました。後に会社名が変わり、*The Century*という名前になります。この雑誌が中・上流階級に人気が出たことに勢いを得て、1873年11月に、*Scribner's Monthly*のコンセプト、構成をそのままに、また*Scribner's*の作家、画家をそのまま起用して児童向けの雑誌を刊行しました。これが『セント・ニコラス』です。当時すでに編集経験もあり、『銀のスケートぐつ』を書いて名声を得ていたメアリ・メイプス・ドッジを編集長に迎えて発行しました。発行部数は、親会社

の力を入れた宣伝、保護を得て4万部、後には7万部という大量の発行部数を維持していました。また、競争相手の児童雑誌を次々に買収して、その寄稿者、読者をも取り込んで大きな成功を取めました。

『銀のスケートぐつ』は、読んでいただくと大変面白いのですが、おそらくこれが初版だと思います。こちらが翻訳書で、大変短いのでおそらく抄訳だと思います。これは原作ですが、池田宣政コレクションに入っていたものです。池田宣政は、先ほど申し上げましたように感動美談を書いた方ですので、大変感動的なお話として集めておられたのだと思います。日本では、石井桃子さんの翻訳が定番で、皆さんもよくご存知だと思います。最初は『ハンス・ブリンカー』で出て、今は『銀のスケートぐつ』で出ています。

メアリ・メイプス・ドッジは大変しっかりした編集方針を持っていて、しかも32年間という長きにわたって編集長として君臨しました。編集方針として2つありました。児童雑誌というものは、自然で楽しめるものであると同時に、理想と価値観をしっかりと伝える教訓的なものであるべきだ、ということです。この編集方針は、この雑誌のみならず、アメリカの児童書出版界にも大きな影響を残したということです。『オックスフォード児童文学百科』によりますと、ドッジは、同誌のコンセプトを「大人の雑誌の内容を、水割りのミルクのようにただ薄めたりしただけではいけません。それどころか、児童雑誌は他のものより力強く、真実で、自由奔放で、妥協のないものであることが必要です。その陽気なおしゃべりは鳥のさえずりでなくてはならず、澁刺さと温かい愛情、生きる喜びそのものでなくてはなりません。」と *Scribner's Monthly* で述べています。

バーネットの『小公子』は、最初にこの雑誌に連載されました。これが挿絵です。お回しいたしますので、付箋のところをご覧ください。それから、マーク・トウェインやオールcott、キプリングなど、有数の作家がこぞって寄稿していたという雑誌で、特に、質の高いフィクションで定評がありました。意外なところでは、新聞*に出ていたものですが、『沈黙の春』の作者で知られている

レイチェル・カーソンが1918年から22年にかけて投稿欄に5点エッセイを投稿し、入選しているそうです。(*「10代の草稿」 読売新聞 2004年7月3日夕刊)

非常に隆盛を誇った『セント・ニコラス』ですが、1930年代に入り、雑誌が大量生産され安い価格で流通するようになり、また編集方針の変更などの内部の混乱もあり、衰退をたどりはじめました。建て直そうと何社かに売却されましたが、1943年について70年間の歴史を閉じました。当館には1939年まで揃っています。売却を経て変質していく時代のものはありません。レジメの5ページに「誌名の変遷」として副題の変遷を掲載しています。2番目までは親会社の名前が変わっただけで中身にはそれほど関係がありませんが、3番目以降は売却の歴史で、中身もだいぶ変わったようです。参考文献を挙げてありますので、興味のある方は雑誌、論文等も含めてご覧ください。

洋雑誌コレクション2 - 『ボーイズ・オウン・ペイパー』『ガールズ・オウン・ペイパー』

もう1つ当館の大きい洋雑誌のコレクションに『ボーイズ・オウン・ペイパー』があります。ペイパーとして週刊で出され、10月から翌年の9月分までがアニュアルとしてまとめられています。1879年に創刊され、息が長く1世紀も続いたイギリスの児童雑誌です。

19世紀後半、産業革命を経たイギリスは、社会的な混乱もありましたが、経済的に潤ったということもあり、教育改革にも目が向けられ、フォスター法や教育改革法により、子どもたちの識字力が向上した時期でもありました。識字力の向上とともに、産業革命を経て労働者階級の子どもたちが、例えば、新聞配達や物売り、あるいは使い走りをするなどで小銭を稼ぎ、自分で本を買える力をつけていたということもあります。そうした子どもたちに向けた、ペニードレッドフルといわれ、1ペニーの雑誌あるいは単行本など非常に質の悪い低俗なものが大量に溢れていました。こうした低俗な雑誌が子どもたちに与える影響を心配して、宗教団体の宗教冊子協会が、1879年1月に、面白い物語、ためになる伝記、子どもたちが楽し

めるスポーツや冒険といった楽しみと知識をバランスよく配した絵入り週刊誌『ボーイズ・オウン・ペーパー』を1ペニーで刊行しました。冒険物語に熱中していた子どもたちは飛びつきました。10年間、50万部も売れ、競争の激しい少年雑誌業界で1世紀近くも刊行が続けられました。これに気をよくして『ガールズ・オウン・ペーパー』という少女向けの雑誌も出ました。これも大変きれいな、わくわくするような雑誌です。絵が多く、子どもたちは喜び、飛びついて買ったそうです。少年向けよりも人気があったと言われていました。これを聞くと思い出すが、大正時代に面白くてためになるを標榜して講談社が出した『少年倶楽部』です。大変売れ行きが良かったため、『少女倶楽部』と『幼年倶楽部』も出しました。『ボーイズ・オウン・ペーパー』と『ガールズ・オウン・ペーパー』に符合しています。当館にはアニュアル(年刊)が入っておりますが、中の一冊一冊は『ボーイズ・オウン・ペーパー』というタイトルです。1年間刊行後、きれいな装丁になってから買った方もいますし、1冊ずつ毎週買って、表紙と、表紙を綴じるための別売りのキットセットで、自分で表紙を付けて綴じるということもあったそうです。

19世紀のイギリスの少年たちにとって、海は憧れであり、海の向こうの国や植民地への憧れが心を沸かたせました。しかしながら、その背景には帝国主義や戦争があり、20世紀に入ると、雑誌の記事の中身もだんだん勢いを失っていきました。それとともに、組織内部の意見の不一致や、経営上の問題、コスト高、また事業拡張の失敗などもあり、雑誌は経営危機に陥りました。それでも1世紀続いて1967年まで刊行されましたが、とうとう廃刊に追い込まれました。レジメに簡単な説明が載っていますのでご覧ください。

ファンタジー作品一コレクションの中から

＜ルイス・キャロル＞

当館のコレクションについて概略説明させていただきました。少しつまみ食い的になりますが、当館所蔵資料の中から、代表的なファンタジー作品を選び、なかなか他では見られない初版や、珍

しい資料をご紹介します。

あまり、系統だっではないませんが、最初はルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』です。1866年にマクミラン社からテニエルの挿絵入りで初版が出ました。これはその3年後、1868年に出た第3版です。初版と同じクロス装丁でテニエルの絵もそのまま初版と同じです。これが珍しいのは、後ろの方に、所有者のものだと思いますが、キャロルが亡くなった時の訃報や、キャロルについての新聞切り抜きなどが貼ってあることです。

こちらは1886年刊行のもので、ずっと人気があり、初版刊行後20年を経ても第3版とまるっきり同じ形で、何刷りも出続けたものです。『オックスフォード児童文学百科』によりますと、この後1887年12月にマクミラン社は版を組み直して普及版を出したということです。たぶんこれが最初の形の最後のものだと思います。

ルイス・キャロル自身による手稿本の*Alice's adventures under ground*です。こちらは残念ながらオリジナルではありません。複製版です。日本でも最近複製版『不思議の国のアリス オリジナル版』が出ました。日本語訳も付いています。リストにVZIと書いてあるのが先ほどご紹介したイングラム・コレクションです。Yではじまる請求記号のものは一般のコレクションです。これは一般のコレクションですけれど、テニエルのオリジナルの木版から直接複製したもので、なかなかよくできています。入手しやすいということでご紹介します。

それから、有名なアーサー・ラッカムの挿絵入り『不思議の国のアリス』です。ラッカムによるカラープレート13枚が収められています。稀覯本刊行会のようなところから75部だけ印刷されたもののうちの75部目です。寄贈を受けたものです。アリスはもっとたくさんありますが、面白いものだけをお見せしています。これは*Everyman's library children's classics*で、珍しくはありませんが、この中には鏡の国のアリスが入っていますのでお持ちしました。

『不思議の国のアリス』の本邦初訳についてご紹介したいと思います。レジメ(次頁)に絵が入っていますが、日本で初めて翻訳されたものは、実

業之日本社から出た明治時代の『少女の友』誌に掲載されました。これは、「トランプ国の女王」として明治41年3月に翻訳掲載されたものです。須磨子という翻訳者の名前が書いてあります。翻訳といっても翻案です。これが先ほどお見せしたテニエルの初版の絵で、こちらが翻訳の方に付いている絵です。面白いと思ったのは、テニエルの真似をしています、いかにも日本の植木屋さんという感じです。『少女の友』に連載後、大正元年に、『アリス物語』として単行本にまとめられました。永代静雄という人が、ここで初めて本名が名乗られているのですが、自分が34回に分けて

訳して、その頃創刊された『少女の友』の初号から続けて寄稿したとあります。紅葉堂書店から大正元年に単行本で出た時には、残念ながら挿絵は1枚も入っていません。単行本になってつまらなくなりました。

日本で次に古いものは、有名な楠山正雄の『アリスの夢』で、「不思議の国」と「鏡のうら」と、「鏡の世界のアリス」も一緒に入っています。これらが日本で早い時期に翻訳された「不思議の国のアリス」です。

「鏡世界」、「鏡の国のアリス」につきましては、1899年、明治31年『少年世界』に、本邦初の翻訳



テニエル絵



『少女の友』挿絵



テニエル絵



『少年世界』挿絵

が出ています。長谷川天溪が訳したもので1899年4月から12月まで連載しております。主人公が美イちゃん、12月で終わっていますが、『子どもの本・翻訳の歩み事典』によりますと、「ナンセンスのおもしろさを伝えきれず途中で終了。原作を精巧に模した挿絵」ということです。お手元にあると思いますが、先ほどのように日本風に翻案したものではなく、本当によく描いてあります。こちらがテニエルの挿絵で、こちらが『少年世界』に連載された方です。よく見ると表情が違うとか、ねこが少しぎこちないとかありますが、大変よく真似てあると思います。『少年世界』は一部復刻が出ています。

<ジョージ・マクドナルド>

ジョージ・マクドナルドの「北風の向こう側」は、子ども向けの最初の作品であり、イギリス児童文学の傑作と言われています。こちらは1890年に出たものです。『子どもの本・翻訳の歩み事典』によりますと、長編でやや難解であったということもあり、翻訳は、昭和43年に「世界の名作図書館」が、初めてのようです。この中でもまだ一部省略した訳で、この後『マクドナルド翻訳全集』で初めて完訳が出たというものです。

もう1つは、「王女とゴブリン」です。『マクドナルド全集1』に入っています。こちらが、*The princess and the goblin* の原作です。

<ケニス・グレアム>

ケニス・グレアムに移ります。名前のカタカナ表記は、『オックスフォード世界児童文学百科』に拠りました。『夢みる日々』(*Dream days*) が最初の短編集です。これが初版です。挿絵が付いておりません。こちらは1962年の第5版の複製ですが、シェパードの絵が入っています。全部影絵のようです。初版の時には絵がなく、絵が入ってから人気が出てきたと言われています。日本では、全編が訳されているわけではなく、短編集に収録されたものの中から、全部調べきれないかもしれませんが、『ものぐさドラゴン』、『おひとよしのりゅう』が出されています。ここに、『ものぐさドラゴン』があります。『おひとよしのりゅう』

の方は、現在開催中の展示会に展示してありますので、そちらでご覧ください。

それから、『黄金時代』があります。これは版が大変たくさんあり、全部シェパードの楽しい絵が付いています。シェパードの絵で売れ行きがいいので、いろいろな版が出されたのだと思います。装丁もいろいろのものが出ています。レジメに、マクミラン版初版の複製やテニエルのオリジナル木版からの直接複製と書いておきましたが、中身は大きく違いません。

それから、有名な『たのしい川辺』です。これも最初1908年に出た時には挿絵がなかったらしいです。ここにあります (VZ-464) は、1954年に出た初版の複製です。初版の複製といいながら、初版以後入れられた挿絵が全部入っています。

1931年に挿絵入り初版がイギリスで出ました。シェパードの挿絵が入ることによって人気が出始め、古典的な地位を獲得したと言われています。1953年にアメリカのスクリブナー社が出しました。このスクリブナー版には、イギリスで刊行された時に入っていなかった絵が6枚入っています。最初、画家は絵をたくさん用意していたらしいのですが、1931年にイギリスで出版される時に割愛されてしまったそうです。それで、アメリカで出す時に、画家自身が是非入れて欲しいと要望し、しかも新たに描き直して6枚入れたということです。この付箋部分が後から入ったものです。1931年のものを所蔵していないので、見比べることができないのですが、そうした6枚が入っている大変珍しい版です。

The wind in the willows は、アーサー・ラッカムが挿絵を描いたものです。これも寄贈いただいたものです。資料によりますと、「この愛すべき物語の挿絵を手がけることを切に望んだアーサー・ラッカムが彼の挿絵画家としての経験を全て注ぎ込んで描きあげた図版を付した本」となっています。1951年刊の復刻版です。きれいな挿絵がたくさん入っています。こちらは、復刻版の復刻版。復刻版は稀観書的なものですが、こちらは簡単に入手できるものです。

日本語の翻訳ですが、これ（『たのしい川邊』Y9-N03-H244）が、最初の中野好夫の翻訳で、

1940年に出たものです。当館未収のものは積極的に収集を始めたことは先ほど申し上げましたが、これはそのようにして去年購入できたものです。当館が部分開館した時に、記念展示会として「子どもの本・翻訳の歩み展」を開催しました。その図録を発展させた形で、『子どもの本・翻訳の歩み事典』が出ています。この段階ではこの資料(中野好夫訳『たのしい川邊』)は、大阪国際児童文学館にしかなかったのですが、去年当館にも入りました。その後は、石井桃子訳が定番になっていると思います。戦後にはじめて出たのは、英宝社から『ヒキガエルの冒険』として出ています。その後、『たのしい川べ：ヒキガエルの冒険』となっていると思います。

<ビアトリクス・ポター>

皆さまよくご存知の、ビアトリクス・ポターに移ります。これは『きつねどんのおはなし』の初版です。

こちらは、*The tale of the faithful dove*の初版です。これが日本語版です。文章はポターが書いたのですが、挿絵を描かないままでした。生前は部分的に刊行されただけで、1971年になって初めて刊行されたものです。

『ずるいねこのおはなし』は、1906年に既にお話も絵も書いていたのですが、子どもたちへのプレゼントとして個人的に書いたもので、いきさつがあり、単行本としての刊行はこれが初めてだそうです。そのいきさつがここに書いてあります。それは日本語版にも書いてありますので、皆さんもご存知かと思います。

いろいろご紹介したいものがあるのですが、時間がなくなりましたので、省略させていただきます。レジメにデ・ラ・メアの詩集なども入っています。後で第二資料室に並べておきます。

エレナ・ファージョンについては、*The silver curlew*。これは初版です。皆さんよくご存知の『銀色のしぎ』という翻訳が出ています。

<A. A. ミルン>

ミルンは、当館にもいろいろな種類の資料があります。これは4冊本で、イングラム・コレクション

ンに入っているものです。*Winnie-the-Pooh*の次が、「ぼくたちが小さかったころ」(*When we were very young*)、「プー横丁にたったいえ」(*The house at Pooh Corner*)、「6歳になったよ」(*Now we are six*)という4冊本のほかに、この立派なものがあります。4冊のように見えて実は箱入り1冊本です。なかなかきれいです。「クマのプーさん」の最初の訳は岩波から出たらしいのですが、残念ながら当館では所蔵していません。「子どもの本・翻訳の歩み展」図録掲載のものも個人所蔵ということです。その後、昭和25年に英宝社から出た初版は当館に入っていますが傷んでいます。昭和28年に英宝社から出たものもあります。初版ということでこちらの方が重要かと思ってお持ちしました。これが石井桃子の『クマのプーさん』です。

これがミルンの『昔あるとき』の原書です。有名な挿絵画家チャールズ・ロビンソンが描いています。翻訳は、大人の本扱いで本館にあります。

<J. R. R. トールキン>

かなり現代に近づいてきました。「ホビット」の初版です。これも箱入りです。去年の冒険展に展示しました。『ホビットの冒険』の瀬田貞二訳は、皆さんご存知かと思います。*The lord of the rings*「指輪物語」も3冊本の初版があります。翻訳は評論社から6巻7冊で出ています。

さらにフェアリーテイルまで含める形でファンタジー作品をご紹介していきたいと思います。

<グリム兄弟>

グリムはあまりイングラム・コレクションには入っていませんでしたが、これは、ヴィクトリア時代に大変人気のあった挿絵画家の一人、リチャード・ドイルの挿絵なので選んだものです。

<アンデルセン>

アンデルセンは19世紀のものが何冊かありましたので、古いところをお持ちしました。これが、デンマークのヴィルヘルム・ペーダセンの挿絵。アンデルセン童話の挿絵の古典と言われていいます。イングラム・コレクションではなく、一般の

洋古書として購入したものです。

それから詩集です。これはアンデルセンの生前に刊行された最後の詩集で、詩218編を収めています。この次にご紹介しますローレンツ・フローリックが描いたアンデルセンの全集3冊とともに池田宣政コレクションです。池田宣政氏がデンマークの収集家から贈られたものです。これについては、『国際子ども図書館の窓 3号』に記事がありますので、詳しくはそれをご覧ください。フローリックという人は、ペーダセンと同じ年に生まれて、ペーダセン没後はアンデルセン童話の挿絵を全て引き受けたといわれている人です。幻想的な挿絵が好まれたということです。

それから、これ（VZ1-30）は少し宗教的な感じもしますが、画家の名前はわかりませんでした。挿絵がたくさん入っているイングラム・コレクションのアンデルセンです。

ガスキンは、19世紀の挿絵画家で、ウィリアム・モリスとの出会いにより、ケルムスコット・プレスの影響を強く受けた画家です。この作品がもっともよく知られていて高く評価されているということです。

ハンス・タイナーです。タイナーは、はじめてアンデルセン童話集に彩色の挿絵を描いたということで有名な人ですが、残念ながらこれは彩色挿絵ではありません。ただ、タイナーの絵であるということと、たまたまですがチェコの出版物です。チェコ語で書いてあります。

『セント・ニコラス』の中から

最後に*St. Nicholas*に掲載された記事をご紹介します。ルイーザ・メイ・オルコットの、有名な「リトル・ウイメン」は載っていませんが、「8人のいとこ」は、この*St. Nicholas*に連載されて、それが単行本になりました。

それと珍しいのは、日本の村井弦斎の「紀文大尽」が、この*St. Nicholas*に出ています。最後の、「トム・ソーヤの外遊記」というのはなかなか面白いです。外国旅行をするトム・ソーヤということで、著者がハックルベリー・フィンのハックになっています。日本では、『名探偵トム・ソーヤ』という翻訳が出ております。こういったも

のが、単行本になる前に*St. Nicholas*に掲載されています。

こんなところで、コレクションの中のつまみ食いを終らせていただきます。

国際子ども図書館所蔵ファンタジー関係洋図書解題リスト

皆さまのお手元に、国際子ども図書館所蔵ファンタジー関係洋図書リスト、洋図書解題、和図書リスト、雑誌記事索引というリストをお配りしてありますが、全部を説明している時間がありませので、洋図書を中心にご説明させていただきます。たぶん公共図書館には、洋図書はあまり多くないかと思われますので、あまり興味がないかもしれませんが、利用者に何か聞かれた時に、国際子ども図書館にあったことを思い出していただくか、あるいは、レファレンスを受けた時、国際子ども図書館に聞けばわかるかもしれないと、思い出していただければと思います。総合的な事典や書誌は省略させていただいて、ファンタジーという件名とノンフィクションから、NDL-OPACで検索した当館所蔵の洋図書リストです。A4横の2枚、全部で3ページのもので、この中で網掛けしてある部分が、その後ろにお付けしましたファンタジー関係洋図書解題です。参考図書と、参考図書として使える研究書を11点ピックアップし解題を付したものです。

当館はまだ全面開館して2年半ですので、洋図書が充実しているとはいえません。ファンタジー関係もないものが多いかもしれません。ただ、ファンタジーがブームになってきたのは割合最近だということで少し救われています。ファンタジーで引きますと、外国の資料が、個々の作品を除いても、多数出てきます。外国ではそれほどファンタジーがブームです。子どものファンタジーに絞れば、それほど多くはないのですが、子どもか大人か区別のつかないものもありますので、使えるような参考図書を取り上げてみました。

<書誌>

1つは書誌で*Fantasy literature for children and young adults*。小学校3年生から高校生を対

象に、1900年から94年にアメリカで英語あるいは英語に翻訳されたファンタジー約4,800点を取めている解題書誌です。2部からなり、作品を寓話ファンタジーから魔法のファンタジーまで10のカテゴリーに分けて、著者名順に作品および読者の対象学年を収録しています。簡単なあらすじと書誌事項および書評掲載資料まで書いてあります。第2部はファンタジーに関する書誌です。参考文献、評論、作家研究などを掲載した研究ガイドで、巻頭に序論、1960年以降の代表的ファンタジー作品リストのほか、受賞作品リストも載っています。巻末に、著者とイラストレーター索引、書名索引、主題索引を入れています。第4版です。1989年に第3版が出て、その中から50年以上絶版の58タイトルは削除してありますが、削除したもののリストも出ています。第3版に1,500タイトル、研究論文6,700点を追加した膨大な書誌です。特に、この厚さで子どものファンタジーだけをとりあげていますので、相当詳しいと思います。

<事典・ガイド>

A Reference guide to modern fantasy for children。子ども向けのファンタジーを対象としている事典です。19から20世紀の英米の作家36名による、子ども向けファンタジーの中・長編の中から100余点を選びすぐって、作家、作品、登場人物、場所、魔法の小道具などを項目としてアルファベット順に配列し、簡潔に解説した事典です。キーワードから調べることができます。ただし、私たちがファンタジーとして取り上げてきた『不思議の国のアリス』は夢のファンタジー、厳密にいうとルイス・キャロルが夢の中のできごとにしてしまっているという理由で、ファンタジーとして認めないとして入っていません。SFも、『くまのプーさん』も短編ということで入っていません。『オズの魔法使い』についても、非常にたくさん論じられていて、研究書もたくさん出ているということで割愛されています。文献リストや年表や挿絵画家のリストがあり、参考図書として非常に役立ちます。あらすじが書いてあります。著者は、ファンタジーおたくという感じのユニークな人だと思います。

*St. James guide to fantasy writers*は作家別のガイドです。セントジェームズ社が、*St. James guide to Horror, Ghost, and Gothic Writers*をセットで出しますので、SFは入っていません。エドガー・アラン・ポーやスティーブン・キングなどは含まず、純粋にファンタジー作家400名を採録しています。主として、イギリスとアメリカで刊行された作品を網羅的に収録していますが、ペロー、グリム、アンデルセン、カルヴィーノ、オルノー夫人、エンデ、フーケなどの古典的なファンタジー作家11名については、外国語作家として後ろに別途掲載してあります。各項目は、詳しい伝記事項、作品リスト、評論で、署名入りです。現存作家については作家本人のコメントも付いています。映画化情報も掲載されています。非常に役に立つレファレンスブックです。

*Fluent in fantasy : a guide to reading interests*です。これは著者がファンタジー熱狂者という感じで、そうした観点から、ファンタジーを愛好する読者の興味を広げ、本屋さんや図書館員が、利用者に適切な助言ができるよう案内するガイドブックです。19世紀から1998年までに出版された作品を対象に大きく3部に分け20章からなっています。ファンタジーの定義や重要性、歴史の変遷を概観した上で、サブジャンルとして、剣・魔法・サガ・神話・伝説・妖精物語・タイムトラベルなど17ジャンルに分けて、代表的な作品を紹介しています。受賞情報もあります。さらに、推薦ブックリストという、特にヤングアダルト向けのものもあります。懇切丁寧なガイドブックです。

The science fiction and fantasy readers' advisory。アメリカ図書館協会のガイドブックです。*ALA Readers' Advisory Series*の1冊です。これも図書館員用で、大人の利用者に適切に助言ができるようにというものです。SFとファンタジーに分かれていて、どちらかというとSFの方によっています。(レジメには)ファンタジーのところだけ要約しました。ファンタジーとは何かというところから、古典的作品とどのジャンルにも属さない作品を論じた後、叙事詩的ファンタジー、歴史ファンタジー、ユーモラスなファンタ

ジーというように10章に分けて解説しています。種々の索引も付いていて、利用者から読書相談を受けた時に心構えを説いているところが印象深く面白いです。

例えば、SFやファンタジーに限りませんが、カウンターで、「これこれについて読みたい」と言われた時に、自分の得意分野であれば即座に答えられますが、知らない分野だと頭が真っ白になります。そういう時にはどうしたらいいかを、インタビューの形で具体的に説明しています。こんなぐあいです。

図書館のカウンターで、SFやファンタジーなど、あなたの苦手な分野について、利用者による本の推薦を求められ、頭が真っ白になったことはありませんか？何とか手がかりをみつけようとコンピューターをしきりにたたき始めたことは？そんな時には、こんな風に利用者に質問をして見ましょう。

「あなたが最近とても面白いと思って読んだ本は何ですか？」さらに「その本の、文章、設定、登場人物が気に入りましたか？」と付け加えるのもよいでしょう。

利用者の答えを聞き、このガイドで調べ、じゃあこれがいいですと答えられますという、本の宣伝がさりげなく入っています。

それからたとえばSFやファンタジーのファンは、同じ著者の本を読みたがる人が多いので、「同じ著者の本に他にこういうものがありますね」と言って少し時間をかせぐ。「その著者のものは全部読みました」と言われるかもしれません。そうしたら、「それは、たとえば何についてでしたか」というように、ジャンルや中身について聞いていく。それでまたこのガイドに戻り、ジャンルから調べ、回答します。

それでもダメな時は、古典的なものだったら間違いがないかもしれません。まず古典を挙げて、SFだったら「アシモフは読みましたか」と言って時間をかせぐか、「最近の受賞作品にはこんなものがありますか」と言ってみるなど。それでもお手上げの時は、図書館内には、SFとかファンタジーの大ファンの職員が必ずいるので助けを呼び、知恵を借りるというのも1つの方法

です。頭が真っ白になった時には、心を落ち着けてこんなことをやってみましょうというものです。

次には、図書館員としての心構えが説いてあります。

図書館員としては、これは苦手とは言えません。図書館員には利用者が求める適切な資料を提供しなければならないという使命があります。苦手とは思わずに1冊か2冊でも、話題になっているものを読んでみましょう。読んで自分が面白いと思ったものはノートをとりましょう。ノートは引き写しではなく、なるべく自分の言葉で書きましょう。それを何冊かためていきます。そして、同僚や詳しい友だちと話をし、それはとてもいい本だというようなお墨付きが得られたら、リストに入れていきます。ちょっとおかしいと言われたら、潔くリストから除外します。こうして、1冊でも2冊でも、とにかくノートをとっていくこと。同じ人に案内するわけではありませんから、ノートに3冊持っていれば、1冊ずつ3人に案内ができます。時間がかかるかもしれませんが、意見を聞きながらリストをふやしていきます。たくさんたまると、みごとあなたもブックトークができるようになります！

こうした大変面白いコメントが書いてあり、図書館員に有用です。

<書誌>

これは、Harold Bloomの、*Classic fantasy writers*と*Modern fantasy writers*です。有名な作家をそれぞれ14名、15名ずつ取り上げて、詳しい書誌を載せています。作家がわかっている時には、こういうものを使えば大変便利です。

<研究書>

あとは研究書ですが、参考書的にも使えるので紹介させていただきます。*Mere creatures*。20世紀に書かれた子ども向けのファンタジーの古典10作品を取り上げて、昔話や神話等との関係を論じたものです。後ろに総合索引があって、大変上手く使えるようになっています。

Worlds within。これは、英語圏のファンタジー

について、中世から現代までを論じたシーラ・イーゴフの研究書、邦訳が『物語る力』です。皆さんもうご存知かもしれません。歴史的に375以上の作品を取り上げています。絵本や翻訳はありませんが、大変詳しい面白い本ですので、是非読んでみてください。

それから、*Worlds enough and time*。これも論文集ですが、ファンタジーのテーマである「時間」、タイムファンタジーについて論じたもので、「ドラえもん」のどこでもドアなども載っています。

最後に、*Elsewhere*。これはファンタジーの国際会議の論文集です。面白いのは、Potter to Potter として Beatrix Potter から Harry Potter までを取り上げ論じているものがあります。

当館にあるものはほんの一部かもしれませんが、ご紹介できたのもほんの一部です。皆さんか

らご指摘があれば、揃えていきますので、お気づきのことがあったらお知らせください。

<雑誌記事索引・和図書>

NDL-OPACや児童書総合目録を使って、雑誌記事索引や和図書のリストも作りました。

ファンタジーが標題にあるものをリストアップしたものです。『ファンタジー文学入門』や『あなたに贈るとっておきのファンタジー』などは簡単に使えそうです。また、『ファンタジーブックガイド』も、あらすじが書いてあるので使えそうです。日本語の資料については説明を省略させていただきます。また、検索法については、明日、児童書総合目録の検索の講義があります。ご質問等がありましたらそこで聞いてみてください。

以上、脈絡のないお話でしたが、終りにさせていただきます。ありがとうございます。

(ちよ ゆり 資料情報課長)

児童書総合目録活用術

渡辺 和重

1. 概要

児童書総合目録 (<http://www.kodomo.go.jp/function/somoku.html>) は、国際子ども図書館、国立国会図書館のほか、日本国内で児童書を所蔵する主要類縁機関である大阪国際児童文学館、神奈川県立神奈川近代文学館、三康文化研究所附属三康図書館、東京都立多摩図書館、日本近代文学館、梅花女子大図書館の6機関が所蔵する児童書・児童関連書の所蔵情報を一元的に検索できる目録です。

また、児童書の専門書誌として受賞情報や解題情報（和図書の「あらすじ」は、(社)日本図書館協会の御協力により、同協会発行「選定図書総目録」所収データを収録）などもあわせて提供します。

平成17年4月4日現在、当目録に収録する書誌情報は下表のとおりです。

参加館	和図書	洋図書	逐次刊行物／ 雑誌記事索引
国立国会図書館	20737	422	1715
国際子ども図書館	168588	31048	1609
大阪国際児童文学館	14615	0	1160
神奈川近代文学館	12452	0	698
三康図書館	5570	0	33
日本近代文学館	3645	0	520
東京都立多摩図書館	108170	14108	845
梅花女子大学図書館	24776	11231	385
合計	358553	56809	6965

※国立国会図書館(国際子ども図書館を含む)の書誌データは定期的に更新されています。

2. 参加館と収録データの特長

ここでは国際子ども図書館を除く参加館の収録データの特徴を説明します。

① 国立国会図書館 (<http://www.ndl.go.jp>)

納本制度により原則として日本国内で出版されたすべての出版物を収集・保存する日本で唯一の国立図書館です。国立国会図書館全体(東京本館、関西館、国際子ども図書館)の所蔵資料(図書、雑誌、新聞、電子資料、古典籍資料、地図、音楽録音・映像資料、雑誌記事索引)が検索できるNDL-OPACが公開されています。国際子ども図書館で所蔵していない

<和図書・洋図書>児童関連図書
<和雑誌・洋雑誌>児童雑誌および児童関連雑誌
を児童書総合目録に収録しています。

- ② 大阪国際児童文学館 (<http://www.iiclo.or.jp/>)
大阪府吹田市にあるわが国最初 (since 1984) に設立された国際的な児童文学資料・研究・情報センターです。児童書総合目録には
<和図書>1950年までに刊行された児童図書
<和雑誌>1945年までに刊行された児童雑誌
を収録しています (1950～の和図書、1945年～の和雑誌および細目データの収録も予定しています)。最新の所蔵状況は大阪国際児童文学館で独自に公開しているOPACを検索する必要があります。
- ③ 神奈川近代文学館 (<http://www.kanabun.or.jp/>)
1984年に横浜市に開館した日本近代文学資料の専門図書館です。児童書総合目録には
<和図書>児童図書および児童文学関連個人文庫
<和雑誌>1999年までの児童雑誌および児童関連雑誌
を収録しています。ここも最新の所蔵状況は独自に公開しているOPACを検索してください。
- ④ 三康文化研究所附属三康図書館 (<http://www.f2.dion.ne.jp/~sanko/>)
「博文館」創設者の大橋佐平氏が設立を出願して、嗣子大橋新太郎氏により設立された大橋図書館の蔵書を継承して発足した図書館です (東京都港区)。児童書総合目録には
<和図書>「児童書目録」収録図書、竹田文庫および旧大橋図書館蔵書
<和雑誌>「児童書目録」収録雑誌
を収録しています。所蔵リストをWebで公開していますが、OPACは提供されていません。
- ⑤ 日本近代文学館 (<http://www.bungakukan.or.jp/>)
日本初 (since 1967) の近代文学総合資料館です。児童書総合目録には
<和図書>藤沢衛彦文庫、児童文庫および金井信生堂刊行図書
<和雑誌>児童雑誌および児童関連雑誌
を収録しています (和図書は今後収録予定)。Webでは雑誌のみ検索可能です。
- ⑥ 東京都立多摩図書館 (<http://www.library.metro.tokyo.jp/>)
東京都立図書館を構成する3館のひとつで立川市にあり、児童・青少年、文学、都政・多摩地域資料を中心とした情報サービスを行っている図書館です。児童書総合目録には
<和図書・洋図書>2001年までに整理した児童図書・児童書関連書
<和雑誌>2001年までに整理した児童雑誌・児童関連雑誌
を収録しています。最新の所蔵情報はWebで公開されている「都立3館の蔵書検索」をご利用ください。
- ⑦ 梅花女子大学図書館 (<http://www.baika.ac.jp/%7Elib/>)
大阪府茨木市にある、日本で最初に児童文学科が設置された大学の図書館です。

児童書総合目録には和・洋の児童図書、児童雑誌、児童関連資料を収録しています。今後児童関連雑誌記事索引も収録する予定です。

H17年度には白百合女子大学児童文化研究センター（白百合女子大学図書館の所蔵データも加わる可能性あり）が参加を予定しています。

3. 検索項目——検索のこつ

児童書総合目録にはキーワード検索と詳細検索の2つの検索方法があります。

<キーワード検索>

よく使われる以下の5項目で検索ができます。

検索項目	説明
タイトル	原文タイトル、シリーズ名、各巻タイトル、内容細目などからも検索できます。
著者	編者、訳者、画家も検索できます。
出版者	
件名	和図書は基本件名標目表（BSH）または国立国会図書館件名標目表（NDL-SH）、洋図書はLibrary of Congress Subject Headings（LCSH）で検索できます。
あらすじ	日本図書館協会発行「選定図書総目録」所収の「児童図書」に係わる解説情報データ（1950～）から検索できます。

<詳細検索>

キーワード検索の項目に加え、以下の項目で検索ができます。きめ細かな検索ができる反面、若干検索スピードが遅いです。

検索項目	説明
所蔵館	
出版年	範囲を指定して検索することができます。（*1）
出版国 出版 国コード	Library of Congressの国名コードで検索できます。（*2）
ISBN、ISSN	
分類（NDC）	NDC9版で検索できます。
分類（NDLC）	国立国会図書館分類表（NDLC）で検索できます。
対象利用者	“一般書・研究書”、“児童書一般”、“学習参考書”を指定できます。（*3）
賞名、受賞年	“赤い鳥文学賞”“野間児童文芸賞”など東京子ども図書館編「日本の児童図書賞」（1947-1981、1982-1986、1987-1991）所収の受賞情報から検索できます。“コルデコット賞”“ニューベリー賞”など外国の受賞情報も検索できます。

*1 和図書を検索する場合は、[検索対象]の[刊行年]を必ず指定してください。

*2 H16.12から検索できるようになります。

*3 今のところ“幼児（0-5歳）”など対象年齢を指定した検索はできません。

*4 「選定年」「選定種別」「選定者」「選定コード」「書評年月日」「書評掲載誌」の項目では検索できません。また、「禁止」の項目で“児童対象外”を選択しても検索することができません。

4. NDL-OPACとの比較——どちらを利用するか

NDL-OPACには国際子ども図書館の所蔵資料も収録されているので、NDL-OPACだけ検索すれば十分なのでしょうか。

		児童書総合目録	NDL-OPAC
収録データ	児童書	○（戦前に刊行された児童書の一部が含まれていない）	○
	関連書、逐次刊行物	△（主に国際子ども図書館が所蔵する資料）	○
	雑誌記事索引（学術雑誌）	×	○（採録誌のみ）
	雑誌記事索引（絵雑誌）	△（「こどものとも」「コードモノクニ」など一部の雑誌のみ）	×
検索項目	分類	NDC、NDLC	NDC、NDLCほか4種類
	標準番号	ISBN、ISSN	ISBN、ISSNほか18種類
	各種コード	国名コード（LC）	国名コード（ISO）、言語コードほか17種類
	あらすじ	△（「選定図書総目録」より）	×
	受賞情報	△（「日本の児童図書賞」に記載されているもの）	×
サービス	郵送複写	×	○（要利用者登録）
	関西館への取り寄せ	×	○（要利用者登録）

<児童書総目を検索したほうが良いケース>

- ・ 国立国会図書館以外の機関の所蔵状況も調べたい
- ・ 絵雑誌の各巻タイトルで検索したい
- ・ 児童書のあらすじで検索したい
- ・ 受賞情報で検索したい

<NDL-OPACを検索したほうが良いケース>

- ・ 戦前に刊行された児童書を検索したい
- ・ 児童文学の関連書を網羅的に検索したい
- ・ 大学紀要に掲載された児童文学の論文を検索したい
- ・ 検索結果から直接郵送複写を申し込みたい

5. その他

最後に児童書総合目録以外で役立つようなリソースを紹介します。

<アジア言語OPAC (<http://asiaopac.ndl.go.jp/>) >

国立国会図書館で所蔵する中国語・朝鮮語で書かれた雑誌・新聞、および1986年以降に整理した中国語、朝鮮語の図書が検索できます。児童書・児童雑誌も8366件収録されています。（平成16年3月現在）

<児童書デジタルライブラリー>

(<http://kodomo4.kodomo.go.jp/web/ippangz/html/TOP.html>)

国際子ども図書館・国立国会図書館で所蔵している昭和25年以前刊行の児童書の一部（323タイトル）について、全てのページをデジタル画像でご覧いただけます。

<国立国会図書館総合目録ネットワーク>

国立国会図書館および都道府県立、政令指定都市立図書館が所蔵する和図書の総合目録です。今のところ参加館からしか利用できませんが、今年度中に一般公開される予定です。

<国際子ども図書館のホームページ (<http://www.kodomo.go.jp/>) >

国際子ども図書館（第一資料室・第二資料室）に受け入れられた新着児童図書の情報 (<http://www.kodomo.go.jp/function/new.html>) や、海外においてさまざまな言語に翻訳刊行された日本の児童書の出版情報

(<http://www.kodomo.go.jp/function/honyaku.html>) を公開しています。

<NACSIS Webcat (<http://webcat.nii.ac.jp/>) >

国立情報学研究所（NII）が公開している全国の大学図書館等が所蔵する図書・雑誌の総合目録です。児童書や関連書も多数収録されています。

(わたなべ かずしげ 資料情報課副主査)

研究報告

イングラム・コレクションの魅力

神宮輝夫

初期の子どもの文学から

1. 教育論の本の重要性
2. 作家と作品

19世紀－物語の時代

1. 過去の遺産
2. 新しいフェアリーテイルへ
3. ロマン主義とフェアリーテイル

19世紀後半－物語の黄金時代

1. リアルな子どもたちの物語
2. ファンタジーの時代
3. 内なる子どもたちの時代

* 作品の後の（ ）内の数字は、初版の刊行年です。

* [例：VZ1-210] は、国際子ども図書館イングラム・コレクションの請求記号です。

初期の子どもの文学から

1. 教育論の本の重要性

中世のヨーロッパでは、帝王神権説などという主張がまかり通っていた。帝王の位は神から授けられたもの、つまり人間は生まれながらに身分が決まっているという考えである。そんな考えをひっくり返した人々の一人がイギリスの哲学者ジョン・ロック (Locke, John) で、彼は『教育論』(1693)の中で、子どもは生まれた時は白紙であると言って、子どもの理解に応じた教育をすすめた。この考えが、子どもの独自性を人々に認識させる力となり、子どものための文学の誕生と発展に大きな影響を与えた。

ご紹介するイングラム・コレクションの魅力の一つは、ロックの著書にも劣らない重要な教育論が見つかることである。

最初は、『ジョン・ミルトンの教育論』¹だろう。これは『失樂園』の作家ジョン・ミルトンが1644年に、ロンドン在住のポーランド人商人の息子にあてた手紙の形式で書いた教育論で、この論文を20年以上も研究し、紹介して註をつけたオスカー・ブラウニングは、つぎのように述べる。

ミルトンは、学習の目的について、神を正しく理解し直すことによってそれは人類最初の両親の罪を、償うことであるという原則から話し始める。神は、その御業においてのみ知り得るものであるから、我々は、知覚できる事物についての知識を通じて、徐々に、知覚できないもの、目に見えないものについての臆想にたどりつかなくてはならない。(xiii)

ミルトンは、学習は言語からはじまるのだが、その言語学習は、まず言葉と物の結びつきを知ることからはじめなくてはならないと説く。この考えは、モラビア生まれの教育者ヨハネス・アモス・コメニウス (1592-1670) の教育論とよく似ている。彼は、世界ではじめて、事物を絵と語彙の組み合わせで説明した、子どものための絵本百科『世界

図絵』² (1658) を出版した。

『かわいいポケットブック』³も、教育論を含んでいる。これは、18世紀イギリスの出版業者ジョン・ニューベリー (1713-67) が、教訓主義全盛期の1744年に「小さなトミー君と可愛いポリーさんの教育と娯楽を目的として」という説明をつけて出版したことで画期的とされる子どもの本だから、教育論も堅苦しい形式のものではない。ニューベリーは、巻頭で大人に向かい、子どもを育てる大目的は、子どもを強く、忍耐力ある、健康で高潔で聡明で幸せな人間にすることだと述べ、それぞれの特徴をいかに身につけさせるかを具体的にあげた。そして、当の子ども達に対しては、「巨人殺しのジャックからの手紙」という形で、子どもは、両親に対して従順で、朝夕の神への祈りで父母へのお恵みを祈らなくてはならない、言いつけられたことはきちんと実行しなくてはならない、遊び仲間をはじめだれに対しても親切でなくてはならない、早起きでなくてはならない、清潔にしていなくてはならない、勉強しなくてはならない、あやまちを正直に言って、あやまらなくてはならない、ののしり言葉を口にしてはならない、嘘をついてはならない、下品な言葉を口にしてはならない、よい忠告は喜んで従わなくてはならない、喧嘩や悪いことはしてはならない、などと実に具体的なアドバイスをしている。

もう一つ、これは、ほとんどの人が知らないだろうジョン・フリームの『聖書の教え』⁴をあげておきたい。これは「数節に分け、質疑応答形式で、敬神の念と美德を増進し腐敗墮落を戒めることを目的とする」と説明されている通りの本で、1810年に3版が出ているところを見ると、1800年代になって出版されたものと思われる。つまり、18世紀後半から強くなった教訓主義的傾向が、まだ続いていた時期である。そんな状況を考えると、この作者の教育、訓育に対する姿勢は、やはり注目すべきものである。彼は、おおよそ次のようなことを大人に説いている。

1. 両親は子どものよき手本でなくてはならない。
2. 夫婦は、意見が合わない場合、子どもの前でそれを論じ合わないようにする。子ども

たちについての細かいことなどは、彼らの前で議論してはならない。子どもの落度について、大人はどの子どもについても、同じ態度で処理しなくてはならない。

3. 両親の意見の違いは、両親の間だけで話し合うべきである。子どもが両親についてよい印象を持つと、それは長続きする。
4. 召使いは、信仰心があり、まじめで思慮深い、規律を重んじる人物を雇うべきである。
5. 子どもたちの意志は、全面的に大人の意志に従わねばならない。であるから、信心深くて優しい両親らしからぬこと、不合理なことは、子どもたちに要求してはならない。

これら教育論は、西ヨーロッパの子どもの文学が「教訓主義」の産物だった時代のものとしては、かなり革新的だと思う。

ミルトンの教育論については、編者のオスカー・ブラウニングが、1883年の復刻版のまえがきで、彼がイートン校のアシスタント・マスターになった時、このミルトンの論文が、当時の緊急課題について、教師たちの考えや意見を明確にする助けになると考え、多くの教師に読んでもらおうとして失敗したエピソードを紹介している。19世紀の教育改革者が、ミルトンの教育論を、なおも革新的と考えていたことがよくわかる。

ニューベリーの大人たちへのアドバイスなど、今もそのまま通用する合理的なもので、子どもに対する「ねばならぬ」も人間が身に備えるべき常識の範囲を超えるものではなく、また、19世紀初頭にジョン・フリームの言ったことなど、今にも堂々と通用する良識そのものではないだろうか。

もっとも、こうした考えは、ごく一部の人の進んだ意見であったことは否めないが、教訓主義一色のように見られる時代の様々な作品に、彼らと同じような人間観や教育論が流れ込んでいるだろうことは十分に考えられる。初期の子どもの文学を研究する場合、こうした資料は、重要な役割を果たしてくれる。

2. 作家と作品

①啓蒙主義思想の影響

子どものための最初の小説は、小説家セアラ・フィールディング (1710-68) による『少女のための小さな塾』⁵である。牧師の未亡人が亡夫の志を継いで自宅を寄宿学校として、14歳を頭とする9人の少女を預かって教育する物語で、9人の少女たちが自ら語る、学校へ来るまでの身の上話を中心になっている。「『少女のための小さな塾』は1749年に発刊されたが、児童文学史上高い地位を占めるに相応しい作品である。子どものための最初の長編小説として知られ、同時に最初の教訓小説、最初の学校物語、最初の教育小説でもある。初版のファクシミリ版には、ジル・E・グレイによる解説と伝記が加えられている。」というコレクション・カタログの解説がこの作品の性格をすべて語っている。

ファクシミリ版の解説は、この小説がフランスの神学者で『テレマックの冒険』(1699)の作者フェヌロンが1687年に発表し、『女子教育論』と、ジョン・ロックと、イギリス近代小説の創始者の一人サミュエル・リチャードソンの書簡体小説『パミラ、美德の報い』(1740)の影響を受けていることを指摘している。

この作品は、子どもの教育理念を愛と調和に置き、従順、誠実、慈悲心、積善、優しさ、端正な容姿服装、上品な態度物腰、知識の獲得、知性の向上などをすすめる、怒り、嘘、傲慢、溺愛、羨み、虚栄、敵意、憎悪などを戒める教訓小説だった。しかし、作者は子どもの内面に対する洞察に優れていて、人物を生き生きと描き、後の少女小説の原形を創った。

チャールズ・ラムと姉のメアリ・ラムの共著『レスタ先生和学校』⁶(1809)は、フィールディングの作品のいわば模倣で、チャールズが3話、メアリが7話を書いている。

ジョン・ニューベリーは『くつふたつの物語』⁷(1765)の出版でもよく知られている。これは、横暴な地主のために家と両親を失って弟と2人だけになったマージェリーが、努力と忍耐と知恵によって、苦しい生活の中で学習して知識を増やし、知恵を磨き、村の学校の校長になり、やが

て立派な地主の夫人になるサクセス・ストーリーである。物語を通じて美德が伝えられ悪徳が警告されているのだが、いわば無から身を起して出世するマージェリーの姿には、勃興する中産階級の力が感じられて、初期の物語としてすぐれたものだった。マージェリーの悲劇は地主による土地囲い込みが原因という、社会意識、政治感覚の鋭い作品でもあり、そうした意識の強い作品を残した小説家オリバー・ゴールドスミスがほんとうの作者だとも言われている。この作品からは、自制心、思慮分別、節制、合理的判断、清廉潔白、勤勉、慈愛などのすすめが読み取れる。ジョン・ロックと同じ考えである。子どもの文学作品が、時代を代表する哲学者の思想の影響を受けるところに、小説や子どもの文学が時代の申し子だったことを示している。

ジャン・ジャック・ルソーの思想に共感して彼の弟子になったのはトマス・デイ (1748-89)。彼の著書の中でもっとも有名な子どものための作品『サンドフォードとマーティンの物語』⁸ (1783, 86, 89) は、本来は、3年間隔で1巻ずつ、都合3巻になった長編だが、まもなく、ほとんどの場合1冊に縮められて、19世紀の末まで出版が続けられた。

この物語は、質実剛健な農民の少年ハリイ・サンドフォードと西インド諸島にプランテーションを持つ金持ち紳士の1人息子トミー・マーティンのふたりが、バーロー牧師のもとで、時代を生き延びる知恵と力を備えた人間になるための教育を受ける物語である。物語形式は、子どものそばにすぐれたチューターがいて、子どもの質問には即座に答える教育を考えたルソー流に、2人の少年をバーロー師が導くかたちになっている。よい子と悪い子の対比を通じて理想の人間像を教える形式は、18世紀イギリスが生み出した教訓物語の定型と言える。

その定型は、ルソーの弟子の弟子と言ふべきマライア・エッジワース (1767-1849) の作品にも受け継がれた。デイの『サンドフォードとマーティン』が本来マライアの父親の著作の一部になるはずだったことでもわかるように、マライア・エッジワースはデイの影響を強く受けて、ルソー主義

の強い教訓物語を大人と子どもの両方に向けて発表している。目録には5点の著作が見られるが、うち4点は、この作家が子ども向きに書いた『両親への助言者』⁹ (1796) である。はじめは18話あったが、初版にあった「紫のびん」が1801年に『子どもたちへの教え』^{アーリー・レッスンズ} という別の本に移され、17話になった。目録に載っている本もすべてが話全部を収録しているわけではないが、4点で全体がわかるようになっている。

「紫のびん」は、お誕生日に新しい靴を買ってもらはずの女の子が、ある店のショーウィンドーで見た紫色の美しいびんが欲しくて、靴のかわりにびんを買うのだが、それはただ透明なびんに紫色の水が入っていたにすぎず、女の子は後悔するのだが、すでに遅く、彼女は底に穴の開いた靴でピクニックに行かねばならなくなる。「無駄無ければ、不足なし」は、丈夫な小包のひもを大事にとって置いた少年と、それを切って小包をあけた少年が、共に弓の試合で弦を切っしまい、ひもを大事にとっておいた少年が勝つ話である。2つの話だけでもわかるように、エッジワースは常に勤勉、節約、誠実、正直、信義、友情、目上の人に対する礼儀正しさなどを奨励し、虚栄、自己中心、怠惰、偏見、嘘などをいませめた。

エッジワースは、文学史的には、子どもへの教訓主義的な作品よりも、ウォルター・スコット (1771-1832) の歴史小説に影響を与えたと言われる最初の小説『ラックレント城』(1800) のような小説で知られ、もう少し後に生まれていたら、すぐれた子どもの文学を残したのではなどと言われる。しかし、『両親の助言者』の作品は人物描写、筋の展開にすぐれていて興味深く読める上に、ニューベリーやトマス・デイと同じく実際の教訓と実利的な結果を語っていて暗さがない。彼らの作品には啓蒙主義時代の合理主義精神が息づいている。

②日曜学校運動の作家たち

同じ18世紀の教訓主義と一つにくられる作家の中には、イギリスをモンテスキューやルソー等の危険思想家から守る目的で、母親と女性家庭教師を主な読者として「教育の守り手」(1802-1806) という雑誌を出したミセス・トリマー (1741-1810)

や日曜学校の子どもたちのための廉価叢書をつくった作家ハナ・モア (1745-1833) のような人たちもいた。

ミセス・トリマーの著作は、コレクションだけでも11点を読むことが出来る。彼女の作品でもっとも有名なのは『たとえばなし—子どもに動物の扱い方を教えることを意図した本』¹⁰である。この作品は、動物愛護とチャリティの精神を伝えることを主目的としているが、動物が人間と同じように口をきくフェアリーテイルを有害と否定した本人の作品の中で、コマドリが人語を話す矛盾や、階級制度的偏見などが話題を呼んで悪名のほうが高いものになってしまった。しかし、『学習はじめ—音節語、二音節語、三音節語と一歩ずつあがる寓話集』¹¹その他の作品を検討すると、この作家についての評価は修正されるべきところがあると思われる。

『学習はじめ』のまえがきに「組み合わせを見せるためとか、まとめる才能を見せるためだけで、文字を1つにまとめた場合、それを読む人は音はわかっても、何の考えも持てません。当然ながら、頭からすぐに消えてしまいます。…(iv)」とある。ミルトンの教育論を読む感じがする。

1音節の語だけを使ったStep the Firstの最初の話は「おおかみとひつじ」。水場で羊に会ったおおかみは、水を汚したと羊をとがめる。羊は、私の方が川下だという。するとおおかみは、おまえは俺の悪口を言ったという。羊は、私は生まれたばかりとこたえる。するとおおかみは、おまえの両親が私の悪口を言ったのだと、羊を食べてしまう。そして、教訓が面白い。「大悪人は、善人にならなくてはならないことをよく知っている。だから、悪事をしてしまうと、なんとかして、それが正しいことのようにみせかける。」

個性的である。

2音節語のStep the Secondの「おろかな牡鹿」も面白い。牡鹿は水に写った自分の立派な角を見て、足もこんなふうだったら、みんなが自分をおそれるのと思う。ところが、犬に追われて角を枝にひっかけ、犬に食われてしまう。教訓は「楽しい空想は日常生活の幸せを損なうことが多い。そして、鼻にもかけないことが、ときとしてもっとも役に立つ。」

とも役に立つ。」

全体に、この本の寓話は、当然ながら簡単明瞭で面白く、教訓も独自のものがある。しかも、やさしい言葉から少しずつ複雑な言葉へ移行する、合理的な教育的配慮がある。ミセス・トリマーは、頑固な保守主義者で、空想を極端に否定した人だが、実際には、なによりも読者が面白く読めるように配慮し、それと教育とのバランスを巧みに取るだけの精神の幅と才能を持った人物ではなかったかと思われる。聖書や歴史の初歩読本のような作品もそれを裏打ちしている。

『旧約聖書画集』¹²は、旧約物語の64場面の銅板版画を物語の順にならべたもの。絵の説明となる物語の本は、残念ながら収録されていない。新約は、幸いに『新約聖書画集』¹³に対応して『新約聖書画集物集』¹⁴がある。ミセス・トリマーは、いわば一番初めに読む聖書物語について、一番初めに読む歴史書をも手掛けはじめていた。古代ローマ史¹⁵と、古代国家の興亡とそれにかかわるローマを扱ったもの¹⁶がある。著者の前書きの言葉通りに「異教の歴史」なのだが、「聖書で言及されている国家や帝国の起こりや征服・従属」について幼い読者にしっかり覚えてもらうことが目的なのである。

これらの語りはリズムのある平易な文体で面白く読める。ミセス・トリマーの作家的力量を示している。彼女は日曜学校の創設者の一人としても知られている。

ハナ・モア (Hannah More 1745-1833) も日曜学校運動に力をそそいだ作家の一人だった。この有名な作家の著作は、『現代女子教育制度批判』¹⁷ (1801、2巻) のみがリストアップされていて「子どもの、特に少女の教育に対する重要な論文。詩人、劇作家、宗教的作家、ブルストッキングとして知られた影響力ある女性グループの一員であったハナ・モアによる教育論」と解説されている。1750年ごろ、銜学的女性のソサイティ、ブルストッキングズの一員だった頃の彼女の作品は子どもとは関係がないし、また、このグループから遠ざかって宗教的になってからの多くの仕事は消耗品のような廉価版のパンフレット形式だったので、手に入らなかったのかも知れない。

イギリスでは、産業革命の結果貧困層が激増し、彼らが工業都市に集中し、子どもたちも5歳頃から労働していた。上流階級人は、そうした子どもたちの体の健康より内面的な健康を心配した。そこで、日曜学校が貧しい子どもたちに聖書を教えることを目的にはじめられた。しかし、聖書が読める力をつけると、彼らは不道德な読みものや危険思想を伝えるパンフレットなどに手を出すのではという恐れも生まれた。

トラクト運動—ハナ・モアのすばらしさは、こうした課題を解決し、しかも子どもの文学の発展に大きな貢献をすることになったトラクト運動であろう。彼女は日曜学校の子どもたちのために、聖書の話をはじめとして教訓物語をたやすく読めるやさしい文章で書いたトラクト、つまり小冊子をつくって、それを半ペニーか1ペニー、あるいは無料で配布することを思い付き、それを実行して成功したことだった。経費はすべて篤志家からの寄付に依存した。小冊子というアイディアは、18世紀に流行したペニー・ドレッドフル（安っぽい読み物パンフレット）の形式を借りた。1977年に復刻シリーズであるガーランド・エディションが出た時、廉価叢書とハナ・モアを解説したジェイムズ・シルバーマンは、トラクトを教訓目的と大衆の人気の融合という、今日も続けられている試みの最初の成功例としている。卓見というべきだろう。ハナ・モアは、114冊のトラクトの約半分を自ら書いたが、『ソールズベリ平原の羊飼』(1795) がもっともよく知られている。

また、実利知識普及協会は、勉学の意欲がありながら教育の機会に恵まれない労働者向けに、科学的で有用な知識を分かり易く伝える1ペニーの週刊誌「ペニー・マガジン」¹⁸を創刊した。1832年から1842年まで11巻(610号)がコレクションに収められている。

初期の子どもの文学から 註

- 1 *Milton's Tractate on Education*, edited by Browning, Oscar with an introduction and notes, Cambridge University Press, 1883 (VZ1-765)
- 2 *Orbis Sensualium Pictus*, by Comenius,

Joannes Amos, Sydney University Press, 1967 (VZ1-260)

- 3 *A Little Pretty Pocket-Book*, by Newberry, John Oxford University Press, 1966 (A facsimile of the British Museum copy dated 1767) (VZ1-796)
- 4 *Scripture Instruction; Digested into Several Sections by way of Question and Answer in order to promote Piety and Virtue, and discourage Vice and Immorality; with a Preface Relating to Education*, by Freame, John and Arthur Arch, 1810 (the Third edition) (VZ1-423)
- 5 *The Governess or, Little Female Academy*, by Fielding, Sarah Oxford University Press, 1968 (A facsimile reproduction of the first edition with an introduction and bibliography by Jill E. Grey) (VZ1-410)
- 6 *Mrs. Leicester's School or The History of Several Young Ladies related by themselves*, by Lamb, Charles & Mary Wells Gardner, Darton & Co., 1809 (VZ1-658)
Mrs. Leicester's School and Other Writings in Prose and Verse (with introduction and notes by Alfred Ainger), 1897 (VZ1-659)
- 7 *The History of Little Goody Two – Shoes otherwise called Mrs. Margery Two-Shoes* George Routledge & Sons, not dated. (VZ1-454)
- 8 *The History of Sandford and Merton*, by Day, Thomas Corrected & Revised by Hartley, Cecil George Routledge and Sons, c.1880 (VZ1-325)
The History of Sandford and Merton, Ward, Lock, and Co., c.1880 (VZ1-326)
The History of Sandford and Merton: A Moral and Instructive Lesson for Young Persons, Milner and Company, c.1877 (VZ1-327)
- 9 *Simple Susan*. Told to the children by Louey Chisholm. T.C.& E.C.Jack, circa, 1900 (Louey Chisholm has extracted "Simple

- Susan" from Maria Edgeworth's original "*The Parent's Assistant, or stories for Children.*") (VZ1-344)
- The Parent's Assistant. or, Stories for Children.* by Edgeworth, Maria, Macmillan & Co., 1897, (Introduction by Anne Thackeray Ritche) (VZ1-345)
- The Parent's Assistant or, Stories for Children,* by Edgeworth, Maria, Baldwin & Cradock, 1840. Volume 1 (contains: Lazy Lawrence, Tarlton, The False Key, The Birth-day Present, and Simple Susan.) (VZ1-346)
- The Parent's Assistant or Stories for Children,* by Edgeworth, Maria. Simkin, Marshal & Co., 1855 New Edition in one Volume. (VZ1-347)
- Harry and Lucy Concluded; Being the Last Part of Early Lessons,* by Maria Edgeworth. Printed for R.Hunter, Baldwin, Cradock and Joy., 1825 (VZ1-343)
- 10 *Fabulous Histories by Mrs. Trimmer; Or, the History of the Robins designed for the Instruction of children respecting Their Treatment of animals.* J.F.Dove, Piccadilly, 1833 (VZ1-1055)
- 11 *The Ladder to Learning- A collection of fables ...* edited and improved, John Harris, St. Pauls Church Yard, 1835 (VZ1-1056)
- 12 *A Series of Prints from The Old Testament. Designed to Accompany A Book Intituled Scripture Lessons.* By Trimmer, Sarah (Kirby), John Marshall, n.d. (VZ1-1046)
- 13 *A series of prints taken from the Old Testament; Designed as Ornaments for those Apartments in which Children receive the first Rudiments of their Education.* By Trimmer, Mrs. S, John Marshall n.d. (VZ1-1047)
- 14 *A Description of a Set of Prints, Taken from the New Testament. Contained in a Set of Easy Lessons,* by Trimmer, Sarah (Kirby), John Marshall, n.d. (VZ1-1048)
- 15 *A New Series of Prints, Accompanied by Easy Lessons: Consisting General Outline of Roman History,* by Trimmer, Sarah (Kirby). J. Harris, 1803 (VZ1-1051)
- A Description of a Set of Prints of Roman History; Contained in a Set of Easy Lessons,* by Trimmer, Sarah (Kirby). John Marshall, c.1810 (VZ1-1052)
- 16 *A New Series of Prints, Accompanied by Easy Lessons: Containing, A General outline of Ancient History [1], [2],* by Trimmer, Sarah (Kirby). J.Harris, 1811 (VZ1-1053,1054)
- 17 *Strictures on the Modern System of Female Education,* by More Hannah, Cadell and Davies, 1801 (ninth edition) (VZ1-781)
- 18 *The Penny Magazine of The Society for the Diffusion of Useful Knowledge 1832-1833,* Volume 1,2, Charles Knight, (VZ1-833)
- The Penny Magazine
- 1834 Volume 3 (VZ1-834)
- 1835 Volume 4 (VZ1-835)
- 1836 Volume 5 (VZ1-836)
- 1837 Volume 6 (VZ1-837)
- 1838 Volume 7 (VZ1-838)
- 1839 Volume 8 (VZ1-839)
- 1840 Volume 9 (VZ1-840)
- 1841 Volume 10 (VZ1-841)
- 1842 Volume 11 (VZ1-842)

19世紀—物語の時代

1. 過去の遺産

ルソーは、生来の理性が働くようになるまで、子どもに教育をほどこすべきではないと考えていたから、読書などを薦めなかったが、例外的に『ロビンソン・クルーソー』¹だけは薦めていた。また、ジョン・ロックは寓話が教育上役立つことを述べていた。『ロビンソン・クルーソー』は本来大人のために書かれた小説であり、寓話も、紀元前から伝承されている文学で、イソップが代表的な作品である。大人も子どもも楽しんでいる。

そのイソップの寓話は、20世紀のものが2冊取められていて、文学史的な資料にはならないが、今日的な価値が大きい。詩人ブライアン・パタンが物語詩にした『悪賢い鵜と魚』²は美しい昔話絵本などで名高いエロール・ル・カインが絵を担当している。ボリス・アルツィバシェフが編集して木版画をつけた『イソップの寓話』[VZ1-11]は1722年の本と1848年の本から作品を選んでいるという珍しいものである。

神話、伝説、昔話などいわゆる説話文学は、徐々に文字化された。6世紀から16世紀にかけて成立したと言われるイスラム圏の大説話文学『アラビアンナイト』³、カシミールの詩人ソーマデーヴァが20年かけて書いたという11世紀の寓話集『譚川集海』^{カターサリットサーガラ}、カンタベリー大寺院への巡礼の旅をする人々が語る様々な話をまとめた形式のイギリス中世文学の傑作であるチョーサーの『カンタベリー物語』⁴ (c.1387-1400)、シンデレラ、白雪姫ほかの有名な昔話をいち早く本の形で世に送り出したイタリア人ジャンバチスタ・バジレーの『ペントメローネ』⁵ (1634)などは、そのすぐれた実例である。

面白いのは『マーカス・ワードの日本絵物語アラジンと魔法のランプ』⁶ (c.1875)である。「一日だけカリフになったアブー・ハサン」、「アリババと40人の盗賊」、「船乗りシンドバッド」、「アラジンと魔法のランプ」を短い文と日本人の画家による絵で語っている。日本人の画家による絵に飾られているので日本絵物語としたのだろうと推測

できる。もう1冊は、カーネギー賞作家ジェラルディン・マコークランの『一千一夜アラビアンナイト』(1982) [VZ1-737]。今まで、子どもの本には入らなかった話も選び、歯切れのよい適切な表現で、明確なイメージを連ねた再話新鮮である。『チョーサーの物語』J.ウォーカー・マクスパデン再話(1907) [VZ1-237]は、9話が再話されているが、17世紀の桂冠詩人ジョン・ドライデンの手になる「騎士の話」の再話が収録されているところがおもしろい。

『ペントメローネ—お話のお話』ジョン・エドワード・テイラー訳(1893) [VZ1-117]は、改訂版とあるので、初版はもっと早かったわけである。ジョージ・クルックシャンクの銅板画が特色を出している。

チョーサーは韻文を主体に散文の部分も付け加えたが、本来、韻文で書かれて、後に子ども向けの散文物語に再話された代表は、なんといっても伝説的大詩人ホメロスの作品だろう。『ホメロスの物語』⁷ (アルフレッド・J・チャーチ再話 1887)は、「イリアス」と「オデュッセイア」を子ども向けに散文にしたもので、分詞構文や、名詞を畳み掛けての説明といった手法で、かっちりひきしまった文体のものになっている。『ウェルギリユウスの物語』⁸ (1902)はトロヤ陥落後放浪の末にローマを建国したアイネーイスの物語である。そして、この2つを合本したような形の『イリアスとアイネーイスの物語』⁹ (1901)は、再話者がこの本の多くの部分を前2作からとっていると語っている。(ちなみに、カッコ内の発行年は収録された本のものであって、この場合のように一見矛盾したことになる。)

チャールズ・ラムの古典再話でもっとも名高いのは姉メアリとの共著『シェイクスピア物語』(1807)だが、ラムはこの好評を受けて翌年には有名なジョージ・チャップマンの『オデッセー』の名訳(1614-5)を底本にした『ユリシーズの冒険』¹⁰を刊行した。

2. 新しいフェアリーテイルへ

キリスト教国では、異教の神々の話が子どもに奨励されるはずはなかったし、啓蒙主義時代に

あつては、魔法の話は不合理なものとして排斥される傾向が強かった。その上、子どもに向かって本を書いたり、その本を子どもに買い与えたりする階級の人々にとって、フェアリーテイル（昔話）は、無教養な人々の語るなんの益もない話にすぎなかった。

そんな中で、そうした話を保存し、後世に残す上で功績があつたのはチャップブック（chapbook）である。呼び売り人（chapman）が売り歩く安いパンフレットのことであり、幽霊話のような超自然な出来事を扱うもの、占いや人相をふくむ迷信などを扱うもの、昔話や中世騎士物語など、笑い話、義賊や大泥棒の話、歴史物語、伝記、聖書物語等々、庶民が楽しんで読む素材を広範にとりこんでいた。

宮廷人たちもフェアリーテイルを子どもの文学とする上で大きな力になった。代表はバジールの『ペンタメローネ』（1634）とシャルル・ペローの『童話集』（1697）である。前者の副題「子どもの楽しみ」は「あつかましいおふざけ」だとナンシー・J・キャネパはその著書の中で言っているが、それは、長男の名前で出版したペローの『童話集』も同じことで、本来は宮廷人たちやエリートの文学サークルなどでの娯楽の一つだった。バジールの作品は、ナポリ方言で書かれていたことや時期的に子どもへの関心が低かったことなど、様々な理由で子どもの世界へひろがっていかなかったが、ペローは、ルイ14世の廷臣でもありフランス・アカデミーの大学者が著者であるということで、超自然な話などが排斥されがちだった時代にあつても、裕福な家庭の子どもたちの手に届き、フェアリーテイルを維持しつづける大きな力となった。ペローは4点コレクションに収められているが、どれも古書的に興味が持てる。『クラシック・フェアリーテイル』¹¹は、1922年、ハリー・クラーク画の『ペロー童話集』の1986年版ファクシミリだが、1922年版はきわめて稀で、このファクシミリ版もコレクションものになっていると説明されている。

『マザー・グースの昔話』¹²の題名で出ている1925年版はオリジナル・タイトルを *Histories or Tales of Past Times Told by Mother Goose* と英

訳したもので、1,250部の限定版。これには「この本のイラストレーションは1719年版の木版画の写真をもとに、W. M. R. Quickがあらたに木版画を製作した。この木版画のデザインは1697年版の *Contes de ma Mere l'Oye* から借りている。」と説明がある。翻訳史ばかりでなく、イラストレーション史的な価値もある。

3. ロマン主義とフェアリーテイル

ロマン主義の芸術運動は、18世紀ヨーロッパの理性を尊重し想像力を排斥した合理主義や調和と伝統の固守にあきたらず、自我の拡張、自由な想像力の展開、未知や無限への憧憬などを芸術のあらゆる分野で展開した運動だった。イギリスではウィリアム・ブレイクやワーズワスの詩人の活動が顕著だった。ウィリアム・ブレイクは万物の根元を、慈悲、憐れみ、愛、平和の精神と考え、自然に、動植物に、無邪気な子どもに、深い喜びを感じてそれを『無垢の歌』¹³（1789）に表現し、19世紀以後の人間観に大きな影響を与えた。ワーズワスは子どもを最も神に近い存在と考えた詩作を通じて子ども観を変えた。ドイツでは、ナポレオン戦争を通じて生まれたナショナリズムと想像力の飛翔への憧憬が、民族の文化遺産である民謡や昔話の収集と研究を促し、アヒム・アルニムとクレメンス・ブレンターノが収集した民謡集『少年の魔法の角笛』（1806-8）やグリム兄弟が収集・再話した昔話集が出版された。

現在「グリム童話集」とよばれる昔話集はヤーコプ、ヴィルヘルムのグリム兄弟が、直接に語り手から聞いたり、文献から集めたりした昔話を彼らの手で書き直してまとめたもので、原題は *Kinder- und Hausmärchen*（子どもと家庭のためのメルヘン）、1812年に第1巻が出版された。「グリム童話」の魅力についてはここで云々する必要はないが、一考すべき問題はある。

長い間、グリム童話は、口承という特徴をできるだけ生かして文字化したといわれていたが、研究の結果、かなりの改変が行われていたことが明らかになっている。これに関連して、紹介しておきたいのは、既述のナンシー・J・キャネパの論文で、『宮廷から森へージャンパチスタ・バジー

レの「お話のおはなし」と創作フェアリーテイルの誕生』(1999)が正式な題名である。彼女は、バジーレの『お話のおはなし』(別名『ペンタメローネ』)が、ヨーロッパにおいては、はじめて文字化された口承の昔話の最初であり、この作品によって創作フェアリーテイルが誕生したとしている。つまり、彼女は、口承の昔話と文字化された昔話は違うものであり、文字化されるとそれは fairytale ではなく literary fairytale なのだを定義する。考えてみるだけのことはある見方と思う。

さて、グリムは1823年と26年の2回、エドガー・テイラーの手で英訳された。英訳名は *German Popular Stories*, 初訳のイラストレーションは当時有名なジョージ・クルックシャンク。このイラストレーションはドイツに逆輸入されたほどすぐれたもので、現在はパuffin版に使われている。

『妖精の輪—昔話と伝説集』¹⁴はジョン・エドワード・テイラー訳で1857年新版、イラストレーションはこの世紀の代表的イラストレーターだったリチャード・ドイルである。

19世紀の「グリム童話」で他によく知られているのは『グリム家庭童話集』(1882)で、この本はウォルター・クレインのイラストレーションで名高い。その点から見ると、現代のものである『グリム童話集』¹⁵(1979)がカイ・ニールセンであることも、なるほどとうなずけよう。イギリスにおけるグリムは、初訳以来連綿と代表的な画家たちのチャレンジが続いている。一流の画家たちの創作意欲を刺激するほどの魅力がある昔話なのである。

エドガー・テイラーは、訳書の序文で「私たちの想像力は、判断力や記憶力と同じように、それを働かすことを通じて必ずよりすぐれたものになることができます。」と言い、お説教に邪魔されなければフェアリーテイルは子どもたちに有益なものになると力説している。

グリム童話は、イギリスでも急速に読者をひろげたが、それには、下地があった。

ニューベリーの後継者の1人ジョン・ハリスは、有名な童話の1つ『ハバードおばさんと犬』をセアラ・キャサリン・マーティンのさしえで1805年に出版し、さらに、リバプールの銀行家で国会議

員だったウィリアム・ロスコーの『チョウチョウの舞踏会』をウィリアム・マルレディのさしえで1807年に発刊し、ナンセンスカルな楽しい物語詩の流れをつくり、またペロー、ドルノワ、アラビアンナイトその他の話を『妖精の宮殿』(1823)にまとめるなど、昔話の本を出版しつづけていた。このハリスの出版社の刊行物は1804年のものと思われる *Oracle*¹⁶と初版が1811年の *Felissa or; The life and Opinions of Kitten of Sentiment*¹⁷(1903)が、当時の出版物の状態を知らせてくれる。

おそらくグリムの影響が大きかったのであろう、ロシア外務省の役人だったアフナーシェフは「ロシア民話集」全8巻(1855-63)をまとめ、ノルウェーではペーテル・クリステン・アスピョルンセンとヨルゲン・モーのふたりが収集した『ノルウェー民話集』(1845)を著した。そして、フィンランドの詩人・作家・劇作家ザカリ・トペリウス(1818-98)はスウェーデン語で歴史小説、戯曲、子どものためのフェアリーテイルを残しているが、彼の作品集『カヌート・ウィスルウィンクスとその他のお話』¹⁸は、貴重な1冊である。

このトペリウスのように、昔話の形式を用いて、昔話の根底を成す人類の叡智に立ち、昔話の読み易さ、楽しさに独特の香気をそえたフェアリーテイルを創作したのがデンマークのハンス・クリスチャン・アンデルセンである。彼は、1835年に最初の童話集を発表した。それには、昔話の再話に近い「火打ち箱」、「小クラウスと大クラウス」、「お姫様とエンドウ豆」と純粹の創作「イーダの花」が収められていた。はじめ、アンデルセンは同じ年に出版した小説『即興詩人』の方を重視していたが、子どものための小さなお話の方がずっと評判がよいので、次々に童話集を出版し、世界的な名声を博するに至った。

英訳版の童話集は4点集められている。まず『アンデルセンの物語とフェアリーテイル』¹⁹(1893、オスカル・ゾンマー訳、アーサー・ギヤスキング、全2巻)がもっとも古いもの。『アンデルセン フェアリーテイル集』²⁰はページいっぱいの挿絵が約100枚という豪華版で、発行年は推定1900年。『アンデルセンのフェアリーテイル』²¹(1930)はアイルランドの画家ハリー・クラークの挿絵が有名

なもの。そして、『ハンス・クリスチャン・アンデルセンのフェアリーテイル』²²は1929年版のカイ・ニールセン絵のものをファクシミリ版で1986年に復刊したものである。

アンデルセンの生涯については、数多くの本が世界中で出版されているが、彼の故郷オーデンセで出版された英語の『アンデルセンの生涯』²³（年代記述なし）は貴重なものである。『アンデルセンのお話と物語』²⁴（1894）はデンマーク語のものである。

アンデルセンの英訳は、最初の1冊が出版されてから11年目の1846年に3冊出ている。チャールズ・ボナーの『デンマークのお話の本』、キャサリン・ピーチーの『デンマークのフェアリーテイルと伝説』、それから最も有名なメアリー・ハウイツの『子どものためのふしぎなお話』である。

ハウイツ（1799-1888）は晩年の6年間以外はずっとクエーカー教徒で、ドイツや北欧の文学に興味を持ち、晩年は外国で暮らした。アンデルセンの翻訳を手がけたのもそうした興味の一環だったが、本人は空想の世界より現実の世界に強い関心を持ち、子どもに向けて家庭や地域の生活をリアルに描く作品を数多く残した。推定1858年版と、これも推定1860年版の『私のおじ、時計師』²⁵は昔町と村の間を往復して郵便や物資などを運んでいた人の物語で、初版は1844年。『わずかなコイン、多くの用心』²⁶は、1831年に起こったノッティンガムの暴動にあたっての自らの体験に基づいた物語で、初版1842年。そして、『自分の話—一人の子どもの自伝』²⁷（1852、new edition）ほかの作品を加え、彼女の作品は重複ものを1冊として、全部で7冊ある。彼女の子どもの向きのリアリズム作品は、あまり高い評価を受けていないが、児童文学史では翻訳のみが知られている作家の忘れられている著作がこれだけまわって読めるのは、子どもの文学のリアリズム研究上まことに有り難い。

19世紀—物語の時代 註

1 *Robinson Crusoe*, by Daniel Defoe, edited with a foreward by Katherine Lines,

illustrated by Edward Ardizzone, The Nonsuch Press, 1968 (VZ1-329)

The Life and Adventures of Robinson Crusoe, Frederick Warne, c.1880 (VZ1-330)

2 *The Sly Cormorant and the Fishes*, New adaptations into poetry of the Aesop Fables by Brian Patten, Illustrated by Errol Le Cain, Kestrel Books, 1977 (VZ1-10)

Aesop's Fables, edited and with wood engravings by Boris Artzybasheff, Charles Skilton, 1948 (VZ1-11)

3 *One Thousand and One Arabian Nights*, by Geraldine Mccaughrean, O.U.P., 1990 (VZ1-737)

4 *Stories from Chaucer*, retold buy J. Walker Mcspadden, Harrap, 1907 (VZ1-237)

5 *The Pentamerone or the Story of Stories*, by Giambattista Basile, translated by John Edward Taylor, Cassell Publishing Co. New York, 1893 (VZ1-117)

6 *Marcus Ward's Japanese Picture Stores*, Picture Stories portrayed by NativeTalent from the Japanese, Marcus Ward, London, c.1875 (VZ1-1090)

7 *Stories from Homer*, by Alfred J. Church, Seeley & Co., 1887 (VZ1-244)

8 *Stories from Virgil*, by Alfred J. Church, Seeley & Co., 1902 (VZ1-245)

9 *The Stories of The Iliad & The Aeneid*, by Alfred J. Church, Seeley and Co., 1901 (VZ1-243)

10 *The Adventures of Ulysses*, by Charles Lamb, Ginn and Company, Boston, 1888 (VZ1-660)

11 *Classic Fairy Tales*, by Charles Perrault, illustrated by Harry Clarke, Chancellor Press, 1986 (VZ1-843)

12 *Histories or Tales of Past Times Told by Mother Goose*. Written in French by M. Perrault, and Englished by G. M., Gent. Newly edited by J. Saxon Chidrrers. Published The Nonsuch Press, 1925 (VZ1-846)

- 13 *Songs of Innocence*, by William Blake, Ernest Benn, 1926 (VZ1-141)
- 14 *The Fairy Ring A Collection of Tales and Traditions*, translated by John Edward Taylor, illustrated by Richard Doyle, New Edition, John Murray, 1857 (VZ1-484)
- 15 *The Fairy Tales of Brother Grimm*, illustrated by Kay Nielsen with an Introduction by Bryan Holme, Hodder and Stoughton, 1979 (VZ1-483)
- 16 *Oracles: containing some particulars of the History of Billy and Kitty Wilson including Anecdotes of their Playfellows. Intended for the entertainment of the LittleWorld*. London: printed for Harris (successor to E. Newbery) the corner of St.Paul's Church-Yard., About 1804 (VZ1-506)
- 17 *Felissa or; The Life and Opinions of Kitten of Sentiment*. (This edition founded on the first edition by J. Harris), Methuen, 1903 (VZ1-507)
- 18 *Canute Whistlewinks and Other Stories*, by Zacharias Toperius, translated by C.W.Foss, and illustrated by Frank Macintosh, Longmans, Green & Co., 1959 (VZ1-1043)
- 19 *Stories and FairyTales by Hans Christian Andersen*, translated by H. Oscar Sommer, George Allen, 1893 (VZ1-32)
- 20 *Fairy Tales*, by Hans Christian Andersen, Ward Lock & Co., c.1900 (VZ1-30)
- 21 *Fairy Tales by Hans Andersen*, illustrated by Harry Clarke, George Harrap, 1930 (VZ1-31)
- 22 *The Fairy Tales of Hans Christian Andersen*, illustrated by Kay Neilsen, Omega Books, 1986 (VZ1-33)
- 23 *The Life of Hans Andersen*, (Illustrations by the Hans Andersen's Collections belonging to the town of Odense). English Guide with 5 Pictures and a map. Fyens Stiftsbogtrykkeri, Odense-Denmark, nd. (VZ1-34)
- 24 *H.C. Andersens Eventyr og Historier.*, 1894 (VZ1-35)
- 25 *My Uncle the Clockmaker*, by Mary Howitt, William Tegg, n.d. c.1860 (VZ1-583)
- 26 *Little Coin , Much Care, or How Poor men Live. A Tale of a Young Person*, by Mary Howitt, William Tegg, 1853 (VZ1-584)
- 27 *My Own Story: Auto-biography of a Child*, by Mary Howitt, William Tegg, 1852 (VZ1-585)

19世紀後半—物語の黄金時代

1. リアルな子どもたちの物語—家庭の少女たちと、冒険する少年たち

18世紀末から19世紀はじめにかけて、マライア・エッジワースは、教訓主義には意を用いながらも、日常生活で常に見られる少年や少女をできるだけありのままの姿で描こうとつとめた。リアリズムへの第一歩だった。

エッジワースが遂に到達できなかった子どもの文学の新しい世界へ、恵まれた条件を生かしてたどりついたのが、キャサリン・シンクレア (1800-64) である。彼女はスコットランドの貴族の娘として生まれ、貴族院議員の父親の秘書を務め、父親の死後、さびしさをまぎらわす目的もあって、当時の子どもの文学に横行していた知識ばかりを頭に入れた、礼儀正しくおとなしい子ども像に反発し、生き生きとした野生の馬のような子どもたちを読者に提供しようと試みて1839年に『別荘物語』¹を発売した。貴族の少年と少女の無邪気ないたずらぶりと、2人が兄の病死を通じて成長していく姿は、時代を先取りした作品として、児童文学史に不動の位置を占めている。ほかに、彼女は絵文字の本も出版して好評だったが、当コレクションには残念ながら収められていない。

シンクレアから2年後には、海軍の軍人だった小説家キャプテン・フレデリック・マリヤットが『老水夫マスタマン・レディ』² (1841) を出版した。一家で漂着して無人島に着き、無から生活を組み立てていく冒険の物語だが、主要テーマは思慮深い兄と活発でやや軽率な弟の比較による教訓にあった。この『ロビンソン・クルーソー』の子ども版は、イギリス児童文学中、最初の冒険小説とされている。マリヤットは6年後に、オリバー・クロムウェルの共和制革命のために領地を奪われた王党派の一家の子どもたちが深い森に隠れ住んで王党派復活の機会をうかがう歴史物語『ニューフォレストの子どもたち』³ (1847) を発表し、イギリス最初の子どものための歴史小説と賞賛された。

『ヒナギクのくさり』

マリヤットの歴史小説は、王党派が勝利を占める保守的な史観に貫かれていたが、19世紀を通じてこの形式の小説と物語は、王室支持と現状保守の思想をずっと持ちつづけていた。彼に続いて歴史小説『小さな大公』⁴ (1854) を書いたのが、シャーロット・メアリ・ヤング (1823-1901) である。彼女については『ヴィクトリア時代のベストセラー作家：シャーロット・メアリ・ヤングの世界』⁵という権威ある伝記があり、それには、「幸いなことに、ヤング夫妻は、エッジワース親子の2巻に及ぶ大冊『実際的な教育』をまじめにこつこつ読んだ末に、子どもたちは不必要に長く家庭という二流の環境に囲いこんでおかずに、できるだけ早くに、両親の社交の席に同席できるマナーを身につけるべきであることに気づきました」とある。これは、知的上流社会で子どもの教育が徐々に変化していた実例であり、メアリ・ヤングは、英国国教会の高教会派に属する父母のもとで、当時の少年が受けたような古典語、歴史、植物学、建築学など、自由に学ぶことが出来た。

そのため、代表作『ヒナギクのくさり』⁶ (*The Daisy Chain*, 1856) のヒロイン、エセル・メイは、母親が死に、長女が身障者になって、医者一家の切り盛りを任されて苦勞を重ね、教養ゆたかな信仰深い上流社会の夫人に育っていく。母親を支え、幼い弟妹の世話や教育に配慮し、教会活動に出来るだけ参加するという、当時少女に求められた理想像がここに描かれている。メアリ・ヤングは父親から英雄崇拜思想を教え込まれ、大人の小説では優れた王の姿や、オックスフォード運動という宗教改革運動に邁進する若者を小説として描いて、どの本も当時のベストセラーとなった。15世紀のイングランドとスコットランドの確執を背景にした大人の小説『檻の中のライオン』⁷ (*The Caged Lion*, 1870) を含めて大人向けの歴史小説が4冊、当コレクションに収録されている。

ヤングの少女向き作品は、そのままの形でアメリカなどで読まれて、少女小説の発展にさまざまな影響を与えた。彼女の作品は19世紀半ばの状況を知る上でも貴重である。

『サンゴ島の三少年』

『ヒナギクのくさり』の2年後、ロバート・マイケル・バラントインの代表作『サンゴ島の三少年』⁸ (*The Coral Island*, Robert Michael Ballantyne, 1858) が世に出た。バラントインは、若者としてカナダ北部のハドソン湾地域へ行き、毛皮を集める仕事に従事した。その時の経験を『毛皮集めの若者たち』⁹ (*The Young Fur Traders*, 1856) にまとめて冒険小説作家の地位を築き、『サンゴ島』でイギリスの少年向き冒険小説の第一人者となった。これは、南太平洋の無人島に漂着したイギリスの三少年がそれぞれの特徴を生かして自分たちの生活を築き上げ、獰猛な未開人から捕虜を救ったり、海賊たちと戦ったりして、イギリスの国威をひろげる。イギリスの若者に世界征服の夢を与え、植民地帝国の拡大に寄与した冒険小説で、19世紀を通じて読みつがれた。(第二次世界大戦後、ゴールディングの『蠅の王』(*Lord of the Flies*, by William Golding, 1954) でパロディされた) この作家は人命救助に携わる人たちの仕事を世に知らせるため、例えばロンドンの消防署で実地に消防を体験し『火と戦う—ロンドン消防隊物語』¹⁰ (*Fighting the Flames. A Tale of the London Fire Brigade*, 1867) のような作品も発表した。『名犬クルソー』¹¹ (*The Dog Crusoe and His Master*, 1860) や『アンガヴァーエスキモーの国の話』¹² (*Ungava: A Tale of Esquimau Land*, 1858) は、名作と言われている。

18世紀末以来、子どもの冒険好み、ユーモアやナンセンスへの強い関心、そしてそうしたものを含んだ面白い物語への憧れが、ようやくこの時期に開花したといえるだろう。見知らぬ土地への憧れが冒険という形をとったように現実から離れたという願望が空想という別世界への扉を開いた。その先駆者はグリムやアンデルセンだったが、彼らの成功に刺激されてイギリスの作家たちもこの時期力作を次々に生み出した。

2. ファンタジー時代—『水の子』『不思議の国のアリス』『北風のうしろの国』

アンデルセンの高い人気は、イギリス人にあらためてフェアリー・テイルズの高い文学性を認識

させ、ジョン・ラスキンは後妻となった少女のためにつくった『黄金の川の王様』¹³ (*The King of the Golden River or the Black Brothers*, John Ruskin, 1851) をサッカレーは『バラとゆびわ』¹⁴ (*The Rose and the Ring*, W. M. Thackeray, 1855) を子どもたちのために創作した。この2作は、その文体のみごとさと含蓄に富むさまざまな暗示で今にいたるまで、高い人気を維持している。

チャールズ・キングズリは英国国教会の牧師で、当時、宗教界のみならずヨーロッパ思想界に深刻な影響をあたえたチャールズ・ダーウィンの生物進化論が聖書的世界観をゆるがすことに懸念を示し、キリスト教の神学と進化論の融合を試みて自然科学を学び、また貧困を生む社会改良にも力を尽くした思想家・作家だった。彼は子どもに向けてキリスト教社会主義の立場から、神の教えを伝達することをモチーフに、人間の子どもが川に落ちて水の子に変身し、水の世界の驚異を体験しながら正しい生き方を求めて遍歴する『水の子』¹⁵ (*The Water Babies: a Fairy Tale for a Land Baby*, Charles Kingsley, 1863) を出版した。この時期、まだファンタジーというジャンルは確立していなかったため、作者本人はフェアリーテイルと呼んでいたが、個人の独創による長編の物語は、子どものためのファンタジーの最初の1冊として、さまざまな影響を与えた。彼は、ほかに、ノルマン人に抗したサクソンの英雄を語って子どもたちを熱狂させた『サクソン人ヘリワード・ザ・ウェイク』¹⁶ (*Hereward the Wake—Last of the English*, 1865) ほか、いくつか子ども向きの本を書いている。

キングズリのファンタジーに2年遅れて、オックスフォード大学の数学と論理学の教授ルイス・キャロル (チャールズ・ラットウィジ・ドジスン) が、学長の3人の娘たちを楽しませるために即興で物語った話をもとにまとめたのが『ふしぎの国のアリス』¹⁷ (*Alice's Adventures in Wonderland*, by Lewis Carroll, 1865) である。「アリス」については、なにも言う必要はないが、当コレクションの「アリス」の本は一見の価値がある。

イングラム・コレクション中 [VZ1-210] は、1869年のドイツ語版を1974年にアメリカで復刻し

たもの。[VZ1-212] は Mervyn Peak のイラストレーションで 1978 年 ロンドン で出版されている。[VZ1-214] は、1899 年に出版されたものを推定 1930 年に復刻したミニチュア版で、レアものとされる。[VZ1-217] は『鏡の国のアリス』との合本でさしえはフィリップ・ガフ。[VZ1-223] は、1964 年初版のラテン語訳を 1994 年に復刻したものの。「アリス」には、さまざまな画家が挑戦してイラストレーションを残している。それは「アリス」の世界の解釈であって、研究上からも大きな意味がある。

イギリスの児童文学研究では、「アリス」以前と以後という表現が使われる。それは、ユーモアやナンセンスの開放、想像力のより自由な展開ということなのだろう。それは、必ずしも「アリス」のみでできたわけではないが、変化のランドマークとしてはわかりやすい。

「アリス」の本の出版を促したのは、友人の作家ジョージ・マクドナルドだったが、マクドナルド自身、神の解釈をめぐる教会の信徒たちと対立し、聖職をやめて、自らの信仰を著作によって人々に伝えようとしていた。彼は、大人の小説としてのファンタジーと子どもに向けてのフェアリーテイルとファンタジーの両方を書いたが、その幻想性は、子どもの方が解説なしに理解できるためだろうか、子どもに向けての作品の方がすぐれている。代表作は死後の世界を探り、現在の生の意味を語る『北風のうしろの国』¹⁸ (*At the Back of the North Wind*, George MacDonald, 1871) だが、生死を同次元のものとする彼の作品としては『おひめさまとゴブリン』¹⁹ (*The Princess and the Goblins*, 1972) の方が全体的な統一感が高くすぐれている。フェアリーテイルの中でも、最もよく知られていて、また作品としても完成度が高い『軽い王女』¹⁹ (*The Light Princess*, 1864) と『黄金の鍵』²⁰ (*The Golden Key*, 1864) は、前者が 1969 年に、後者は 1972 年にモーリス・センダックのイラストレーションが付いて出版された。

キングズリ、キャロル、マクドナルドの 3 人は、自己の内面の深奥をさぐり、神を探求すると同時に、狂気に至るものの存在をも意識し続けていた。

19 世紀イギリスのファンタジーのありのままの姿である。彼らの仕事がこの世紀のファンタジーの頂点だった。

3. 内なる子どもたちの時代—「ジャカネイプス」と「キャロツ」

ジュリアナ・ホレイシア・ユーイング (1841-1885) はミセス・ユーイングとよばれるが、作家ミセス・ギャッティの 10 人の子どもの 2 番目で、家族のストーリーテラーだった。妹のホレイシア・K. F. ギャッティが姉について『ジュリアナ・ホレイシア・ユーイングと彼女の作品』²¹ (*Juliana Horatia Ewing and Her Books*, Horatia K. F. Gatty, 1885) という伝記を書いている。(児童文学研究家ロジャ・ランスリン・グリーンが『物語作者たち』(1946) という作家論の本の中で、ミセス・ユーイングの作品年表はこの伝記の末尾のものが完全としている。)

筆者である妹は、この本の冒頭で、「子どもたちがユーイング夫人について、いちばん知りたいにちがいない点は、彼女は物語をどう書いたかということだと思います。彼女は話の筋や登場人物たちを、全部自分の頭の中で考え出したのか？ それとも、実際の出来事や周りの人たちから、なにかの形で連想したのか？ そのような質問にたいする最もよい返事は、彼女の作品を書かれた順にならべた表を作って、それらの作品が姉の心の中で生まれたきっかけを、できるだけお話することでしょう。それによって、自然に彼女の伝記の筋道ができていくものだと思います。」と述べている。ミセス・ユーイングが天性の物語作者だったことがよくわかる言葉である。事実、彼女はあまり長くなかった一生のうちかなりの数の作品を残した。

当コレクションも [VZ1-360] から [VZ1-393] までが、妹による伝記 1 点を含んで彼女の作品である。もっともそのうち 23 点は親族間のプレゼント用のものなので、重複が多い。『ジャカネイプス』²² (*Jackanapes*, 1883)、『家つきの妖精』²³ (*Lob Lie-By-The-Fire*, 1874)、『短い一生の物語』²⁴ (*The Story of a Short Life*, 1885) の 3 点がそれである。

『ジャカネイプス』は、孤児となった軍人の息

子がおばに育てられて軍人となり、友人を救うために戦死する話で、まともにはよいが、軍国美談的であまり評価は高くない。2番目は、捨てられていたジプシーの赤ん坊が若者になって、育ての親の2人の老婦人の家からとび出し、後悔してもどるが、家に入れず、毎晩畑をひそかに耕す話で、ジプシーの捨て子と知りながら育てる老婦人たちの、当時の慣習に外れた行為に、新しさを見たのが、現代の批評家ジリアン・エイブリーである。3番目は、軍隊の行進中の事故でけがをした少年が、残りの短い人生を軍隊とともに過ごす短編である。軍隊に関係した短編2編が親族関係の集まりなどでの贈りものになることも、また一般によく読まれていただろうこともわかるが、作品としては孤児院の少年が、物堅い農家の作男になり、やがてその家をついで幸福な家族を持つ『ダーウィンおじさんのハト小屋』²⁵ (*Daddy Darwin's Dovecote*, 1884) が優れている。ジリアン・エイブリーが、ミセス・ユーイングを評価するのは、孤児院の孤児など犯罪者予備軍のように思われていた時代に、孤児を作男として雇うといった因習や偏見打破の精神を作品にみただけからでもある。しかし、彼女の作品は子どもの心をひきつけないという意見は多い。

ミセス・モルズワース (メアリー・ルイザ・モルズワース、1841-1885) は、児童文学に与えた大きな影響と、彼女の今も生き生きとして面白い作品群を考えると、ミセス・ユーイングを超える作家だと思う。しかし、この聖職者が道徳的意図で収集したコレクションでは、ミセス・モルズワースの作品は4点、『おばあさん』²⁶ (*'Grandmother Dear' A Book for Boys and Girls*, Mary Louisa Molesworth, 1878) 『お話し』²⁷ (*Tell me a Story*, 1875) 『12の小さなお話』²⁸ (*Twelve Tiny Tales*, 1890) 『四方の風農場』²⁹ (*Four Wind Farm*, 1887) のみがみつかると。グリーンは、『12の小さなお話』は幼児の絵雑誌掲載のもので重要なものではないとしているが、目録には、この本はオズボーン・コレクションにもないと註がついている貴重な資料である。姉妹が一緒になって繁華街の通りを横断するとき、いちばん小さな5歳の女の子が白い手袋をした片手をあげて、姉たちを通す「小さな

おまわりさん」などはなるほど重要ではないと納得する。しかし、赤ちゃんがぐずっているところへやってきた行商のおばあさんが、籠の中のものを赤ちゃんに選ばせ、赤ちゃんが古いめがねを選んでかけるとぴったり合う「妖精のめがね」などどうだろう。びっくりしているうちに眼鏡は消えるが、赤ちゃんはその後、賢い人として一生を送るのである。全体には、軽い教訓がただよっている。『お話し』には、作者の幼時の思い出から生まれたことで有名な「糸巻きの妖精たち」が収録されている。昼間友達のフランセスがクイーンのような服を作ったと自慢したため、ルイザは糸巻き国のクイーンになった夢を見るのだから、王冠が重いのではずしてくれと頼んでも、妖精たちは言うことをきかない。目覚めたルイザは、二度とクイーンになりたいなどと思わないと決心する。ルイザは、きれいでないと言われたので、きれいになりたいけれど、そんな願いは悪いことかと母親にきく。母親は、その考えの間違いはやがてわかると思うけれど、私は、今のあなたを大切に思っている、それが大事なことで教える。題名から受ける感じと違い、他人をうらやまず、愛に満ちた普段の暮らしに満足しなさいという教訓話で評判ほどに面白くはない。

モルズワースの真の価値は『キャロット』(*Carrots*, 1876) で幼児の感覚、思考が大人と違うことを明らかにして、幼児の内面世界の魅力を伝え、幼年文学の世界をきりひらいたことにある。さらに重要なことは『カッコウ時計』(*The Cuckoo Clock*, 1877) 『壁掛けの部屋』(*The Tapestry Room*, 1879) と、既出の『四方の風農場』などで、日常生活の中の不思議や魔法を物語にした、everyday magicといわれる新しいファンタジーの形式を生み出したことである。この形式はE. ネズビットの作品によって20世紀的ファンタジーとして定着したが、創始者はモルズワースである。この新種のファンタジーは、子どもの内面の発見があってはじめて生まれたファンタジーである。

子どもの内面世界が、大人が考えているそれとは全くちがうことに気づいたもう1人の作家は『小公子』³⁰ (*Little Lord Fauntleroy*, 1886)、『秘密の花園』³¹ (*The Secret Garden*, 1911) の作者

フランシス・ホジソン・バーネット (Frances Hodgson Burnett 1849-1924) である。彼女には、現在ほとんど知られていない『私のいちばんの友だち』 (*The One I Knew the Best of All*, 1893) という自伝的作品があり、その中で彼女は、「子どもはごく幼い時から、物事をきちんと判断し、筋道をたてて覚える」と語っている。『小公子』も『小公女』も『秘密の花園』も、それぞれに子ども心をしっかりととらえているが、その原因の1つは、彼女が子どもの心の内をよく知っていたからにちがいない。

教訓主義的な傾向を引き継ぎながら始まった19世紀は、ナポレオン戦争後の民族主義の台頭の中から生れた昔話の復活や、理性主義に対する想像力重視のロマンチズムからファンタジー文学を誕生させ、同時に子どもに対する認識の深まりが、リアルな子どもたちの魅力あふれる興味尽きない物語や小説を数多く子どもたちと大人たちに向かって送りだした。児童文学という文学領域を完成させた世紀だったと言えるだろう。

おわりに

エドワード・ヘンリー・ウィニングトン・イングラム師は「ヴィクトリア朝時代の、道徳的・精神的価値観に沿った児童文学作品」の収集を目的としたといわれるので、この紹介は19世紀までで締めくくりたいと思う。それは総数1,157点の半数以上の20世紀の本670点を残すことになる。20世紀になってからのものの多くは、収集が師の娘コンスタンスに移ってからのものであり、彼女が学校の教師だったこともあるのだろう、読物的な要素を重視して、アメリカの物語や小説が多くなっている。それも、文学史を開けばかならず見られるような作家・作品ではなく、大衆的なものが多い点が魅力で、新しい研究が待たれる。

筆者の研究テーマや好みもあって、全くといってよほど触れていないのが絵本とイラストレーションと韻文の分野である。これらの分野には一目でひきつけられる視覚的に冴えた作品が多いので、ご利用いただきたい。なお、2003年に国際子ども図書館で開かれた「未知の世界へー児童文学にえがかれた冒険ー」展図録や『国際子ども図書館の窓』第3号に掲載された「ウィニングトン-

イングラム・コレクションの魅力」などもご参照いただければ幸いである。

19世紀後半ー児童文学の黄金時代 註

- 1 *Holiday House* by Catherine Sinclair, Blackie & Son, London (VZ1-962)
- 2 *Masterman Ready; or, The Wreck of the Pacific* by Captain Frederic Marryat, Frederic Warne (VZ1-720)
- 3 *The Children of the New Forest* by Captain Frederic Marryat Heirloom Library, 1952 (VZ1-719)
- 4 *The Little Duke* by Charlotte Mary Yonge, Blackie & Son (VZ1-1151)
- 5 *Victorian Bestseller: The World of Charlotte Mary Yonge* by Margaret Mare & Alicia C. Percival, George G. Harrap, 1947 (VZ1-1152)
- 6 *The Daisy Chain*
- 7 *The Caged Lion* by Charlotte Mary Yonge, Macmillan, 1901 (VZ1-1148)
- 8 *The Coral Island: A tale of the Pacific Ocean* by Robert Michael Ballantyne (VZ1-101)
- 9 *The Young Fur-Traders* by R. M. Ballantyne, Thomas Nelson, 1856 (VZ1-103)
- 10 *Fighting the Flames. A Tale of the London Fire Brigade* by R. M. Ballantyne James Nisbit (VZ1-105)
- 11 *The Dog Crusoe and His Master: A Story of Adventure in the Western Prairies* by R. M. Ballantyne Blackie & Son, 1919 (VZ1-104)
- 12 *Ungava: A Tale of Esquimau Land* by R.M. Ballantyne T.Nelson & Sons, 1897 (VZ1-107)
- 13 *The King of the Golden River or the Black Brothers. A Legend of Stiria* by John Ruskin, George Allen, 1892 (VZ1-927)
- 14 *The Rose and the Ring* by William Makepeace Thackeray Smith, Elder, & Co., 1891 (VZ1-1028)
- 15 *The Water Babies: A Fairy Tale for a Land Baby* by Charles Kingsley, Macmillan, 1901

- (VZ1-631)
- 16 *Hereward the Wake-Last of the English* by C. Kingsley Macmillan, 1906 (VZ1-630)
- 17 *Alice's Adventures in Wonderland* by Lewis Carroll, Methuen, 1978 (VZ1-212)
- 18 *At the Back of the North Wind* by Geoge Macdonald, Blackie & Son, 1890 (VZ1-687)
- 19 *The Light Princess* by G. Macdonald, The Bodley Head, 1972 (VZ1-689)
- 20 *The Golden Key* by G. Macdonald, The Bodley Head, 1972 (VZ1-688)
- 21 *Juliana Horatio Ewing and Her Books* by Horatia K. F. Gatty, Society for Promoting Christian Knowledge, 1885 (VZ1-388)
- 22 *Jackanapes and Other Tales* by Juliana Horatia Ewing, Society for Promoting Christian Knowledge, 1900 (VZ1-375)
- 23 *Lob-lie-by-the-Fire or The Luck of Lingborough and Other Tales* by J.H. Ewing. George Bell, 1909 (VZ1-364)
- 24 *The Story of a Short Life* by J.H. Ewing, Society for Promoting Christian Knowledge, 1886 (VZ1-387)
- 25 *Daddy Darwin's Dovecot: A Country Tale* by J.H. Ewing Society for Promoting Christian Knowledge, 1881 (VZ1-365)
- 26 *'Grandmother Dear' A Book for Boys and Girls* by Mary Louisa Molesworth, Macmillan, 1878 (VZ1-769)
- 27 *Tell me a Story* by M. L. Molesworth Macmillan, 1908 (VZ1-771)
- 28 *Twelve Tiny Tales* by M.L. Molesworth Sociey for Promoting Christian Knowledge, 1887 (VZ1-772)
- 29 *Four Winds Farm* by M. L. Molesworth Macmillan, 1891 (VZ1-770)
- 30 *Little Lord Fauntleroy* by Frances Hodgson Burnett Charles Scribner's & Sons, 1908 (VZ1-192)
- 31 *The Secret Garden* by F. H. Burnett Wm. Heineman, 1925 (VZ1-194)

講師略歴（五十音順）

○ 井辻朱美（いつじ あけみ）

1955年生まれ、東京大学大学院比較文化専攻修了。

海外のファンタジーを紹介するだけでなく、自らも本格的なファンタジー作品を発表。

出版物 著書『水晶散歩』、『遙かよりくる飛行船』、『ファンタジーの魔法空間』等。

訳書『光をはこぶ娘』、『妖魔の住む街』、『図解・ファンタジー百科事典』等。

○ 定松正（さだまつ ただし）

1937年生まれ、青山学院大学文学部卒業。英国エクセター大学（教育学部大学院）留学。

出版物 著書『赤い十字章』、『赤ずきん』、『イギリス児童文学散歩』等。

訳書『子どもと本』、『ジャングル・ブック』、『ファンタジーの伝統』等。

○ 白井澄子（しらい すみこ）

1950年生まれ、青山学院大学文学部卒業。ブリティッシュ・コロンビア大学ライブラリー・スクール修士課程（児童文学・児童図書館学専攻）修了。

出版物 著書『エリナー・ファージョン』、『英米児童文学の宇宙』本田英明編

訳書（共訳）『アジアのわらい話』、『イギリス青少年サービスの展開』

○ 神宮輝夫（じんぐう てるお）

国立国会図書館客員調査員（平成14年度～16年度） 青山学院大学名誉教授

1932年生まれ、早稲田大学大学院英文学専攻修了。児童文学研究者。

日本児童文学者協会賞（'64）、サンケイ児童出版文化賞（'66）、児童福祉文化賞（'68）

出版物 著書『世界児童文学案内』、『童話への招待』、『児童文学の中の子ども』等。

訳書『アーサー・ランサム全集』をはじめ、翻訳多数。

○ 間宮史子（まみや ふみこ）

筑波大学大学院地域研究研究科（修士課程）修了。

専門分野：口承文芸学、ドイツ児童文学・文化

論文 『日本昔話のイメージ』、『異郷訪問譚における「山野の異郷」のイメージ』、

独語論文：『「グリム童話選集」のテキスト変遷』等。

Fantasy: its birth to development. Transcript of the ILCL
Lecture Series on Children's Literature, 2004

Contents

Foreword	Takao Murayama	3
Outline of the fantasy	Teruo Jinguh	4
From fairytale to fantasy	Fumiko Mamiya	20
On British fantasy	Tadashi Sadamatsu	37
Fantasy in the U.S. and Canada	Sumiko Shirai	47
What is fantasy?	Akemi Itsuji	68
Researching fantasy literature - utilizing the ILCL collections	Yuri Chiyo	95
How to use the Union Catalog of Children's Literature	Kazushige Watanabe	137
The Winnington-Ingram Collection-A Good Companion to English Children's Literature	Teruo Jinguh	143

**平成 16 年度国際子ども図書館
児童文学連続講座講義録「ファンタジーの誕生と発展」**

平成 17 年 10 月 12 日 発行

編集・発行 国立国会図書館国際子ども図書館
〒110-0007 東京都台東区上野公園 12-49
電話 03-3827-2053 FAX 03-3827-2043

印刷 株式会社 丸井工文社
〒107-0062 東京都港区南青山 7-1-5

表紙デザイン 田中 邦彦

本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に国際子ども図書館企画協力課協力係に連絡してください。本誌のPDF版を国際子ども図書館ホームページ(<http://www.kodomo.go.jp/>)でご覧いただけます。なお、訂正があった場合は、ホームページ上に掲載いたします。

